

小林市文化財調査報告書 第5集

みず おとし
水 落 遺 跡

県営出の山地区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1992

宮崎県

小林市教育委員会

小林市文化財調査報告書 第5集

^{みず}水 ^{おとし}落 遺 跡

県営出の山地区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1992

宮崎県

小林市教育委員会

序

この報告書は、平成元年度出の山地区県営圃場整備事業に伴い、西諸県農林振興局の委託を受け、宮崎県文化課の協力のもとに行った水落遺跡・中島遺跡の発掘調査の記録です。平成元年9月から同年12月までの調査の結果、縄文時代後期の黒色磨研土器、弥生時代後期の土器、中世の青磁・白磁・東播系の片口鉢などが出土しました。また、弥生時代後期の竪穴住居6軒、中世の掘立柱建物7棟・溝状遺構9本、江戸時代の近世墓43基などが発見されました。

小林市教育委員会では、これらの貴重な資料をもとに市史解明の糸口にしたいと考えております。

なお、調査に当たって、ご指導とご協力をいただきました宮崎県教育委員会文化課、西諸県農林振興局、出の山土地改良区等関係各位に対し、深甚の謝意を表しますとともに、発掘調査に従事くださいました皆様に対しても厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

小林市教育委員会

教育長 山口 寅一郎

例 言

1. 本書は、小林市出の山地区の県営圃場整備事業に伴ない、平成元年度に実施した水落遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、小林市教育委員会が主体となり、県文化課主任主事長津宗重（一次調査）・主事長友郁子（二次調査）が担当した。

3. 調査組織は次の通りである。

調査主体 小林市教育委員会

教育長 山口寅一郎

社会教育課長 川畑 正一

係長 黒木 英夫

主事 上別府 優

特別調査員 長崎大学医学部助教授 松下 孝幸

助手 佐伯 和信

講師 分部 哲秋

折原 義行

長崎大学歯学部 小山田常一

調査員 県文化課 主任主事 長津宗重（一次調査担当）

主事 長友郁子（二次調査担当）

主査 宍戸 章

主事 吉本 正典

4. 本書の執筆は、黒木・長津・長友が分担し、文責については目次に明記している。

5. 近世墓出土の人骨については松下孝幸氏の玉稿を頂いた。

6. 石器の石材は宍戸章氏の御教示による。

7. 土器の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。本報告の方位は磁北である。またレベルは海拔絶対高である。

8. 遺構は次の通りの略記号を用いた。

S A……………堅穴住居 S B……………掘立柱建物 S E……………溝状遺構

S C……………土壙 S D……………近世墓

本文目次

序	
例言	
第I章 序説	1
第1節 発掘調査に至る経緯	黒木 1
第2節 小林市内の歴史的環境	長津 1
第II章 遺構と遺物	5
第1節 調査区の設定と概要	長津 5
第2節 包含層の状態	長津 5
第3節 縄文時代の遺構と遺物	長友 5
第4節 弥生時代の遺構と遺物	長友・長津 21
第5節 中世の遺構と遺物	長津 58
第6節 近世の遺構と遺物	長友 74
第III章 まとめ	長津 108
付篇 宮崎県小林市水落遺跡出土の近世人骨	松下・佐伯・分部・折原・小山田

表目次

第1表 小林市内の遺跡地名表	3
第2表 縄文土器観察表	15
第3表 竪穴住居観察表	43
第4表 弥生土器観察表	45
第5表 掘立柱建物観察表	62
第6表 陶磁器観察表	72
第7表 近世墓観察表	83

挿図目次

第1図 遺跡分布図	2
第2図 基本土層図	5
第3図 SC1実測図	6
第4図 水落遺跡全体図	7・8
第5図 縄文土器実測図(Ⅰ)	9
第6図 縄文土器実測図(Ⅱ)	10
第7図 縄文土器実測図(Ⅲ)	11

第8図	縄文土器実測図 (IV)	12
第9図	縄文土器実測図 (V)	13
第10図	縄文土器実測図 (VI)	14
第11図	石器実測図	14
第12図	B地区遺構分布図	19・20
第13図	SA1実測図	22
第14図	弥生土器実測図 (I) SA1	23
第15図	弥生土器実測図 (II) SA1	24
第16図	SA2実測図	26
第17図	弥生土器実測図 (III) SA1・SA2	27
第18図	SA3実測図	29
第19図	弥生土器実測図 (IV) SA2・SA3	30
第20図	弥生土器実測図 (V) SA3・SA4	32
第21図	SA5実測図	34
第22図	SA6実測図	35
第23図	弥生土器実測図 (VI) SA5・SA6	36
第24図	SA7実測図	38
第25図	弥生土器実測図 (VII) SA7	39
第26図	弥生土器実測図 (VIII) SA7	41
第27図	弥生土器実測図 (IX) SA7	42
第28図	弥生土器実測図 (X) 遺構外	43
第29図	石器実測図	44
第30図	中世遺構分布図	59・60
第31図	掘立柱建物実測図 (I) SB1・SB3	61
第32図	掘立柱建物実測図 (II) SB2	62
第33図	掘立柱建物実測図 (III) SB4	63
第34図	掘立柱建物実測図 (IV) SB5・SB6	64
第35図	掘立柱建物実測図 (V) SB7	65
第36図	溝状遺構実測図 (I) SE4~6	67・68
第37図	溝状遺構実測図 (II) SE7~9	69
第38図	陶磁器実測図	71
第39図	近世墓分布図	75
第40図	近世墓実測図 (I) SD1~3・5・6	77

第41図	近世墓実測図 (Ⅱ) S D 4・40・42	79
第42図	近世墓実測図 (Ⅲ) S D 7~10・20	81
第43図	近世墓実測図 (Ⅳ) S D 11~13	82
第44図	近世墓実測図 (Ⅴ) S D 14・18・19	85
第45図	近世墓実測図 (Ⅵ) S D 15	86
第46図	近世墓実測図 (Ⅶ) S D 16・17・24・43	87
第47図	近世墓実測図 (Ⅷ) S D 21	88
第48図	近世墓実測図 (Ⅸ) S D 22	89
第49図	近世墓実測図 (Ⅹ) S D 23	90
第50図	近世墓実測図 (Ⅺ) S D 25・26・30・31	91
第51図	近世墓実測図 (Ⅻ) S D 27	92
第52図	近世墓実測図 (Ⅼ) S D 28・29・36	93
第53図	近世墓実測図 (Ⅽ) S D 32・34・37・41	94
第54図	近世墓実測図 (Ⅾ) S D 33	95
第55図	近世墓実測図 (Ⅿ) S D 35	96
第56図	近世墓実測図 (ⅰ) S D 38	97
第57図	近世墓実測図 (ⅱ) S D 39	98
第58図	近世墓出土六道錢鏽着状況実測図 (Ⅰ) S D 11・12・14・15・39	99
第59図	近世墓出土六道錢鏽着状況実測図 (Ⅱ) S D 16・21・21埋土中・24・27・28・34・35	100
第60図	近世墓出土六道錢鏽着状況実測図 (Ⅲ) S D 30・31・33・36・40・41	101
第61図	近世墓出土六道錢拓影 (Ⅰ) S D 11・12・14	102
第62図	近世墓出土六道錢拓影 (Ⅱ) S D 14・15・16・21	103
第63図	近世墓出土六道錢拓影 (Ⅲ) S D 21・24・27・28・30・33	104
第64図	近世墓出土六道錢拓影 (Ⅳ) S D 33~36・39・40	105
第65図	近世墓出土六道錢拓影 (Ⅴ) S D 40・41	106
第66図	近世墓出土数珠玉実測図 S D 10・20	106
第67図	近世墓出土遺物実測図	107

図 版 目 次

- 図版 1 B地区調査前全景 (北から)、B地区全景
- 図版 2 S C 1 出土縄文土器 (1~12)、S C 1 出土縄文土器 (13・15~24)
- 図版 3 S C 1 出土縄文土器 (14・25~30・33~42)、S A 6 出土縄文土器 (31・32)、S A 2・S A 4 出土石器 (43・44)
- 図版 4 S C 1・S A 5・S A 6、S A 1

- 図版5 SA 2・SA 3
- 図版6 SA 6・SA 7炭化材出土状況
- 図版7 SA 2土層断面、SA 3土層断面、SA 5土層断面、SA 7炭化材出土状況
- 図版8 SA 1出土弥生土器(1~29)
- 図版9 SA 2出土弥生土器(30~42)、SA 2出土弥生土器(44~56)、SA 3出土弥生土器(57~70)、SA 3出土弥生土器(73~79)
- 図版10 SA 3出土弥生土器(80~87)、SA 5出土弥生土器(88~102)、SA 6出土弥生土器(103~111)、SA 7出土弥生土器(120~135)
- 図版11 SA 7出土弥生土器(113~119)
- 図版12 SA 7出土弥生土器(125~127)、遺構外出土弥生土器(148~163)、SA 1出土石器(001・002)・SA 2出土石器(004・005)・SA 3出土石器(006)・SA 5出土石器(007~009)・SA 7出土石器(010~012)、SA 2出土石器(003)
- 図版13 A地区遠景(西から)、A地区全景
- 図版14 A地区掘立柱建物群、SE 4~6
- 図版15 SB 1、SB 2、SB 3、SB 4
- 図版16 SB 5、SB 6、SB 7、SE 1・SE 2
- 図版17 SE 4・SE 5土層断面、SB 4 P 4半裁、陶磁器(1~30)、東播系こね鉢(6)・軽石製品(31)
- 図版18 SE 7土層断面、SE 7
- 図版19 近世墓全景、SD15、SD21
- 図版20 SD22、SD23、SD27、SD28
- 図版21 SD29、SD30、SD31、SD33
- 図版22 SD35、SD36、SD38、SD39
- 図版23 SD 1、SD 2、SD 7、SD 8、SD 9、SD10、SD11、SD12
- 図版24 SD13、SD14、SD15、SD16、SD17、SD43、SD18、SD19、SD20、SD21
- 図版25 SD22、SD23、SD24、SD25、SD26、SD27、SD28、SD29
- 図版26 SD30、SD31、SD32、SD33、SD34、SD35、SD36、SD37
- 図版27 SD38、SD39、SD40、SD41、SD42
- 図版28 近世墓出土六道銭 SD11(1~7)・SD12(8~14)・SD14(15~23)・SD15(24~30)・SD16(31~37)・SD21(38~48)
- 図版29 近世墓出土六道銭 SD24(49~54)・SD27(55~61)・SD28(62~68)・SD30(69~71)・SD33(72~79)・SD34(80~82)・SD35(83~86)・SD36(87~93)・SD39(94~96)
- 図版30 近世墓出土六道銭 SD40(98~102)・SD41(103~105)、基本土層

第 I 章 序説

第 1 節 発掘調査に至る経緯

宮崎県西諸県農林振興局では、昭和62年度から出の山地区圃場整備事業を実施している。平成元年度工事实施予定地内には遺跡は知られていなかったが、県文化課の分布調査で土器散布地等が確認された。また、隣接地に「夷守駅」の推定地が所在していたので、県文化課では昭和63年12月試掘調査を実施した。その結果、予定地内で弥生時代頃の遺跡が2ヶ所（水落遺跡、中島遺跡）所在することが確認された。なお「夷守駅」に関する遺構等は確認されていない。聞き取り調査では、細野小学校の北東の墓地内では墓地造成中、地下式横穴墓と推定される内面に朱を塗った空洞が発見されている。

そして、この工事予定地内で遺跡の所在が確認されたため、西諸県農林振興局、出の山土地改良区、県文化課、市教育委員会の4者で協議を行った結果、工事により包含層等が削平を受ける部分と道路部分は、発掘調査の措置を取ることになった。水落遺跡の発掘調査対象地は広範囲で調査期間に数か月を要することから、稲収穫後に調査着手したのでは工期に影響するため、一部稲の転作を行い調査期間を確保することになった。

発掘調査は、水落遺跡A地区を平成元年9月4日から10月30日まで県文化課主任主事長津宗重氏の担当で実施し、水落遺跡B地区は11月7日から12月27日まで県文化課主事長友郁子氏の担当で実施した。また、中島遺跡については道路部分のみを12月に実施した。

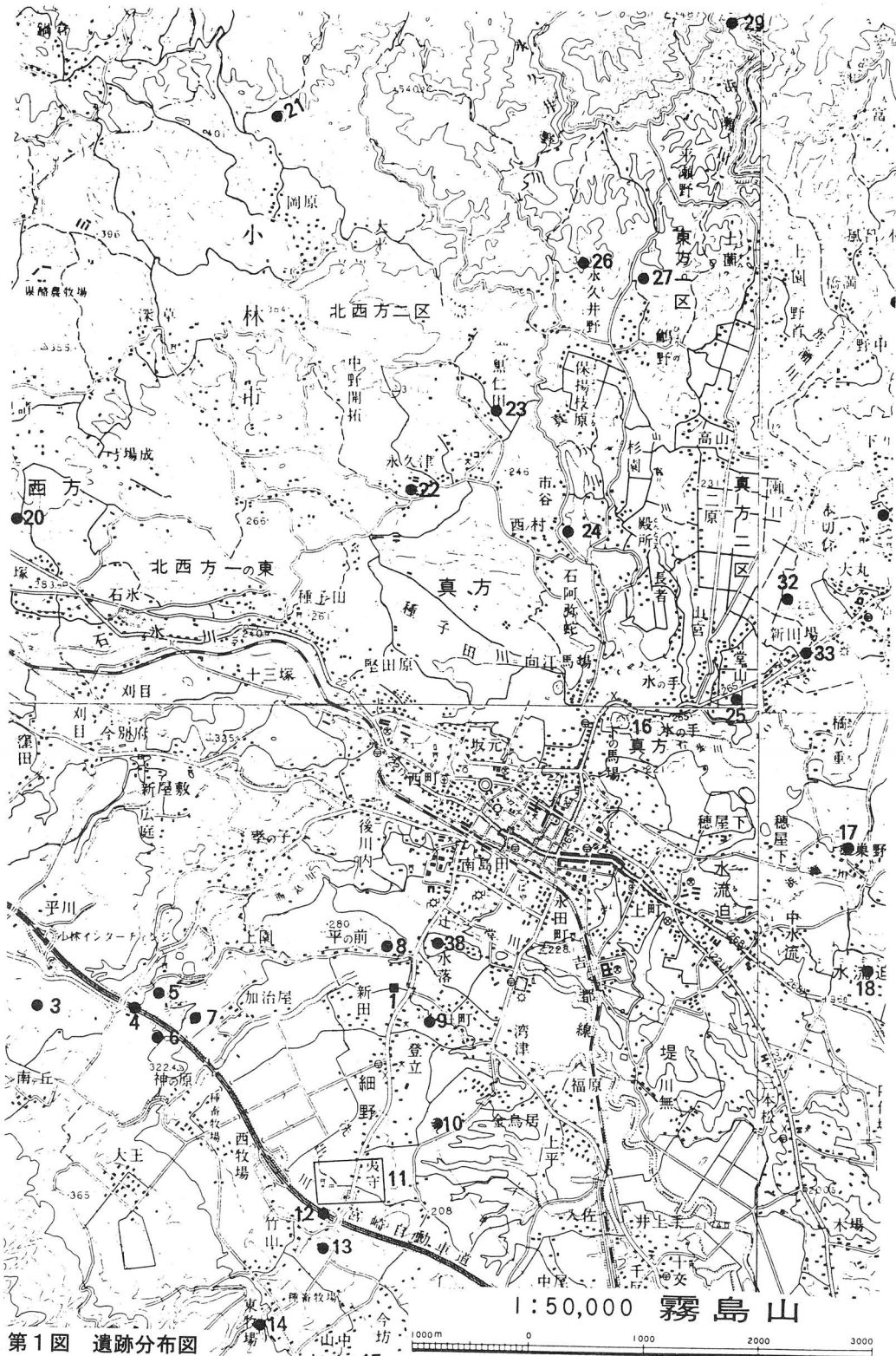
第 2 節 小林市内の歴史的環境

小林盆地は北の裏日向山地、東の諸県山地北西支脈、南の霧島火山、西の加久藤盆地に囲まれた凹地である。裏日向山地の南には加久藤火砕岩と溶結岩の丘陵地が広がり、霧島火山の北と東には溶岩流末端から形成された新・旧の扇状地が開析されて、下位及び中位の段丘が広がる。盆地内には石氷川などの小河川が流れ、合流して岩瀬川となって東に流れている。盆地底の大部分はシラス台地とそれが侵食されて形成された段丘であり、最低位に氾濫原性低地がかなり広がる⁽¹⁾。

水落遺跡の歴史的環境を知るために、町内の遺跡を時代順に概観するが、詳細については既に概報⁽²⁾で述べているので、ここでは各時代の概略に留める（第1図）。

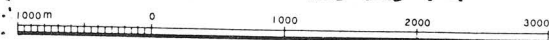
旧石器時代の遺跡は確認されていないが、東隣りの野尻町の新村・高山遺跡⁽³⁾でナイフ形石器・剥片・搔器が出土しているので近い将来当市でも確認されると思われる。

縄文時代早期の遺跡としては本田遺跡（大字東方字坂下）・平木場遺跡（大字南西方字平木場）・大平遺跡（大字北西方二区字大平）・内木場遺跡（大字東方字集）・上永久井野・城山などが知られ、押型文（楕円・山形）土器・前平式土器・塞ノ神式土器などが出土しているが、集石遺構などのこの時期の遺構は当地域では検出されていない。前期の遺跡としては、本田遺跡・平木場遺跡⁽⁴⁾・新田場遺跡（大字真方三区字新田場）などが知られている。特に本田遺跡は県内でも有数



第1図 遺跡分布図

1:50,000 霧島山



1. 水落遺跡	2. 平川遺跡	3. 駒栗毛B遺跡	4. 諏訪台遺跡
5. 駒栗毛A遺跡	6. 出の山遺跡	7. 前ノ原遺跡	8. 新田遺跡
9. 小林市横穴墓群	10. 夷守駅推定地	11. 竹山遺跡	12. 竹山南遺跡
13. 東牧場遺跡	14. 三ツ山城跡	15. 栗巢野遺跡	16. 下ノ平地下式横穴墓群
17. 尾中原地下式横穴墓群	18. 大平遺跡	19. 永久津遺跡	20. 黒仁田遺跡
21. 正覚原古墳	22. 堂山遺跡	23. 永久井野遺跡	24. ひばり遺跡
25. 本田遺跡	26. 内木場遺跡	27. 東二原地下式横穴墓群	28. 新田場地下式横穴墓群
29. 城山地下式横穴墓群			

第1表 小林市内の遺跡地名表

の前期の遺跡で、曾畑式土器が出土すると伴に住居の一部が確認された。前期の住居としては県内唯一であり、注目される。なお中期の遺跡は県内では非常に稀薄であり、当地域でも確認されていない。後期の遺跡としては中山前遺跡（大字細野字中山ノ前）・駒栗毛遺跡（大字細野字駒栗毛）・本田遺跡・立山遺跡（大字東方二区字立山）・集遺跡（大字東方字集）・鬼塚遺跡（大字南西方）などが知られている。特に駒栗毛遺跡では市来式土器と岩崎上層式土器の上下関係を層位によって確認している。

弥生時代については生駒出土の両端決りの方形石庖丁、尾中原出土の長頸壺、細野出土の重弧文土器が特に知られているが、調査はあまり行われていない。今回の水落遺跡の調査によって後期後葉～末葉の6軒の竪穴住居が検出され、当地域の集落の様相が初めて明らかにされた。また重弧文長頸壺がSA7から出土しており注目される。

古墳時代については当地域には前方後円墳・円墳はなく、地下式横穴墓と横穴墓がある。横穴墓としては小林市横穴墓（大字細野字真方）があるが、詳細は不明である。地下式横穴墓としては下ノ平地下式横穴墓群（大字水流字下ノ平）・尾中原地下式横穴墓群（大字北西方字石塚尾中原）・新田場地下式横穴墓群（大字真方字松之元・新田場）・二原地下式横穴墓群（大字真方字二原）・城山地下式横穴墓群（大字細野字城山）などが調査され、4グループに分かれる。当地域の地下式横穴墓は羨門石閉塞の片袖平入りで棚状施設を有するタイプであり、棚状施設に剣・刀・鏃などの武器を副葬することに特徴があるが、須恵器・土師器などの土器が玄室内に副葬されることがない。壁面に束柱を線刻するものもある。また川内川上流のえびの市を中心に分布する竪坑上部石閉塞もわずかであるが見られる。なお平成元年12月～2年2月に圃場整備事業に伴って15基が調査された東二原地下式横穴墓群⁽⁶⁾では、2号地下式横穴墓から直径5.0cmの珠文鏡が、8号地下式横穴墓から貝輪が出土しており注目されるが、基本的には剣・刀・刀子・鉄鏃の組み合わせである。遺物として他に注目されるのは新田場地下式横穴墓から出土したという双脚状鉄器⁽⁷⁾や同7号地下式横穴墓の釣針・線刻入りの鉄鏃⁽⁸⁾である。当地域の地下式横穴墓の時期は5世紀後半～6世紀前半である。また二重周溝を有する直径約27m、高さ3.6mの円墳が東二原で確認されており、市内では初例であり注目される。なお平木場遺跡⁽⁹⁾では一辺440cmの方形プランの住

居の一部が検出されている。

『延喜式』によると日向国の駅馬は16駅あり、そのうちの夷守駅は大字細野字夷守に地名が残ることからこの地に比定されている。その推定地は水落遺跡から南へ約1 kmの地点である。

平安時代の遺跡としては竹山遺跡（大字細野字竹山）・駒栗毛遺跡が知られており、布痕土器などが出土している。

中世の山城としては三ツ山城（大字真方）・小林城・内木場城・野首城・岩牟礼城・宇賀城がある。三ツ山城は北原氏の居城であり、本丸・二の丸・大手口の跡が残っている。

今回の調査でまとめて43基も近世墓が検出されたのは、江戸時代の墓地の構造・変遷を考える点で注目される。

当地域の発掘調査はようやく端緒についたばかりであり、地域史を具体的に描きだせるまでには至っていない。今後の調査に期待することが大である。

【註】

- (1) 経済企画庁総合開発局『土地分類図（宮崎県）』1974
- (2) 長津宗重・長友郁子「水落遺跡」『小林市文化財調査報告書』第1集 小林市教育委員会 1990
- (3) 日高孝治「新村遺跡・高山遺跡」『野尻町文化財調査報告書』第1集 野尻町教育委員会 1986
- (4) 鈴木重治「小林市本田遺跡の調査」『昭和41年度西日本史学会秋季学術大会発表要旨』『九州考古学』第32号所収 九州考古学会 1967
鈴木重治「本田遺跡」『宮崎県史 資料編 考古1』宮崎県 1989
- (5) 田中 茂「こまくりげ遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1) 宮崎県教育委員会 1973
- (6) 長友郁子「東二原地下式横穴墓群」『小林市文化財調査報告書』第2集 小林市教育委員会 1990
- (7) 志戸本次助『小林市史』小林市 1966
乙益重隆 「異形鉄器」『成川遺跡』文化庁 1974
- (8) 面高哲郎・長津宗重「新田場地下式横穴墓群」『宮崎県文化財調査報告書』第34集 宮崎県教育委員会 1991
- (9) 註(6)に同じ
- (10) 安楽 勉「平木場遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1) 宮崎県教育委員会 1973
- (11) 藤岡謙二郎「日向国」『古代日本の交通路IV』大明堂 1979
- (12) 平部嶮南『日向地誌』1884

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 調査区の設定と概要

水落遺跡（小林市大字細野字水落・脇ノ上）は、宮崎市の北北西約40kmの標高208m（比高10m）の丘陵上に位置する。

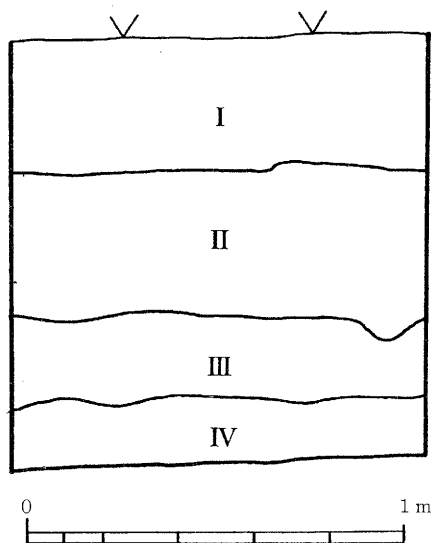
県営出の山地区圃場整備事業に伴って県教育委員会が昭和63年12月19日から26日まで試掘調査を行った結果、遺跡の存在が確認されたので、小林市教育委員会が調査主体となり、A地区の4000㎡とB地区の10000㎡の発掘調査を行った。一次調査のA地区は平成元年9月4日から10月5日まで、二次調査のB地区は11月7日から12月27日まで行われた。

A地区からは中世の掘立柱建物7棟・溝状遺構6本が検出され、縄文時代晩期の黒色磨研土器、中世の青磁・白磁・土師器などが出土した。掘立柱建物の内訳は庇付きの2間×5間が1棟、庇付きの2間×3間が2棟、2間×3間が1棟、1間×3間が2棟、2間×2間が1棟である。主軸は東西方向と南北方向である。

B地区からは弥生時代後期の竪穴住居6軒、中世の溝状遺構3本、江戸時代の墓43基が検出され、弥生時代後期の土器・中世の土器（東播系の片口鉢）・六道銭（寛永通宝）などが出土した。特にSA7から出土した重弧文長頸壺は注目される。また近世墓としてまとまって43基も調査されたのは注目される（第4図）。

第2節 包含層の状態（第2図）

当遺跡の基本層序は、第Ⅰ層が褐色土層（Hue 7.5YR 4/4・耕作土）、第Ⅱ層が黒色土層（7.5YR 2/1）、第Ⅲ層が暗褐色土層（7.5YR 3/4）、第Ⅳ層が黄橙色土層（7.5YR 8/8・アカホヤ層）、第Ⅴ層が橙色土層（7.5YR 6/8）である。東区は第Ⅱ層が残存しており、第Ⅲ層で遺構検出を行った。西区は第Ⅲ層が水田耕作によって既に削平されており、第Ⅳ層で遺構検出を行った。遺物は第Ⅲ層から出土する。



第2図 基本土層図

第3節 縄文時代の遺構と遺物

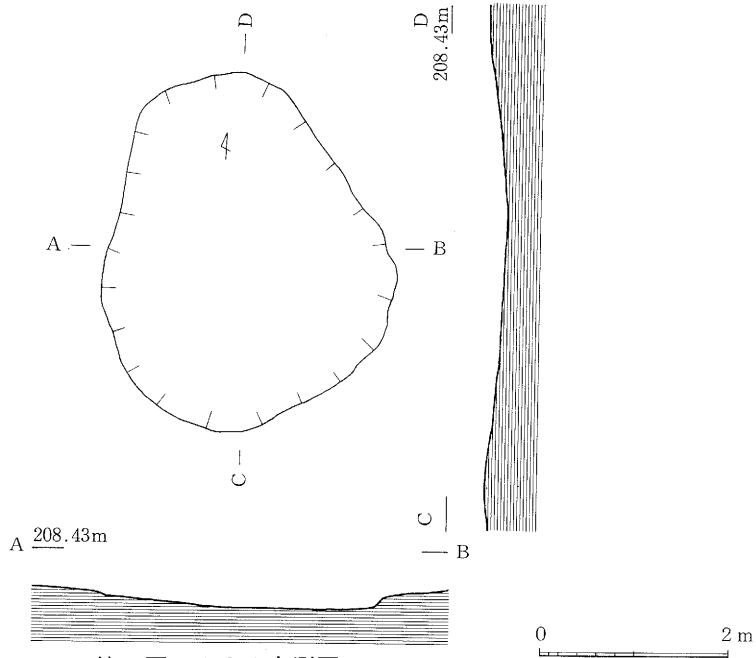
水落遺跡では調査区の中央付近で1基だけ縄文時代の土壌が確認された。その中から縄文時代後期の土器が多数出土した。

(1) SC1（第3図）

概報ではSA4として報告したものであるが、出土遺物等の詳細な検討を行ったところ縄文時

代の土壌であることが判明した。

長径3.8m、短径3.1mの歪な楕円形で、遺構確認面からの掘り込みは浅く、なだらかな摺鉢状を呈する。遺構検出時には土器の集中地点としてしか捉えられなかったが、土器を取り上げて精査したところわずかに掘込みが確認された。埋土は黒褐色軟質土で、やや粘性をおびている。



第3図 SC1実測図

(2) 遺物 (第7~10図)

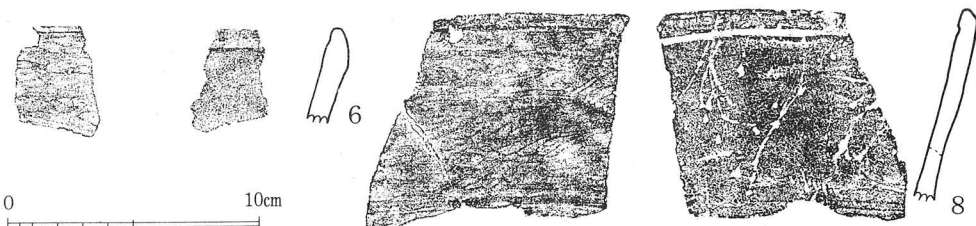
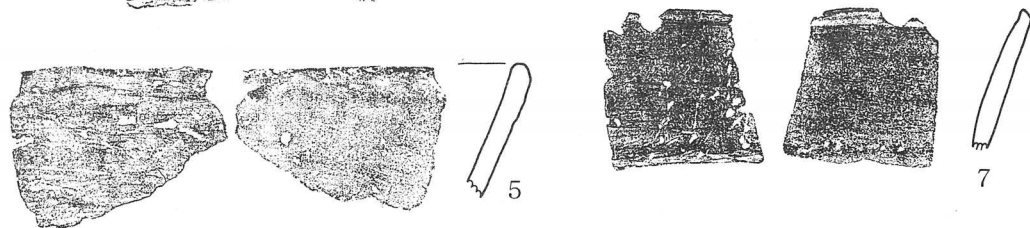
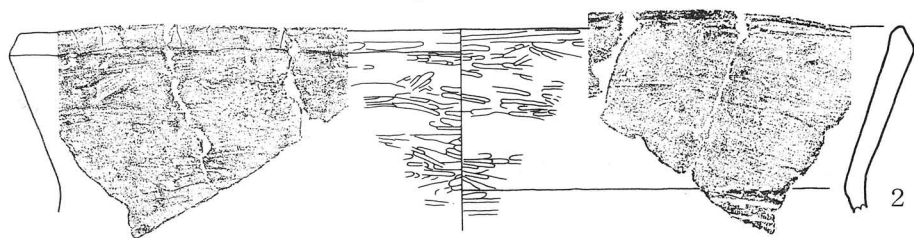
遺物は全面的に集中して出土した。31・32を除き全てSC1からの出土である。31・32はSA6からの出土である。ほとんどが縄文時代後期の磨研土器の深鉢である。

1、2は平口縁をなし口縁端部に面どりを施し断面形が三角形を呈する。3、4は平口縁をなし口縁端部がやや丸みを持つ。5は口縁部がやや内傾する。6は口縁部がやや内傾し、7はほとんど直立する。2点とも口縁端部内面に弱い凹線を施す。8も口縁部がやや内傾し、口縁端部に凹線を施す。9、10ともに大型で頸部が強くくびれて胴部が大きく膨らむ。9は口縁端部内面に凹線を施す。11~13は小型の深鉢の口縁部から胴部片である。9、10同様の特徴を持ち口縁部が短い。14は完形の小型深鉢である。平口縁で口縁部が短く、口縁端部は薄く、丸みを帯びた三角形を呈する。頸部は強くくびれて胴部の張りが強い。底部は小さく上げ底を呈する。1~13に比べてミガキが雑である。15も小型の深鉢の口縁部から胴部片であるが、14よりも頸部のくびれと胴部の張りが弱い。16~22は波状口縁である。いずれも丁寧なミガキを施されており、16、17以外は内面に凹線を施している。23~27は胴部片である。いずれも14同様頸部が強く屈曲し、胴部が張る。

28~31は頸部片である。31を除き器面を丁寧に磨いてある。31は2条の沈線の間貝殻による刺

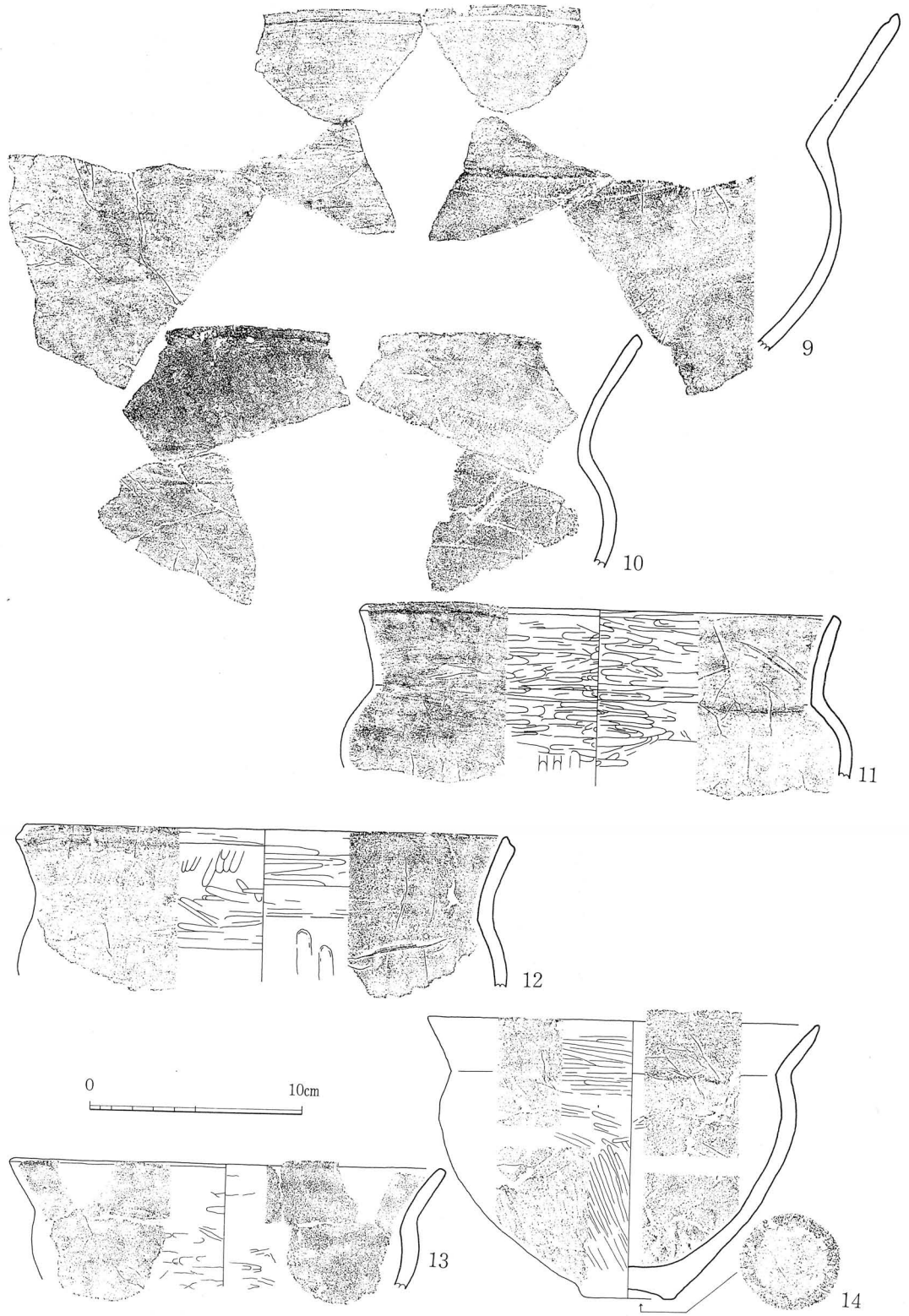


第4図 水落遺跡全体図

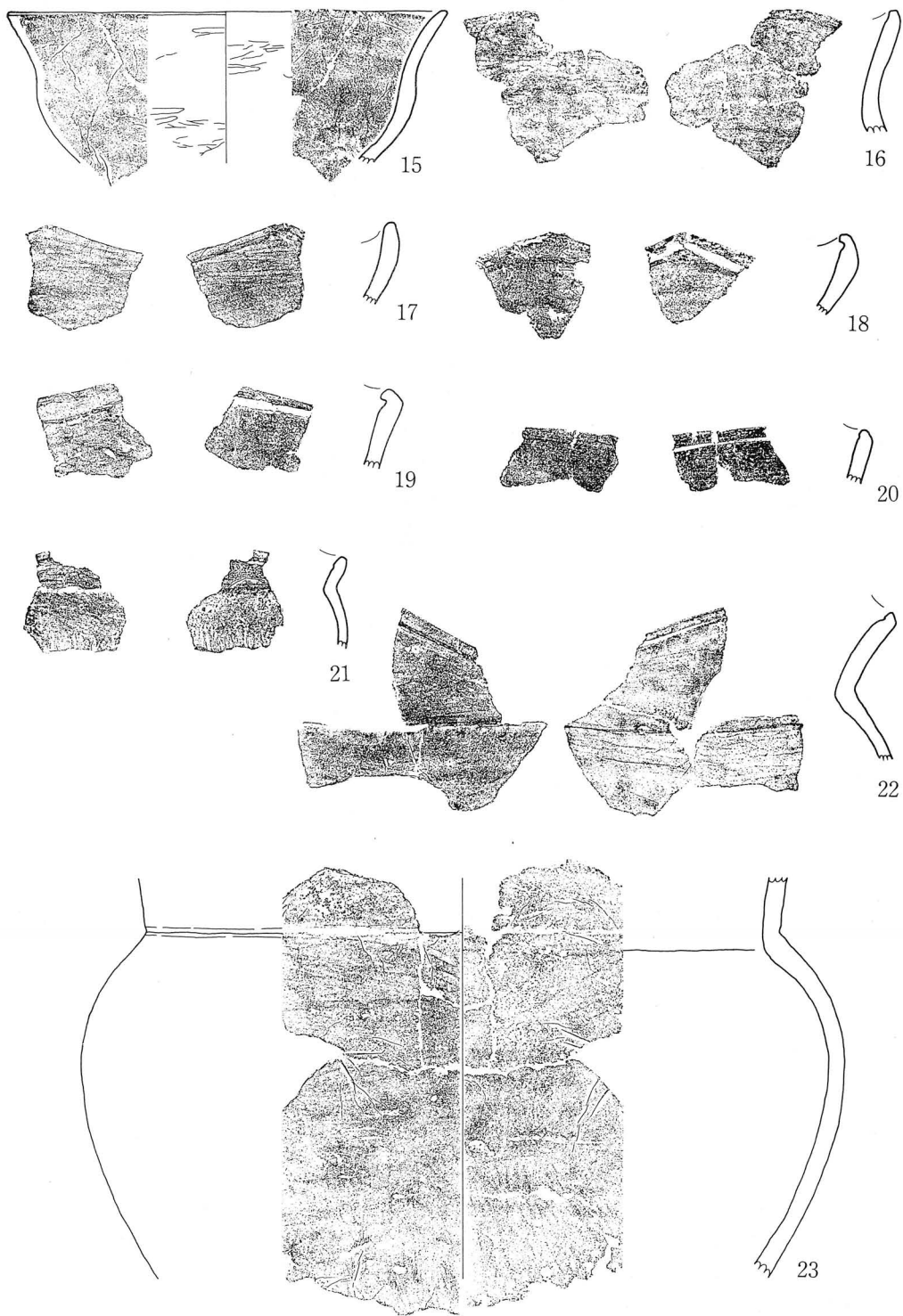


0 10cm

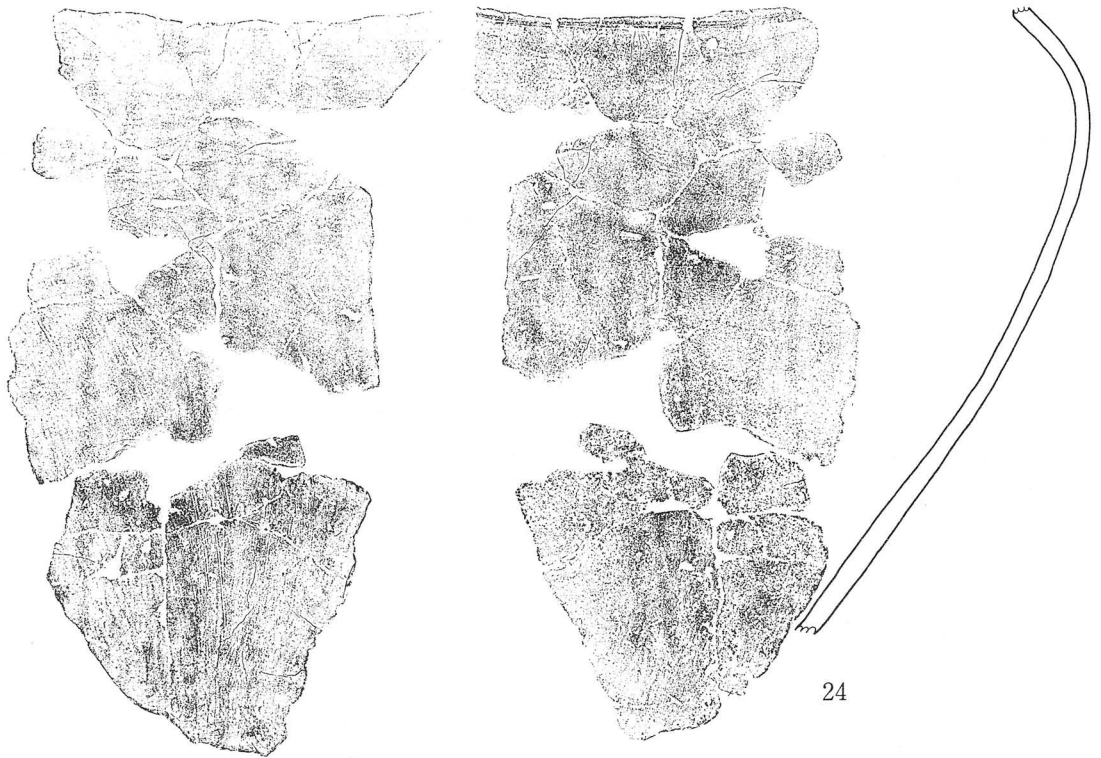
第5図 縄文土器実測図 (I)



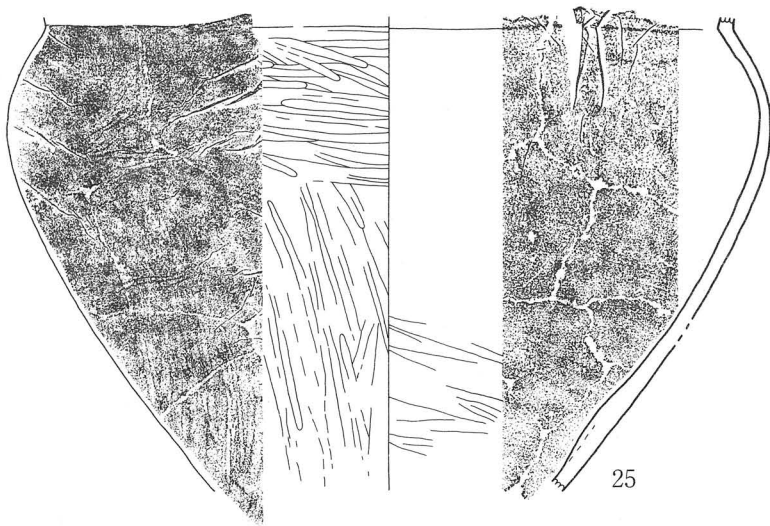
第6図 縄文土器実測図(Ⅱ)



第7図 縄文土器実測図(Ⅲ)



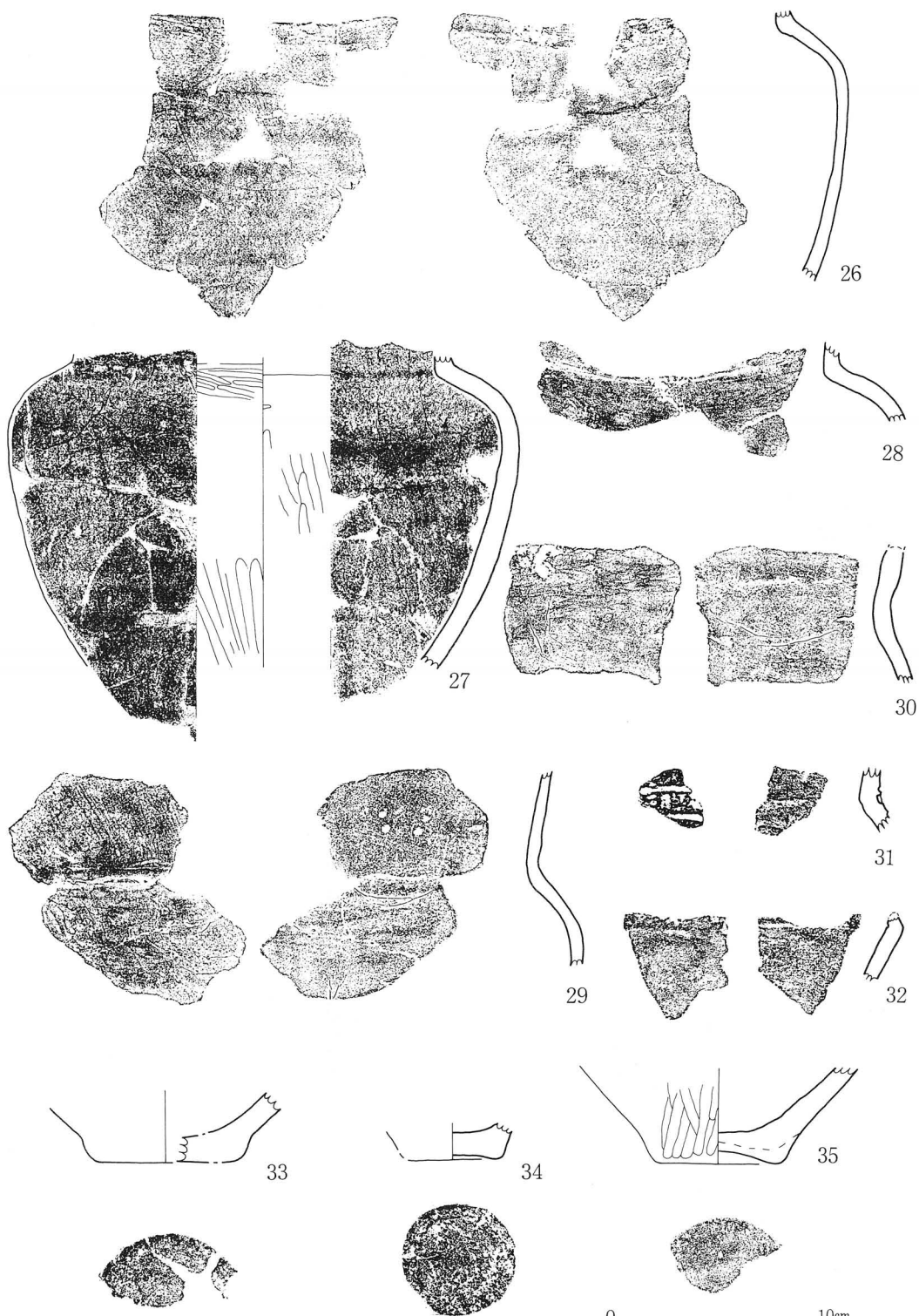
24



25

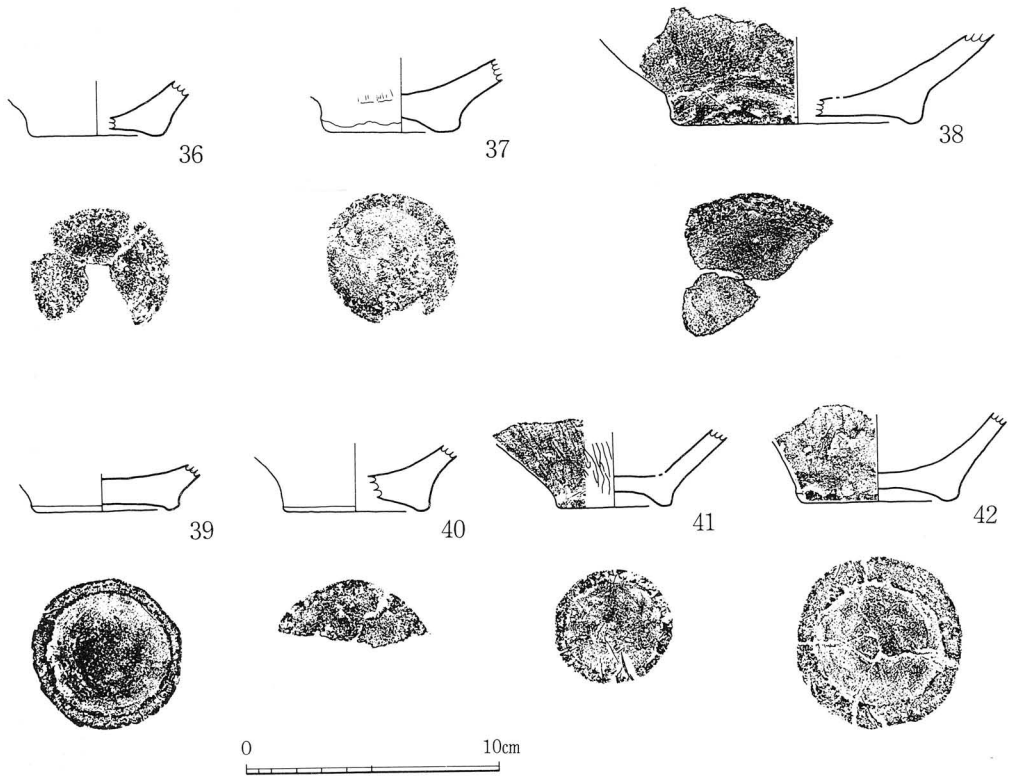
0 10cm

第8図 縄文土器実測図(IV)

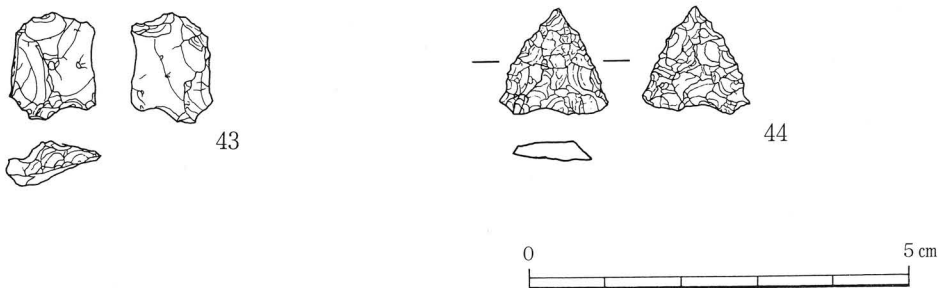


第9図 縄文土器実測図 (V)

0 10cm



第10図 縄文土器実測図 (VI)



第11図 石器実測図

突文を施している。外の土器片と形式を異にすると考えられる。33~42は底部片である。33は平底を呈する。34は平底に近い弱い上げ底である。35~36は顕著な上げ底を呈する。

小結

31を除き全て三万田式に属すると考えられ、富田紘一氏の編年による太郎迫式に相当すると考えられる。しかし、熊本県太郎迫遺跡に見る典型的な太郎迫式に比べて口縁部が短く文様を持つものが少ないという特徴を持つと考えられる。また、現在宮崎県内において三万田式土器を出土する遺跡が少ないため県内の特徴と本遺跡の特徴の比較は難しい。今後の資料の増加を待ちたい。

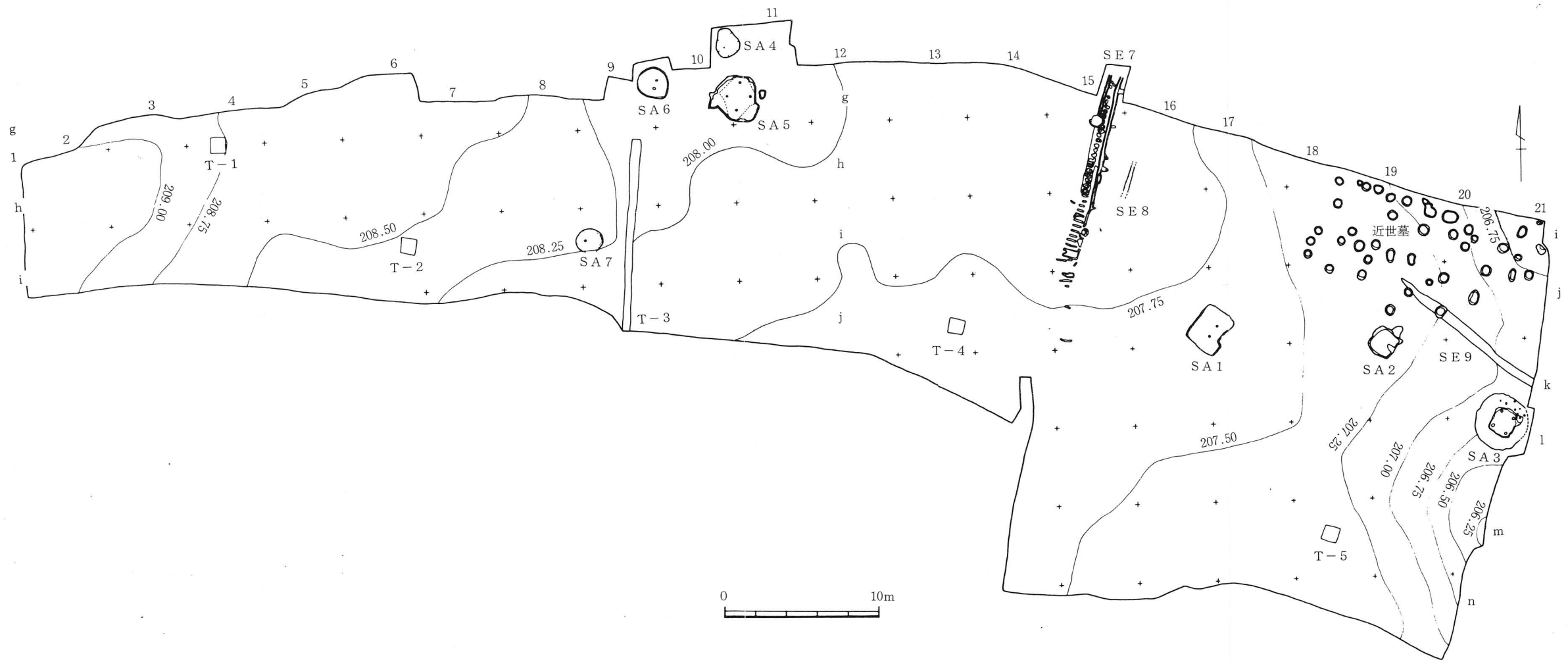
第2表 縄文土器観察表

図面 番号	器 及 残	部 存	調		整		文		胎		土		色		調	焼成	備 考
			表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏			
1	SA 4	口	縁	ヨコ方向のヘラ ミガキ	ヨコ方向のヘラ ミガキ	ヨコ方向のヘラ ミガキ				3.5mm以下の乳白色、灰色の砂粒、 2mm程の半透明の砂粒を含む。		黒 (10Y R 2/1)	にぶい黄橙 (10Y R 7/4) 黒 褐 (10Y R 2/2)	良好	ス ス 付 着		
2	SA 4	口	縁	ヨコ方向の丁寧 なヘラミガキ	ヨコ方向の丁寧 なヘラミガキ	ヨコ方向のヘラ ミガキ				3mm以下の灰、赤茶、乳白色の砂 粒、2mm以下の黒く光る柱状の砂 粒を含む。8mm大の灰色の石粒を 若干含む。		明黄褐 (10Y R 6/6) 黒 褐 (10Y R 3/2)	にぶい黄橙 (10Y R 7/4) 浅黄 (2.5Y 7/3)	良好			
3	SA 4	口	縁 部	ヨコ方向のミガ キ	ヨコ方向のミガ キ	ヨコ方向のミガ キ				2mm以下の淡黄、白色の砂粒、 2.5mm以下の無色透明な砂粒を含 む。		黒 褐 (10Y R 3/2)	にぶい黄橙 (10Y R 6/4) 黒 (10Y R 2/1)	良好	ス ス 付 着		
4	SA 4	口	縁	ヨコ方向のミガ キ	ヨコ方向のミガ キ	ヨコ方向のヘラ ミガキ				2.5mm以下の淡黄、白色の砂粒を 含む。		暗灰黄 (2.5Y 4/2) 黒 (2.5Y 2/1)	にぶい黄褐 (10Y R 5/4) 黒 褐 (2.5Y 3/1)	良好			
5	SA 4	口	縁	ヨコ方向の丁寧 なヘラミガキ	ヨコ方向の丁寧 なヘラミガキ	ヨコ方向のヘラ ミガキ				4mm以下の灰、茶、白色の砂粒、 2mm以下の黒く光る柱状の砂粒、 金色に光る砂粒を含む。		にぶい黄橙 (10Y R 6/3) 黒 褐 (10Y R 2/2)	黒 褐 (10Y R 3/1)	良好			
6	SA 4	口	縁	ヨコ方向のヘラ 工具によるナデ	ヨコ方向のヘラ ナデ	ナデ		浅い沈線		5mmの白色の粒、3mm以下の白、 黒色の砂粒、半透明、黒色の光る 砂粒を含む。		にぶい褐 (7.5Y R 6/3)	にぶい橙 (7.5Y R 7/3)	良好			
7	SA 4	口	縁	ヨコ方向のヘラ ミガキ	ヨコ方向のヘラ ミガキ	ヨコ方向のミガ キ		浅い凹線		3mm以下の白色、淡黄、黒色の砂 粒、2mm以下の無色透明の砂粒を 含む。		黒 (10Y R 2/1)	にぶい黄褐 (10Y R 5/4)	良好			
8	SA 4	口	縁	ヨコ、斜方向の ヘラミガキ	ヨコ、斜方向の ヘラミガキ	ヨコ方向のミガ キ		沈線		2mm以下の淡黄、灰白、白色の砂 粒、1.5mm以下の無色透明な砂粒 を含む。		黒 褐 (10Y R 3/2)	褐 (10Y R 4/4) 黒 (10Y R 2/1)	良好			
9	SA 4	口	縁 部	ヨコ、斜方向の ヘラミガキ	ヨコ、斜方向の ヘラミガキ	ヨコ方向のミガ キ ナデ		沈線		2mm~6.5mmの乳白色の粒、3mm以 下の茶、白灰、無色透明、半透明 の砂粒を含む。		橙 (7.5Y R 6/6)	にぶい黄橙 (10Y R 6/4) 黒 褐 (10Y R 3/1)	良好			
10	SA 4	口	縁 部	ヨコ方向のミガ キ	ヨコ方向のミガ キ	タテ、斜方向の ナデのあとヨコ ミガキ				3mm程の茶、灰、乳白色の粒、2 mm以下の白、乳白色、半透明の砂 粒を含む。		にぶい黄橙 (10Y R 6/4) 黒 (10Y R 2/1)	にぶい黄橙 (10Y R 6/3) 黒 (10Y R 2/1)	良好			

図面 番号	遺構名	器 残	部 存	調		整		文		胎	土	色		調	焼成	備	考
				表	裏	表	裏	表	裏			表	裏				
11	SA 4	口	縁	ヨコ、タテ方向 の丁寧なミガキ	ヨコ方向の丁寧 なミガキ					2mm以下の乳白色の砂粒を含む。		褐 (7.5YR 4/3)	黒褐 (2.5Y 3/1)	良好			
12	SA 4	口	縁	タテ、ヨコ方向 のミガキ	ヨコ、タテ方向 のヘラミガキ					1～3mm程の白・茶・灰・褐色の 砂粒、2mm以下の柱状の黒く光る 砂粒を含む。		橙 (7.5YR 7/6) 黒 (5Y 2/1)	橙 (7.5YR 7/6) 黒 (5Y 2/1)	良好			
13	SA 4	口	縁	ミガキ	ミガキ					2mm以下の乳白色、灰色の砂粒、 1mm以下の黒く光る砂粒と無色透 明の砂粒を含む。		暗 褐 (7.5YR 3/3)	暗 褐 (7.5YR 3/3)	良好	スス付着		
14	SA 4	完	形	ヨコ、斜方向の ミガキ、ナデ	ヨコ方向のミガ キ ナデ					1mm以下の茶、白、2mm以下の半 透明の粒を多く含む。		灰 褐 (5YR 4/2)	灰 褐 (5YR 4/2)	良好	スス付着		
15	SA 4	口	縁	ミガキ	ヨコ方向のミガ キ					2mm以下の乳白色、灰色の砂粒を 含む。		褐 (7.5YR 4/3)	褐 (7.5YR 4/3)	良好	スス付着		
16	SA 4	口	縁	ヨコ方向のヘラ ミガキ	ヨコ方向のミガ キ					4mm程の黒、茶、乳白色の粒を少 量、1mm以下の乳白色、淡黄色の 砂粒、2mm以下の黒く光る柱状の 砂粒を含む。		黒 (10YR 2/1)	黒褐 (10YR 3/2) 黒 (10YR 2/1)	良好	液状口縁		
17	SA 4	口	縁	ヨコ方向のヘラ ミガキ	ヨコ方向のヘラ ミガキ					2mm以下の白、乳白色、黒色の光 る砂粒を含む。		にぶい赤褐 (5YR 5/3)	褐 灰 (5YR 5/1)	良好	液状口縁		
18	SA 4	口	縁	丁寧なナデ	ナデ				沈線	2mm以下の白、茶色の砂粒、無色 透明、黒、金色の光る砂粒を含む。		にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	良好	液状口縁		
19	SA 4	口	縁	丁寧なナデ	丁寧なナデ				沈線	1.5mm以下の白色の砂粒、半透明、 黒色、金色の光る砂粒を含む。		橙 (5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	良好	液状口縁		
20	SA 4	口	縁	ヨコ方向のヘラ ミガキ	ヨコ方向のヘラ ミガキ				細線	0.5mm以下の白い軟質の細砂粒、 1mm程のうす茶の砂粒を若干含む。		黒 褐 (5YR 3/1)	黒 褐 (5YR 3/1)	良好	液状口縁		
21	SA 4	口	縁	ヨコ、斜方向の ヘラミガキ	ミガキ				細い沈線	1mm以下の白、黒色、半透明で光 る砂粒を含む。		褐 灰 (7.5YR 4/1)	灰 褐 (5YR 5/2)	良好	液状口縁		

図面 番号	遺跡名	器部 及び 残存	調		整	文		様		胎	土	色		調	焼成	備 考
			表	裏		表	裏	表	裏							
22	SA4	口縁部	斜、ヨコ方向の 丁撃なへらミガキ	斜、ヨコ方向の 丁撃なへらミガキ	斜、ヨコ方向の 丁撃なへらミガキ	表	裏	洗線	3.5mm以下の乳白色、灰色、黒色の砂粒、1.5mm程の透明な砂粒を含む。	褐 (7.5YR 4/3)	暗褐 (10YR 3/3)	良好	波状口縁			
23	SA4	頸部	ヨコ、斜方向の 丁撃なへらミガキ	タテ、斜方向の へらミガキ、ナ デ、指ナデ					3mm以下の白色、茶褐色の砂粒、半透明、乳白色、黒色の光る砂粒を多く含む。	明赤褐 (5YR 3/2) 橙 (5YR 6/6)	にぶい赤褐 (5YR 4/4)	良好	スス付着			
24	SA4	胴部	ヨコ、タテ方向 の丁撃なへらミ ガキ	ヨコナデ					3mm以下の白色、淡茶色、灰色、無色透明で光る砂粒を含む。	赤灰 (2.5YR 4/1) にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい褐 (7.5YR 6/3) 褐灰 (5YR 4/1)	良好	内面にスス付着			
25	SA4	頸部	ヨコ、斜方向の 丁撃なへらミガ キ	ナデ、斜方向の へらナデのあと ナデ					2mm以下の乳白色、半透明、黒色で光る粒を多く含む。3mm大、8mm大の粒を含む。	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	良好				
26	SA4	頸部	ヨコ方向の丁撃 なへらミガキ	ヨコ方向のミガ キの上をタテ方 向にミガキ					1~3.5mmの白色の砂粒を含む。	黒褐 (5YR 3/1)	黒褐 (5YR 3/1)	良好				
27	SA4	頸部	ヨコ、タテ方向 のへらミガキ	ヨコ、斜方向の ナデ					1~2mmの褐、灰色の砂粒、1.5~4mmの白色の砂粒、透明の光る微細砂粒を含む。	黒褐 (10YR 3/1) にぶい褐 (7.5YR 6/3)	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	良好	スス付着			
28	SA4	頸部	ヨコ方向のミガ キ	ヨコナデ					0.5~1mmの黒く光る柱状の砂粒、透明に光る細砂粒、1~1.5mmの白色の砂粒を含む。	にぶい黄褐 (10YR 5/3) 黒褐 (10YR 3/1)	灰黄褐 (10YR 4/2)	良好				
29	SA4	頸部	斜、ヨコ方向の へらミガキ	ヨコナデ					3mm以下の白色、無色透明、黒色の光る砂粒を含む。	にぶい赤褐 (5YR 4/3)	明赤褐 (5YR 5/6)	良好				
30	SA4	口縁部	ヨコ方向のへら ミガキ	ヨコ方向のへら ミガキのあとナ デ					4mmの半透明の光る粒、白色の粒、2mm以下の白色の砂粒、無色透明、黒色の光る砂粒を多く含む。	黒褐 (10YR 3/1)	黒褐 (10YR 3/2) にぶい褐 (7.5YR 5/3)	良好				
31	SA6	頸部	ナデ	ヨコナデ	洗線、刺突文				1mm程の無色透明の光る砂粒、黒く光る砂粒、0.5mm以下の白色の砂粒を含む。	にぶい赤褐 (5YR 4/3)	暗赤褐 (5YR 3/4)	良好				
32	SA6	口縁部	へらナデ	ヨコナデ	洗線				0.5mm以下のガラス質の光る砂粒、1.5mm以下の褐色の砂粒を少量含む。	にぶい橙 (7.5YR 6/4) 明黄灰 (2.5Y 5/2)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	良好				

図面 番号	遺構名	器部 及び 残存	調		整	文		胎	土	色		調	焼成	備 考
			表	裏		表	裏			表	裏			
33	SA 4	底部	ナデ		ナデ			2mm以下の白灰色、茶色の砂粒、 黒色、無色透明の光る砂粒、6mm の茶色の粒を含む。		灰黄褐 (10Y R 6/2)	灰黄褐 (10Y R 5/2)		良好	
34	SA 4	底部	ナデ		ナデ			2mm以下の白、黒色、黄白色、黒 色の光る細砂粒を含む。		にぶい黄橙 (10Y R 7/4)	橙 (7.5Y R 7/6)		良好	
35	SA 4	底部	ナデ		ナデ			1~2.5mmの白色の砂粒を含む。		黄 灰 (2.5 Y 4/1)	灰黄褐 (10Y R 5/2)		良好	
36	SA 4	底部	ナデ		ナデ			4mm以下の白色の砂粒、黒色の光 る砂粒を含む。		浅黄橙 (10Y R 8/1) にぶい赤褐 (5 Y R 5/3)	黒 褐 (10Y R 3/1)		良好	内面にスス付着
37	SA 4	底部	ナデ		ナデ			2mm以下の乳白色、白、無色透明 半透明の砂粒、1mm以下の柱状の 黒く光る砂粒を含む。		にぶい褐 (7.5Y R 5/4)	黒 褐 (5 Y R 2/1)		良好	内面にスス付着
38	SA 4	底部	ナデ		ナデ			4mm以下の灰白、黒、乳白色の砂 粒、黒、金色、半透明の光る砂粒 を含む。		にぶい橙 (7.5Y R 6/4)	にぶい黄橙 (10Y R 6/4)		良好	内面に1~2mm厚 さの炭化物付着
39	SA 4	底部	ナデ		ナデ			2mm以下の白、茶色の砂粒、半透 明の光る砂粒を含む。		明赤褐 (5 Y R 5/8)	にぶい赤褐 (5 Y R 4/4)		良好	
40	SA 4	底部	ナデ		ナデ			2.5mm以下の白色、半透明で鋭く 光る砂粒を含む。		にぶい赤褐 (5 Y R 5/3)	灰 褐 (7.5Y R 5/2)		良好	
41	SA 4	底部	ナデ		ナデ			1mm以下の白色の砂粒、黒色、半 透明の光る細砂粒を含む。		灰 褐 (5 Y R 6/2)	褐 灰 (5 Y R 4/1)		良好	内面に炭化物付 着
42	SA 4	底部	ナデ		ナデ			2mm以下の白色の砂粒、黒色、半 透明の光る砂粒を含む。		にぶい橙 (7.5Y R 7/3)	淡 黄 (5 Y 8/3)		良好	内面に炭化物付 着



第12图 B地区遺構分布图

【註】

- (1) 富田紘一「三万田式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣 1981
- (2) 富田紘一『戸坂遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会 1986
- (3) 岩永哲夫「陣内第2遺跡」『埋蔵文化財調査研究報告』宮崎県総合博物館 1987
- (4) 長友郁子「水落遺跡」『小林市文化財調査報告書第1集』小林市教育委員会 1990

第4節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は調査区の中央部（h-8・9、g-9・10・11）と東部（j-16・17、k-16・17、j-18・19、k-18・19、k-20・21、l-20・21）から住居跡が6軒検出された。SA5・SA6以外はそれぞれ約15m間隔で点在している。SA5・SA6の間隔は約5mで、隣あった状態で検出された。円形プランと方形プランが混在しており、住居跡同士が切りあっている遺構はない。住居跡の埋土はほとんどの住居跡の場合、白色のパミスを疎らに含む黒褐色軟質土（これをI層とする）と床面近くに堆積する、I層にアカホヤブロックを多く含むII層で構成されている。

SA1（第13図）

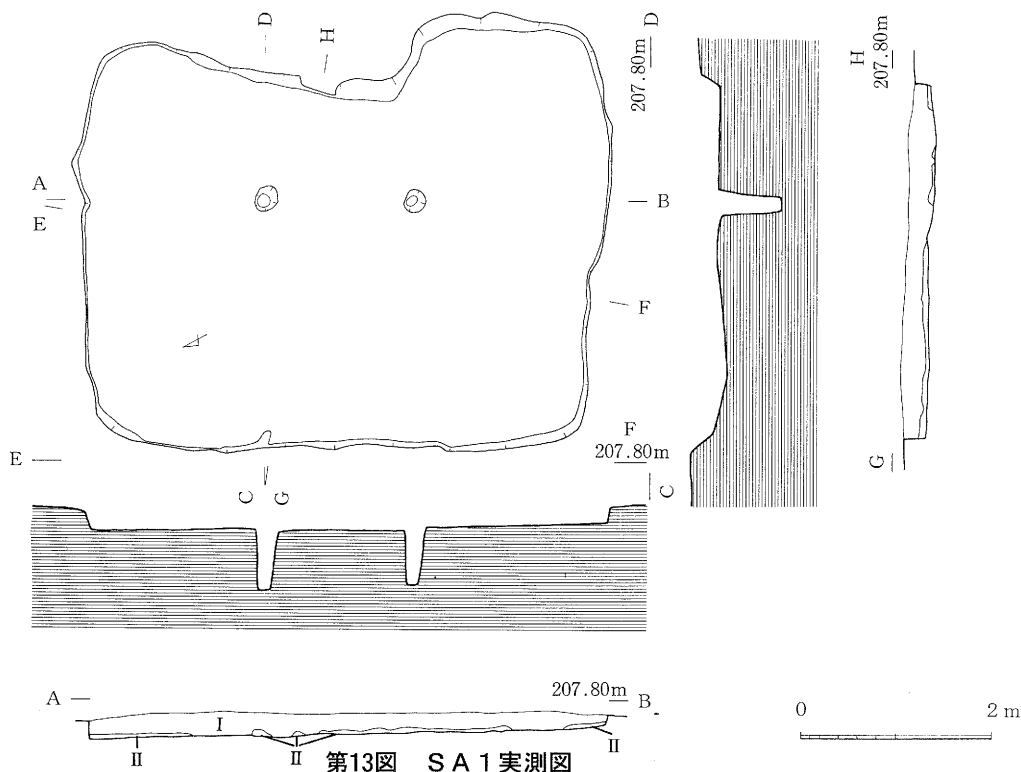
SA1はj-17・18、k-17・18に位置し、長さ5.5m、幅3.9mの方形プランを呈し南東側に1ヵ所張り出しを持つ。柱穴は長径30cm、短径22cm、深さ75cmのものと長径26cm、短径22cm、深さ60cmのものの2個が南北方向に並んで検出された。柱穴間の距離は1.33mである。遺存状況は良好ではなく壁高は15cmから19cmを測る。壁面は平坦な床面から垂直に近い角度で立ち上がっている。埋土は基本層序どおりでほとんどが白色パミスを少量含む黒褐色軟質土（I層）であるが、床面近くではそれにアカホヤのブロックを疎らに含む（II層）。焼土や炉跡は検出されなかった。

壺（第14図1～10）

1は頸部が締まり、口縁部が大きく外反するが、口縁端部を欠如している。胴部は長胴気味で、胴部最大径は中位にある。胴部の外面は斜方向のハケメを、内面は横方向のハケメを施している。頸部径12.7cm、胴部の最大径25.8cm、器高27.3cm+ α である。2は1と同一個体で、底径5.3cmの平底気味の底部である。3は口頸部がほぼ垂直に伸び、途中から大きく外反し、口縁端部は上下に張り出している。口頸部は内外面ともヨコナデを、肩部の外面にはハケメを施している。口径は17.0cmである。4は3と同一個体の長胴気味の底部で、底部は若干丸底気味の平底である。5は口縁部が短く大きく外反し、口縁端部は凹気味に仕上げている。口径は12.0cmで、内外面ともヨコナデを施している。6は5と同一個体で、底径9.4cmの平底の底部である。7は口縁端部が内側に短く屈曲する口縁部である。8は胴部が大きく張った小型の壺の胴部で、外面にヘラ磨きを施している。10は底径3.0cmの平底の小型壺である。

鉢（第14図11）

11は胴部から口縁部にかけて緩やかに内側に湾曲し、口縁端部は凹気味に仕上げている。口径

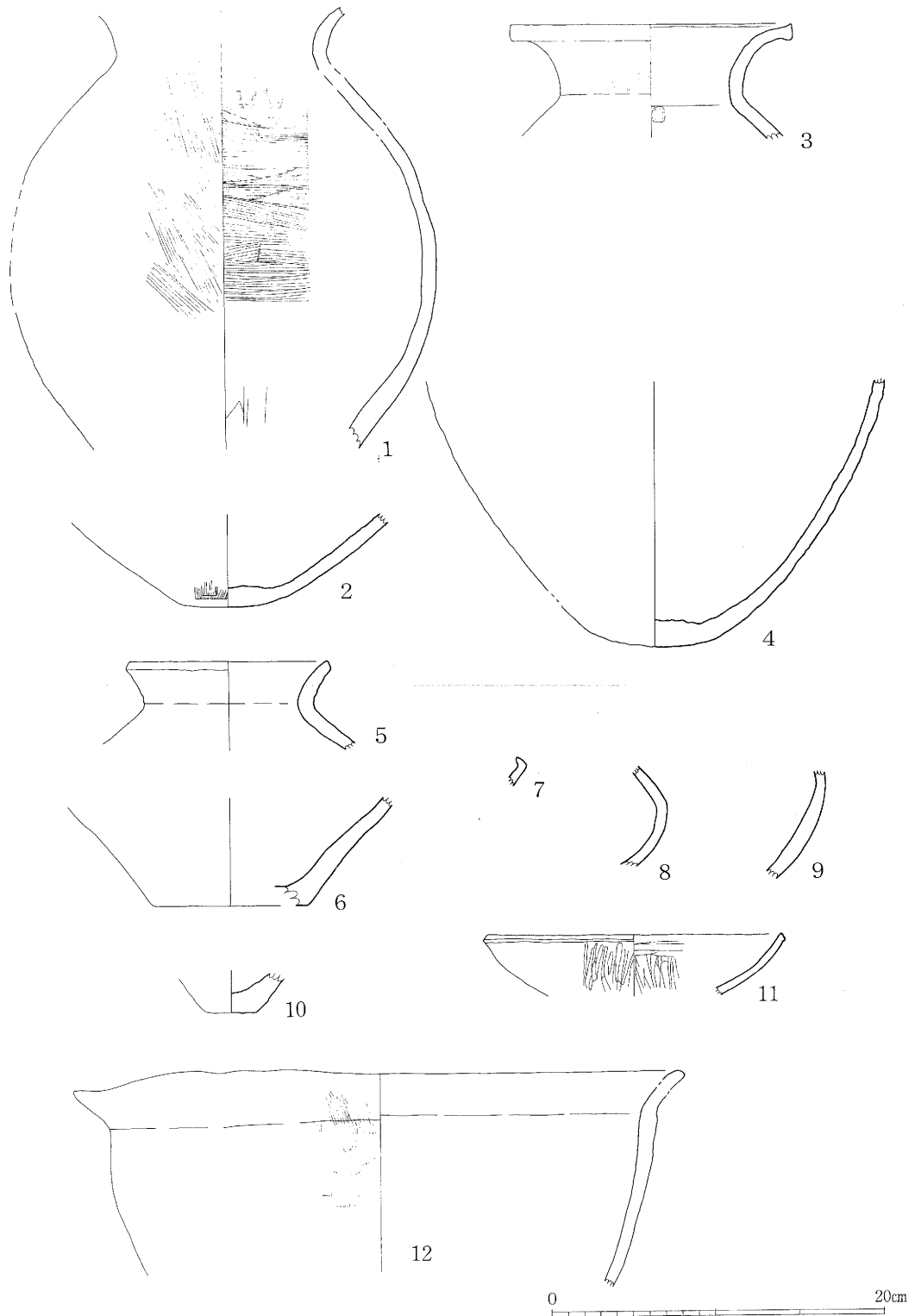


第13図 SA 1 実測図

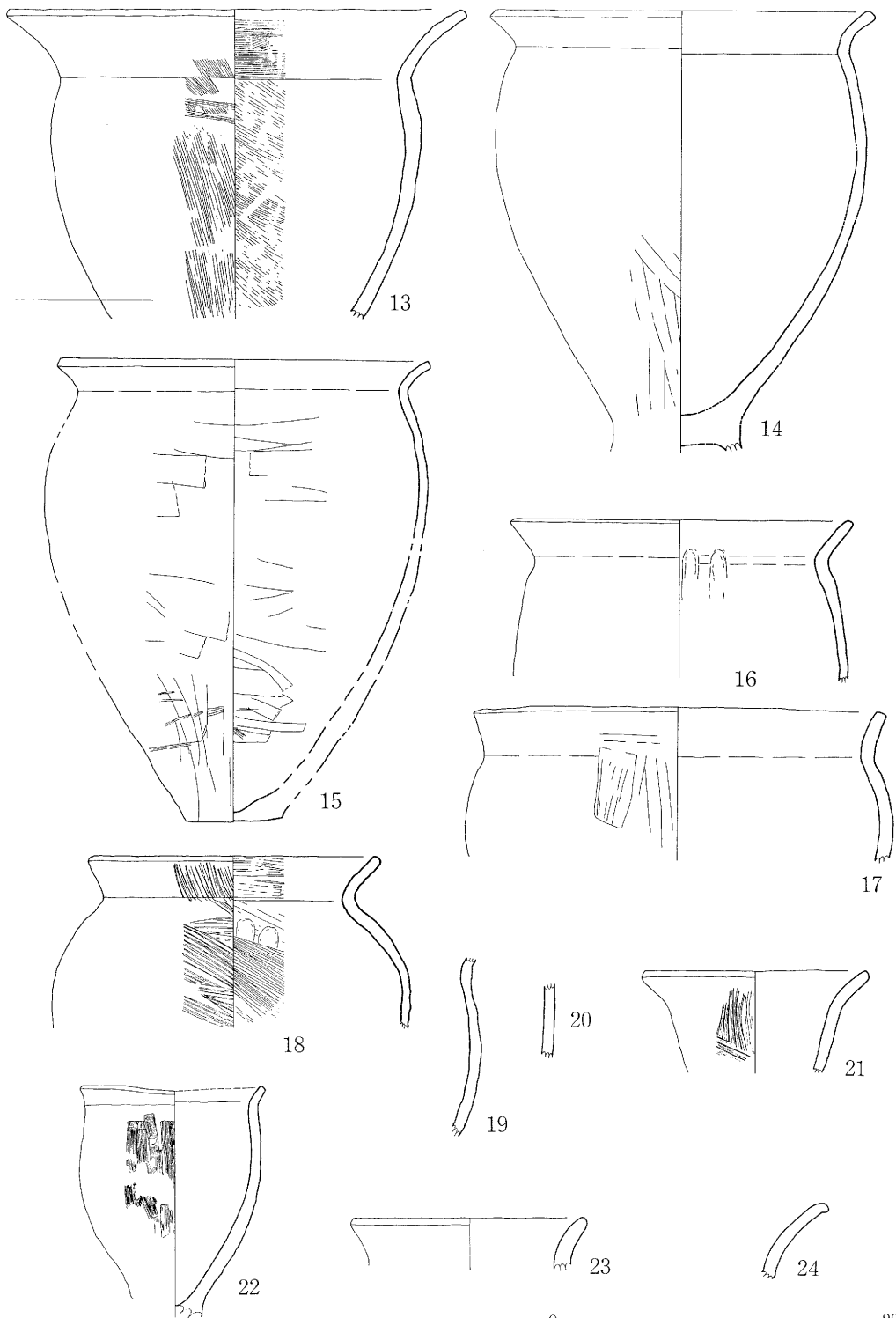
は18.0cmで、内外面とも縦方向のヘラ磨きを施している。

甕 (第14図12、第15図13~24)

12は胴部最大径が口縁部直下にあり、口縁部が短く直線的に外反し、口唇部は丸く仕上げている。口縁部から胴部にかけての外表面は縦方向のハケメを、内面はヨコナデを施している。口径36.8cm、頸部径33.4cm、胴部最大径33.1cmである。13は胴部最大径が頸部の若干下位にあり、口縁部が緩やかに長く外反している。口縁端部は凹気味に仕上げている。口縁部の外表面にはヨコナデを、他の部位にはハケメを施している。口径26.8cm、頸部径20.7cm、胴部最大径22.0cm、現高18.6cmである。14は口径と胴部最大径がほぼ一致し、胴部最大径が上位にある。口縁部が途中で屈曲しながら短く外反し、口縁端部は凹気味に仕上げている。胴部の下位からすぼまり、上げ底の底部に続くが、底部の端部を欠如している。胴部の内外面とも8mm幅の工具による縦方向のナデを施している。口径22.2cm、頸部径19.7cm、胴部最大径22.0cm、器高26.3cm+ α である。15は14と同様に口径と胴部最大径がほぼ一致し、胴部最大径が上位にある。口縁部が湾曲しながら短く外反し、端部は凹気味に仕上げている。胴部の下位からすぼまり、平底の底部に続く。胴部の内外面とも横・縦方向のハケメを施している。口径21.7cm、頸部径19.5cm、胴部最大径22.7cm、器高27.7cm、底径5.7cmである。16も14・15と同様に口径と胴部最大径がほぼ一致し、胴部最大径が上位にある。口縁部は直線的に外反し、口縁端部は凹気味に仕上げ、内外面ともナデを施している。



第14图 弥生土器实测图 (I)



第15图 弥生土器实测图(II)

0 20cm

17は胴部最大径が口径よりやや大きく、口縁部がほぼ直立して伸び、口縁端部は凹気味に仕上げている。胴部の外面は縦方向のハケメを施している。口径23.6cm、頸部径23.1cm、胴部最大径25.4cmである。18は口径より胴部最大径がかなり大きく、口縁部が短く外反している。口縁端部は凹気味に仕上げている、口縁端部以外は斜方向のハケメを施している。口径16.6cm、頸部径15.0cm、胴部最大径20.8cmである。21は頸部から大きく外反し、胴部は頸部から底部に向かってすぼまっている。口径13.1cm、頸部径10.3cmである。22は口径と胴部最大径がほぼ一致し、胴部最大径が中位にある。口縁部は短く外反し、口縁端部は平坦に仕上げている。口径10.6cm、頸部径10.4cm、胴部最大径10.8cm、現高13.6cmである。

高坏（第17図25～29）

25は坏部と口縁部の境に明瞭な稜線を有し、口縁部が短く外反する。口唇部は平坦に仕上げ、端部は下方に摘み出している。坏部の内外面とも縦・横方向のヘラ磨きである。口径29.0cm、坏部高10.3cmである。26は25と同一個体の脚部で、脚部が緩やかに大きく外方に伸びている。脚裾部は欠如しており、脚裾部との変換点に片面から穿孔した孔径1.4cmの円形透かし孔を四方に有する。外面は縦方向のヘラ磨きを、内面には指押さえを施している。27は口縁端部が下方に張り出している。29は26に比べると細身の脚部で、孔径0.9cmの円形透かしを有する。外面は丁寧な縦方向のヘラ磨きを、内面には絞りを施している。

砥石（第29図001・002）

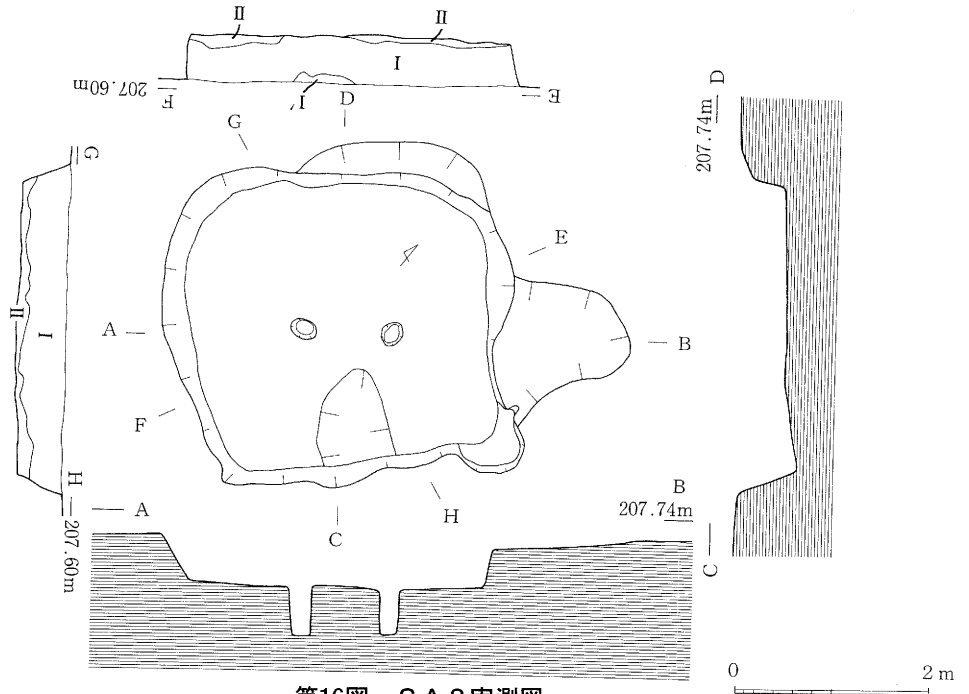
001は扁平縦長の砂岩製で、表・裏面ともに使用しており、表・裏面ともへこんでいる。長さ12.5cm+ α 、幅7.1cm+ α 、厚さ1.8cm、重さ462g+ α である。002は扁平縦長の砂岩製で、表・裏面ともに使用しており、表面がへこんでいる。長さ8.4cm+ α 、幅4.7cm+ α 、厚さ1.5cm、重さ126g+ α である。

SA2（第16図）

SA2はj-19・20、k-19・20に位置し、長さ3.65m、幅3.45mの方形プランを呈し、中央に2個の柱穴を持つ。柱穴は長径30cm、短径22cm、深さ48cmのものと長径28cm、短径20cm、深さ53cmのもの2個が東西方向に並んで検出された。柱穴間の距離は0.68mである。遺存状況は比較的良好で壁高は35cmから52cmを測る。壁面はほぼ平坦な床面から垂直に近い角度で立ち上がっている部分とやや角度が鈍くなった部分がある。埋土はSA1同様に、ほとんどが白色パミス少量含む黒褐色軟質土（I層）であるが、床面近くではそれにアカホヤのブロックを疎らに含むもの（II層）であった。焼土や炉跡は検出されなかった。

壺（第17図30～39）

30・31は胴部外面はハケメの後、ヘラ磨きを施している。32は底径13.4cmの平底の底部である。内外面ともナデを施している。33は頸部が縮まり、口頸部がほぼ垂直に伸び、途中から外反し、更に口縁端部で大きく屈曲する。口縁端部は丸く仕上げている。口頸部の外面下位は斜方向のハ



第16図 SA 2実測図

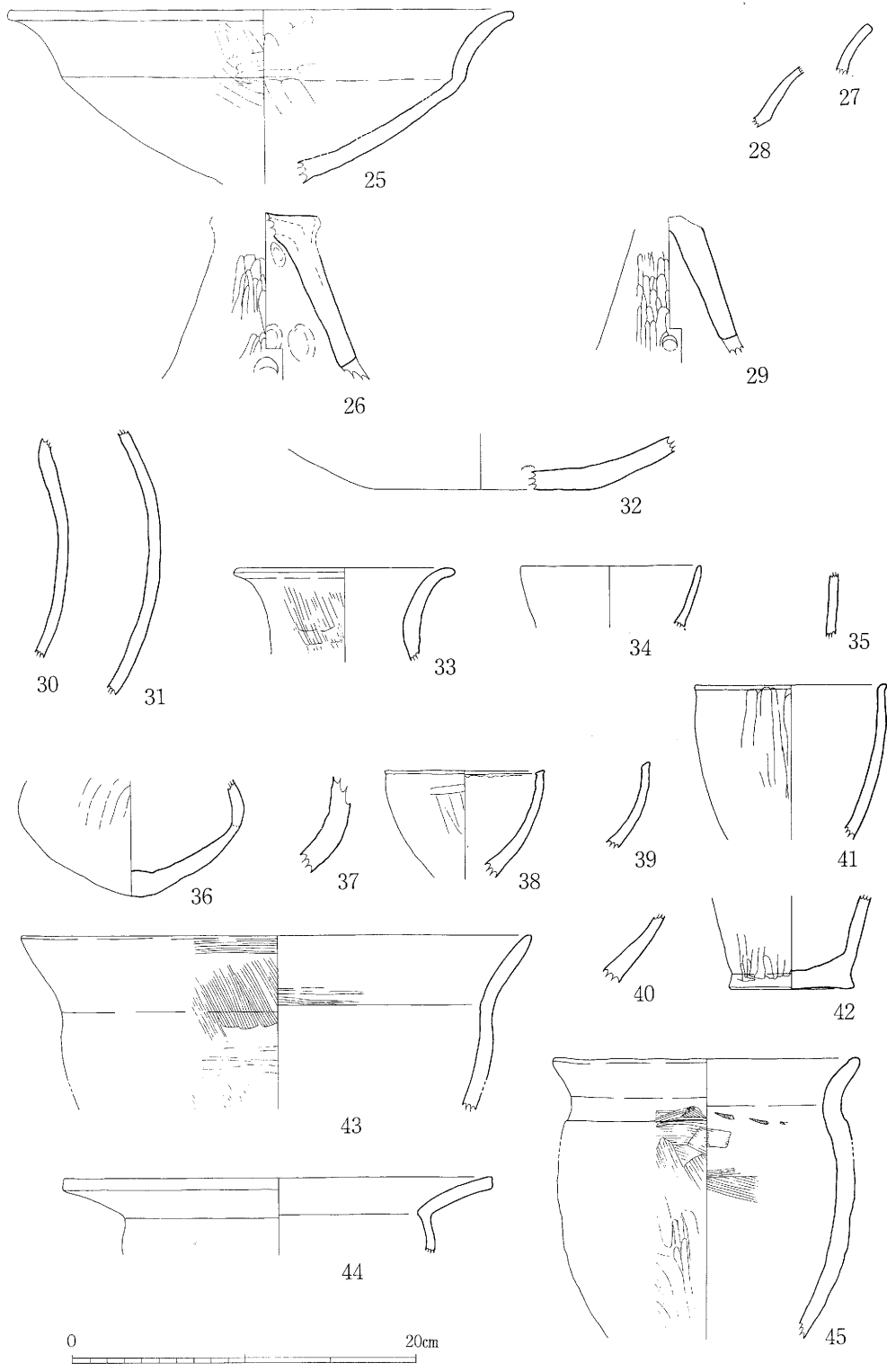
ケメ、その他の部位にはヨコナデを施している。口径12.5cm、頸部径8.7cmである。34は口縁部が内側に少し湾曲しながら伸びている。内外面ともヨコナデとナデを施している。口径10.4cm、頸部径8.5cmである。36は胴部最大径が中位にあり、胴部が大きく張る。底部は底径1.5cmの小さな平底をわずかに残す丸底である。胴部上半部の外面は斜方向のヘラ磨きを、その他の部位はナデを施している。胴部最大径13.1cm、現高6.8cmである。

鉢 (第17図38~42)

38は底部から胴部にかけて大きく外反し、胴部から口縁部にかけて緩やかに内側に湾曲し、口縁部ではほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は平坦気味に仕上げ、内外に摘み出している。内外面とも縦方向のヘラ磨きを施している。口径は9.4cm、底部は欠如しており現高6.3cmである。41は胴部から口縁部にかけて緩やかに内側に湾曲し、口縁部ではほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部を外側に少し折り曲げ、平坦に仕上げている。外面は縦方向のヘラ磨きを、内面はナデを施している。口径は11.0cmである。42は41と同一個体で、底径7.1cmの若干上げ底気味の平底の底部である。底面が外へ張り出してその上部が若干くびれている。底部まで縦方向のヘラ磨きを、底面はヘラ状工具によるナデを施している。

甕 (第17図43~45、第19図46~54)

43は胴部最大径が口縁部直下にあり、口縁部が直線的に外反し、口唇部は丸く仕上げている。口縁部から頸部にかけての外面は縦方向のハケメを、胴部外面は斜方向のハケメの後ナデを施している。胴部の内面はナデを施している。口径29.5cm、頸部径25.3cm、胴部最大径25.3cmである。



第17图 弥生土器実測图(Ⅲ)

44は胴部最大径が頸部の若干下位にあり、口縁部が長く大きく外反している。口縁端部は凹気味に仕上げている。内面の口縁部と胴部の境は明瞭である。内外面ともヨコナデを施している。口径25.0cm、頸部径18.0cm、胴部最大径18.3cmである。45は口径と胴部最大径がほぼ一致し、胴部最大径が中位付近にある。口縁部がほぼ真っ直ぐに立ち上がり、途中から短く大きく外反し、端部は丸く仕上げている。頸部に段ができるほど強いヨコナデを施している。胴部の下位からすぼまり、底部を欠如している。外面は斜方向のハケメを、内面は横方向のハケメとヨコナデを施している。口径17.5cm、頸部径15.7cm、胴部最大径17.4cm、器高16.5cm+ α である。46は口径と胴部最大径がほぼ一致し、胴部最大径が中位にある。口縁部は直線的に短く外反し、口縁端部は平坦に仕上げている。内外面ともナデを施している。口径15.4cm、頸部径14.4cm、胴部最大径16.6cm、器高18.4cm+ α である。47は口径が胴部最大径より小さく、胴部最大径が上位にある。口縁部がほぼ真っ直ぐに立ち上がり、口縁端部で短く外へ屈曲する。口縁端部は平坦に仕上げている。内外面ともヨコナデを施している。口径16.0cm、頸部径14.8cm、胴部最大径17.8cmである。51は底径8.1cmの平底の底部であるのに対して、52~54は上げ底の底部であり、特に53は脚高4.0cmと高い。底径は52は7.5cm、53は8.8cm、54は4.0cmである。54のみが内外面ともヘラ磨きを施している。

高坏 (第19図55~56)

55は坏部と口縁部の境に甘い稜線を有し、口縁部が緩やかに外反するが、口唇部は欠如する。外面はハケメを、内面はナデを施している。

台石 (第29図003~004)

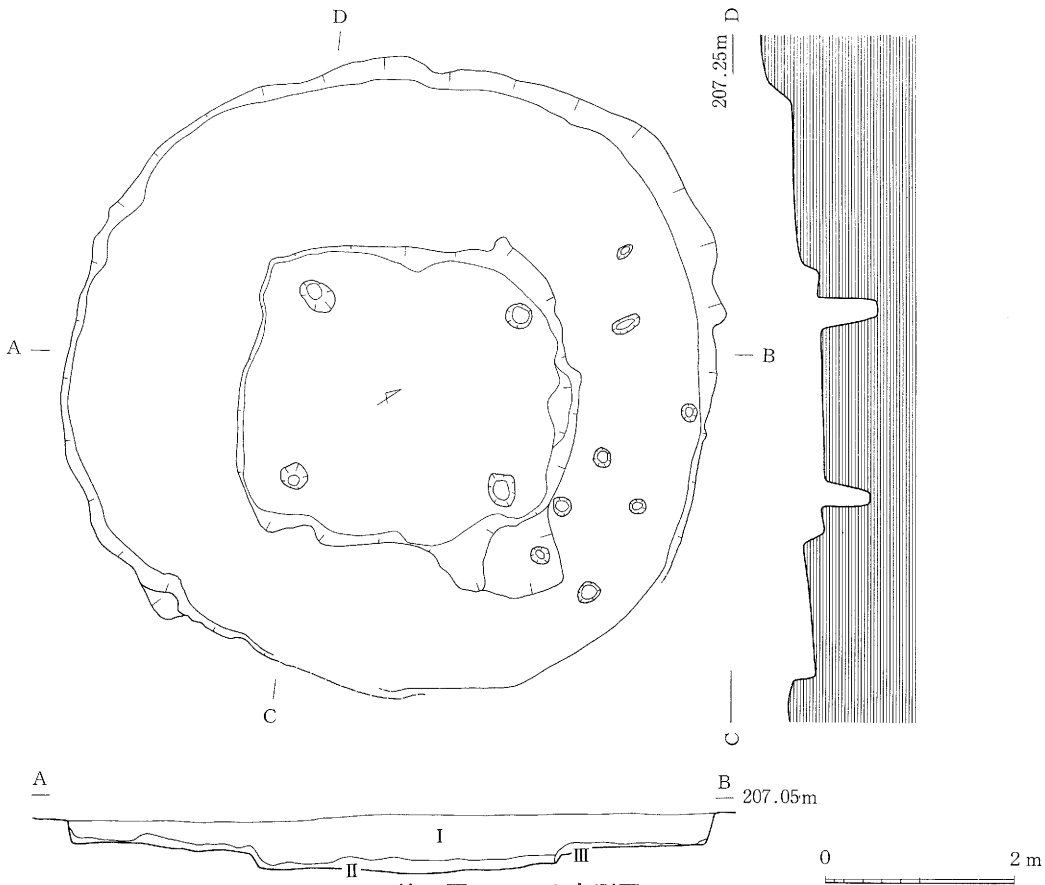
003は厚手の扁平の安山岩製で、表面を使用しているためにへこんでいるが、裏面は平坦である。長さ25.4cm、幅23.5cm、厚さ6.7cm、重さ7100gである。004は安山岩製で、表面を使用しているために若干へこんでいるが、裏面は平坦である。長さ13.0cm、幅10.7cm、厚さ3.4cm、重さ900gである。

砥石 (第29図005)

005は安山岩製で、表面は使用しているために大きくへこんでいるが、裏面は平坦である。長さ9.5cm、幅8.9cm、厚さ2.6cm、重さ580gである。

SA3 (第18図)

SA3はk-20・21、1-20・21に位置し、長径6.73m、短径6.71mの円形プランを呈する大型の住居跡である。中央部を長さ3.56m、幅3.14mの方形に掘り窪めてベッド状遺構を造りだしている。支柱穴は方形の掘り込み部分の四隅にそれぞれ長径38cm、短径32cm、深さ38cmのもの、長径28cm、短径26cm、深さ19cmのもの、長径42cm、短径28cm、深さ63cmのもの、長径30cm、短径27cm、深さ11cmのもの4個である。柱穴間の距離はそれぞれ1.56m、1.82m、1.61m、1.92mを測る。住居跡の壁面はほぼ平坦なベッド状遺構から垂直に近い角度で立ち上がり、壁高は23cm

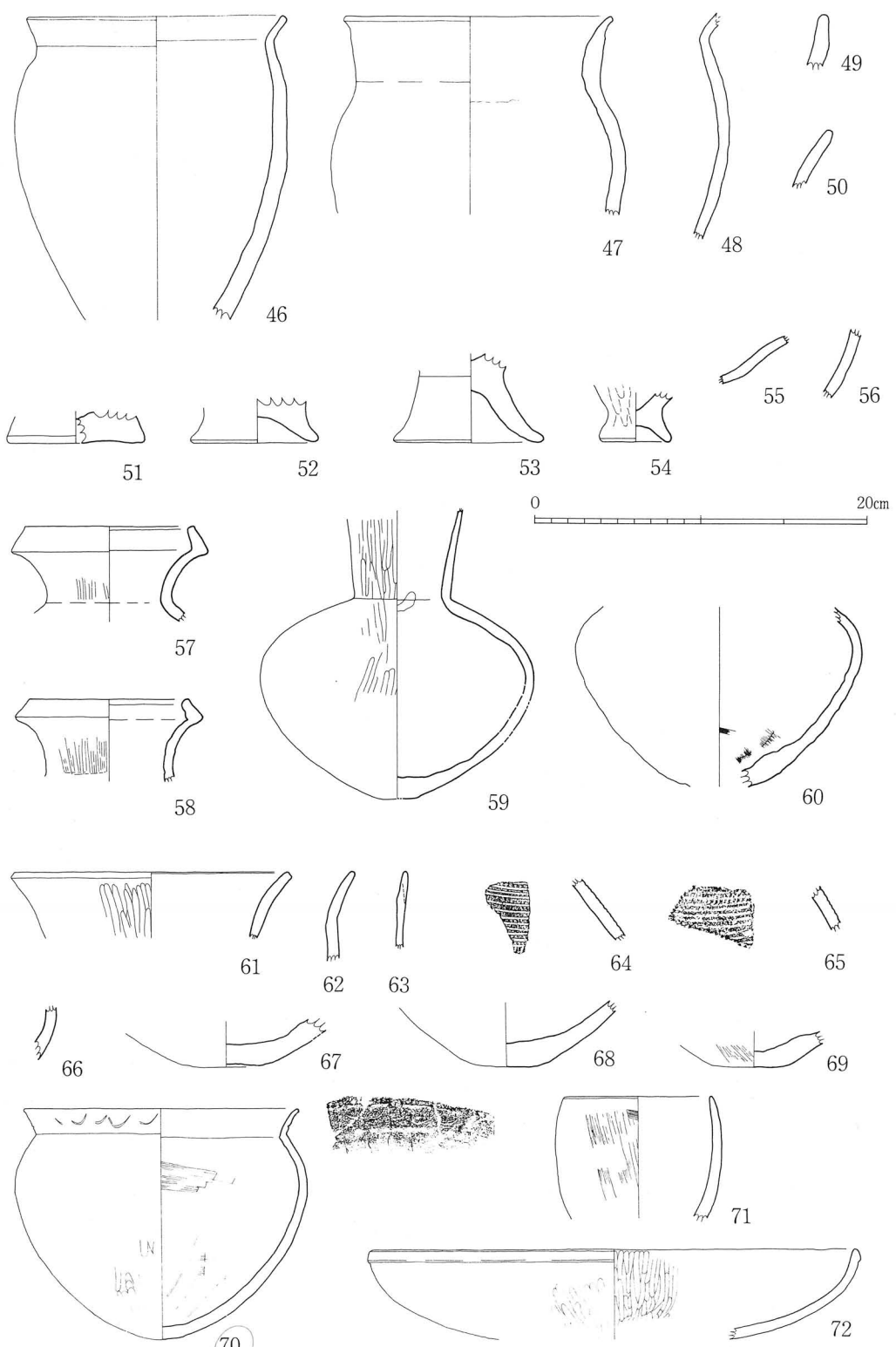


第18図 SA3実測図

から30cmを測る。住居跡中央の床面部分からベッド状遺構までの立ち上がりはやや角度が鈍く壁高は7cmから15cmを測る。住居跡の東側部分が一部削平されているが外の部分の遺存状況は比較的良好である。埋土はほとんどの部分が基本層序のI層のみであるが、東西方向のセクションにIII層としてI層とほぼ同質であるが橙色のパミスを多く含む層がある。

壺 (第19図57~70)

57は頸部が縮まり、口縁部が内傾する無文の複合口縁壺で、口縁端部を平坦に仕上げている。頸部の外面は縦方向のハケ目を、他の部位はナデを施している。口径10.2cm、頸部径7.7cmである。58は頸部が縮まり、口縁部が短く大きく内傾する無文の複合口縁壺で、頸部はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、途中から緩やかに外反する。口縁端部は平坦に仕上げている。頸部の外面は縦方向のハケメの後ナデを、他の部位にはナデを施している。口径は9.7cm、頸部径7.8cmである。59は胴部最大径が中位にあり、胴部が横に大きく張る長頸壺である。頸部はほぼ直立しながらやや外方に長く伸びる。底径は2.0cmの小さい平底である。外面は縦方向のヘラ磨きを、内面はナデを施している。口縁部は欠如しており、頸部径5.8cm、胴部最大径16.1cm、器高17.6cm+ α である。60は胴部最大径が上位にあるが、口頸部と底部を欠如している。内外面とも風化著しいため調整は不明である。胴部最大径は17.3cmである。61は口縁部が緩やかに外反し、口縁端部は凹気



70

第19图 弥生土器实测图 (IV)

味に仕上げている。口径は16.4cmで、外面は縦方向のヘラ磨きを、内面はヨコナデを施している。64は重弧文長頸壺の胴部の破片で、横方向の13条の沈線に一部縦方向の沈線を施している。外面は縦方向のヘラ磨きを、内面にはナデを施している。65は64と別個体の重弧文長頸壺で、横方向の8条の沈線に一部縦方向の沈線を施している。外面は風化著しいために調整は不明であるが、内面はハケメを施している。70は口径が胴部最大径より小さく、胴部最大径は上位にある。口縁部は直線的に短く外反し、外面にヘラ状工具による連続する弧状の沈線文を施している。胴部外面は縦方向のヘラ磨きを、内面は横方向のハケメを施している。底部は丸底である。口径16.6cm、頸部径15.2cm、胴部最大径17.7cm、器高14.2cmである。67は上げ底気味の平底であるのに対して、68・69は平底である。底径は67が3.8cm、68が4.0cm、69が4.7cmである。

鉢（第19図71～72）

71は胴部から口縁部にかけてほぼ直立しながら伸び、口縁端部付近で内側に湾曲し、口縁端部は丸く仕上げている。口径は8.7cmで、外面は縦方向のハケメを施している。内面はナデを施している。72は皿状に口縁部付近で直立気味に立ち上がる。口縁端部はヨコナデで丸く仕上げ、外側に段を有する。外面は斜方向のヘラ磨きを、内面には縦方向のヘラ磨きを施している。口径30.0cm、器高5.5cm+ α である。

甕（第20図73～79）

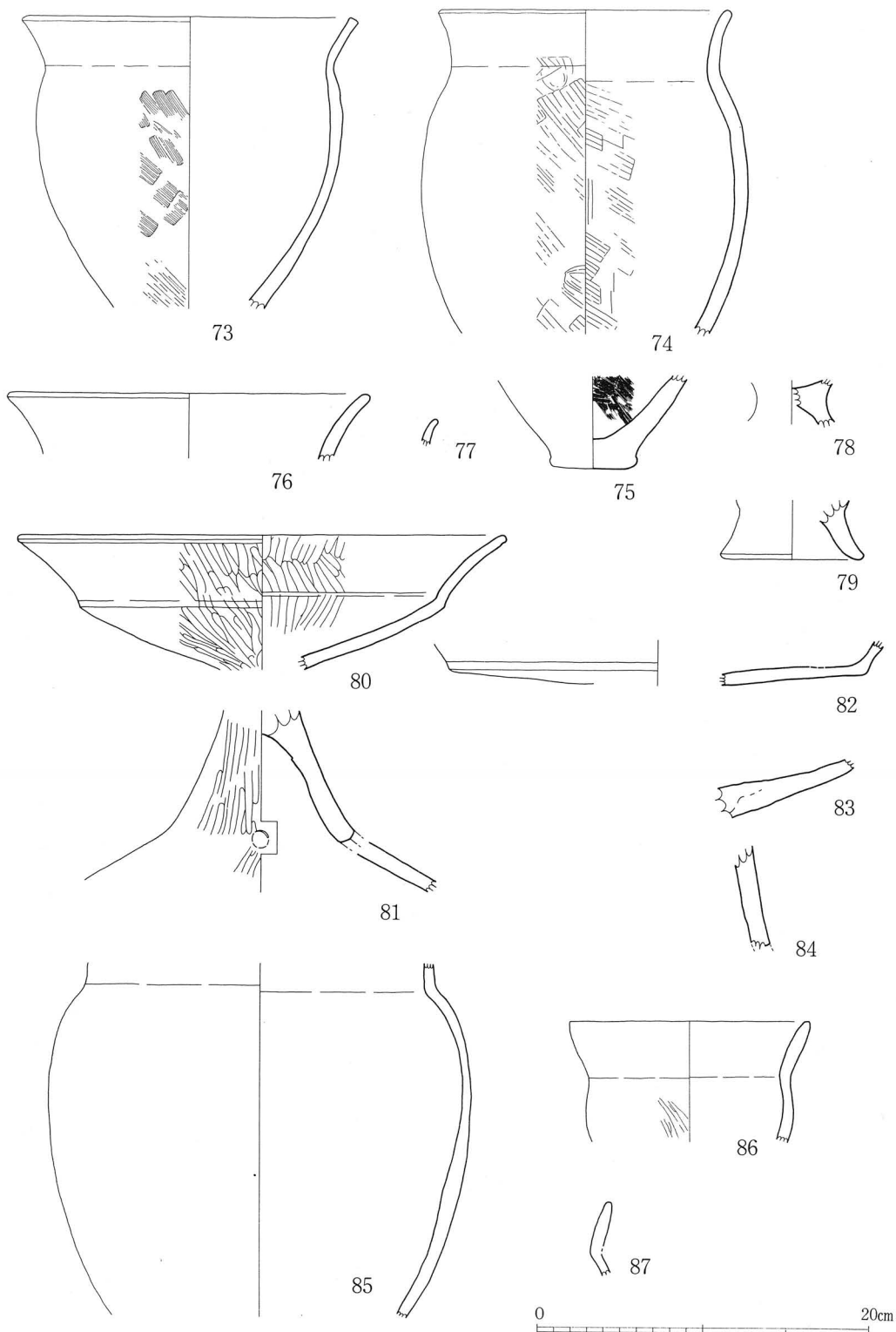
73は胴部最大径が上位にあり、口径が胴部最大径より大きい。口縁部は長く直線的に外反し、口唇部は凹気味に仕上げている。胴部の外面は斜方向のハケメを、内面はヨコナデを施している。口径19.5cm、頸部径17.5cm、胴部最大径18.4cm、器高17.7cm+ α である。74は胴部最大径が上位にあり、口径は胴部最大径より小さい。長い口縁部がほぼ直立しながら伸び、途中から緩やかに外反している。口縁端部は平坦に仕上げている。口縁部の内外面はヨコナデを、胴部の内外面には斜方向のハケメを施している。口径17.3cm、頸部径16.2cm、胴部最大径19.7cm、器高19.7cm+ α である。75は74と同一個体の底径4.7cmの平底の底部で、底部は外方に張り出している。78・79は上げ底の底部で、79は底径8.0cmである。

高坏（第20図80～84）

80は浅い坏部と口縁部の境に明瞭な稜線を有し、長い口縁部が緩やかに湾曲しながら外反する。口唇部は平坦に仕上げ、坏部の内外面とも斜方向のヘラ磨きである。口径29.2cm、坏部高8.2cmである。26は25と同一個体の脚部で、脚部が緩やかに広がり、脚裾部から更に大きく広がる。脚部と脚裾部との変換点に両面から穿孔した孔径1.0cmの円形透かし孔を四方に有する。外面は縦方向のヘラ磨きを、内面には指押さえを施している。82は浅い皿状の坏部で、丁寧なナデを施している。

砥石（第29図006）

006は安山岩製で、表面は使用しており、わずかにへこんでいる。裏面は大きく欠損している。



第20图 弥生土器实测图 (V)

長さ6.1cm、幅5.6cm、厚さ0.9cm、重さ55gである。

SA5 (第21図)

SA5はg-10・11、に位置し、長さ6.15m、幅5.7mの方形プランを呈するが時期不明の土壌により切られている。4本柱の建物で、柱穴は長径25cm、短径24cm、深さ77cmのものと長径30cm、短径24cm、深さ62cmのもの、長径32cm、短径30cm、深さ71cmのものと長径23cm、短径13cm、深さ68cmのもの4個が検出された。柱穴間の距離はそれぞれ2.3m、1.95m、2.1m、1.9mである。時期不明の焼土や炭化物を含む攪乱が多く、遺存状況は良好ではない。埋土は外の住居跡同様ほとんどがI層で床面近くにII層が堆積している。SA6、SC1と隣あっている。

壺 (第23図88~92)

88は頸部が締まり、口縁部が内湾気味に内傾する無文の複合口縁壺で、頸部に一条の断面三角形突帯を有する。頸部は緩やかに外反し、短い口縁部で大きく屈曲する。口縁端部は平坦に仕上げている。頸部の外面は縦方向のハケメを施しているが、その他の部位は風化著しい。口径13.1cm、頸部径8.8cmである。89は口径が胴部最大径より小さく、短い口縁部が大きく外反している。胴部最大径は上位にあるなで肩で、内外面ともナデを施している。口径6.4cm、頸部径5.9cm、胴部最大径8.5cmである。90は89と同一タイプであるが、一回り大きい。内外面ともナデを施している。頸部径6.7cm、胴部最大径10.4cmである。91は重弧文長頸壺の胴部破片で、3条の重弧文と1条の沈線が施されている。外面はヘラ磨きを、内面はナデを施している。

鉢 (第23図93・94)

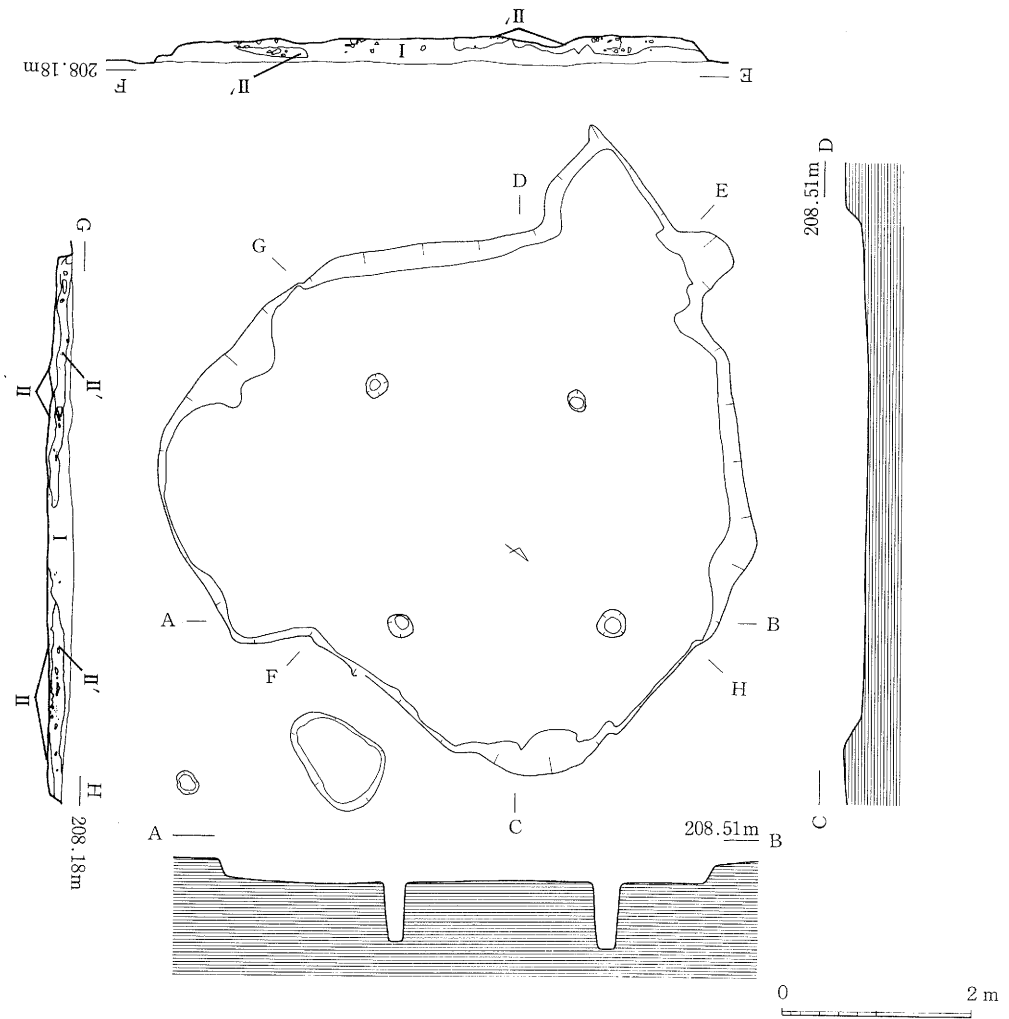
93は長い口縁部が頸部から内側に大きく湾曲しながら外反し、口縁端部は極端に凹に仕上げている。外面は縦方向のハケメを、内面はナデを施している。94は胴部から口縁部にかけて緩やかに内側に湾曲し、口縁部でほぼ垂直気味に立ち上がる。口縁端部を外側に少し折り曲げ段をなし、平坦に仕上げている。外面は斜・縦方向のヘラ磨きを、内面は縦方向のヘラ磨きを施している。

甕 (第23図95~98)

95は頸部に刻み目突帯を1条巡らし、短い口縁部が斜め上方に直線的に伸びている。口径22.2cm、頸部径19.6cmである。96は口径より胴部最大径が大きく、胴部最大径は中位にある。短い口縁部が直線的に外反し、口唇部は丸く仕上げている。口縁部の内面は横方向のハケメを、胴部内面は縦方向のハケメを施している。外面はナデを施している。口径13.0cm、頸部径12.3cm、胴部最大径14.3cmである。98は底径7.0cmの上げ底の底部で、外方に張り出している。全面ナデを施している。

高坏 (第23図99~102)

99は口縁端部を平坦に仕上げている。100は脚部が下方にいくに従って除々に広がり、脚裾部が水平気味に小さく広がる。脚裾部の上位に外面から穿孔した直径1.0cmの円形透かし孔を五方に有する。外面は縦方向のヘラ磨きを、内面は絞りとナデを施している。脚裾部径は13.8cmである。



第21図 SA5実測図

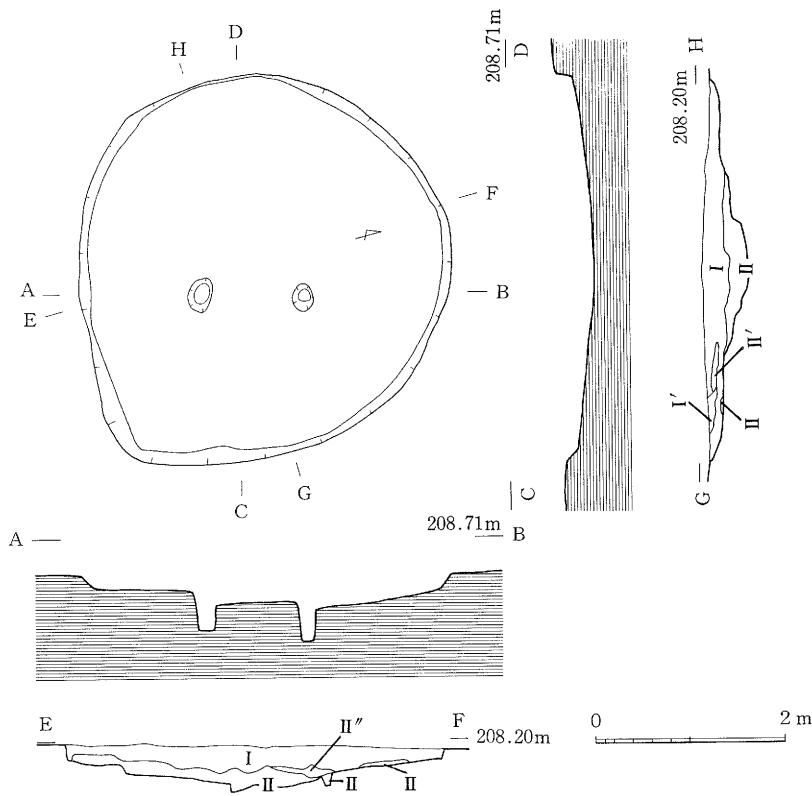
101は口縁部と坏部の境は明瞭で、短い口縁部がほぼ直立気味に立ち上がり、途中から外反する。内外面とも丁寧なへら磨きを施している。

磨石 (第29図007)

007は砂岩製で、表裏面とも研磨しており、側面は敲打している。長さ4.8cm、幅2.8cm、厚さ4.9cm、重さ83gである。

砥石 (第29図008)

008は扁平な頁岩製で、表面と側面が良く研磨されているが、裏面は破損している。長さ3.3cm、幅2.6cm、厚さ1.0cm、重さ12gである。009は扁平な頁岩製で、表裏面とも研磨されている。長さ3.6cm、幅3.5cm、厚さ1.0cm、重さ19gである。



第22図 SA 6実測図

SA 6 (第22図)

SA 6はg-9・10に位置し、長径4.15m、短径3.9mの円形プランを呈するが、南東の隅のみ方形を呈する。柱穴は2個で長径37cm、短径25cm、深さ38cmのものと長径30cm、短径21cm、深さ53cmである。柱穴間の距離は0.85mである。

壺 (第23図103~106)

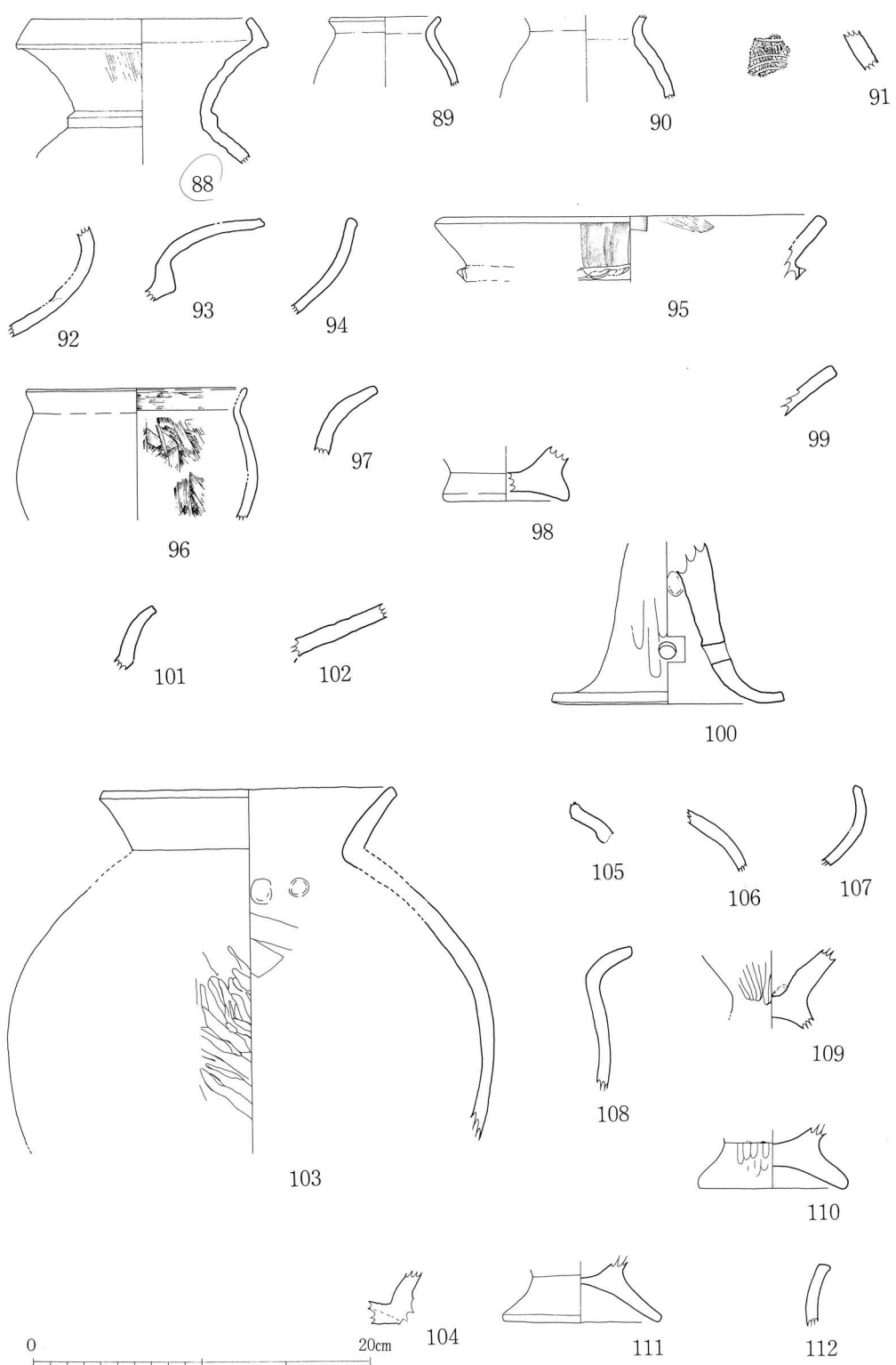
103は口径は胴部最大径よりかなり小さく、胴部最大径は中位にある。頸部は縮まり、短い口縁部が大きく外反し、口縁端部を平坦に仕上げている。口縁部は内外面ともナデを、胴部の外面は斜方向のヘラ磨きを、胴部内面は板状工具によるナデを施している。口径17.2cm、頸部径13.9cm、胴部の最大径29.0cm、器高21.0cm+ α である。104は103と同一個体の平底の底部である。

鉢 (第23図107)

107は胴部から口縁部にかけて緩やかに外反し、途中から直立気味に内側に湾曲する。口縁端部は平坦に仕上げている。内外面とも丁寧なナデを施している。

甕 (第23図108~111)

108は口径が胴部最大径より大きく、口縁部が短く直線的に外反し、口唇部は平坦に仕上げている。内外面はヨコナデを施している。109~111は上げ底の底部で、109・110は内外面とも縦方向のヘラ磨きを施している。底径は110が8.6cm、111が9.2cmである。



第23图 弥生土器实测图 (VI)

高坏 (第23図112)

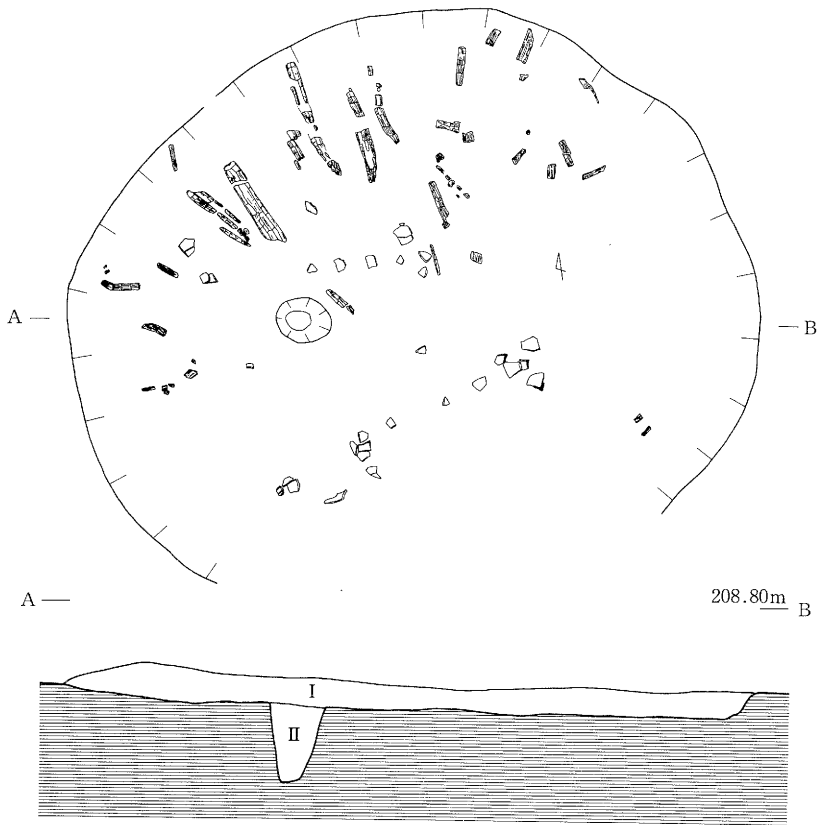
112は口縁部が緩やかに外反し、口唇部は平坦に仕上げ、端部は下方に摘み出している。外面は縦方向のヘラ磨きを施している。

SA7 (第24図)

SA7はi-8・9に位置し、長径3.68m、短径3.31mの円形プランを呈するが、その掘り込みは明瞭ではなく埋没後に一括投棄された遺物により平面プランの確認が行われた。東側の一部だけに住居の壁の立ち上がりが確認された。住居跡の北側部分に炭化材が出土した。炭化材は直径5~8cmの物が多く放射状に出土していることから垂木材である可能性が高い。柱穴は中央西よりに1個検出された。この住居跡は特に遺物の集中が顕著であった。

壺 (第25図113~117・第26図118~121・123)

113は重弧文長頸壺の口縁部から頸部で、口縁部はほぼ真っ直ぐに伸び、口縁端部付近で大きく外反する。口縁端部は凹気味に仕上げている。頸部には4条の突帯を巡らしている。口縁部外面は縦方向のヘラ磨きを、内面はナデと横方向のハケメを施している。口径10.8cm、頸部径15.8cm、胴部径7.1cmである。114は113と同一個体で、胴部最大径は中位にあり、底部はわずかに平底を残す丸底である。胴部上半部に16条の重弧文とその下位に4条の横方向の沈線の上から縦方向に2段の沈線文を施している。胴部上半部は縦方向のヘラ磨きを、胴部下半部は縦・斜方向のハケメを施している。115は頸部が締め、口縁部は緩やかに外反するが、口縁端部と底部は欠如している。胴部最大径は中位にあり、その部位に断面三角形の1条の刻み目突帯を巡らしている。口縁部の内外面はヨコナデを、胴部外面は縦方向のハケメを、胴部内面は横方向のハケメを施している。頸部径10.7cm、胴部最大径26.0cmである。116は口頸部は欠如しており、胴部最大径は上から器高の三分の一の高さの位置にあり、その部位に断面三角形の刻み目突帯を施している。なで肩の長胴の胴部からすぼまりながら平底の底部に続く。胴部の内外面とも縦・横方向の粗いハケメを、一部はその上から丁寧なナデを施している。頸部径9.1cm、胴部最大径25.8cm、底径5.0cm、器高31.4cm+ α である。117は口径が胴部最大径の約二分の一と小さく、胴部最大径は上位にあり、胴部が長胴気味で、わずかに平底の痕跡が残る丸底の底部に続く。短い口縁部はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、途中から大きく外反し、口縁端部は平坦気味に仕上げている。口縁部の内外面ともヨコナデを、胴部の外面は斜方向のハケメを、胴部の内面はナデを、底部の内面は指押さえを施している。口径8.7cm、頸部径7.6cm、胴部最大径20.9cm、器高27.2cmである。118は117と同一タイプで口径が胴部最大径の約二分の一で、胴部最大径が中位にある。短い口縁部が大きく外反し、口縁端部はヨコナデで平坦気味に仕上げている。胴部は長胴で、平底気味の底部に続く。口縁部の内外面はヨコナデを、頸部内面は指押さえ、胴部の外面は斜方向のハケメを、胴部内面はナデを施している。口径13.4cm、頸部径11.5cm、胴部最大径25.7cm、器高36.6cmである。119は口径が胴部最大径の約二分の一で、胴部最大径は中位にある。短い口縁部が緩やかに外反し、口



第24図 SA 7実測図

0 1 m

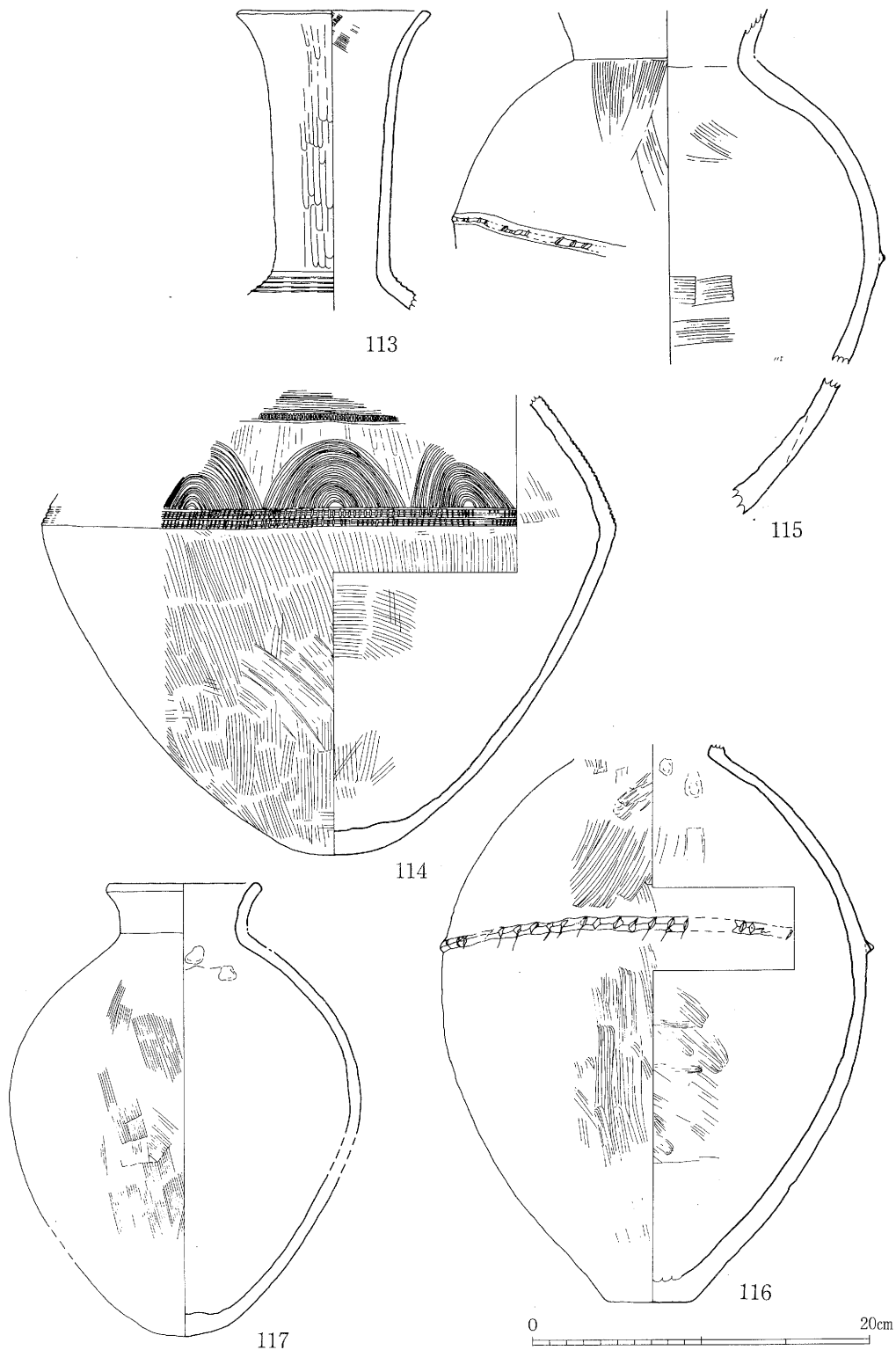
縁端部は丸く仕上げている。胴部は横に大きく張り、底部は平底である。肩部にヘラ状工具による3本沈線の「Λ」の線刻がある。胴部の外面は粗いナデを、内面はナデを施している。口径9.2cm、頸部径8.2cm、胴部最大径24.0cm、器高30.0cmである。121は口縁部はほぼ直立し、途中から大きく外反し、口縁端部付近で更に屈曲する。内外面ともナデとヨコナデを施している。口径は13.2cmである。120は小さな平底の底部である。123は平底の底部である。外面は斜方向のハケメを、内面と底面はナデを施している。

鉢 (第26図122・124)

124は胴部から口縁部にかけてほぼ直立しながら伸び、口縁端部付近で内側に湾曲し、口縁端部は凹気味に仕上げている。口縁部の内外面はヨコナデを、胴部の内外面は斜方向のハケメを施している。

甕 (第26図125・126、第27図127~144)

125は胴部最大径が頸部下位にあり、口径と胴部最大径がほぼ一致する。短い口縁部がほぼ直立気味に立ち上がり、途中から斜目上方に外反し、口唇部は平坦に仕上げている。胴部はすぼまり上げ底の底部に続く。口縁部は内外面ともヨコナデを、胴部の外面は斜方向のハケメを、胴部内



第25图 弥生土器实测图 (VII)

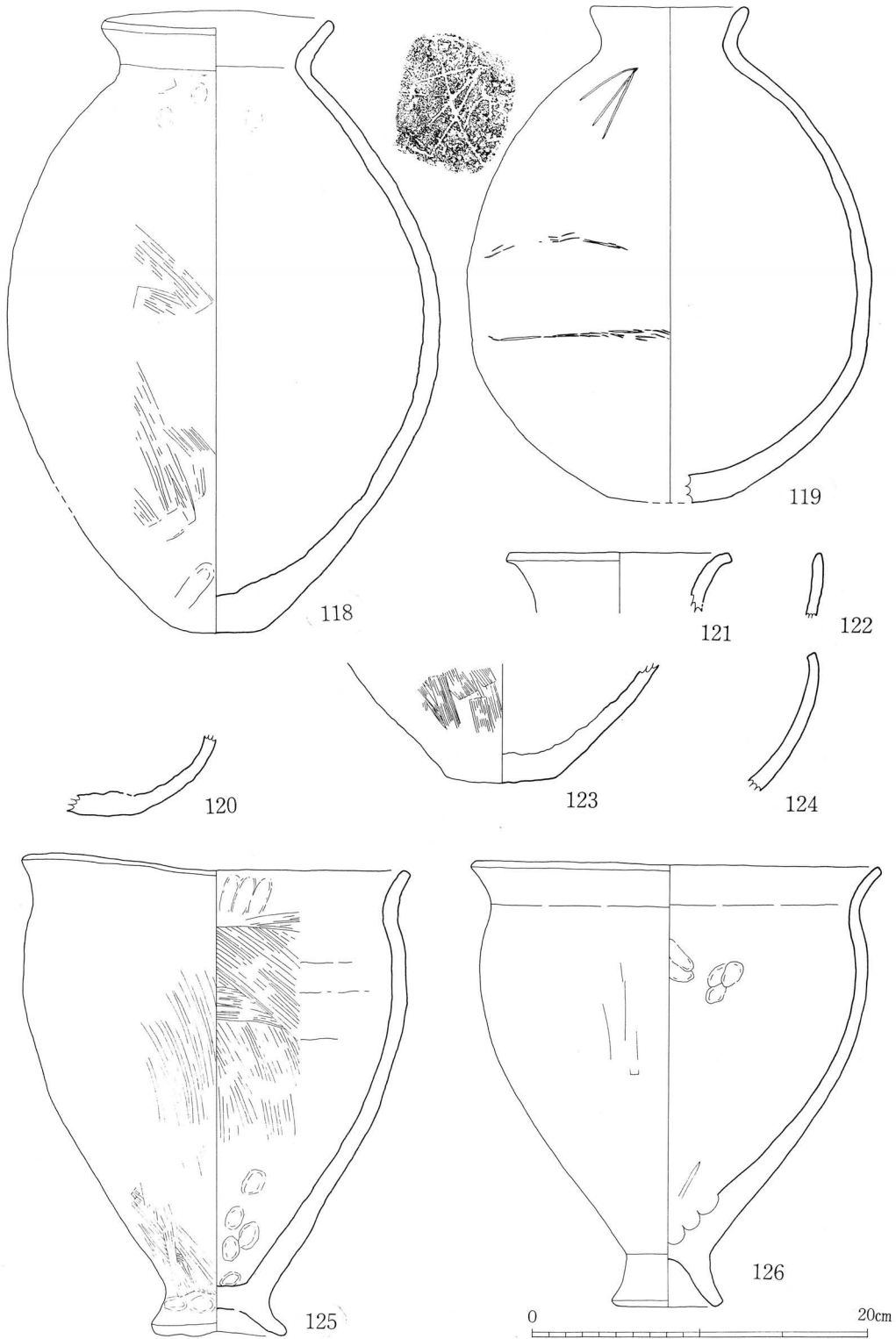
面の上半部は斜方向のハケメを、同下半部は指押さえとナデを施している。口径22.4cm、頸部径22.9cm、胴部最大径23.0cm、底径7.8cm、器高28.0cmである。126は胴部最大径が頸部の下位にあり、口径と胴部最大径はほぼ一致する。長い口縁部が緩やかに外反し、口縁端部はヨコナデで凹気味に仕上げている。胴部はすぼまり上げ底の底部に続き、底部は3.2cmと高く高台状である。口縁部の内外面はヨコナデを、胴部の内外面とも板状工具によるナデを施している。口径24.1cm、頸部径22.1cm、胴部最大径23.3cm、底径5.8cm、器高26.7cmである。127は胴部最大径が頸部下位にあり、口縁部が緩やかに外反し、口唇部は凹気味に仕上げている。胴部からすぼまり上げ底の底部に続く。口縁部は内外面ともヨコナデを、胴部の外面は縦方向のハケメを、内面は縦方向のナデを施している。口径20.3cm、頸部径17.6cm、胴部最大径20.2cm、底径6.3cm、器高25.4cmである。128は胴部最大径が頸部の下位にあり、口縁部がほぼ真っ直ぐに伸び、途中から外反している。口縁端部は平坦に仕上げている。内外面ともナデを施している。口径23.4cm、頸部径20.5cmである。129は短い口縁部が大きく外反し、途中で水平気味に屈曲する。口縁端部はヨコナデで凹気味に仕上げている。口縁部外面ヨコナデを、内面は斜方向のハケメを施している。口径20.2cm、頸部径17.7cmである。130は口縁部が大きく外反し、胴部最大径は頸部である。胴部の外面は斜方向のハケメを、内面はヨコナデを施している。口径21.6cm、頸部径18.0cmである。139は頸部に一条の刻み目突帯を有する甕である。140～143は上げ底の底部であるのに対して、144は平底である。底径は140が8.1cm、143が5.8cm、144は6.5cmである。144の底部は外方に張り出している。

高坏（第27図145～147）

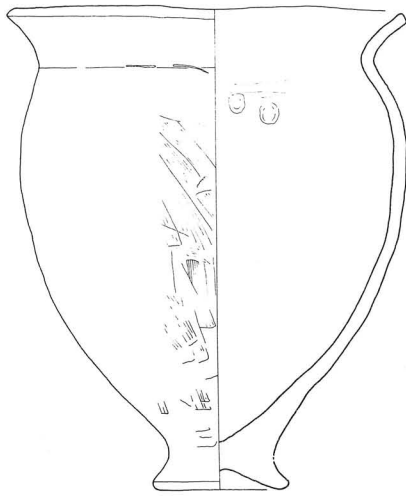
145は浅い坏部と口縁部の境に明瞭な稜線を有し、短い口縁部が緩やかに湾曲しながら外反する。口唇部はヨコナデで丸く仕上げ、坏部の内外面とも斜・横方向のヘラ磨きである。146は円形の透かしを有する脚部で、脚部が緩やかに広がるが、脚裾部は欠如している。外面はヘラ磨きを、内面はナデを施している。147は146と同一タイプである。

砥石（第29図010～012）

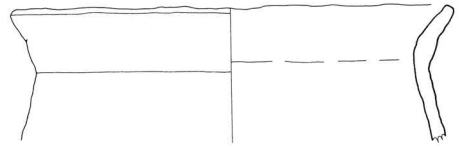
010は安山岩製で、表面は使用して平坦になっている。長さ8.0cm、幅11.3cm、厚さ7.4cm、重さ1100gである。011は安山岩製で、表裏面とも使用して平坦になっている。長さ9.7cm、幅8.2cm、厚さ4.5cm、重さ787gである。012は安山岩製で、表面は使用して若干へこんでいる。長さ14.2cm、幅8.4cm、厚さ5.7cm、重さ1000gである。



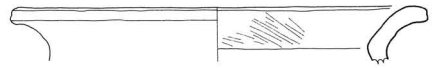
第26图 弥生土器实测图 (VIII)



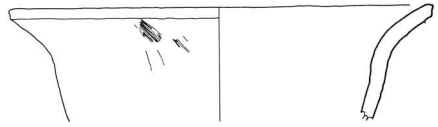
127



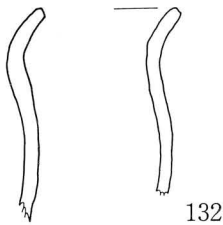
128



129



130

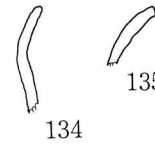


131

132



133



134



135



136



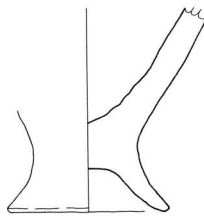
137



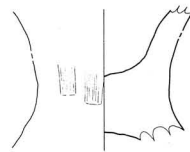
138



139



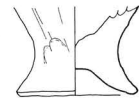
140



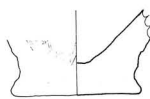
141



142



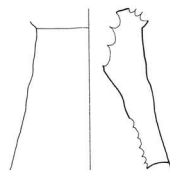
143



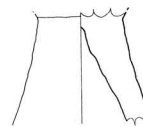
144



145



146



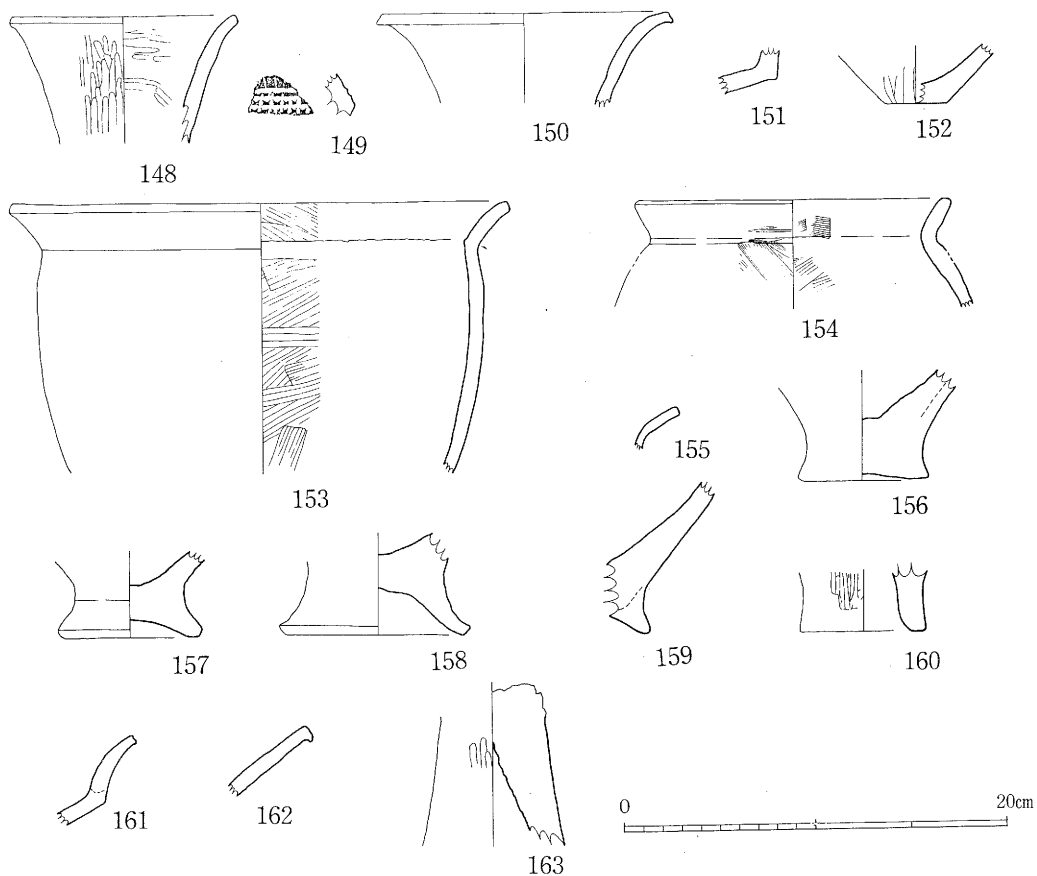
147



第27图 弥生土器实测图 (IX)

住居 番号	平面プラン	グリッド	規模 (m)	主柱穴	床面積 (㎡)	備 考
			長径×短径			
SA 1	方 形	j・k-16・17	5.68×4.66	2	20.9	
SA 2	方 形	j・k-19	3.46×3.32	2	7.9	
SA 3	円 形	k・l-20	6.82×6.78	4	34.4	
SA 5	円 形	g-10・11	6.88×6.34	4	24.4	
SA 6	円 形	g-9・10	4.12×3.94	2	11.7	
SA 7	円 形	i-8・9	3.68×3.30	1	9.1	

第3表 竪穴住居観察表



第28図 弥生土器実測図 (X)



第29图 石器实测图

第4表 弥生土器観察表

図面 番号	遺構名	器種	器部	調		整	焼成	色		調		胎土	備考
				外	内			外	内	外	内		
1	SA1	壺	頸部 胴部	頸部…風化の為調整不明 胴部…斜方向のハケ目	頸部…風化の為調整不明 胴部…斜方向のハケ目	良好	橙 浅黄橙(10YR8/4)	橙 浅黄橙(10YR8/4)	黄 灰(2.5Y4/1)	黄 灰(2.5Y4/1)	黄 灰(2.5Y4/1)	1〜4ミリの茶・褐色の砂粒を含む。	1と同一個体
2	SA1	壺	底部	ナデ、縦方向のハケ目	ナデ	良好	橙 黒褐(2.5Y7/8) 明黄褐(10YR7/6)	橙 黒褐(2.5Y7/8) 明黄褐(10YR7/6)	黄 灰(5Y5/1)	黄 灰(5Y5/1)	黄 灰(5Y5/1)	1〜3ミリの灰・褐色の砂粒を含む。	1と同一個体
3	SA1	壺	口縁部	横ナデ、縦方向のハケ目	横ナデ、指押え	良好	灰	灰	灰	灰	灰	1.5〜6ミリの白い軟質の砂粒、1〜1.5ミリの茶色の軟質の砂粒を多量に含む。	外面に一部スス付着 口径…17.1cm
4	SA1	壺	胴部 底部	胴部…縦、斜方向のナデ 底部…ナデ	胴部…一部縦、斜方向のナデ 底部…ナデ	良好	橙 黄橙(10YR8/8)	橙 黄橙(10YR8/8)	灰 黄橙(10YR8/8)	灰 黄橙(10YR8/8)	灰 黄橙(10YR8/8)	2ミリ以下の灰・茶・乳白・こげ茶色無色透明で光る砂粒を多く含む。1ミリ以下の黒くて光る砂粒を含む。2〜3ミリの灰色の砂粒を少量含む。	3と同一個体
5	SA1	壺	口縁	横ナデ	横ナデ	良好	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	1〜3.5ミリの灰・褐・茶・白い半透明の砂粒、黒く光る砂粒、透明で光る砂粒を多量に含む。	口径…12cm
6	SA1	壺	底部	ナデ	ナデ、指押え	良好	浅黄橙(7.5YR8/3)	浅黄橙(7.5YR8/3)	淡橙(5YR8/4)	淡橙(5YR8/4)	淡橙(5YR8/4)	3ミリ以下の茶・赤褐・黒・灰・乳白・黒色で光る、無色透明で光る砂粒を多く含む。	5と同一個体 底径…9.4cm
7	SA1	壺	口縁部	横ナデ	ナデ	良好	にぶい橙(5YR7/3)	にぶい橙(5YR7/3)	淡橙(5YR8/4)	淡橙(5YR8/4)	淡橙(5YR8/4)	0.5ミリ以下の黒色、無色透明で光る砂粒を含む。	
8	SA1	壺	胴部	ハラ磨キ	横ナデ、指押え	良好	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	褐灰(10YR4/1)	褐灰(10YR4/1)	褐灰(10YR4/1)	2ミリ以下の灰・黒・白色の砂粒を含む。	
9	SA1	壺	胴部	斜方向のハラ磨キ	縦方向のハケ目	良好	橙(2.5YR7/6)	橙(2.5YR7/6)	褐灰(5YR5/1)	褐灰(5YR5/1)	褐灰(5YR5/1)	1〜4ミリの黒色の砂粒を含む。	
10	SA1	壺	底部	ナデ	縦方向のハラ磨キ	良好	褐灰(7.5YR6/1)	褐灰(7.5YR6/1)	褐灰(7.5YR6/1)	褐灰(7.5YR6/1)	褐灰(7.5YR6/1)	0.5〜2ミリ白・灰・乳白色で光る、黒色で光る砂粒を含む。	
11	SA1	鉢	口縁部	縦方向のハラ磨キ	縦、横方向のハラ磨キ	良好	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	0.5〜2ミリの褐色の砂粒を含む。	口径…18.0cm
12	SA1	甕	口縁部 胴部	口縁部…ナデ 胴部…斜方向のハケ目の後、ナデ 胴部…縦方向のハケ目の後、ナデ	横ナデ	良好	橙(5YR7/6) 橙(7.5YR6/6)	橙(5YR7/6) 橙(7.5YR6/6)	橙(5YR7/6) 橙(7.5YR6/6)	橙(5YR7/6) 橙(7.5YR6/6)	橙(5YR7/6) 橙(7.5YR6/6)	2ミリの灰・褐・白い半透明、2ミリ以下の黒く棒状に光る砂粒、1ミリ以下の透明に光る砂粒を含む。	外面にスス付着

図面 番号	選構名	器種	器部	調		整		焼成	色		調		胎	土	備	考
				外	内	外	内		外	内	外	内				
13	SA1	甕	口縁部 胴部	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目の 後、ナデ	口縁部…横方向のハケ目の 後、ナデ 胴部…斜方向のハケ目の 後、ナデ	良好	橙 (5 Y R 7/6)	橙 (5 Y R 7/6)	橙 (5 Y R 7/6)	橙 (5 Y R 7/6)	0.1~5ミリの灰色の砂粒を含む。	口径…26.8cm 外面に一部スス附着				
14	SA1	甕	口縁部 底部	口縁部…横ナデ 胴部…工具による縦方向 のナデ 底部…横ナデ、ナデ	口縁部…横方向のナデ、横 ナデ 胴部…横ナデ、縦方向の ナデ 底部…ナデ	良好	灰黄褐(10Y R 5/2) にぶい黄褐(10Y R 7/3)	灰黄褐(10Y R 5/2) にぶい黄褐(10Y R 7/3)	にぶい黄橙(10Y R 7/4) 灰黄橙(10Y R 4/2)	にぶい黄橙(10Y R 7/4) 灰黄橙(10Y R 4/2)	2.5ミリ以下の明褐・褐色の砂粒を含む。	口径…22.2cm 外面にスス附着				
15	SA1	甕	口縁部 底部	口縁部…横ナデ 胴部…横、縦方向のハケ 目 底部…ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…横、縦方向のハケ 目 底部…ナデ	良好	明赤褐(2.5 Y R 5/6)	明赤褐(2.5 Y R 5/6)	橙 (2.5 Y R 6/8) 橙 (7.5 Y R 7/6)	橙 (2.5 Y R 6/8) 橙 (7.5 Y R 7/6)	1~4ミリの黒・褐色の砂粒を多量に含 む。	口径…21.7cm 器底…27.7cm 器底後…5.7cm 外面にスス附着				
16	SA1	甕	口縁部 胴部	口縁部…横ナデ 胴部…横ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…横ナデ	良好	浅黄橙(10Y R 8/3)	浅黄橙(10Y R 8/3)	浅黄橙(10Y R 8/4)	浅黄橙(10Y R 8/4)	1~3ミリの茶・褐色の砂粒を多量に含 む。					
17	SA1	甕	口縁部 胴部	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ状工具 による縦方 向のナデ	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ状工具 による縦方 向のナデ	良好	橙 (5 Y R 6/6) 灰白(2.5 Y R 8/2)	橙 (5 Y R 6/6) 灰白(2.5 Y R 8/2)	橙 (5 Y R 6/6)	橙 (5 Y R 6/6)	1~4ミリの赤褐色の砂粒を多量、1~ 2.5ミリの褐色の砂粒を含む。	口径…23.6cm				
18	SA1	甕	口縁部 胴部	口縁部…ナデ 胴部…斜方向のハケ目 指押え	口縁部…横方向のハケ目 胴部…斜方向のハケ目、 指押え	良好	橙 (5 Y R 7/6)	橙 (5 Y R 7/6)	橙 (5 Y R 7/6) 浅黄橙(7.5 Y R 8/6)	橙 (5 Y R 7/6) 浅黄橙(7.5 Y R 8/6)	1~3ミリの茶・黒・灰・半透明の砂粒 を含む。	口径…16.6cm				
19	SA1	甕	胴部	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙(10Y R 8/3) 褐灰(10Y R 5/1)	浅黄橙(10Y R 8/3) 褐灰(10Y R 5/1)	浅黄橙(10Y R 8/3)	浅黄橙(10Y R 8/3)	0.6~6ミリの黒・茶色の砂粒を多量に含 む。	外面にスス附着				
20	SA1	甕	胴部	縦・斜方向の磨キの 後、丁寧なナデ	ナデ	良好	褐灰(5 Y R 5/1) 浅黄橙(10Y R 8/4)	褐灰(5 Y R 5/1) 浅黄橙(10Y R 8/4)	浅黄橙(7.5 Y R 8/3)	浅黄橙(7.5 Y R 8/3)	1ミリ以下の茶褐色の砂粒を含む。					
21	SA1	甕	口縁部	口唇部…横ナデ 口縁部…縦・斜方向のハケ 目の後、ナデ	口唇部…横ナデ 口縁部…縦・斜方向のハケ 目の後、ナデ	良好	黒褐(7.5 Y R 3/1)	黒褐(7.5 Y R 3/1)	浅黄橙(10Y R 7/4)	浅黄橙(10Y R 7/4)	2ミリ以下の白・黒・半透明で光る茶色 の砂粒を多量に含む。	口径…13.1cm 外面にスス附着				
22	SA1	甕	口縁部 底部	口縁部…横ナデ 胴部…縦方向のハケ目 底部…磨キ 底部…風化の為調整不明	口縁部…横ナデ 胴部…縦方向のハケ目 底部…磨キ 底部…風化の為調整不明	良好	褐灰(7.5 Y R 4/1) 浅黄橙(7.5 Y R 8/6)	褐灰(7.5 Y R 4/1) 浅黄橙(7.5 Y R 8/6)	にぶい橙(7.5 Y R 7/4)	にぶい橙(7.5 Y R 7/4)	2ミリ以下の茶・灰・こげ茶・白色、無 色透明で光る、黒く光る砂粒を含む。	口径…10.6cm 外面にスス附着				
23	SA1	甕	口縁部	横ナデ	横ナデ	良好	浅黄橙(10Y R 8/4)	浅黄橙(10Y R 8/4)	浅黄橙(10Y R 8/4)	浅黄橙(10Y R 8/4)	3ミリ以下の茶・黒・白色、無色透明で 光る砂粒を多量に含む。	口径…13.8cm 外面にスス附着				
24	SA1	高坏	口縁部	ナデ	ナデ	良好	淡橙(5 Y R 8/4)	淡橙(5 Y R 8/4)	浅黄橙(7.5 Y R 8/4) 浅黄橙(7.5 Y R 8/6)	浅黄橙(7.5 Y R 8/4) 浅黄橙(7.5 Y R 8/6)	1.5ミリ以下の茶・白・黒色で光る赤褐 ・灰色の砂粒を多量に含む。					
25	SA1	高坏	坏部	口縁部…横、斜方向のハケ 目 坏部…斜方向のハケ目 磨キ	口縁部…横、斜方向のハケ 目 坏部…磨キ 坏部…斜方向のハケ目 磨キ	良好	浅黄橙(7.5 Y R 8/4)	浅黄橙(7.5 Y R 8/4)	浅黄橙(7.5 Y R 8/4)	浅黄橙(7.5 Y R 8/4)	2ミリの明褐・灰色の砂粒を多量に含む。	口径…29.3cm 内面にスス附着				

図面 番号	遺構名	器種	器部	調		整	焼成	色		胎	土	備	考
				外	内			外	内				
26	SA1	高坏	脚部	ナデ、縦方向のケズリ	横ナデ、指押え	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	浅黄橙(10YR 8/4)	1~1.5ミリの赤褐・黒・白い半透明の砂粒を含む。	四方円形透し			
27	SA1	高坏	口縁部	ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	良好	浅黄橙(7.5YR 8/6)	浅黄橙(7.5YR 8/6)	1ミリの茶・褐・灰色の光る砂粒を含む。				
28	SA1	高坏	坏部	斜方向のヘラ磨キ	ヘラ磨キ	良好	浅黄橙(7.5YR 8/4)	浅黄橙(10YR 8/4)	1ミリの茶・黒・白い半透明の砂粒を含む。				
29	SA1	高坏	脚部	縦方向のヘラ磨キ	ナデ、絞り	良好	浅黄橙(7.5YR 8/3)	淡黄(2.5Y 8/3)	2ミリの褐・灰色の砂粒を含む。	円形透し			
30	SA2	壺	頸部 胴部	斜方向のハケ目の後、ヘラ磨キ	ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4) 灰黄褐(10YR 5/2)	浅黄橙(10YR 8/4)	5ミリ以下の茶褐色・灰色・黒色で光る半透明で光る砂粒を含む。				
31	SA2	壺	胴部	縦方向のハケ目の後、ヘラ磨キ	ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	浅黄橙(10YR 8/3)	4ミリ以下の茶・黒・茶褐・灰・黒色で光る砂粒を多量に含む。	外面にスス付着			
32	SA2	壺	底部	縦・横・斜方向のナデ	ナデ、指押え	良好	浅黄橙(7.5YR 8/4) 灰色(10YR 8/3)	浅黄橙(7.5YR 8/4)	5ミリ以下の灰・茶・茶褐・白色の砂粒、黒・乳白色で光る砂粒を多量に含む。	底径…13.4cm			
33	SA2	壺	口縁部	横ナデ・斜方向のハケ目	縦・横方向のナデ	良好	灰白(10YR 8/2)	浅黄橙(10YR 8/4)	2ミリ以下の茶・灰色の砂粒と黒色・透明で光る砂粒を含む。	口径…12.5cm SA3と接合			
34	SA2	壺	口縁部	口縁部…ナデ、横・斜方向のナデ	口縁部…ナデ、横ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/3)	浅黄橙(10YR 8/4)	1ミリ以下の茶・黒色の砂粒と無色透明で光る砂粒を少量含む。	口径…10.4cm			
35	SA2	壺	胴部	縦方向のヘラ磨キ	横ナデ	良好	灰白(10YR 8/2)	浅黄橙(7.5YR 8/3)	1ミリ以下の白色、無色透明で光る砂粒を含む。	外面にスス付着			
36	SA2	壺	胴部 底部	胴部…ヘラ磨キ 底部…ナデ	ナデ	良好	橙(7.5YR 7/6)	橙(5YR 6/6)	細かい砂粒を含む。				
37	SA2	壺	胴部	ナデ	ナデ	良好	にぶい橙(2.5YR 6/2) にぶい橙(2.5YR 6/3)	にぶい橙(2.5YR 6/2) にぶい橙(2.5YR 6/3)	1~3.5ミリの白・灰・褐・白い半透明の砂粒を多量に含む、内・外面共にサラサラしている。				
38	SA2	鉢	口縁部 底部 底辺付近	口縁部…ナデ、横方向のヘラ磨キ 胴部…縦方向のヘラ磨キ 底部…斜方向のヘラ磨キ	ヘラ磨キ	良好	橙(7.5YR 7/6)	橙(7.5YR 7/6) 明褐灰(7.5YR 7/1)	1~2.5ミリの明褐色の砂粒を含む。	口径…9.4cm			

図面 番号	連構名	器種	器部	調		整		焼成	色		調		胎 土	備 考
				外	内	外	内		外	内	外	内		
39	SA 2	鉢	口縁部	ナデ・ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	浅黄橙(10YR 8/4)	2~2.5ミリの褐色の砂粒を含む。				
40	SA 2	鉢	胴部	ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	褐 灰(10YR 5/1)	1ミリの白い半透明・褐色の砂粒を含む。					
41	SA 2	鉢	口縁部 底部付近	横ナデ・縦方向のヘラ磨キ	横方向のハケ目・横ナデ	良好	にぶい橙(7.5YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	光る透明の砂粒を含む。	口径…11.0cm				
42	SA 2	鉢	底部	縦方向のヘラ磨キ・ナデ	ナデ	良好	にぶい橙(7.5YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	光る透明の砂粒を含む。	底径…7.1cm				
43	SA 2	甕	口縁部 頸部	横・縦方向のハケ目	横ナデ・横方向のハケ目	良好	にぶい褐(7.5YR 5/4) 褐 (7.5YR 4/3)	褐 灰(10YR 4/1) にぶい褐(7.5YR 6/3)	1~1.5ミリの淡黄・白い半透明の砂粒を含む。	口径…29.5cm				
44	SA 2	甕	口縁部	横ナデ	横ナデ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1ミリの光る砂粒と褐色の砂粒を含む。	口径…25.0cm 外面にスス付着				
45	SA 2	甕	口縁部 底部付近	口縁部…横ナデ 胴部上半…斜方向のハケ目 胴部下半…縦方向の板状工具によるナデ	口縁部…横ナデ 胴部…横方向のハケ目	良好	にぶい褐(7.5YR 6/3)	明褐灰(7.5YR 7/1)	1~3ミリの灰・茶・褐・白い半透明の砂粒を含む。	口径…17.5cm 外面にスス付着				
46	SA 2	甕	口縁部 底部付近	口縁部…ナデ 胴部…底部付近…横・斜方向のナデ	ナデ	良好	にぶい橙(7.5YR 7/4) 橙 (2.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	4ミリ以下の茶・黒・灰色の砂粒を含む。	口径…15.4cm 外面にスス付着				
47	SA 2	甕	口縁部 胴部	ナデ・横ナデ	横ナデ	良好	にぶい褐(7.5YR 5/3) 橙 (5YR 6/6)	灰黄褐(10YR 5/2) にぶい褐(7.5YR 5/4)	0.5~3ミリの淡黄・茶の砂粒を多量と黒く光ると透明の砂粒を少量含む。	口径…16.0cm				
48	SA 2	甕	頸部 底部付近	横ナデ	横ナデ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	7ミリ以下の茶色・白色と無色透明で光る砂粒を含む。	外面にスス付着				
49	SA 2	甕	口縁部	横ナデ・斜方向のハケ目	斜方向のナデ	良好	灰 褐(5YR 5/2)	にぶい赤褐(5YR 5/4)	2ミリ以下の茶・白色の砂粒を含む。					
50	SA 2	甕	口縁部	横ナデ・縦方向のハケ目	横ナデ	良好	灰黄褐(10YR 6/2)	にぶい黄橙(10YR 7/3) 褐 灰(10YR 5/1)	1ミリの明褐と光る砂粒を含む。	外面にスス付着				
51	SA 2	甕	底部	ナデ・横・斜方向のナデ	風化の為調整不明	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	浅 黄(2.5Y 7/3)	2ミリ以下の茶・黒・灰・茶褐色と無色透明で光る砂粒を含む。	底径…8.1cm 平底				

図面 番号	遺構名	器種	器部	調		整	焼成	色		胎	土	備 考
				外	内			外	内			
52	SA 2	甕	底部	横ナデ			良好	灰 褐(7.5YR 5/2)	橙 (7.5YR 7/6)	3ミリ以下の茶・白・黒色の砂粒と黒色・半透明で光る砂粒を含む。		底径…7.5cm 上げ底
53	SA 2	甕	底部	斜・横方向のナデ	ナデ		良好	浅黄橙(10YR 8/4)	橙 (5YR 7/6) にぶい黄橙(10YR 7/3)	3ミリ以下の白色・半透明で光る砂粒を含む。		底径…8.8cm 上げ底
54	SA 2	甕	底部	ヘラ磨キ	ヘラ磨キ		良好	にぶい橙(5YR 6/4) 褐 灰(7.5YR 4/1)	褐 灰(5YR 4/1)	2ミリ以下の乳白色と黒色・無色透明で光る砂粒を含む。		底径…4.0cm 上げ底
55	SA 2	高坏	坏部	斜方向のハケ目・ナデ	ナデ		良好	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	2ミリ以下の無色透明・淡黄色の砂粒を含む。		
56	SA 2	高坏	坏部	ヘラ磨キ	ヘラ磨キ		良好	橙 (2.5YR 6/8)	橙 (2.5YR 6/6)	1ミリ以下の白・黒色の砂粒と黒色・無色透明で光る砂粒を含む。		
57	SA 3	壺	口縁部 頸部	口縁部…横ナデ 頸部…ナデ	斜方向のナデ		良好	黄 橙(10YR 8/5)	浅黄橙(10YR 8/4) 橙 (5YR 7/6)	2ミリ以下の半透明で光る、黒・白色の砂粒を含む。		無文の複合口縁壺 口径…10.2cm
58	SA 3	壺	口縁部	横ナデ・ハケ目の後、 ナデ	斜方向のナデ		良好	浅黄橙(10YR 8/4)	浅黄橙(10YR 8/4)	1ミリ以下の白・黒色の砂粒と無色透明で光る砂粒を含む。		無文の複合口縁壺 口径…9.7cm
59	SA 3	壺	口縁部 底部	口縁部…縦方向のヘラ磨キ 胴部…縦・斜方向のヘラ磨キ 底部…ナデ	口縁部…横・斜方向のナデ 胴部…底部…ナデ		良好	明赤褐(2.5YR 5/6) にぶい赤褐(5YR 4/3) 5YR 5/4	橙 色(2.5Y 6/8)	2.5ミリ以下の無色透明で光る砂粒と1.5ミリ以下の茶・淡黄・黒くて光る砂粒を含む。		底径…2.0cm
60	SA 3	壺	胴部 底部付近	風化の為調整不明	風化の為調整不明		良好	黄 橙(10YR 8/6)	浅黄橙(10YR 8/4) 灰 (5Y 6/1)	2ミリ以下の灰・褐・茶・黒くて光る砂粒と黄味をおびた砂粒を多く含む。		
61	SA 3	壺	口縁部	横ナデ・縦方向のヘラ磨キ	横ナデ		良好	にぶい黄橙(10YR 7/3)	にぶい橙(7.5YR 7/4)	1.5ミリ以下の茶色と無色透明で光る砂粒・黒色で光る砂粒を含む。		口径…16.4cm
62	SA 3	壺	口縁部	ナデ・横ナデ	横ナデ		良好	灰 白(10YR 8/2) 灰 白(10YR 7/1)	灰 白(10YR 8/2)	0.5～1ミリの茶と光る砂粒を含む。		
63	SA 3	壺	口縁部	ナデ・斜方向のハケ目	斜方向のハケ目・ナデ		良好	にぶい褐(7.5YR 4/1)	にぶい黄橙(10YR 6/4)	0.5～4ミリの白色の砂粒と金色と黒色に光る砂粒を含む。		
64	SA 3	壺	胴部	縦方向のヘラ磨キの後、洗線。	ナデ		良好	赤 灰(2.5YR 4/1)	灰 褐(5YR 5/2)	2.5ミリ以下の灰・茶・白色の砂粒を含む。		重弧文長頸壺

図面 番号	遺構名	器種	器部	調		整		焼成	色		調		胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面		外 面	内 面	内 面	内 面		
65	SA3	壺	胴部	風化著しい為、調整不明。沈線	斜・縦方向のハケ目の後、ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	灰白(10YR 8/2)	灰オリーブ(5Y 6/2)	2ミリ以下の茶・灰・白色の砂粒と黒色で光る砂粒を含む。		重文文長頸壺		
66	SA3	壺	胴部	ナデ	ナデ	良好	灰白(10YR 8/2)	灰白(10YR 8/2)	灰白(10YR 8/2)	0.5ミリ以下の灰色の砂粒と光る砂粒を少量含む。				
67	SA3	壺	底部	ナデ	ナデ	良好	黄橙(10YR 8/6)	淡黄(2.5Y 8/3)	淡黄(2.5Y 8/3)	1.8ミリ以下の茶・無色透明で光る砂粒と1ミリ以下の黒くて光る砂粒を含む。		底径…3.8cm		
68	SA3	壺	底部	縦方向のナデ	ナデ	良好	橙(5YR 6/6)	橙(5YR 6/6)	灰(5Y 4/1)	1.5ミリ以下の淡黄、灰白の砂粒0.5ミリ以下の黒色、無色透明で光る砂粒を含む。		底径…4.0cm 外面にスズ附着		
69	SA3	壺	底部	斜方向のハケ目	ナデ	良好	黄橙(10YR 7/3)	灰(5Y 5/1)	灰(5Y 5/1)	3.5ミリ以下の灰・褐色の砂粒と無色透明で光る砂粒を含む。		底径…4.7cm		
70	SA3	壺	口縁部 底部	縦方向のヘラ磨キ・ナデ	横方向のハケ目	良好	浅黄橙(7.5YR 8/4)	浅黄橙(7.5YR 8/4)	黄橙(10YR 7/4)	1.5ミリ以下の灰白色・無色透明と黒く光る砂粒を含む。		口径…16.6cm		
71	SA3	鉢	口縁部 胴部	口縁部…横ナデ 胴部…縦方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ナデ	良好	黄橙(10YR 7/4)	黄橙(10YR 7/4)	黄橙(10YR 7/4)	2ミリ以下の茶色の砂粒を多量に含む。 1ミリ以下灰・黒・無色透明で光る砂粒を少量含む。		口径…8.7cm		
72	SA3	鉢	口縁部 胴部	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のヘラ磨キ	口縁部…縦方向のハケ目の後、横ナデ 胴部…縦方向のヘラ磨キ	良好	褐灰(7.5YR 4/1)	褐灰(7.5YR 4/1)	褐灰(7.5YR 4/1)	黒くて光る砂粒、1ミリ以下の無色透明で光る、淡黄色の砂粒を含む。		口径…30.0cm 内外面にスズ附着		
73	SA3	甕	口縁部 胴部	口縁部…横ナデ 胴部…板状工具による斜方向のナデ	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目の後、ナデ	良好	黄橙(5YR 7/4)	黄橙(5YR 7/4)	黄橙(10YR 6/2)	5ミリ以下の茶・黒・灰色の砂粒を多量に含む。		口径…19.5cm 外面にスズ附着		
74	SA3	甕	口縁部 胴部	口縁部…横ナデ 胴部…指押え 頸部…胴部…斜方向のハケ目の後、ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目の後、ナデ	良好	黄橙(10YR 7/3)	黄橙(10YR 7/3)	黄橙(10YR 7/4)	3ミリ以下の灰白・淡茶・白色の砂粒を含む。		口径…17.3cm 外面にスズ附着		
75	SA3	甕	底部	ナデ・斜方向のナデ	ナデ・斜方向のハケ目	良好	黄橙(7.5YR 7/4)	黄橙(7.5YR 7/4)	黄橙(7.5YR 6/2)	1.5ミリ以下の淡黄、灰・無色透明で光る砂粒を含む。		口径…21.6cm 外面にスズ附着		
76	SA3	甕	口縁部	横ナデ	横ナデ	良好	黄橙(10YR 7/3)	黄橙(10YR 7/3)	黄橙(10YR 7/4)	1.5ミリ以下の白・黒・淡黄・無色透明で光る。金色で光る砂粒を含む。		口径…21.6cm 外面にスズ附着		
77	SA3	甕	口縁部	横ナデ	丁葺な横ナデ	良好	黄橙(10YR 7/3)	黄橙(10YR 7/3)	黄橙(10YR 7/4)	無色透明で光る砂粒を少量含む。				

図面 番号	遺構名	器種	器部	調		整		焼成	色		胎	土	備	考
				外	内	外	内		外	内				
78	SA3	甕	底部	ナデ	ヘラ磨キ	良好	橙 (5 YR 7/6)	内 黄橙(10YR 7/3)	胎	1.5ミリ以下のこげ茶・茶・白色の砂粒を含む。黒・無色透明で光る砂粒を含む。				
79	SA3	甕	底部	斜方向のナデ	ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	浅黄橙(10YR 8/4)	胎	1.2ミリ以下のこげ茶・茶・淡黄・黒色の砂粒、無色透明で光る砂粒を含む。				
80	SA3	高坏	口縁部 坏部	口縁部…横ナデ、斜方向のヘラ磨キ 坏部…斜方向のヘラ磨キ	ナデ	良好	橙 (5 YR 7/6)	橙 (5 YR 7/6) 橙 (2.5 YR 6/8)	胎	1.5ミリ以下の茶色の砂粒を含む。無色透明の砂粒を多量に含む。			口径…29.2cm	
81	SA3	高坏	脚部	縦方向の磨キ	粗いナデ 斜方向のナデ	良好	明赤褐(2.5 YR 5/8)	明赤褐(2.5 YR 5/8)	胎	1ミリ以下の黒色透明で光る砂粒を多く含む。0.5ミリ以下の淡黄・茶色の砂粒を少し含む。			四方円形透かし	
82	SA3	高坏	坏部	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	良好	橙 (7.5 YR 7/6)	内 黄橙(10YR 7/4) 黒 (5 Y 2/1)	胎	3ミリ以下の茶・褐色の砂粒を含む。1ミリ以下の白・黒く光る砂粒を少し含む。				
83	SA3	高坏	坏部	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4) 淡橙 (5 YR 8/4)	内 黄橙(7.5 YR 7/4)	胎	2ミリ以下の黒・灰・茶・半透明で光る砂粒を多く含む。				
84	SA3	高坏	脚部	縦方向のヘラ磨キ	丁寧なナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	浅黄橙(10YR 8/4)	胎	3.5ミリ以下の茶色の砂粒、1.5ミリ以下の褐・黒く光る砂粒を含む。				
85	SC1	甕	頸部 胴部	縦・横・斜方向のナデ	横・縦方向のナデ	良好	内 黄橙(10YR 6/3)	内 黄橙(10YR 6/3)	胎	1ミリ～2ミリの黒く光る棒状の砂粒を多く含む。3ミリ～8ミリの灰色の砂粒を少し含む。				
86	SC1	甕	口縁部 胴部	口縁部…横ナデ 胴部…磨キ	口縁部…横ナデ 胴部…風化の為調 整不明	良好	浅黄橙(2.5 Y 8/3)	浅黄橙(2.5 Y 8/3)	胎	3ミリの黄褐色の砂粒を含む。1ミリ以下の白・灰・無色・白色透明・黄褐色の砂粒を少し含む。			口径…14.4cm	
87	SC1	甕	口縁部	横ナデ	横ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	浅黄橙(10YR 8/4) 内 黄橙(10YR 7/2)	胎	2ミリ以下の灰・白・黒色・半透明で光る砂粒を含む。				
88	NO付	壺	口縁部	縦方向のハケ目	風化の為調整不明	良好	橙 (5 Y 7/6) 内 黄橙(10YR 7/3)	灰 (5 Y 4/1) 明黄橙(10YR 7/6)	胎	2ミリ以下の茶・褐・灰白・黒く光る砂粒を含む。1ミリ以下の無色透明で光る淡黄色の砂粒を含む。 4ミリの黒色の砂粒を含む。			無文の複合口縁壺 頸部に一条突帯 口径…13.1cm	
89	SA5	壺	口縁部	口唇部…ナデ 頸部…横ナデ	横・縦方向のナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	内 黄橙(10YR 7/4)	胎	1～2ミリの淡茶・褐色の砂粒を含む。			口径…6.4cm	
90	SA5	壺	口縁部	横ナデ	横ナデ	良好	明黄橙(10YR 7/6)	明黄橙(10YR 7/6)	胎	1～2.5ミリの淡黄・灰・白・褐色の砂粒を多量に含む。				

図面 番号	遺構名	器種	器部	調		整	焼成	色		調		胎	土	備	考
				外	内			外	内	外	内				
91	SA 5	壺	胴部	縦方向のへら磨きの後、沈線	横ナデ	横ナデ	良好	灰黄褐(10YR 4/2)	橙(7.5YR 6/6)	橙(7.5YR 6/6)	1ミリの半透明で乳白色の砂粒、1~2.5ミリの白い軟質の砂粒を含む。		重弧文長頸壺		
92	SA 5	壺	胴部	横と縦方向のへら磨キ	斜方向のナデ	斜方向のナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	灰白(10YR 8/2)	灰白(10YR 8/2)	3ミリ以下の茶・褐・灰・白色の砂粒を少量含む。1ミリ以下の黒くて光る砂粒を少量含む。				
93	SA 5	鉢	口縁部	口唇部…横ナデ 口唇部…縦方向のハケ目・横ナデ	口唇部…横ナデ 口縁部…ナデ	口唇部…横ナデ 口縁部…ナデ	良好	黄橙(10YR 8/6)	黄橙(10YR 8/6)	黄橙(10YR 8/6)	1.5ミリ以下の茶褐・灰・黒・無色透明の光る砂粒を含む。				
94	SA 5	鉢	口縁部	斜・縦方向のへら磨キ	縦方向のへら磨キ	縦方向のへら磨キ	良好	黄(2.5Y 7/4) 褐灰(10YR 6/1)	黄(2.5Y 7/8) 黄灰(2.5Y 5/1)	黄(2.5Y 7/8) 黄灰(2.5Y 5/1)	0.5~3ミリの白色・光る微細粒を含む。				
95	SA 5	甕	口縁部	口唇部…ナデ 口縁部…縦方向のハケ目	斜方向のハケ目	斜方向のハケ目	良好	黄灰(2.5Y 4/1)	淡黄(2.5Y 8/3)	淡黄(2.5Y 8/3)	1~3ミリの灰・褐色の砂粒、1ミリの透明に光る砂粒を少量含む。		口径…22.2cm 頸部に一条刻み目突帯		
96	SA 5	甕	口縁部 胴部	口唇部…ナデ 調部…横ナデ	横・縦・斜方向のハケ目	横・縦・斜方向のハケ目	良好	黄(2.5Y 7/4)	黄(2.5Y 7/4)	黄(2.5Y 7/4)	4.5ミリ以下の茶・こげ茶と1ミリ以下の白色の砂粒を含む。		口径…13.0cm		
97	SA 5	甕	口縁部	横ナデ	横ナデ	横ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	淡黄(2.5Y 8/3)	淡黄(2.5Y 8/3)	1~3ミリの褐・灰色の砂粒を含む。				
98	SA 5	甕	底部	横ナデ	ナデ	ナデ	良好	灰黄褐(10YR 5/2)	褐灰(7.5YR 4/1)	褐灰(7.5YR 4/1)	1~2.5ミリの白い半透明の砂粒、5~8ミリの薄い褐色の砂粒を含む。		底径…7.0cm		
99	SA 5	高環	口縁部	ナデ、横ナデ	横ナデ	横ナデ	良好	黄(10YR 7/3) 黄(10YR 7/4)	黄(10YR 7/3)	黄(10YR 7/3)	0.5~2ミリの黒く光る棒状の砂粒を多量に含む。				
100	SA 5	高環	脚部	縦・横方向のナデ	縦・横ナデ	縦・横ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	浅黄橙(10YR 8/4)	浅黄橙(10YR 8/4)	1~3ミリの灰・茶・褐色・白い半透明の砂粒を含む。		脚部径…13.8cm 五方円形透かし		
101	SA 5	高環	口縁部	口唇部…磨キ 口唇部…縦方向のへら磨キ	横方向のへら磨キ	横方向のへら磨キ	良好	黒(2.5Y 2/1)	黄(10YR 7/4)	黄(10YR 7/4)	0.5~1ミリの白い軟質の砂粒を少量含む。				
102	SA 5	高環	環部	ハケ目	ナデ	ナデ	良好	橙(5YR 7/6)	黄(2.5Y 4/1)	黄(2.5Y 4/1)	1~2.5ミリの茶・褐・白色の砂粒を含む。				
103	SA 6	壺	口縁部 胴部	口唇部…横ナデ 胴部…斜方向のへら磨キ	横ナデ、指押え 板状工具によるナデ	横ナデ、指押え 板状工具によるナデ	良好	淡黄(2.5Y 8/3) 灰(7.5Y 5/1)	灰白(2.5Y 8/2)	灰白(2.5Y 8/2)	1ミリ~4ミリの灰・茶褐色の砂粒を多く含む。		口径…17.2cm		

図面 番号	遺構名	器種	器部	調		整		焼成	色		胎	土	備考
				外	内	外	内		外	内			
104	SA6	壺	底部	斜方向のナデ	ナデ		良好	黄 灰(2.5Y 5/1)	淡 黄(2.5Y 8/3)	1 ミリ～5 ミリの灰・ 褐色の砂粒 を多く含 む。		平底	
105	SA6	壺	頸部	ナデ	ナデ		良好	浅黄橙(10YR 8/4) に ぶい黄橙(10YR 7/3)	浅黄橙(10YR 8/4) に ぶい黄橙(10YR 7/3)	1 ミリ～2.5 ミリの褐色 の砂粒を含 む。			
106	SA6	壺	肩部	ナデ	指押え、ナデ		良好	橙 (7.5YR 7/6)	浅黄橙(10YR 8/4)	0.5 ミリ以下 の黒く光る 砂粒、1ミ リ以下の黒 褐色の砂粒 を含む。			
107	SA6	鉢	口縁部	丁寧なナデ	丁寧なナデ		良好	黒 褐(7.5YR 3/1)	明赤褐(5YR 5/6)	1 ミリ以下 の白い半透 明の砂粒を 少し、光る 微細砂粒を 多く含む。			
108	SA6	甕	口縁部 、 胴部	横ナデ	横ナデ		良好	灰 褐(7.5YR 4/2) に ぶい褐(7.5YR 6/3)	浅黄橙(10YR 8/4) 灰 褐(5YR 4/2)	1 ミリの灰・ 褐、黒褐色 の砂粒を含 む。		外面にス ス附着	
109	SA6	甕	底部	縦方向のへ ら磨キ、 ナデ	丁寧なナデ		良好	に ぶい赤褐(5YR 5/3)	に ぶい褐(7.5YR 5/4)	0.5 ミリ～2ミ リの乳白色 で半透明の 砂粒を少し 含む。		上げ底	
110	SA6	甕	底部	縦方向のへ ら磨キ	ナデ		良好	橙 (2.5YR 7/6) に ぶい黄橙(10YR 7/4)	黒 褐(10YR 3/1)	1 ミリの乳白 ・半透明の 砂粒を含む 。微細な無 色透明の光 る砂粒を多 く含む。		上げ底	
111	SA6	甕	底部	横ナデ	ナデ		良好	浅黄橙(10YR 8/4) に ぶい黄橙(10YR 7/4)	に ぶい黄橙(10YR 7/4)	2 ミリ以下 の白・茶・ 灰・褐・無 色透明な砂 粒、2.5ミ リ以下の柱 状の黒く光 る砂粒を多 く含む。		上げ底	
112	SA6	高坏	口縁部	ナデ・縦方 向のへら 磨キ	ナデ		良好	に ぶい黄橙(10YR 7/4)	灰黄橙(10YR 5/2)	0.5 ミリ～1ミ リの白色の 砂粒を含む 。			
113	SA7	長頸壺	口縁部	縦方向のへ ら磨キ	横方向のハ ケ目、ナデ		良好	に ぶい褐(7.5YR 5/4) 橙 (7.5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	1 ミリ～5ミ リの白・白 色透明の砂 粒を多く含 む。0.5ミ リ～2ミリの 無色透明で 光る茶色の 砂粒を含む 。		口径…10.8cm	
114	SA7	長頸壺	胴部	縦方向のへ ら磨キ 縦・斜方向 のハケ目	横・縦・斜 方向のハ ケ目		良好	橙 (7.5YR 7/6) に ぶい黄橙(10YR 7/4)	に ぶい黄橙(10YR 7/3) 褐 灰(10YR 6/1)	0.5 ミリ～1ミ リの無色透 明で光る黒 ・柱状で黒 く光る茶色 の砂粒、2 ミリ～4ミ リの白・茶 ・灰色の砂 粒を含む。		横の沈線 の上に刻み 目重弧文	
115	SA7	壺	頸部 、 胴部	頸部…横 ナデ 胴部…縦 ・斜方向 のハケ目	頸部…横 ナデ 胴部…横 ・斜方向 のハケ目		良好	黄 橙(10YR 8/6) 浅黄橙(7.5YR 8/4) 黒 (2.5GY 2/1)	灰 白(10YR 8/2) 淡 黄(2.5Y 8/3)	1 ミリ以下 の白色の砂 粒を少し含 む。		胴部に刻 み目突帯	
116	SA7	壺	頸部 、 底部	頸部…横 ナデ 胴部…縦 ・斜方向 のハケ目 底部…ナ デ	頸部…横 ナデ 胴部…縦 ・斜方向 のハケ目 の後、丁寧 なナデ		良好	灰 褐(5YR 4/2) 橙 (5YR 6/6)	に ぶい黄橙(10YR 7/4)	0.5 ミリ～2.5 ミリの赤茶 ・褐色の砂 粒、0.5ミ リ～2ミリの 白っぽい灰 色の砂粒を 含む。		胴部に刻 み目突帯	

図面番号	遺構名	器種	器部	調		整	焼成	色		調	胎	土	備考
				外	内			外	内				
117	SA7	壺	口縁部 底	口縁部…ナデ 胴部…斜・縦方向のハケ目 底	口縁部…横ナデ 胴部…横・斜方向のナデ、指押え 底	良好	黒褐(10YR 7/4)	黒褐(10YR 3/1)	3ミリ以下の茶・褐・淡黄色の砂粒、1ミリ以下の黒く光る、無色透明で光る、白色の砂粒を含む。	口径…8.7cm 器高…27.2cm			
118	SA7	壺	口縁部 底	口縁部…ヨコナデ 胴部…ハケ目の後、ナデ 底	口縁部…横ナデ 胴部…横ナデ…指押え 底	良好	浅黄橙(10YR 8/6) 明黄褐(10YR 7/6)	浅黄橙(10YR 8/6)	0.5ミリ～2ミリの赤茶・褐色の砂粒、0.5ミリ～1.5ミリの乳白・黄白色の砂粒を含む。	口径…13.4cm 器高…36.6cm			
119	SA7	壺	口縁部 底	口縁部…横ナデ 胴部…底部…粗いナデ	口縁部…横ナデ 胴部…横ナデの後、横ナデ 底	良好	浅黄橙(10YR 8/4) 橙(5YR 7/8) 赤褐(5YR 5/4)	浅黄橙(10YR 8/4)	1ミリ～2ミリの無色透明で光る・白で光る・柱状で黒く光る・茶・黒の砂粒、2ミリ～4ミリの白・茶色の砂粒を含む。	口径…9.2cm 器高…30.0cm			
120	SA7	壺	口縁部 底	口縁部…横ナデ 胴部…底部…粗いナデ	口縁部…横ナデ 胴部…横ナデの後、横ナデ 底	良好	橙(5YR 7/6) 黒褐(7.5YR 3/1)	黄橙(10YR 6/3)	3ミリ～5ミリの灰白の砂粒、3ミリ以下の茶褐色の砂粒を含む。2ミリ以下の白・無色透明・黒く光る砂粒を含む。	口径…13.2cm			
121	SA7	壺	口縁部	横ナデ	ナデ	良好	淡黄(2.5Y 8/3) 灰黄(2.5Y 6/2)	淡黄(2.5Y 8/3) 灰黄(2.5Y 6/2)	3ミリの黒色の粒を含む。2ミリ以下の灰・黒・赤褐色の砂粒を多く含む。1ミリ以下の黒・無色透明の光る砂粒を少し含む。				
122	SA7	鉢	口縁部	斜・縦方向のハケ目	ナデ	良好	橙(5YR 7/6)	橙(7.5YR 7/6)	2ミリ以下の茶褐・灰色の砂粒を含む。				
123	SA7	壺	口縁部 底	斜方向のハケ目	斜方向のハケ目	良好	灰(7.5YR 6/6)	灰(N 4/)	2ミリ以下の灰・茶褐・黄褐色の砂粒、1ミリ以下の無色透明で光る砂粒を多く含む。6.5ミリの砂粒、1ミリ以下の黒く光る砂粒を含む。				
124	SA7	鉢	口縁部	横ナデ 斜方向のハケ目	横ナデ 斜方向のハケ目	良好	橙(7.5YR 7/6)	黄橙(10YR 7/4)	2.5ミリの灰白の砂粒、2ミリの茶褐色の砂粒、1.5ミリ以下の乳白の砂粒、4ミリの灰色の砂粒を含む。				
125	SA7	甕	口縁部 底	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目 底	口縁部…横ナデ、指押え 胴部…斜方向のハケ目 底	良好	橙(5YR 6/8) 赤褐(7.5YR 6/3)	橙(5YR 6/6) 赤褐(7.5YR 8/6)	0.5ミリ～3ミリの茶・白・灰色の砂粒を含む。	口径…22.4cm 器高…28.0cm			
126	SA7	甕	口縁部 底	口縁部…ナデ、板状工具による縦・斜方向のハケ目 底	口縁部…横ナデ、指押え 胴部…斜方向のハケ目 底	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	浅黄橙(10YR 8/4)	3ミリ以下の灰白・赤茶色の砂粒を含む。	口径…24.1cm 器高…26.7cm			
127	SA7	甕	口縁部 底	口縁部…横ナデ、板状工具による縦・斜方向のハケ目 底	口縁部…横ナデ、指押え 胴部…斜方向のハケ目 底	良好	明黄褐(10YR 6/6) 橙(5YR 6/8)	黄橙(7.5YR 7/8)	1ミリ～3.5ミリの黒っぽい砂粒、0.5ミリ以下の乳白・無色透明に光る砂粒、0.5ミリ～2ミリの黒く柱状に光る砂粒を含む。	口径…20.3cm 器高…25.4cm			
128	SA7	甕	口縁部	粗いナデ、ナデ	ナデ	良好	淡黄(2.5Y 8/3)	淡黄(2.5Y 8/3)	4.5ミリ以下の茶褐・灰色の砂粒、2ミリ以下の無色透明で光る砂粒、3ミリ以下の乳白の砂粒を含む。	口径…23.4cm			
129	SA7	甕	口縁部	横ナデ	横ナデ、斜方向のハケ目	良好	赤褐(7.5YR 7/4)	赤褐(7.5YR 7/4)	3ミリ以下の白色の砂粒、1ミリ以下の無色透明・黒で光る・赤褐色の砂粒を少し含む。	口径…20.2cm			

図面 番号	遺構名	器種	器部	調		整	焼成	色		胎	土	備考
				外	内			外	内			
130	SA 7	甕	口縁部	横ナデ、斜方向のハケ目	横ナデ	良好	にぶい黄橙(10YR 7/4)	浅黄橙(10YR 8/4)	2ミリ以下の白・灰・赤褐・無色透明で光る砂粒を多く含む。		口径…21.6cm	
131	SA 7	甕	口縁部 胴部	口縁部…ヨコナデ 胴部…横・斜方向のハケ目	横ナデ、ナデ	良好	にぶい橙(7.5YR 6/4)	橙 (7.5YR 6/6)	1ミリ～2ミリの乳白・白い半透明・柱状の黒く光る砂粒を多く含む。		外面に少しスス附着	
132	SA 7	甕	口縁部 胴部	ナデ?	横方向のハケ目	良好	橙 (7.5YR 6/6)	灰 褐(7.5YR 4/2) にぶい橙(7.5YR 7/4)	1ミリ以下の白・灰・黒色の砂粒を少し含む。		外面にスス附着	
133	SA 7	甕	口縁部 胴部	口縁部…ナデ、ヨコナデ 胴部…横・斜方向のハケ目	ナデ	良好	にぶい黄橙(10YR 7/3) 浅黄橙(10YR 8/3)	にぶい橙(7.5YR 7/4)	1ミリ～2ミリの乳白・白い半透明・柱状の黒く光る砂粒を多く含む。		外面…頸部～胴部少しスス附着	
134	SA 7	甕	口縁部	ナデ?	ナデ?	良好	にぶい黄橙(10YR 7/3) 浅黄橙(10YR 8/3)	浅黄橙(10YR 8/3)	2ミリ以下の茶褐・白色透明・無色透明・黒色の砂粒を少し含む。		外面にスス附着	
135	SA 7	甕	口縁部	ナデ、横ナデ	横ナデ	良好	灰黄褐(10YR 7/3)	にぶい黄橙(10YR 5/2)	1ミリ～2ミリの白・淡黄・茶・黒く光る砂粒を含む。			
136	SA 7	甕	口縁部	横ナデ、指押え	ナデ	良好	にぶい黄橙(10YR 7/3)	にぶい黄橙(10YR 7/2)	2ミリ～3ミリの茶・淡黄・白・赤褐色の砂粒を多く含む。		外面にスス附着	
137	SA 7	甕	口縁部	ナデ、横ナデ	横ナデ	良好	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	1ミリ～1.5ミリの茶・白い半透明の砂粒を少し含む。			
138	SA 7	甕	頸部 胴部	縦ナデの後、指押え 板状工具による横方向のナデ	縦ナデ 板状工具による斜方向のナデ	良好	灰 白(5Y 7/1)	浅黄橙(10YR 8/3)	2ミリ以下の黒・灰・黄褐・白色透明・白色の砂粒を多く含む。		外面にスス附着	
139	SA 7	甕	口縁部	縦方向のハケ目、ナデ	斜方向のハケ目、ナデ	良好	にぶい橙(7.5YR 7/3)	淡 黄(2.5Y 8/4)	3ミリ以下の黒色の砂粒、2ミリ以下の無色透明で光る砂粒、2ミリ以下の白・灰色の砂粒を含む。2ミリ以下の茶・褐色の砂粒を多く含む。		頸部に一条の刻み目 突帯	
140	SA 7	甕	底部	横ナデ、縦方向のハケ目	粗いナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	黒 褐(2.5Y 3/1)	2ミリ以下の黒・灰色の砂粒、1ミリ以下の赤褐色の砂粒を含む。		上げ底 底径…8.1cm	
141	SA 7	甕	底部	縦方向のハケ目	ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	橙 (5YR 7/6) 黄 橙(10YR 8/6)	2.5ミリ以下の黒色の砂粒、2ミリ以下の無色透明で光る砂粒、1.5ミリ以下の白色の砂粒、3ミリ以下の茶・褐色の砂粒を含む。			
142	SA 7	甕	底部	横ナデ	ナデ	良好	にぶい橙(7.5YR 7/4)	浅黄橙(7.5YR 8/3)	1ミリ以下の赤褐・無色透明の砂粒を少し含む。			

図面 番号	遺構名	器種	器部	調		整		焼成	色		胎	土	備考
				外	内	内	面		外	面			
143	SA7	甕	底部	板状工具によるナデ 横ナデ 指押え	剥離の為調整不明	良好	内面	内面	内面	内面	1ミリ以下の白・白色透明・灰・赤褐・ 無色透明で光る砂粒を少し含む。	上げ底 底径…5.8cm	
144	SA7	甕	底部	斜・縦方向のハケメ 指押え	ナデ	良好	内面	内面	内面	内面	2ミリ以下の白色透明・無色透明で光る 砂粒、1ミリ以下の黒・白色の砂粒を少 し含む。	平底 底径…6.5cm	
145	SA7	高坏	口縁部	横ナデ 斜・横方向のヘラ磨キ	横方向のヘラ磨キ	良好	内面	内面	内面	内面	3ミリの褐色の砂粒、微細な黒色透明の 砂粒を多く含む。		
146	SA7	高坏	脚部	ヘラ磨キ	ナデ	良好	内面	内面	内面	内面	1ミリ～2ミリの茶・灰・白く光る砂粒 を多く含む。	半完形の透し	
147	SA7	高坏	脚部	ヘラ磨キ	ナデ	良好	内面	内面	内面	内面	2ミリ以下の灰・黒・無色透明・黒く光 る砂粒を少し含む。		
148		壺	口縁部	縦方向のヘラ磨キ	横方向のヘラ磨キ	良好	内面	内面	内面	内面	1ミリ～2.5ミリの茶・褐・灰・白い半透 明の砂粒を含む。	口径…11.5cm	
149		壺	肩部	ミガキの後、横方向 の凹線に縦方向の凹 線が重なる	剥離の為調整不明	良好	内面	内面	内面	内面	1ミリ～5ミリの白・白色透明の砂粒を 多く含む。0.5ミリ～2ミリの無色透明で 光る・茶色の砂粒を含む。		
150		壺	口縁部	ナデ・横ナデ	横ナデ	良好	内面	内面	内面	内面	1ミリの灰・褐色の砂粒を含む。	口径…15.0cm	
151		壺	口縁部	ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	良好	内面	内面	内面	内面	1ミリ～1.5ミリの褐・灰・茶色・黒く光 る棒状の砂粒、透明の砂粒を含む。		
152		壺	底部	縦方向のヘラ磨キ	ナデ	良好	内面	内面	内面	内面	1ミリ～1.5ミリの褐色の砂粒を多く含む		
153		甕	口縁部 胴部	口縁部…胴部…ナデ 胴部…板状工具に よる縦方向の ナデ	斜方向のハケ目	良好	内面	内面	内面	内面	1ミリ～2.5ミリの茶・褐・淡黄の砂粒、 2ミリ～5ミリの砂粒を少し含む。	口径…25.8cm	
154	表探	甕	口縁部 胴部	口縁部…ナデ・横ナデ 胴部…斜方向のハケ 目	口縁部…横ナデ 横方向のハケ目 胴部…板状工具によるナデ	良好	内面	内面	内面	内面	1ミリ～2.5ミリの茶・褐・白・乳白色の 砂粒を含む。	口径…16.3cm	
155	表探	甕	口縁部	横ナデ	横ナデ	良好	内面	内面	内面	内面	棒状で黒く光る・透明で光る細砂粒、1 ミリ～3ミリの白色の砂粒を少し含む。		

図面 番号	遺構名	器種	器部	調		焼成	色		調		胎	土	備 考
				外	内		外	内	内	面			
156		甕	底部	横ナデ	ナデ	良好	ぶい赤褐(5YR 5/4)	ぶい赤褐(5YR 4/3)	2.5ミリ～4ミリの褐色の砂粒を少し含む				
157	表採	甕	底部	横ナデ	ナデ	良好	ぶい黄橙(10YR 7/3)	灰黄(2.5Y 6/2)	0.5ミリ～2ミリの白色の砂粒、細砂粒を少し含む。				内面にスス付着
158		甕	底部	横ナデ	ナデ	良好	橙(7.5YR 7/6)	灰(5Y 4/1)	1ミリ～3ミリの灰・褐・茶・白い半透明の砂粒を多く含む。				
159	表採	甕	底部	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4)	ぶい黄橙(10YR 7/2)	1ミリ～3ミリの茶・褐・灰色の砂粒を多く含む。				内面に薄くスス付着
160		甕	底部	縦方向のハケ目・横ナデ	横ナデ	良好	灰白(10YR 8/2)	浅黄橙(10YR 8/3)	4ミリ以下の灰色、3ミリ以下の白色、1ミリ以下の黒・無色透明で光る砂粒を含む。				
161		高環	環部	横・斜方向のヘラ磨キ	横方向のヘラ磨キ	良好	ぶい橙(7.5YR 7/4)	ぶい黄橙(10YR 7/4)	1ミリの茶・灰色の砂粒を少し含む。				
162	表採	高環	環部	ナデ	ナデ	良好	橙(5YR 6/8)	橙(7.5YR 6/8)	0.5ミリ以下の白・灰色の砂粒を含む。				
163		高環	脚部	磨キ風化している	ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/3) ぶい黄橙(10YR 6/3)	淡黄(2.5Y 8/3)	1ミリ～3ミリの褐・茶・白い半透明の砂粒を含む。				

第5節 中世の遺構と遺物

中世の遺構はA地区の東区で掘立柱建物7棟・溝状遺構4本、西側で溝状遺構2本が検出された。一方、B地区の東側では溝状遺構が3本検出されたが、掘立柱建物は1棟も検出されていない。中世の青磁片・白磁片・土師器片などが出土した。

(1) 掘立柱建物 (第30図)

掘立柱建物は7棟はA地区の東区 (b-10・11、c-11、d-11~13) で検出されたが、B地区では検出されていない。7棟の内訳は庇付きが3棟、庇なしが4棟である。SB4の庇付きの2間×5間が最大規模であるが、2間×3間が標準的な規模である。SB1は南北方向が主軸であり、東面庇付きの2間×3間である。SB2は南北方向が主軸であり、西面庇付きの2間×3間である。SB3は南北方向が主軸の2間×3間である。SB4は東西方向が主軸であり、南面庇付きの2間×5間である。SB5は東西方向が主軸の2間×3間である。SB6は2間×2間である。SB7は東西方向が主軸の2間×3間である。SB1はSE3を切っている。SB7はSE5によって切られている。SB1の柱穴から青磁片が、SB4の柱穴から白磁片が出土した。

SB1 (第31図)

SB1は調査区の中央部の北端部のa・b-10に位置する。主軸はN-23°-Eで、東面庇付きの2間×3間の建物である。梁392cm、桁行604cmで、身舎の面積は23.68m²である。柱穴径は30~50cmである。庇の梁が76cmと84cmである。SB1はSE1を切っている。柱穴から青磁片が出土している。

SB2 (第32図)

SB2はSB1の東側のb-11に位置する。主軸はN-10°-Eで、西面庇付きの2間×3間の建物である。梁388cm、桁行628cmで、身舎の面積は24.37m²である。柱穴径は30~40cmである。庇の梁は北側、南側とも100cmである。

SB3 (第33図)

SB3はSB2の南東側に近接するc-11に位置する。主軸はN-16°-Eで、2間×3間の建物である。梁392cm、桁行612cmで、面積は23.99m²である。

SB4 (第34図)

SB4はSB3の南東側に近接するd-11・12に位置する。主軸はN-73°-Wで、南面庇付きの2間×5間の建物である。梁508cm、桁行1024cmで、面積は52.02m²である。庇の梁は西側が100cm、東側が112cmである。

SB5 (第33図)

SB5はSB4の北東側で重なり合うd-12に位置する。主軸はN-108°-Eで、1間×3間の建物である。梁400cm、桁行596cmで、面積は23.84m²である。



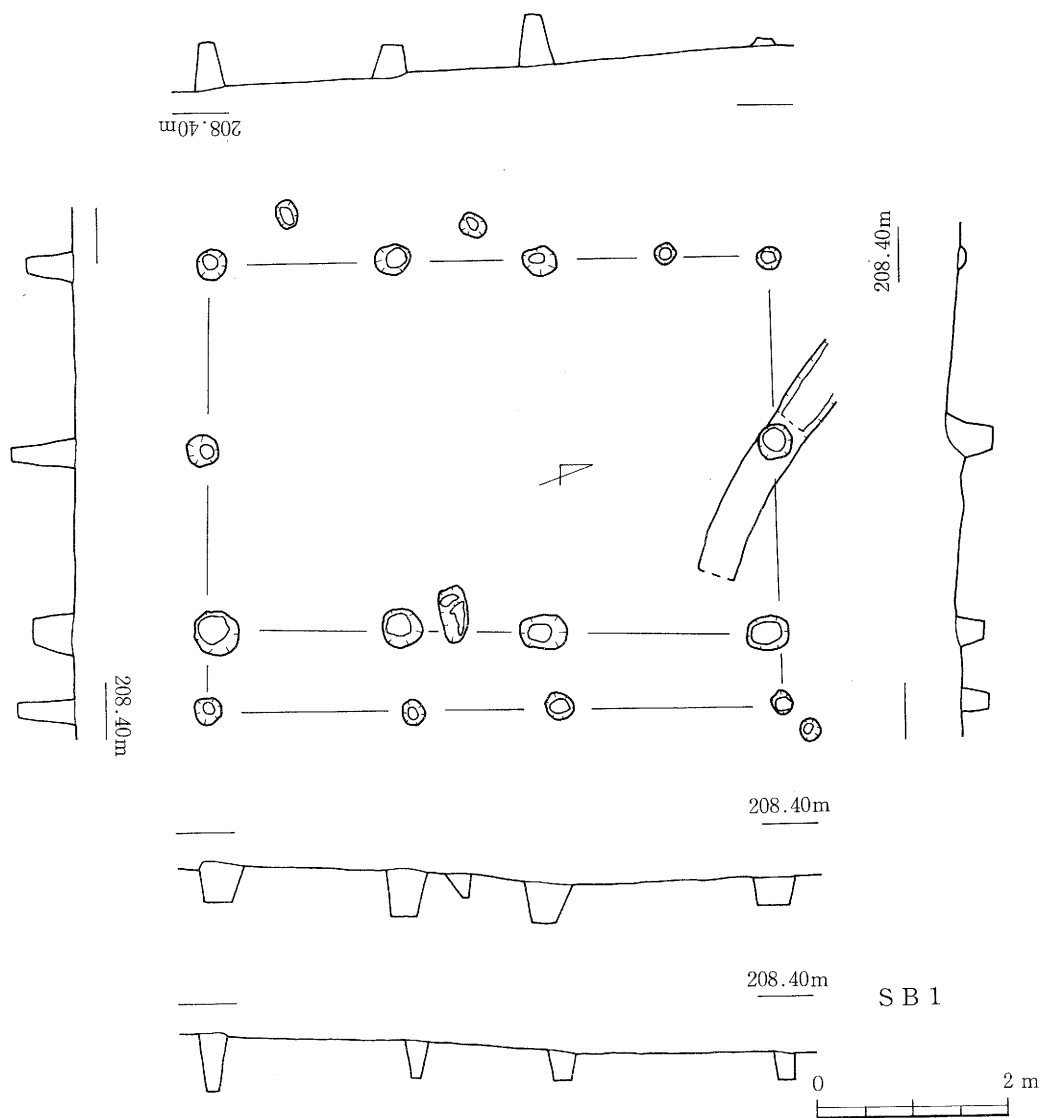
第30図 中世遺構分布図

SB 6 (第35図)

SB 6はSB 5の南東側で重なり合うd-12に位置する。主軸はN-20°-Eで、2間×2間の建物である。梁400cm、桁行408cmで、面積は16.32m²である。

SB 7 (第35図)

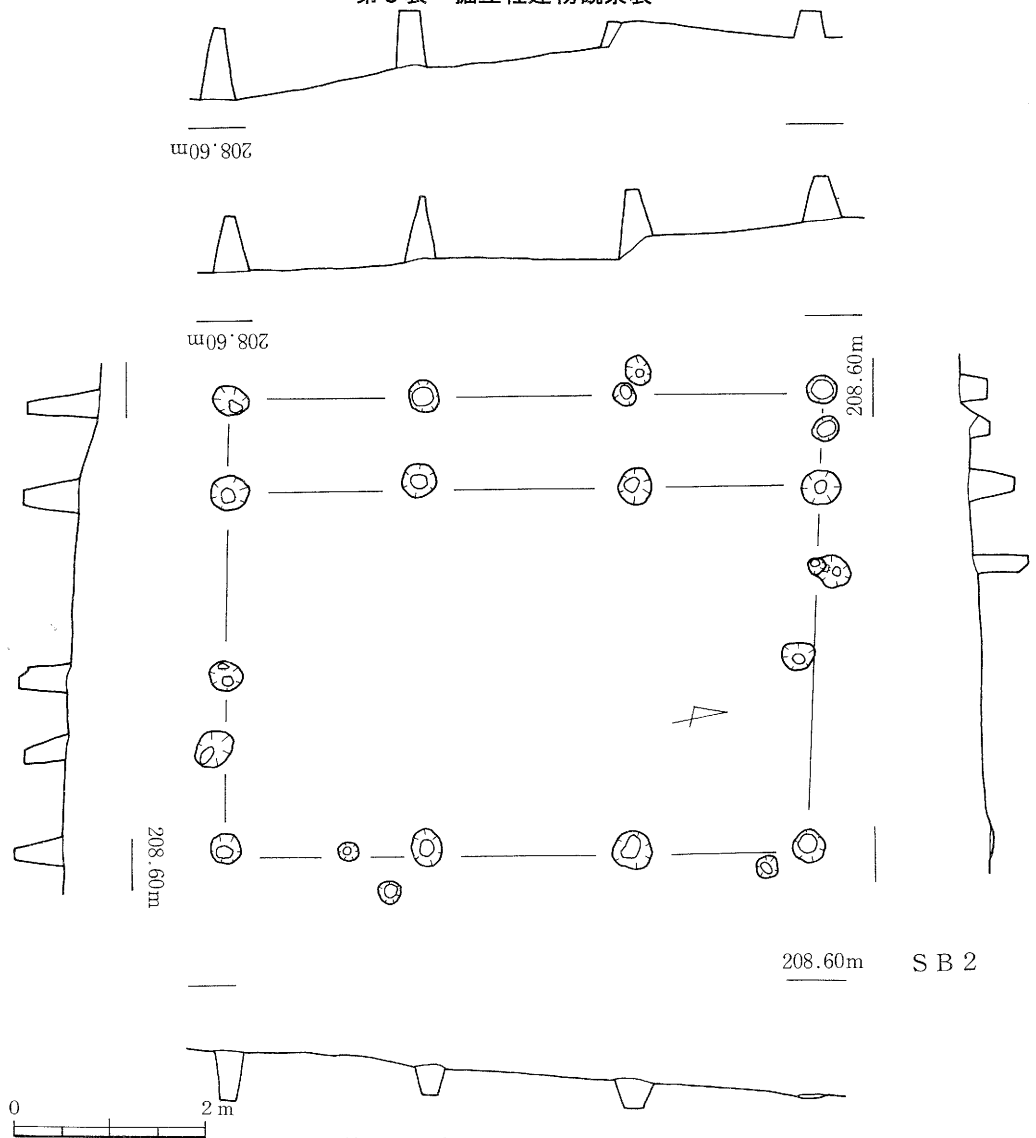
SB 7はSB 5の東側のd-13に位置する。主軸はN-110°-Eで、1間×3間の建物である。梁360cm、桁行580cmで、面積は20.88m²である。



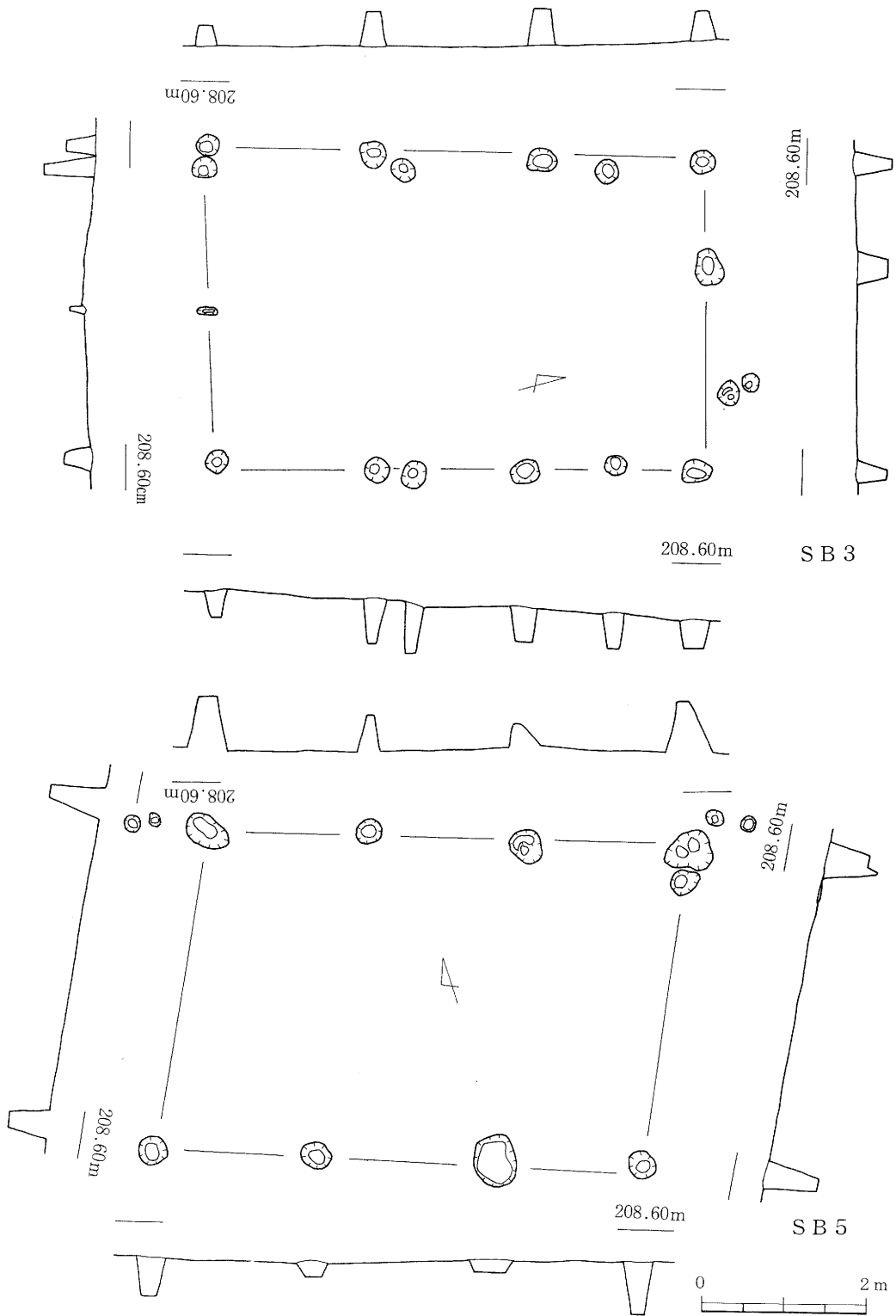
第31図 掘立柱建物実測図(I)

建物	グリッド	方位	規模	梁行(cm)	桁行	庇	身舎面積(m ²)	備考
S B 1	a・b-10	N-23°-E	2間×3間	392	604	76・84	23.68	東面庇
S B 2	b-11	N-10°-E	2間×3間	388	628	100	24.37	西面庇
S B 3	c-11	N-16°-E	2間×3間	392	612		23.99	
S B 4	d-11・12	N-73°-W	2間×5間	508	1024	100・112	52.02	南面庇
S B 5	d-12	N-108°-E	1間×3間	400	596		23.84	
S B 6	d-12	N-20°-E	2間×2間	400	408		16.32	
S B 7	d-13	N-110°-E	1間×3間	360	580		20.88	

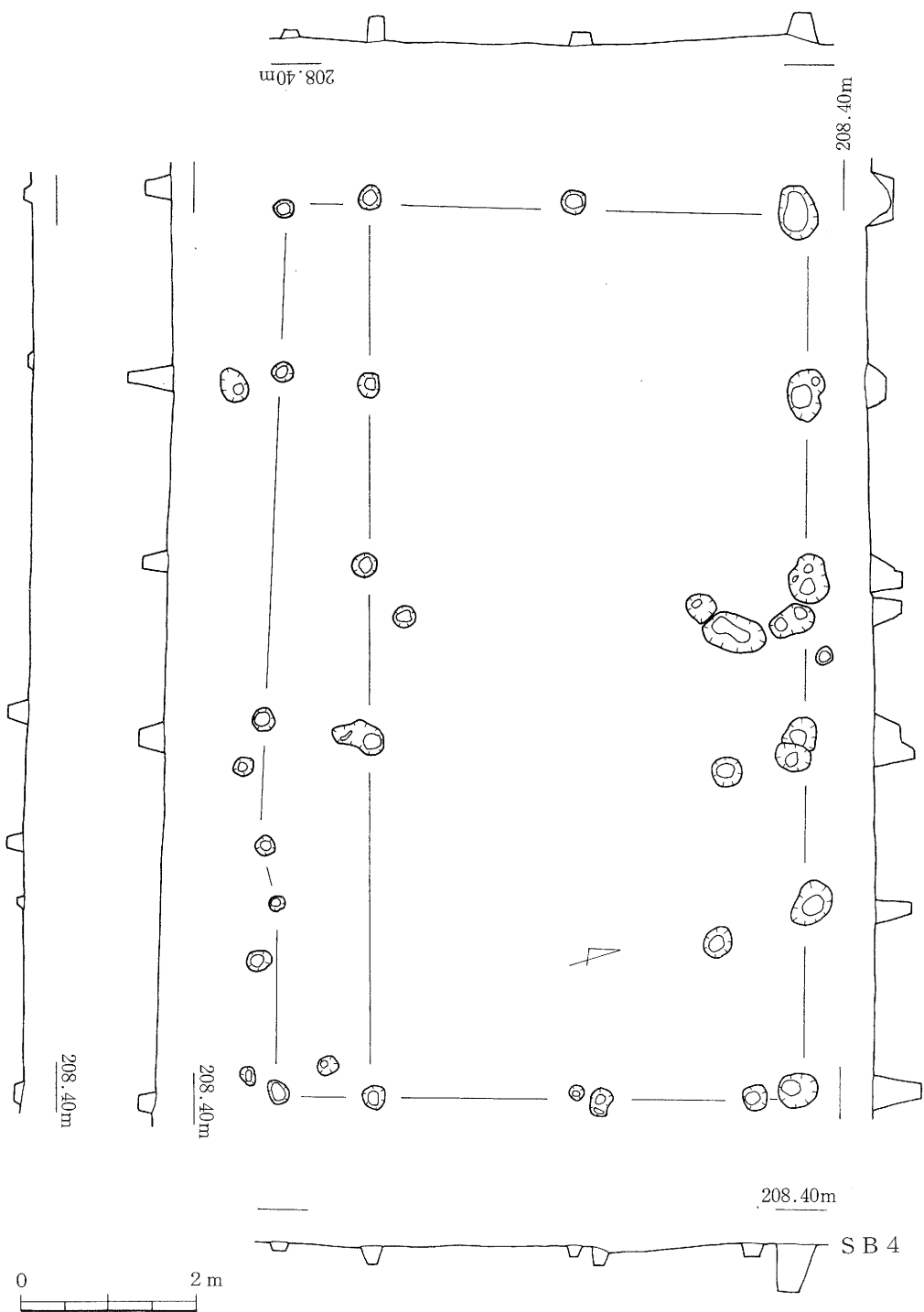
第5表 掘立柱建物観察表



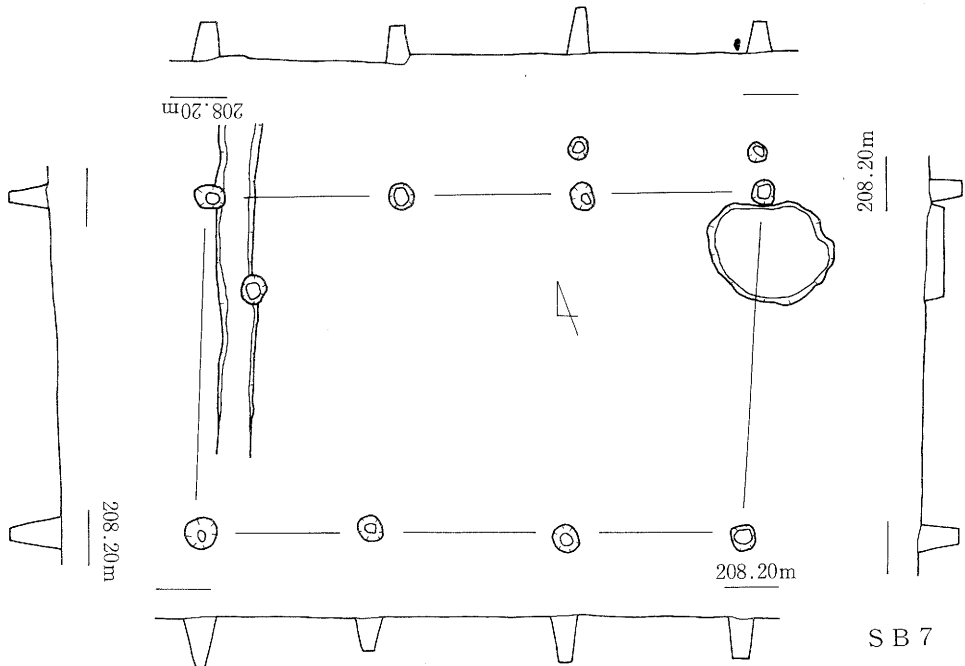
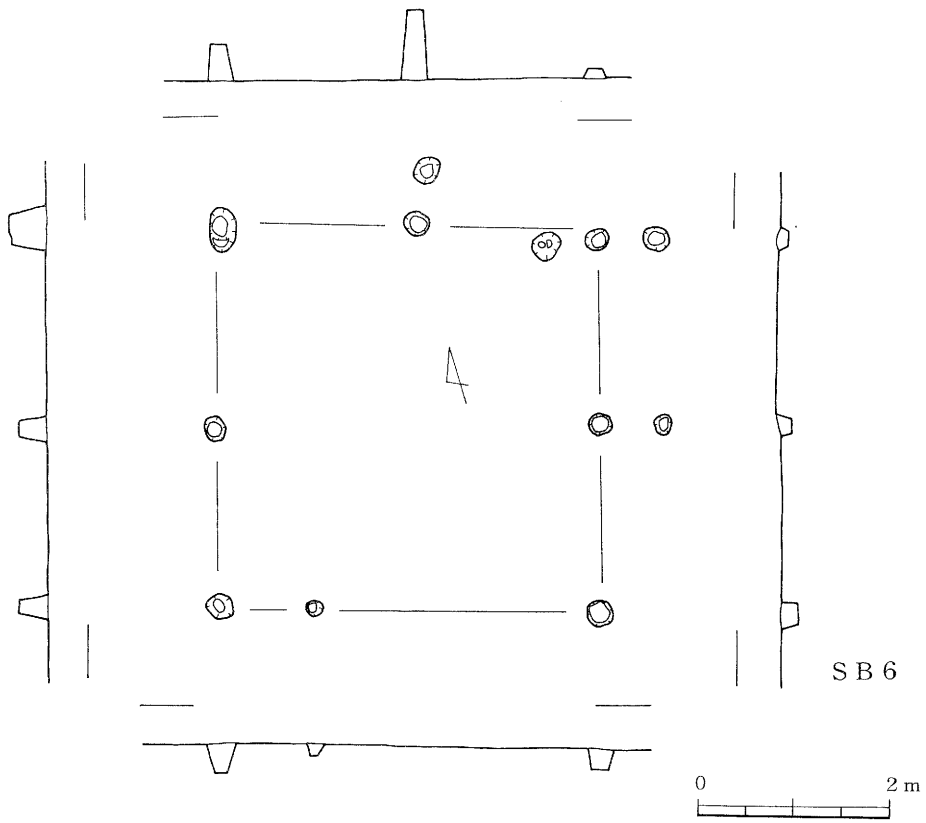
第32図 掘立柱建物実測図(Ⅱ)



第33图 掘立柱建物实测图 (III)



第34图 掘立柱建物实测图 (IV)



第35図 掘立柱建物実測図 (V)

(2) 溝状遺構

A地区の西区の北部(a-6・7)のSE1とSE2、東区の北部(b-10、c・d-13・14)のSE3～SE6の計6本が検出された。すべてほぼ南北方向に走っている。一方、B地区の東部ではSE7～SE9の3本の溝状遺構が検出された。SE5はSE4に切られ、両者はSE6によって切られている。溝状遺構に伴う遺物は出土していない。

SE1

SE1はa-6に位置し、幅20～50cm、深さ5～20cmで、等高線に対して直角のほぼ北から南へ長さ200cm伸びて消える。

SE2

SE2はa-7に位置し、幅30～50cm、深さ5～10cmで、等高線に対して直角のほぼ北から南へ長さ600cm伸びて消えている。

SE3

SE3はb-11に位置し、幅40～50cm、深さ6cmで、北北西から南南東へ長さ280cm伸びて消えている。SB1によって切られている。

SE4 (第37図)

SE4はc・d-13に位置し、幅40～50cm、深さ2～15cmで、北北東から南南西へ長さ10.5m伸びて消えている。SE5を切り、SE6によって切られている。

SE5 (第37図)

SE5はc・d-13に位置し、幅38～58cm、深さ3～12cmで、北北東から南南西へ長さ12.5m伸びて消えている。SE5とSE6によって切られている。

SE6 (第37図)

SE6はc・d-14に位置し、幅50～60cm、深さ10～15cmで床面に長さ55～65cm、幅35～45cm、深さ3～6cmの楕円形プランの窪みが連続している。楕円形の窪みの上には硬化面がある。

SE7 (第36図)

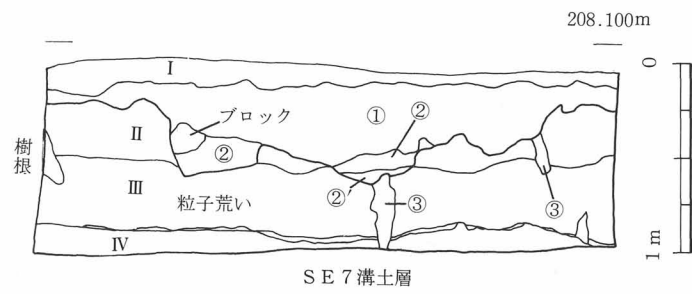
SE7(概報ではB地区SE1～3)はg～i-15に位置し、北北東から南南西方向に伸びている。幅約180cm、長さ27.8mで床面に幅約60cm、長さ45～55cm、深さ約8cmの楕円形プランの窪みが連続しているが、SE6とは異なり一部に両側に幅約30～40cm、深さ約10cmの溝を伴っている。またSA6で見られた硬化面は存在しなかった。

SE8

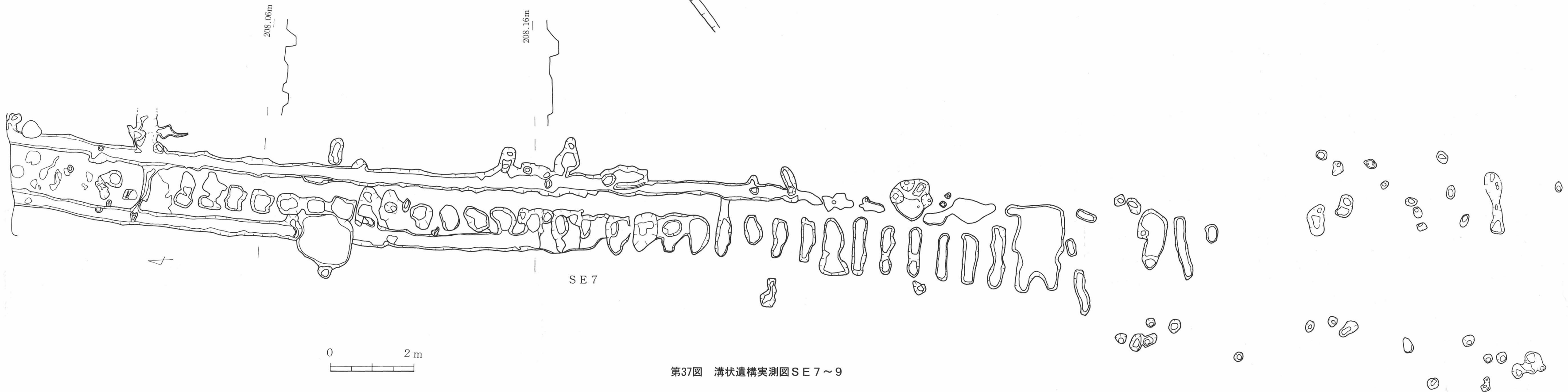
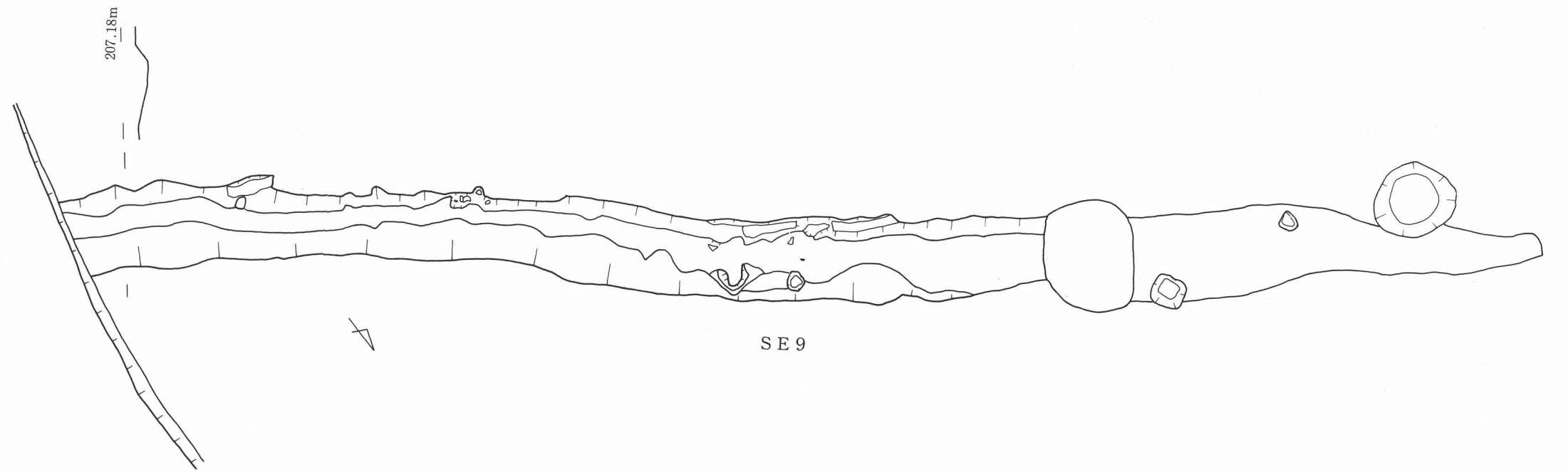
SE8(概報ではB地区SE5)はh-16に位置し、SE7とほぼ平行して伸びているが、約3.3mの長さしか痕跡が残っていない。

SE9 (第36図)

近世墓に向かって南南東から北北西方向に伸びるSE9(概報ではB地区SE4)はj・k-



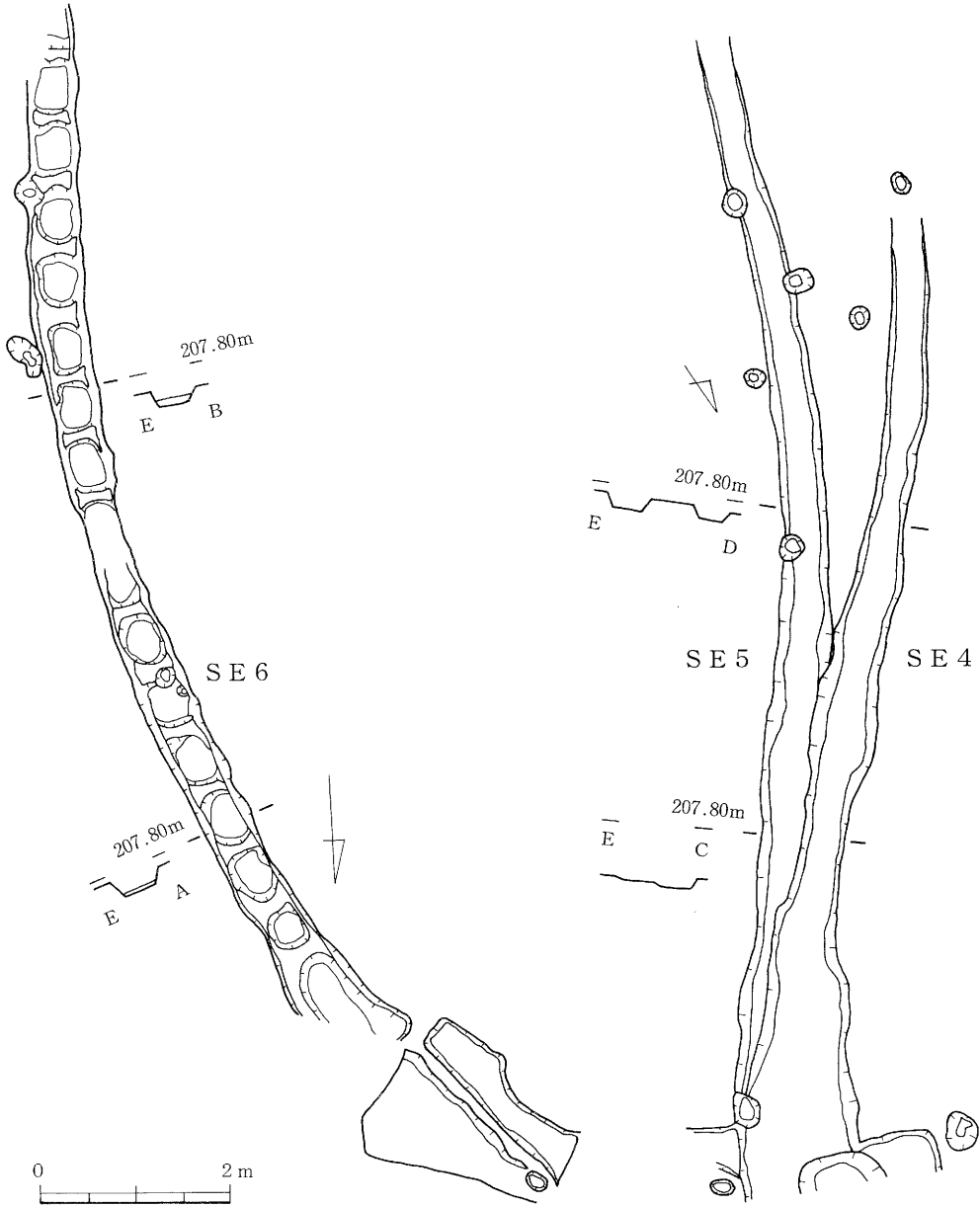
- | | |
|-----------|--------------------------|
| I 耕作土層 | ① 漆黒色軟性土層 |
| II 褐色土層 | ② アカホヤ・褐色ブロックを含む |
| III 黄橙色土層 | ②' ②よりもややアカホヤブロック・パミスを含む |
| IV 青灰色土層 | ③ 柔らかい埋土 |



第37図 溝状遺構実測図SE 7~9

19~21に位置し、長さ21.1m、幅120cm、深さ10cmで、近世墓のSD22とSD42によって切られている。

溝状遺構に伴う遺物は全然出土していない。



第37図 溝状遺構実測図(Ⅱ)

(3) 遺物

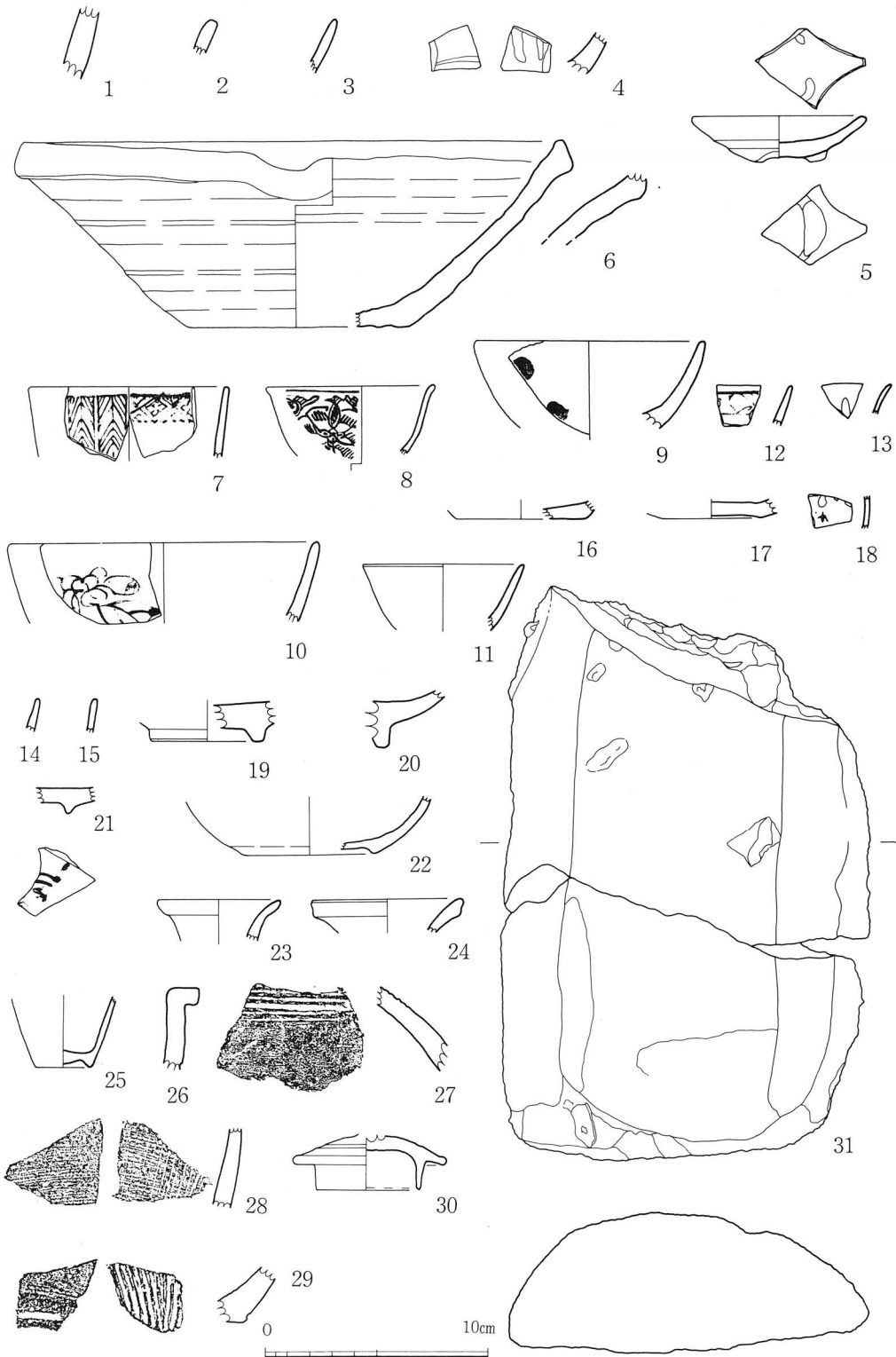
遺物としてはSE7の延長上のk-14区で出土した東播系片口鉢がある。以前の時期のものとしては布痕土器が1点出土している。

東播系片口鉢 (第38図)

口縁端部を上下に軽く摘み上げ、内外面ともヨコナデを施している。底部は糸切りで、口径24.0cm、器高8.3cm、底径9.9cmである。

小結

中世の遺構はA地区の東区で掘立柱建物7棟・溝状遺構4本、西区で溝状遺構2本が検出された。切り合いによる新旧関係は、SE3→SB1、SB7→SE5、SE5→SE4→SE6であるので、次の4時期に分かれる。I期はSB2・SB5・SB7・SE3、II期はSB1・SB3・SB6・SE5、III期はSB4・SE4、IV期はSE6である。SB1の柱穴から青磁片が、SB4の柱穴から白磁片が出土しているので、II期が鎌倉期に、III期が室町期に比定される。一時期3棟の掘立柱建物の単位が抽出された。



第38图 陶磁器実測図

表6表 陶磁器観察表

遺物 番号	出土 地点	器 種	法 量 (cm)		形態・手法の特徴ほか	色	調	胎	土
			口径	底径 器高					
1	A	布痕土器、鉢			外面…ナデ 内面…布痕、風化している。	橙 (5 Y R 7/6)		3ミリ～4ミリの灰、うす茶色の砂粒を含む。	土
2	A	青磁、碗			外面・内面…釉	オリーブ灰(10Y 6/2)。		精良	
3	A	青磁、碗			外面・内面…釉	灰 白(5 G Y 8/1)		精良	
4	A	青磁、碗			外面・内面…釉	灰 白(10Y 7/2) オリーブ灰(10Y 6/2)		精良	
5	A SB3 P1	白磁、皿	7.4	2.0 2.1	外面・内面…釉 内面…砂目痕 量付は4個のアーチ状をしている。切り高台	白		精良	
6	B	東播系、こね鉢	24.1	9.9 7.6	外面…横ナデ 内面…横ナデ、ものをすったような使用痕がのこる。 底部…糸切底	(外) 灰 黄 (7.5 Y 8/1) (内) 灰 (2.5 Y 6/1) (5 Y 8/1)		2ミリ～5.5ミリの乳白色の砂粒、1ミリ～1.5ミリの褐色の砂粒を少し含む。	
7	A e-5	染付、碗	8.8		外面・内面…釉 外面…染付	明緑灰(7.5 G Y 8/1) より白い		精良	
8	A f-5	染付、碗	7.4		外面・内面…釉 外面…染付	白		精良	
9	A c-6	染付、碗	10.0		外面・内面…釉 内面…釉はぎ	灰 白(5 G Y 8/1)		精良	
10	A c-12	染付、碗	13.8		外面・内面…貫入、釉 外面…染付	明緑灰(7.5 G Y 8/1)		精良	
11	A d-9	陶器、碗	7.1		外面・内面…釉	白		精良	
12	A b-7	染付、碗			外面・内面…釉、貫入	(外) 灰 白(5 G Y 8/1) (内) 灰 白(10 Y 8/1)		精良	
13	A d-13	陶器、碗			外面・内面…釉	白		精良	
14	A e-5	陶器、碗			外面・内面…釉、細かい貫入	灰 白(2.5 Y 8/2) より少し白い		精良	
15	A e-5	陶器、碗			外面、内面…釉、貫入	(外) オリーブ(5 Y 5/4) 黄(10 Y 8/2) (内) 灰(5 Y 8/2) 黒(10 Y R 2/2)、(10 Y R 3/2)		精良	

遺物番号	出土地点	器種	法量 (cm)		形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
			口径	底径 器高			
16	A b-7	陶器、皿		5.8	外面・内面…釉	灰白(2.5GY 8/1)	精良
17	A c-12	陶器、皿		4.4	外面…横ナデ、露胎 内面…白色物付着、釉	(外) 灰黄褐(10YR 4/2) (内) ぶい赤褐(2.5YR 4/4)	精良
18	A f-5	陶器、碗			外面・内面…釉	白	精良
19	A d-9	陶器、碗		4.8	外面…釉、壺付露胎 内面…釉、釉はぎ	(外) 灰オリーブ(7.5Y 6/2) にぶい褐(7.5YR 5/3) (内) 灰白(5Y 8/2)	精良
20	A b-9	陶器、碗			外面…釉、壺付露胎 内面…釉、釉はぎ	(外) 灰白(5Y 8/2) 暗灰黄褐(7.5YR 5/3) (内) 灰白(10Y 8/2)	精良
21	A e-14	染付、碗			外面・内面…釉 外面…染付	灰白(10Y 7/1)	精良
22	A c-12	陶器、皿		5.6	外面…釉、底部露胎 内面…釉貫入	(外) 灰褐(5YR 4/2) (内) 褐(7.5YR 4/3)	精良
23	A e-5	磁器		5.4	外面・内面…釉	白	精良
24	A e-7	陶器		6.7	外面・内面…釉	灰白(10Y 7/2)	精良
25	A d-6	磁器		2.4	外面・内面…釉	灰白(10Y 8/1)	精良
26	A e-5	陶器、鉢			口唇部…無釉 外面…釉 内面…釉、釉のかかっている部分がある。	(外) 黒褐(5YR 2/1) (内) オリーブ黄(7.5Y 6/3) 暗赤褐(5YR 3/2)	精良
27	A b-9	陶器、壺			外面…横ナデ、5本の沈線がのこる。 内面…板状工具による横ナデ	褐灰(10YR 3/1)	4ミリ以下の乳白・灰白の砂粒、 1.5ミリの半透明な砂粒を含む。
28	A e-6	陶器、摺鉢			外面…横方向のハケメ 内面…横方向のハケメの上を縦方向に櫛状の条線	灰赤(2.5YR 5/2) 暗赤灰(2.5YR 3/1)	精良
29	A d-8	陶器、摺鉢			外面…横方向のハケメ、沈線、光沢のない釉 内面…櫛状の条線(単位不明)、光沢のない釉	褐灰(10YR 5/1)	0.5ミリ以下の灰、茶の砂粒を少し含む。
30	A e-6	陶器、蓋		4.7	外面…釉、無釉 内面…無釉	(外) 釉の部分 黒褐(7.5YR 3/1) 無釉の部分 赤灰(2.5YR 4/1) (内) 赤灰(2.5YR 4/1)	1ミリ以下の灰白、透明で光る微砂粒を多く含む。

第6節 近世の遺構と遺物

調査区の東端部分（h-18、i-18・19・20・21、j-18・19・20）から近世墓が43墓検出された。近世墓の確認範囲は約400m²であるが、調査区の設定の関係上墓域全体を調査できなかった。全て土葬であるが棺材が出土したのはわずかに3基と遺物の遺存状況は極めて悪かったが、人骨の出土状況と墓壇の平面形から埋葬形態は座葬によると考えられる。検出されたのは埋葬施設のみで地上部の墓標や墓道は検出されなかった。

以下、代表的な事例をとりあげ概観をおこなうが、人骨についての詳細は付篇の長崎大学医学部解剖学第2教室松下孝幸助教授らによる報告を参照されたい。基本的に近世墓の場合1基につき被葬者は1体であるが、SD-21のみ2体であったと考えられる。

SD15（第45図）

i-20に位置し、この近世墓群のなかで最大の法量を測る。長軸2m、短軸1.3m、深さ1.4mの長方形プランを呈する。ほぼ東西方向に主軸を持つ。掘り形は段掘りにされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底部中央を長径78cm、短径55cm、深さ5～15cm掘り窪めており、このような例は水落遺跡近世墓群の中では外に存在しない。比較的保存の良い人骨（頭蓋・尺骨・橈骨、男性、老年）の一部が出土しており、その出土状況から大型の長方形プランであるにもかかわらず埋葬形態は座葬であったと考えられる。副葬品として寛永通宝が6枚、釘、棺材などが出土している。

SD21（第47図）

i-19に位置し、長径1.23m、短径1.1m、深さ0.92mのやや楕円形プランを呈する。壁は78°～88°で立ち上がるが、北東部分が一部段掘りになっている。底部は長径0.72m、短径0.71mの円形を呈する。この墓からは成人骨（頭蓋・大腿骨）と小児の歯が出土しており、1基の墓壇の中に2体葬られていたと考えられる。副葬品として寛永通宝が13枚出土し、うち11枚は4枚と7枚に分かれて銹着した状態で出土した。

SD22（第48図）

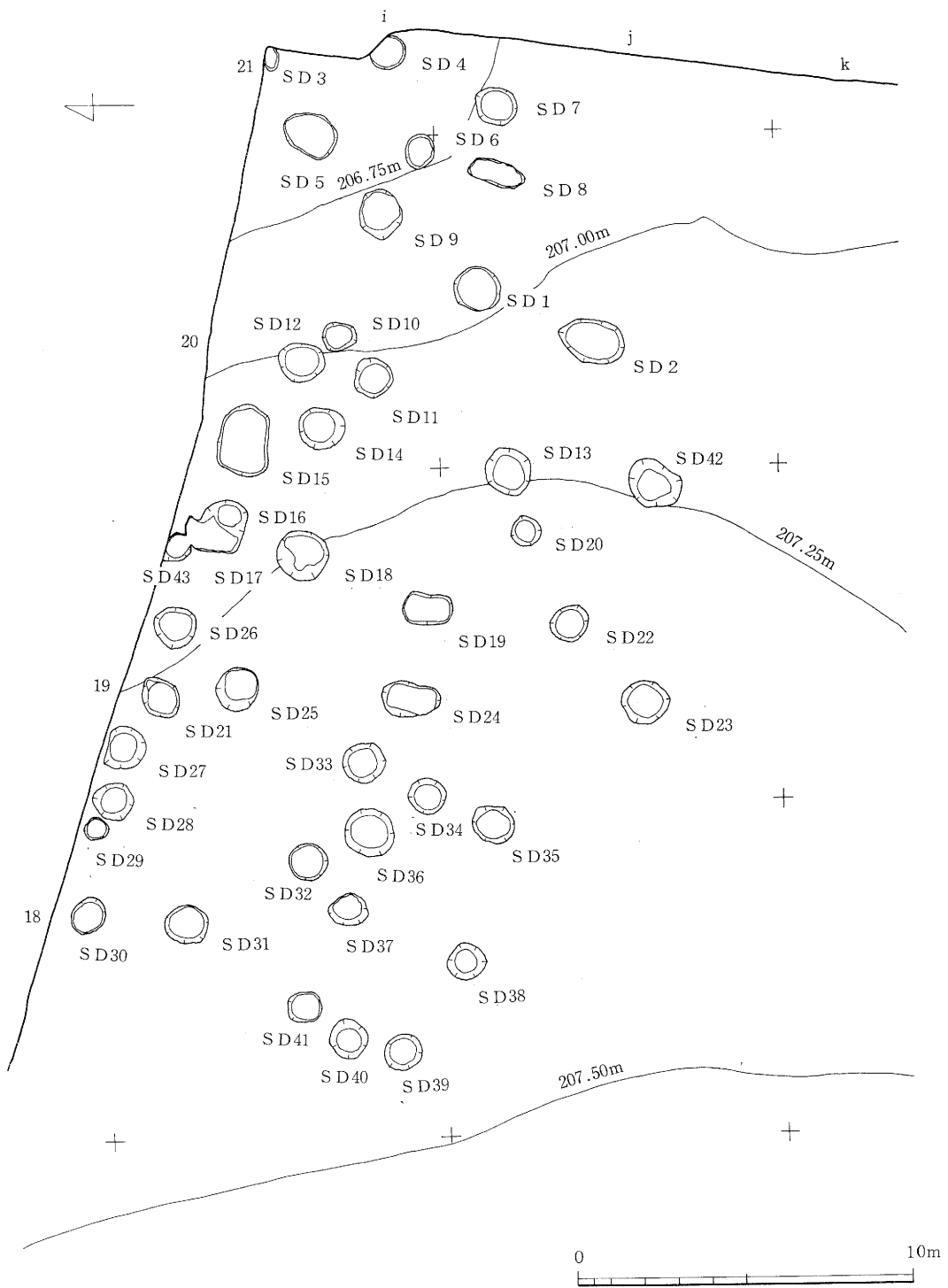
j-19に位置し、長径1.1m、短径1.08m、深さ0.64mの円形プランを呈する。壁は75°～88°で立ち上がる。底部は長径0.82m、短径0.72mの円形を呈する。骨細片と歯が出土しているが、保存状態は悪く、性別、年齢は不詳。出土遺物なし。

SD23（第49図）

j-19に位置し、長径1.37m、短径1.3m、深さ0.55mの円形プランを呈する。壁は72°～86°で立ち上がり、南東側に段掘りが見られる。底部は長径0.97m、短径0.94mの円形を呈する。頭蓋と四肢骨片が出土しているが保存状態は悪く、性別、年齢は不詳。出土遺物なし。

SD27（第51図）

i-19に位置し、長径1.31m、短径1.24m、深さ1.1mの円形プランを呈する。壁は75°～81°で



第39图 近世墓分布图

立ち上がる。底部は長径0.84m、短径0.82mの円形を呈する。頭蓋・肩甲骨・上腕骨・大腿骨（男性・熟年）が出土しており、計測値が出されている。副葬品として寛永通宝が7枚出土し、その一部には目の粗い平織りの布が付着している。銭の錆着状況から中央の孔部分にひもを通していた可能性が考えられる。

SD28（第52図）

h-18・19、i-18・19に位置し、SD-29との間がわずか12cmしか離れておらず隣あっている。長径1.16m、短径1.08m、深さ1.06mの円形プランを呈する。壁は約79°で立ち上がる。底部は長径0.7m、短径0.72mの円形を呈する。人骨が出土しているが、保存状態は悪い。副葬品として寛永通宝7枚、錆のため文字の判読が不可能な銭貨1枚が出土した。銭の錆着状況から中央の孔部分に紐を通していた可能性が考えられる。

SD33（第54図）

i-19に位置し、長径1.26m、短径1.13m、深さ0.78mのやや楕円形プランを呈する。壁は78°～80°で立ち上がる。底部は長径0.88m、短径0.78mの円形を呈する。頭蓋・四肢骨が出土しており、壮年の女性と考えられる。副葬品として寛永通宝8枚、釘1点、8.3cm×3.7cmの大きさの木片が出土した。棺材と考えられる。銭の錆着状況から中央の孔部分に紐を通していた可能性が考えられる。

SD35（第55図）

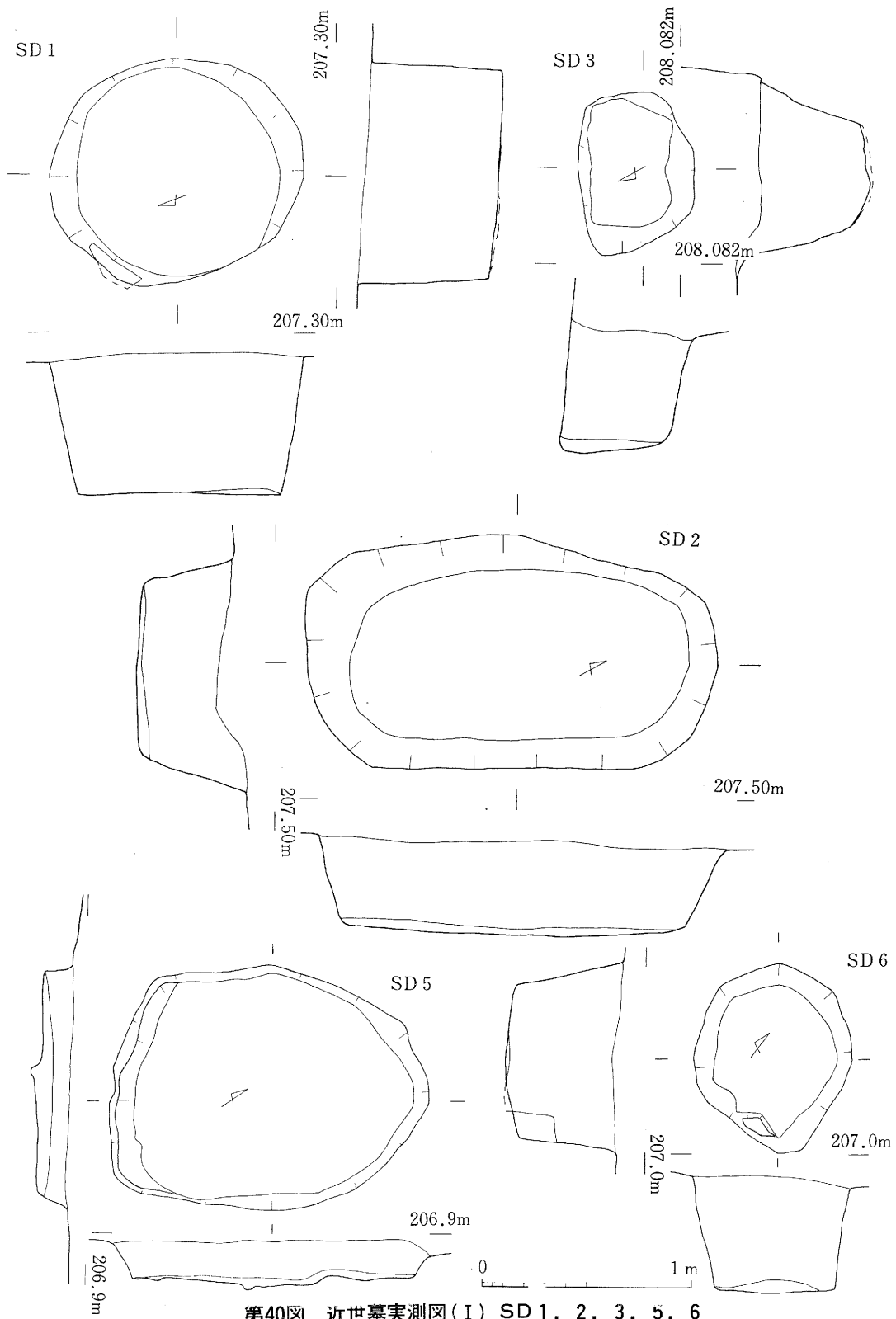
j-18に位置し、長径1.17m、短径1.11m、深さ0.55mのやや楕円形プランを呈する。壁は76°～79°で立ち上がる。底部は長径0.82m、短径0.72mの円形を呈する。頭蓋・四肢骨が出土しており、性別は不明であるが老年と推定された。副葬品として寛永通宝が4枚出土した。銭の錆着状況から中央の孔部分に紐を通していた可能性が考えられる。

SD36（第52図）

i-18に位置し、長径1.36m、短径1.32m、深さ1.5mの円形プランを呈する。壁は78°～82°で立ち上がる。底部は長径0.95m、短径0.88mの円形を呈する。頭蓋・上腕骨・橈骨・頸骨が出土しているが、保存状態はこの近世墓群中最良であった。熟年の男性と推定された。副葬品として寛永通宝が7枚、3枚と4枚に分かれて錆着して出土しており、その一部には目の粗い平織りの布が付着している。銭の錆着状況から中央の孔部分に紐を通していた可能性が考えられる。

SD38（第56図）

j-18に位置し、長径1.12m、短径1.06m、深さ0.76mの円形プランを呈する。壁は69°～74°で立ち上がる。底部は長径0.62m、短径0.57mの円形を呈する。頭蓋・四肢骨・釘が出土しているが全て保存状況が悪い。この近世墓だけは、人骨が出土しているにもかかわらず、六道銭が出土していない。



第40图 近世墓実測図(I) SD 1. 2. 3. 5. 6

SD39 (第57図)

j-18に位置し、長径1.1m、短径1.06m、深さ0.7mの円形プランを呈する。壁は78°～84°で立ち上がる。底部は長径0.75m、短径0.74mの円形を呈する。頭蓋・大腿骨が出土しているが性別、年齢ともに不明である。出土遺物は寛永通宝3枚、大釘の破片1点、中型の釘が1点である。

遺物

上記以外の遺物について若干触れておきたい。

第67図1・2は近世の磁器椀で、第67図3は15～16世紀の白磁椀、4は16世紀の染付で3・4どちらも輸入品である。5は時期不明の土師質皿片である。いずれも墓壇内から出土しているが流れ込みと考えられる。

6～19は棺に使われた釘である。保存状態は比較的良好なものが多いが、頭部のみで下部が切損しているものが多い。いずれも角釘である。6,10,12,13,16,19,20は頭巻という頭部を叩き出し、折り曲げているものである。11,12,13はいわゆる五寸釘である。11はSD39,12はSD11,13はSD15から出土している。それぞれ釘の中心線に対して斜め方向に棺材と思われる木質が錆着している。

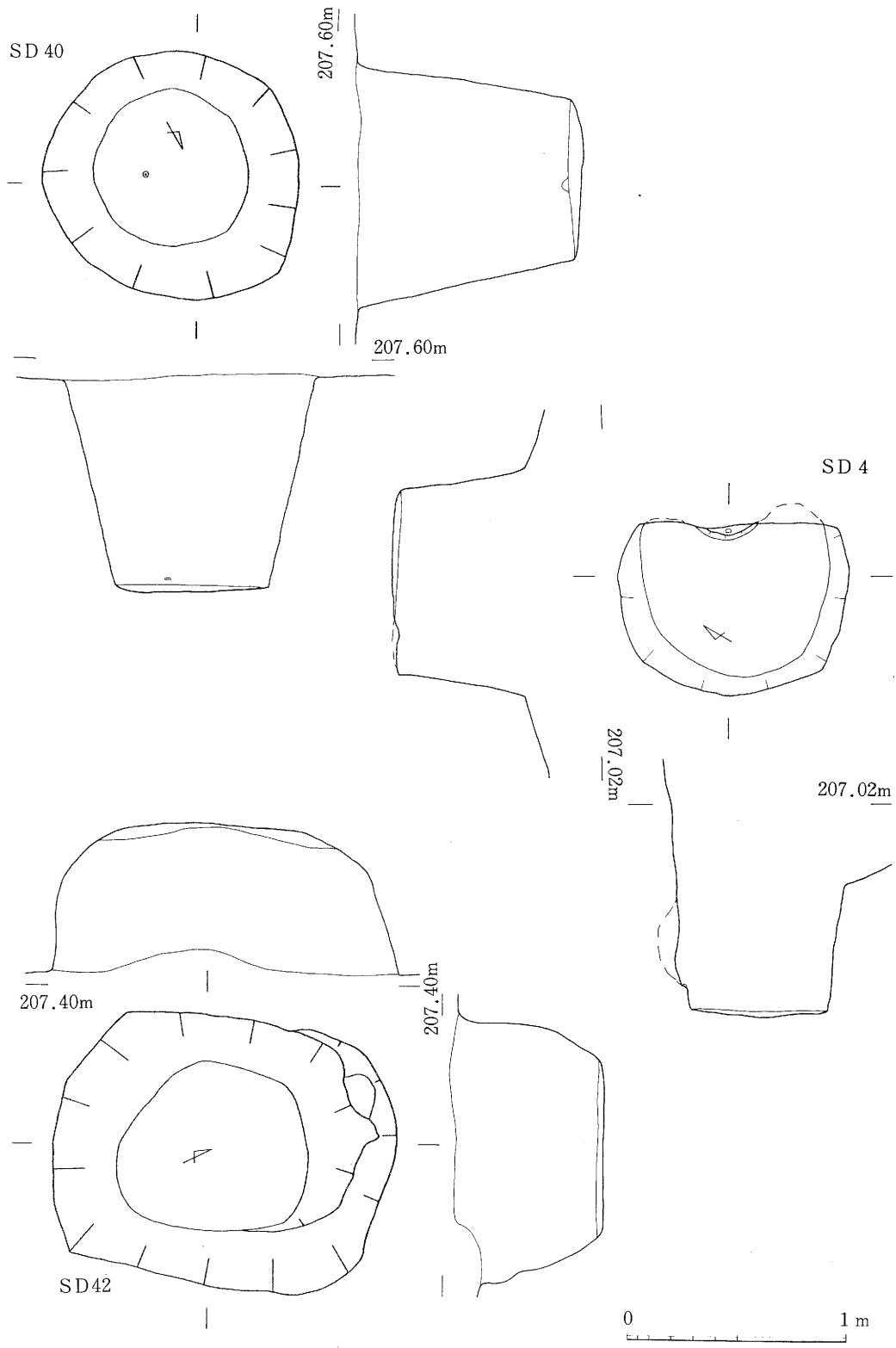
今回墓壇内から出土した六道銭について、錆着したものについては錆着状況を図化した。その結果布痕やひも痕を観察することができた。

1・4は特別な付着物は認められなかったが錆着状況からは紐などによりまとめられていた形跡が見られる。2は片面に布痕を有する。2・3ともに孔がずれて錆着している。5は紐痕を有する。全体的に保存状態が良い。6・7共にSD15の出土であるが、錆着状況から紐でまとめた可能性が考えられる。13は一部に布痕を有する。15は表面に人骨が付着する。16は付着物が多く原型をとどめていない。18は木質が多く付着し、文字も痕跡しか確認できなかった。20・21ともにSD-36からの出土で布痕が付着する。特に21は下端部を覆うように布痕が付着する。

第66図1～4は貝製の数珠玉で直径は1が7.35mm、2が7.71mm、3が6.08mm、4が6.69mmである。5はガラス製の数珠玉で直径12.53mmを測る。

小結

葬法は全て土葬であるが棺材が出土したのはわずかに5基と遺物の遺存状況は極めて悪いため人骨の出土状況と墓壇の平面形から埋葬形態は坐葬によると考えられる。墓道は検出されなかったが、分布に直線的な空白部分が有ることからその部分を墓道として使用していたと考えられる。墓域を区画する柵列等は検出されなかったが、墓域自体は北側に延びていたらしく調査区北側の道路部分の削平時に法面に埋葬施設がでていたという。検出されたのは埋葬施設のみで地上部の墓標等は全く遺存していなかったが、切りあっているものが極めて少ないことから土饅頭の上に卒塔婆が立てられていたと考えられる。また、それが失われないう程度の比較的短期間しか使用されなかったとも考えられる。現在近くに専寿寺という寺院が存在するが、小林市史によると専寿



第41图 近世墓実測図(Ⅱ) SD 4. 40. 42

寺の辺りに宝光院という寺院があり、明治元（1868）年の神仏分離令に伴う廃仏棄釈により明治3年に廃寺になったという。

大型のいわゆる五寸釘である11はSD39,12はSD11,13はSD15と釘が顕著に出土する墓塚に1本ずつ出土することからこの3基の墓塚の内部主体は早桶ではなく組合せの箱棺であった可能性が考えられる。また、六道銭の銹着状況から本遺跡においては六道銭は紐に通して棺桶に入れたと考えられる。さらに民俗例などから、付着している布痕は頭陀袋の可能性が考えられる。

本遺跡の近世墓の営まれた時期については、出土遺物の六道銭により江戸時代前半に相当すると考えられる。

今回小林市において近世墓の調査が初めて行われた。県内でも近世墓の調査例は現在わずかに7例にすぎない。あまりにも乏しい資料のためなんら明らかにすることができなかった。今後の資料の増加を待ちたい。

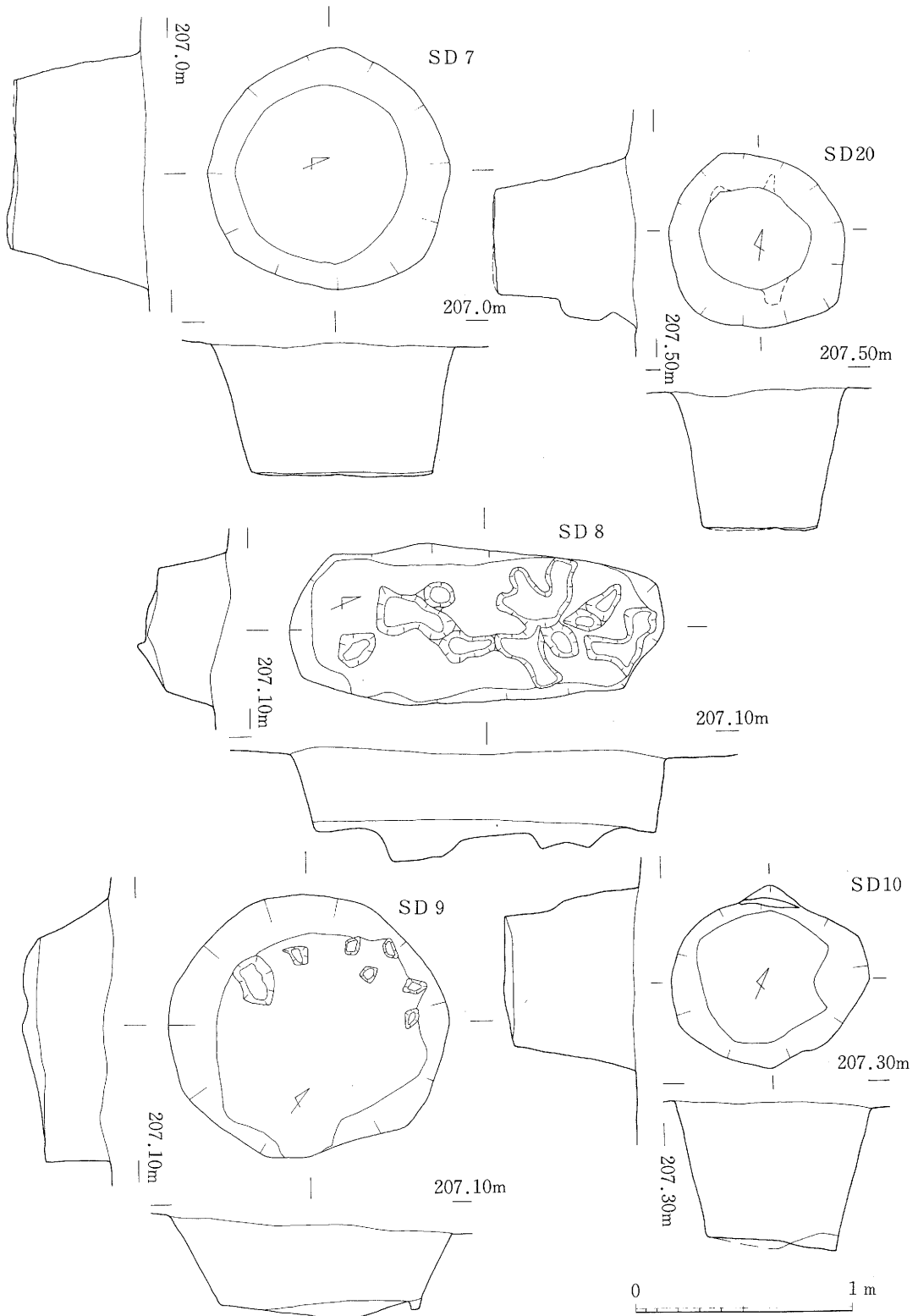
参考文献

『増上寺子院群』東京都港区教育委員会 1988

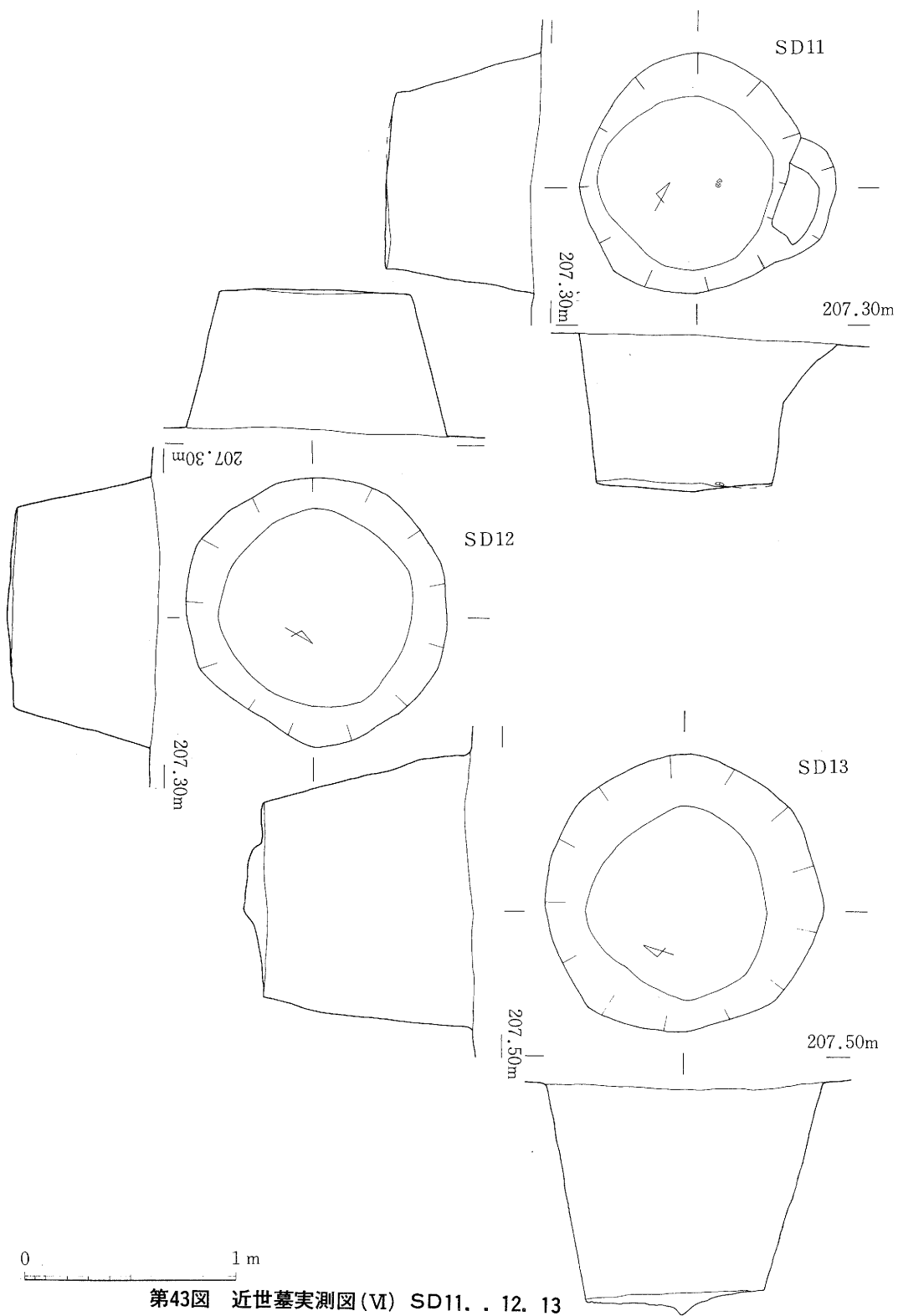
『自鏡院遺跡』東京都新宿区教育委員会 1987

野田拓治「川田京坪遺跡」『熊本県文化財調査報告 第46集』熊本県教育委員会 1980

志戸本次助『小林市史 第1巻』小林市 1966



第42図 近世墓実測図(Ⅲ) SD 7. 8. 9. 10. 20

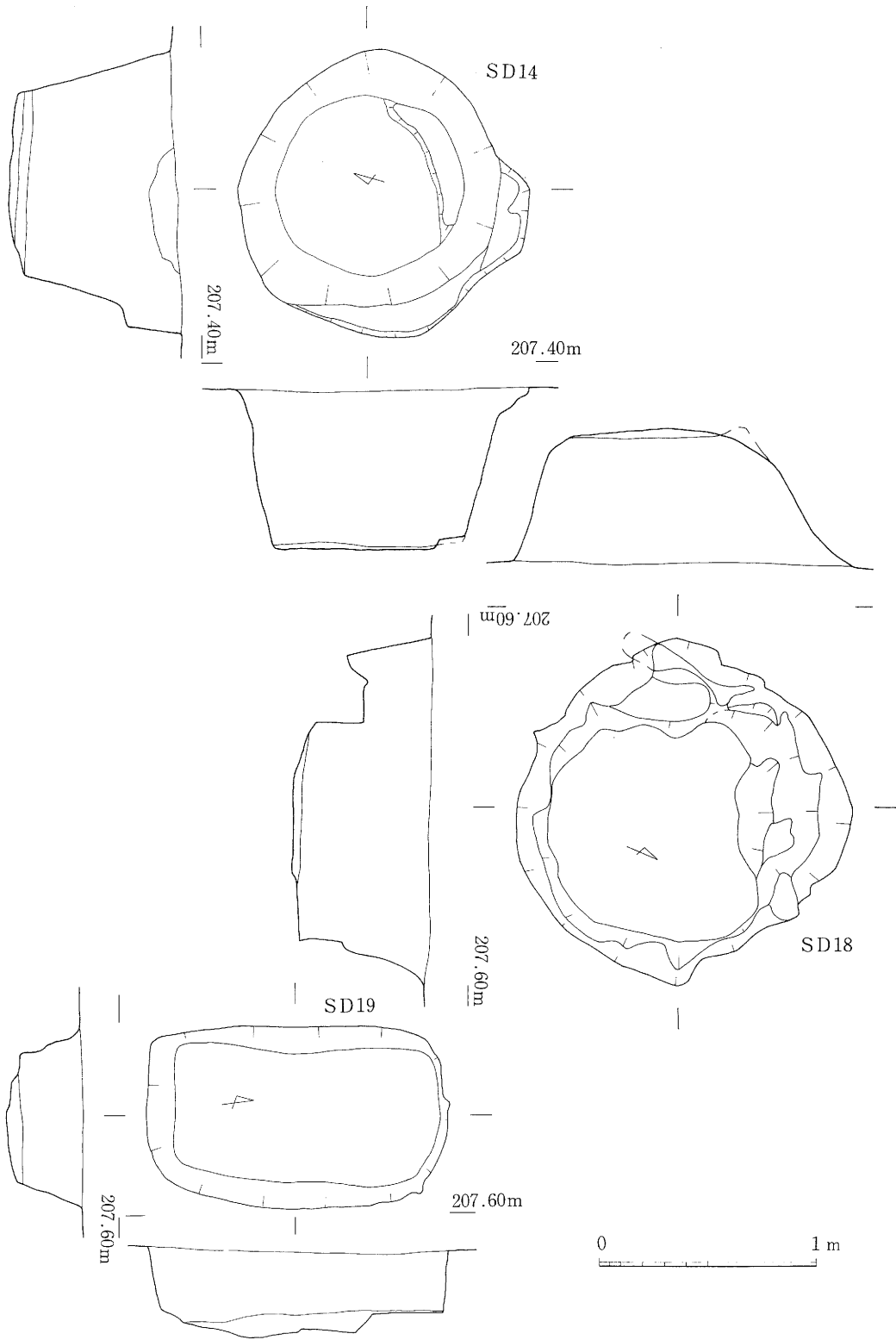


第43图 近世墓実測図(VI) SD11. . 12. 13

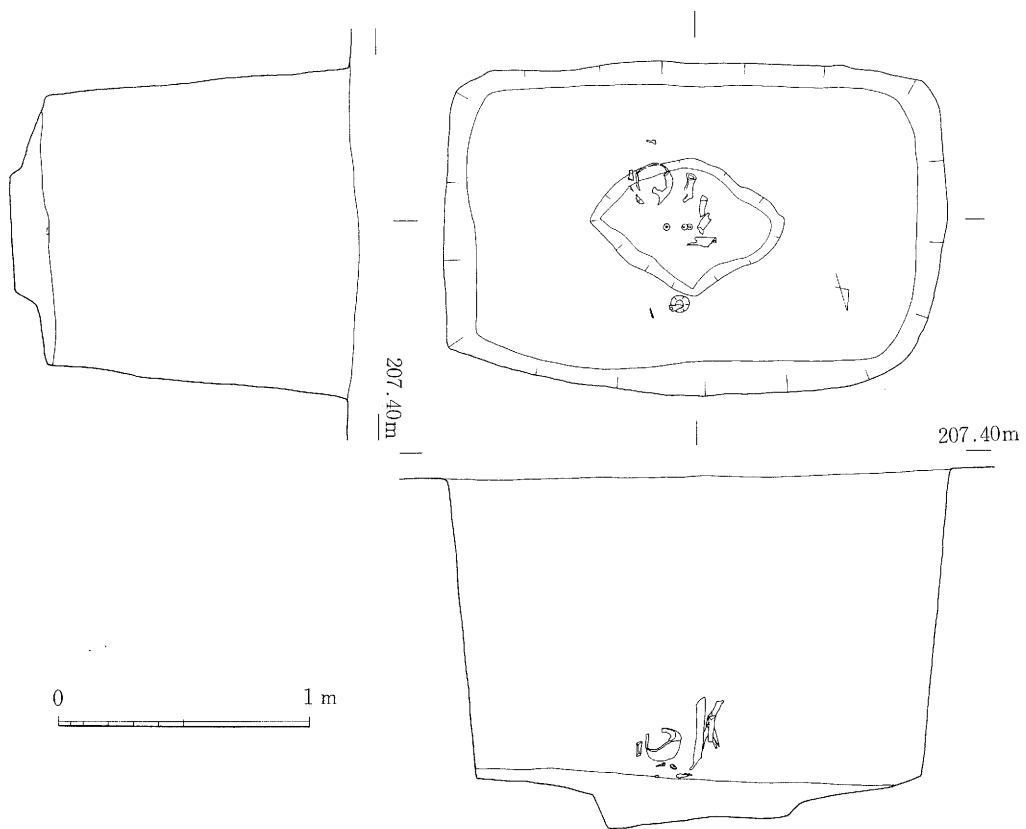
第7表 近世墓観察表

墓 塚 No	平面形	グリッド	法 量 (m)		人 骨 有・無	六 道 銭	棺 材	そ の 他	備 考
			上場…長径×短径×深さ	下場…長径×短径					
SD1	円形	j-20	1.22×1.08×0.7	1.02×0.96	無				
SD2	方形	j-20	1.95×1.13×0.45	1.62×0.8	無				
SD3	方形	i-21	0.95×0.59×0.5	0.5×0.5	無				調査区外につ きま末堀
SD4	方形	i-21	1.05×0.77×0.62	0.85×0.63	無				
SD5	円形	i-20・21	1.51×1.18×0.22	1.35×1.07	無				
SD6	円形	i-20	0.9×0.75×0.5	0.73×0.57	無				
SD7	円形	j-21	1.14×1.12×0.62	0.84×0.79	無				
SD8	方形	j-20	1.74×0.73×0.38	1.53×0.58	無				
SD9	円形	i-20	1.32×1.23×0.42	1.05×0.95	無				
SD10	円形	i-20	0.9×0.85×0.61	0.62×0.6	無			玉	
SD11	円形	i-20	1.2×1.15×0.74	0.82×0.82	無	洪武通宝…5枚 不明…1枚	釘		
SD12	円形	i-20	1.28×1.23×0.71		無	洪武通宝…4枚 不明…3枚			
SD13	円形	j-19・20	1.32×1.3×1.07	0.92×0.84	無				
SD14	円形	i-20	1.35×1.32×0.77	0.9×0.84	無	洪武通宝…2枚 古寛永通宝…4枚 新、古不明…1枚 不明…2枚			
SD15	方形	i-19・20	2.0×1.3×1.23	1.76×1.07	有	古寛永通宝…7枚	釘		人骨…男性 (老年)
SD16	円形	i-19	1.1×0.88×0.9	0.6×0.55	無	古寛永通宝…6枚 新寛永通宝…1枚			
SD17	方形	i-19	1.56×-×0.45	1.44×-×0.66	無				
SD18	円形	i-19	1.6×1.55×0.63	1.0×0.75	無				
SD19	方形	ij-19	1.4×0.83×0.37	1.3×0.6	無				
SD20	円形	j-19	0.8×0.8×0.65	0.52×0.49	無			玉	
SD21	円形	i-19	1.22×1.0×0.93	0.72×0.72	有	SD21-古寛永通宝…4枚 SD21埋土中-古寛永通宝…2枚 新寛永通宝…4枚 新古不明…1枚			人骨…成人1 小児1

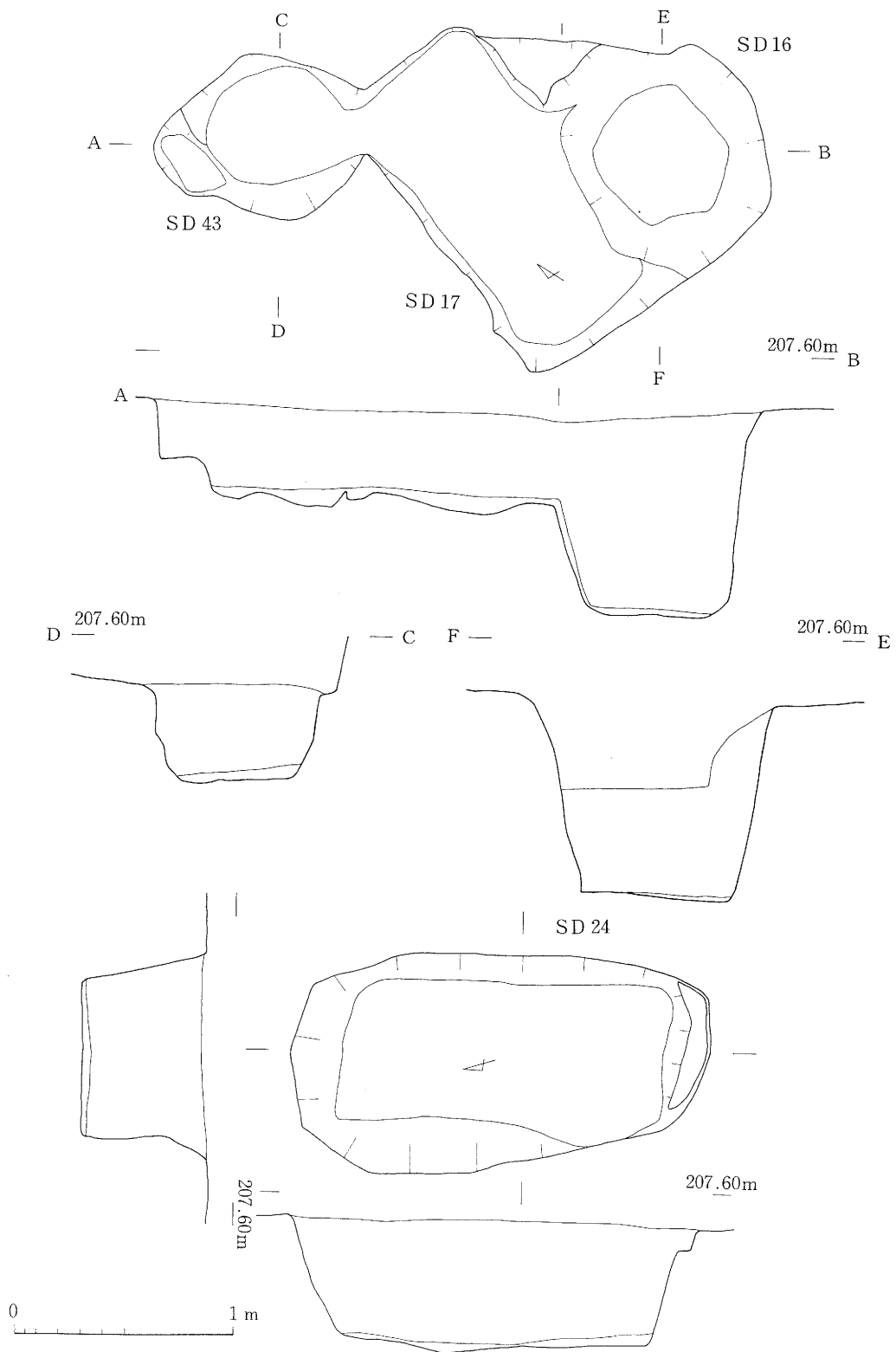
墓 塚 No	平面形	グリッド	法 量 (m)		人 骨 有・無	六 道 銭	棺 材	そ の 他	備 考
			上場…長径×短径×深さ	下場…長径×短径					
S D 22	円 形	j-19	1.1×1.05×0.66	0.83×0.73	有				
S D 23	円 形	j-19	1.37×1.29×0.59	0.97×0.94	有				
S D 24	方 形	i-19	18.7×0.94×0.59	14.3×0.7	無	洪武通宝…4枚 古寛永通宝…2枚			
S D 25	円 形	i-19	12.8×12.7×0.65	1.0×0.86	無				
S D 26	円 形	i-19	1.2×1.1×1.07	0.8×0.76	無				
S D 27	円 形	hi-19	1.32×1.23×1.09	0.84×0.82	有	古寛永通宝…3枚 新古不明…4枚			人骨…男性 (熟年)
S D 28	円 形	hi-18・19	1.17×1.07×1.12	0.72×0.7	有	古寛永通宝…1枚 新寛永通宝…5枚 不明…1枚			
S D 29	円 形	hi-18	0.74×0.75×0.45	0.62×0.6	無				
S D 30	円 形	h-18	1.11×0.98×0.61	0.8×0.77	有	新・古不明…1枚 不明…2枚			
S D 31	円 形	i-18	1.18×1.12×0.7	0.92×0.81	有				
S D 32	円 形	i-18	1.24×1.11×0.46	0.9×0.9	有				
S D 33	円 形	i-19	1.24×1.16×0.78	0.87×0.78	有	古寛永通宝…7枚 新・古不明…1枚	釘・ 板		人骨…女性 (壮年)
S D 34	円 形	i-18・19	1.0×0.97×0.93	0.62×0.54	有	古寛永通宝…3枚			
S D 35	円 形	j-18	1.15×1.1×0.54	0.9×0.83	有	古寛永通宝…4枚			
S D 36	円 形	i-18	1.45×1.32×1.5	0.97×0.77	有	古寛永通宝…4枚 新寛永通宝…2枚 新・古不明…1枚			人骨…男性 (熟年)
S D 37	円 形	i-18	1.2×0.93×0.64	0.88×0.75	無				
S D 38	円 形	i-18	1.1×1.05×0.77	0.64×0.6	有		釘		
S D 39	円 形	j-18	1.1×1.05×0.7	0.75×0.75	有	古寛永通宝…3枚	釘		
S D 40	円 形	i-18	1.15×1.15×1.0	0.75×0.7	有	古寛永通宝…3枚 新・古不明…3枚			
S D 41	円 形	i-18	1.06×0.95×0.6	0.88×0.86	無	古寛永通宝…3枚			
S D 42	方 形	j-19・20	1.53×1.24×0.66	0.85×0.78	無				
S D 43	円 形	i-19	-×0.75×0.41	-×0.3	無				



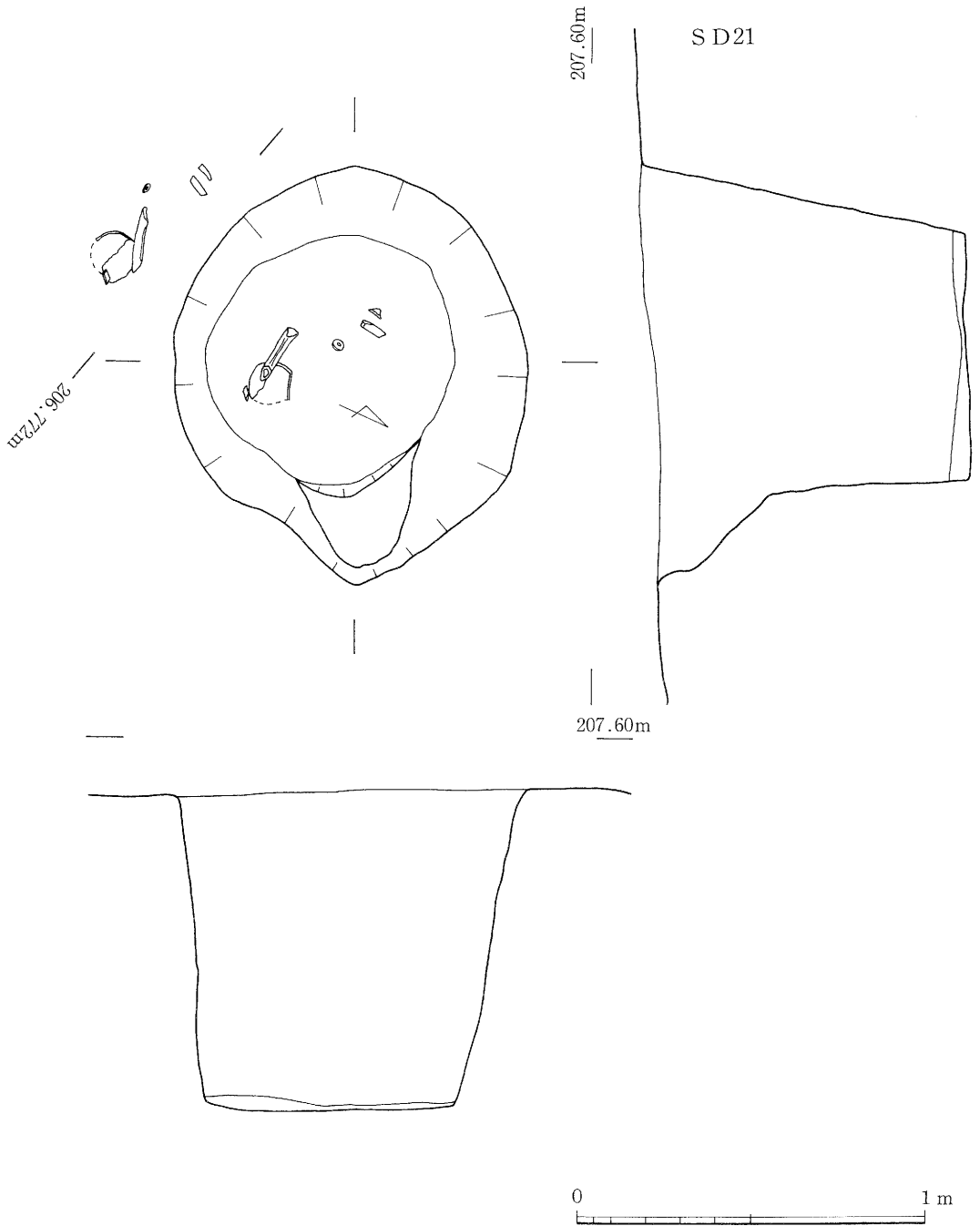
策44図 近世墓実測図(V) SD14. 18. 19



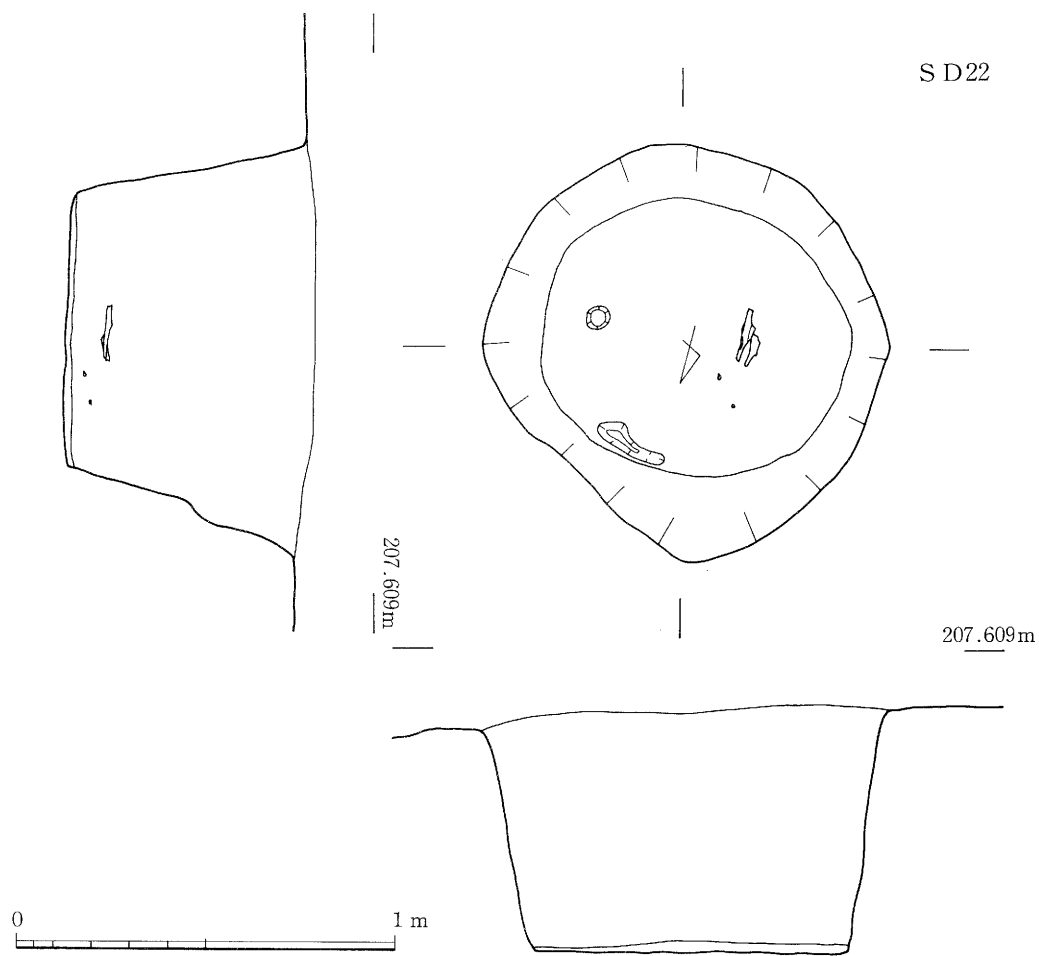
第45図 近世墓実測図(VI) SD15



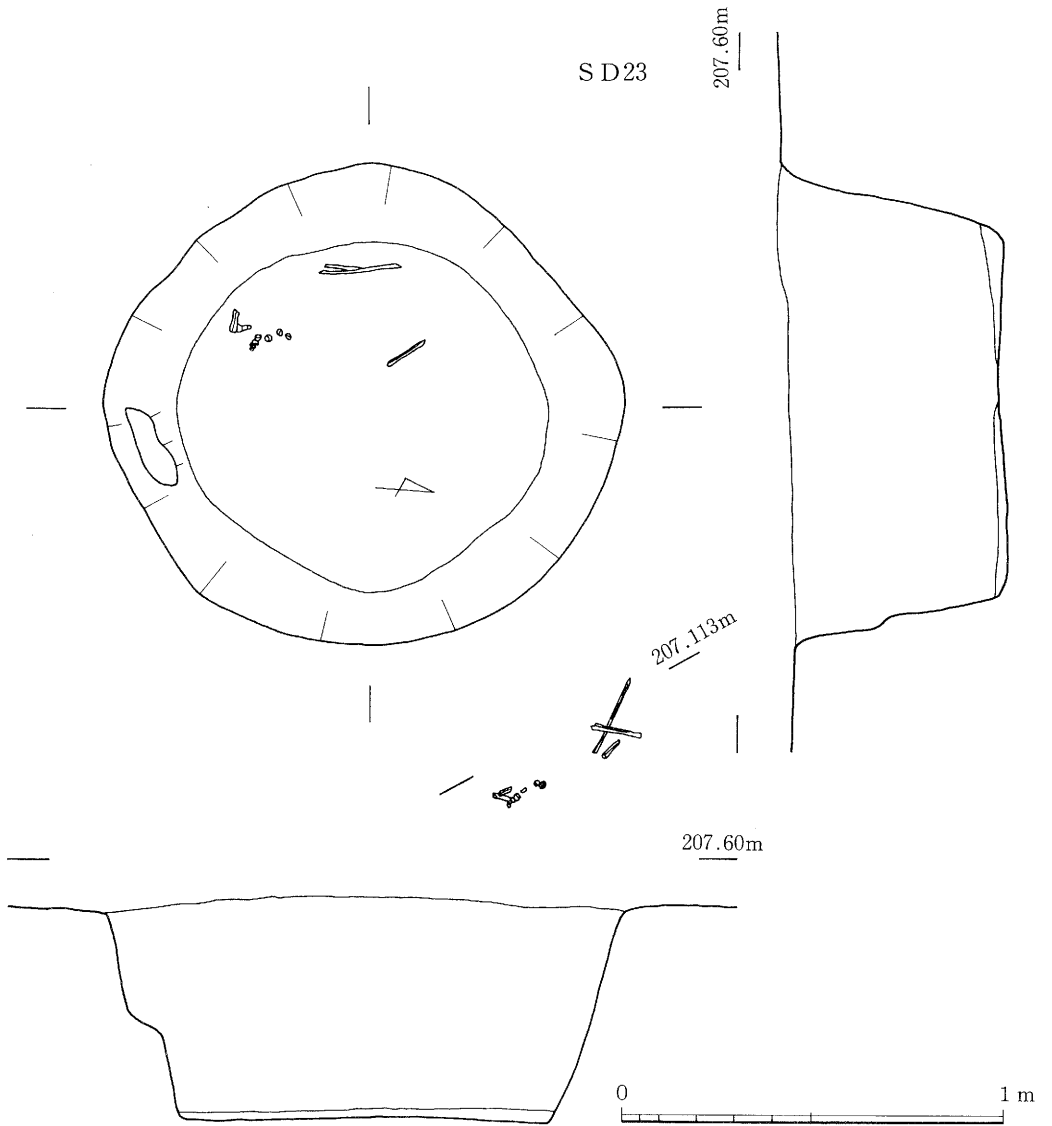
第46图 近世墓実測図(VII) SD16. 17. 24. 43



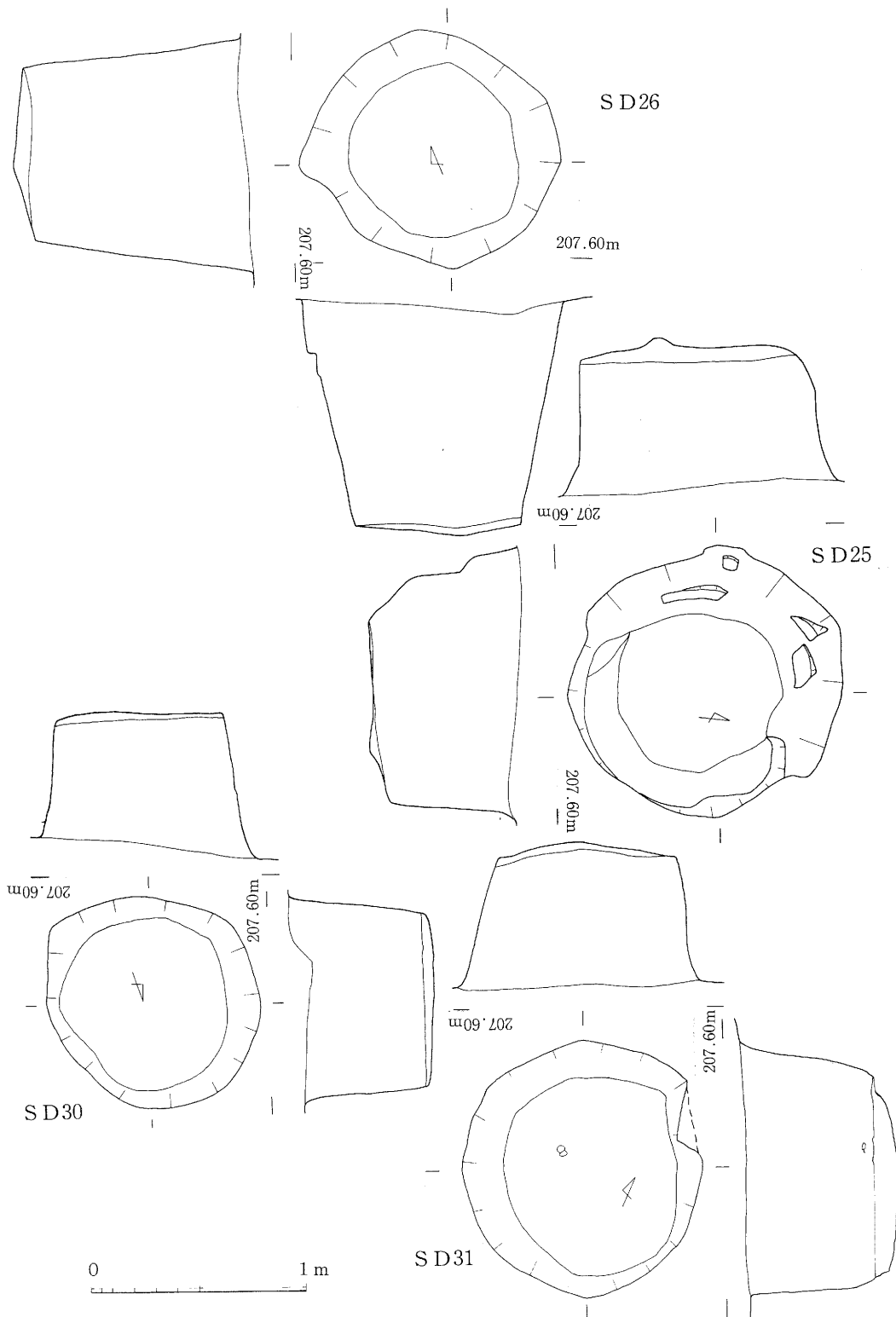
第47図 近世墓実測図 (VIII) SD21



第48图 近世墓実測図 (IX) SD22

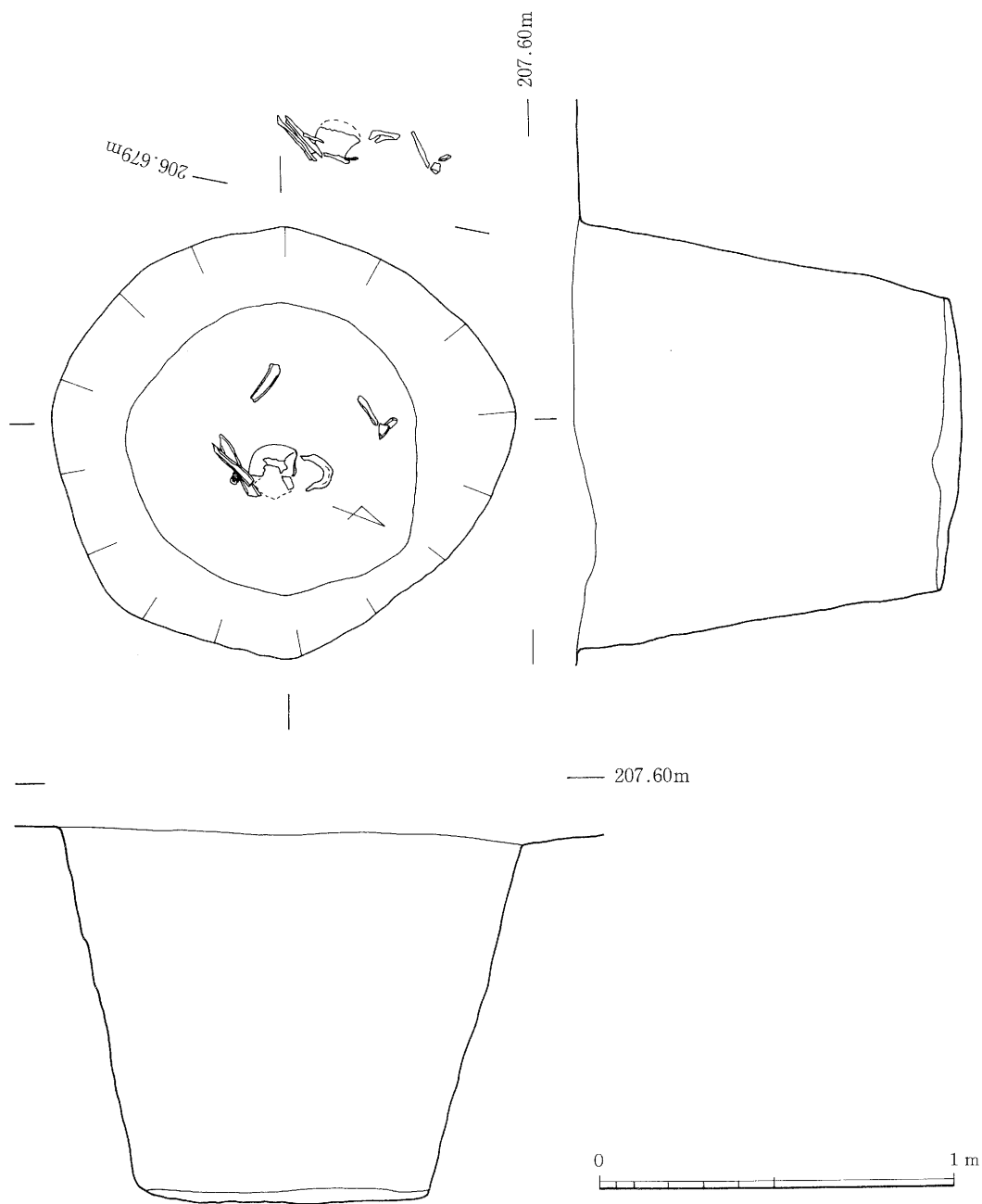


第49図 近世墓実測図 (X) SD23

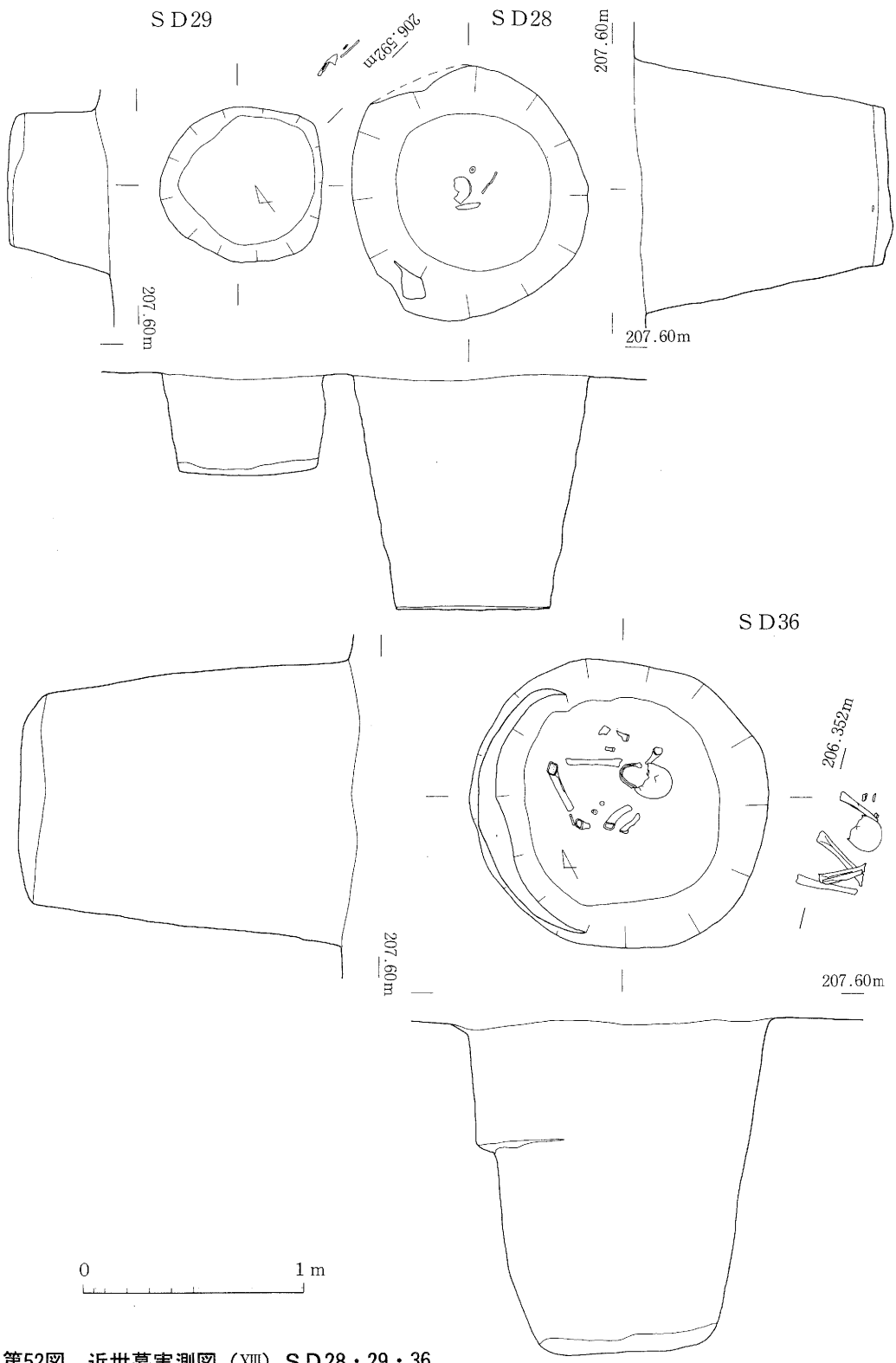


第50图 近世墓実測图 (IX) S D 25 · 26 · 30 · 31

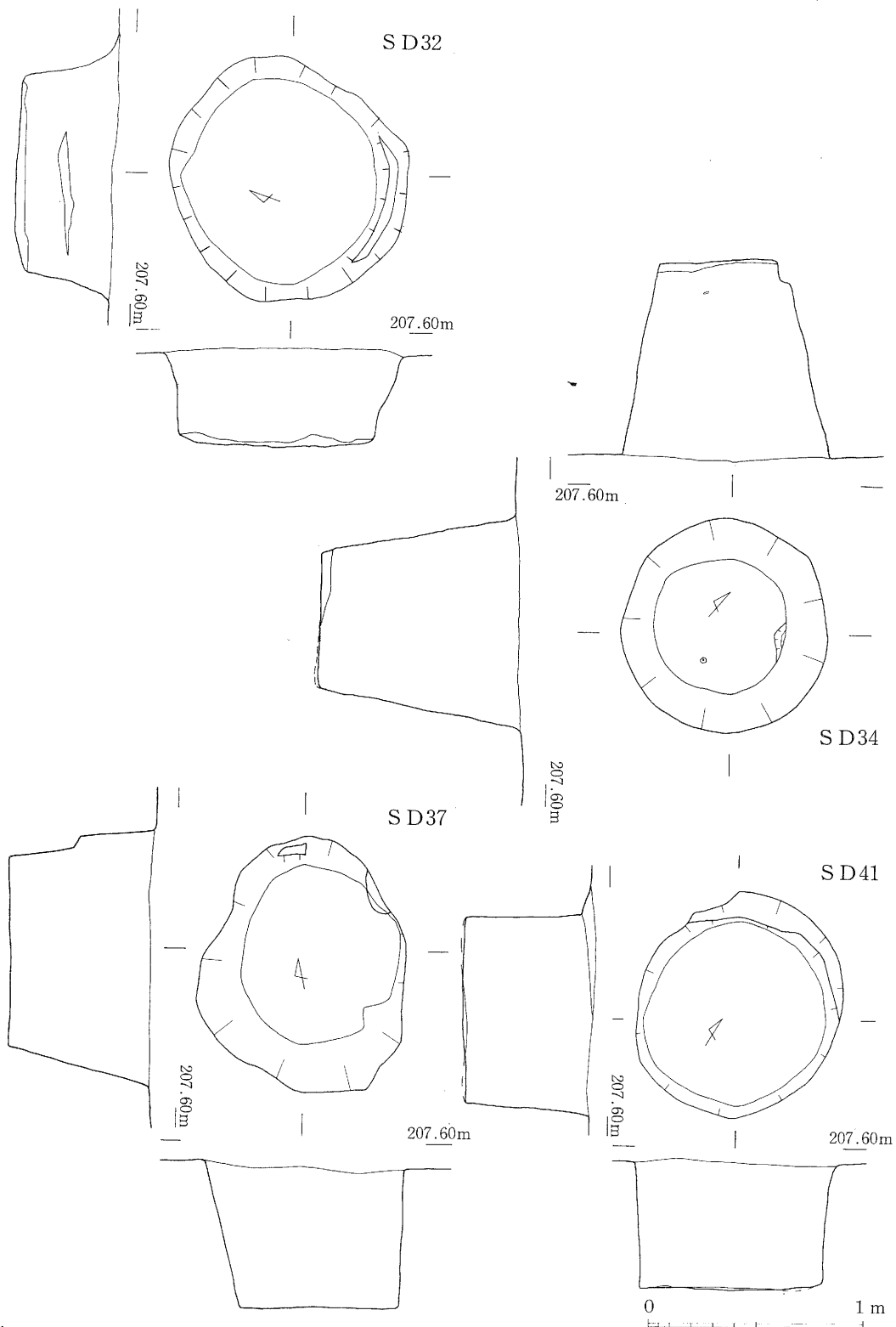
SD27



第51図 近世墓実測図 (XII) SD27

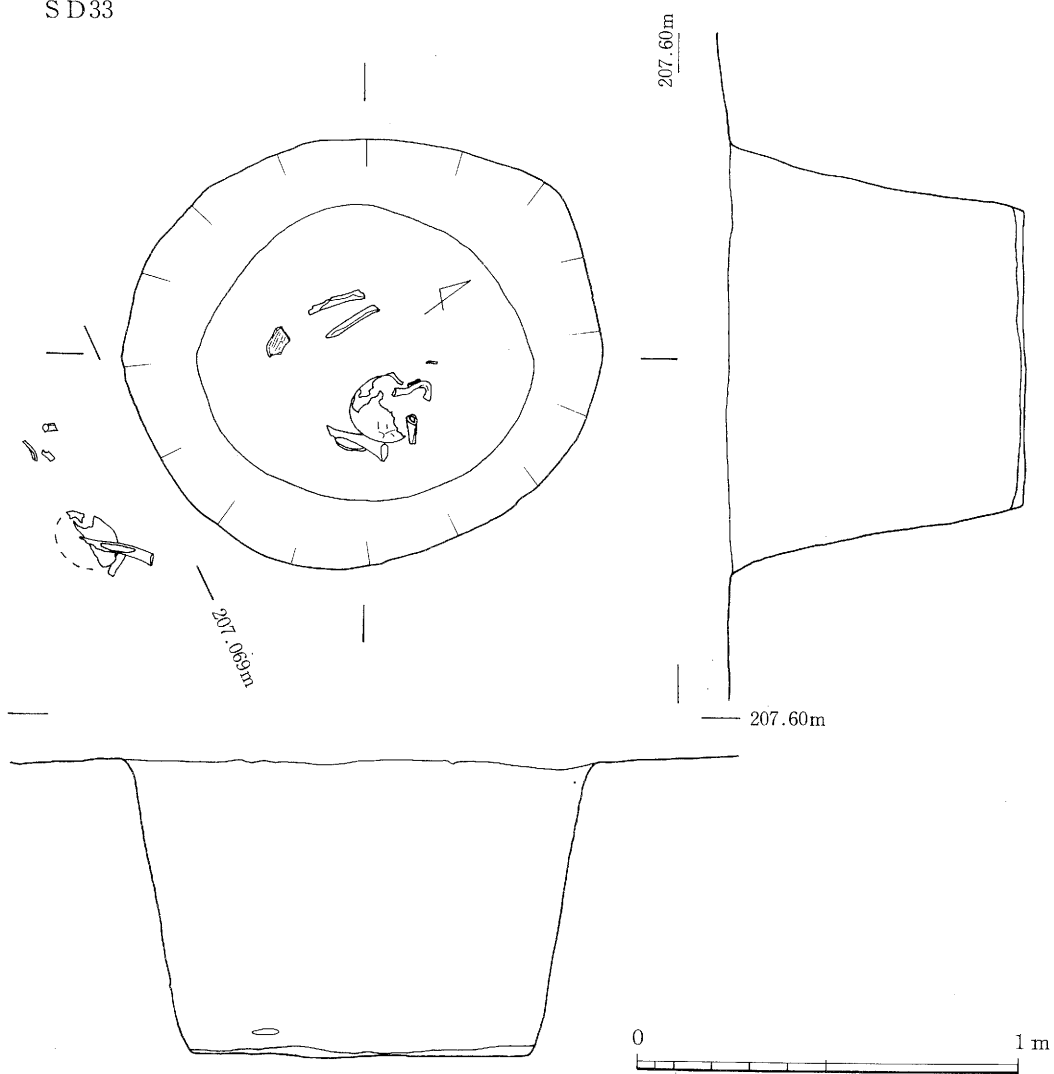


第52図 近世墓実測図 (XIII) S D 28・29・36

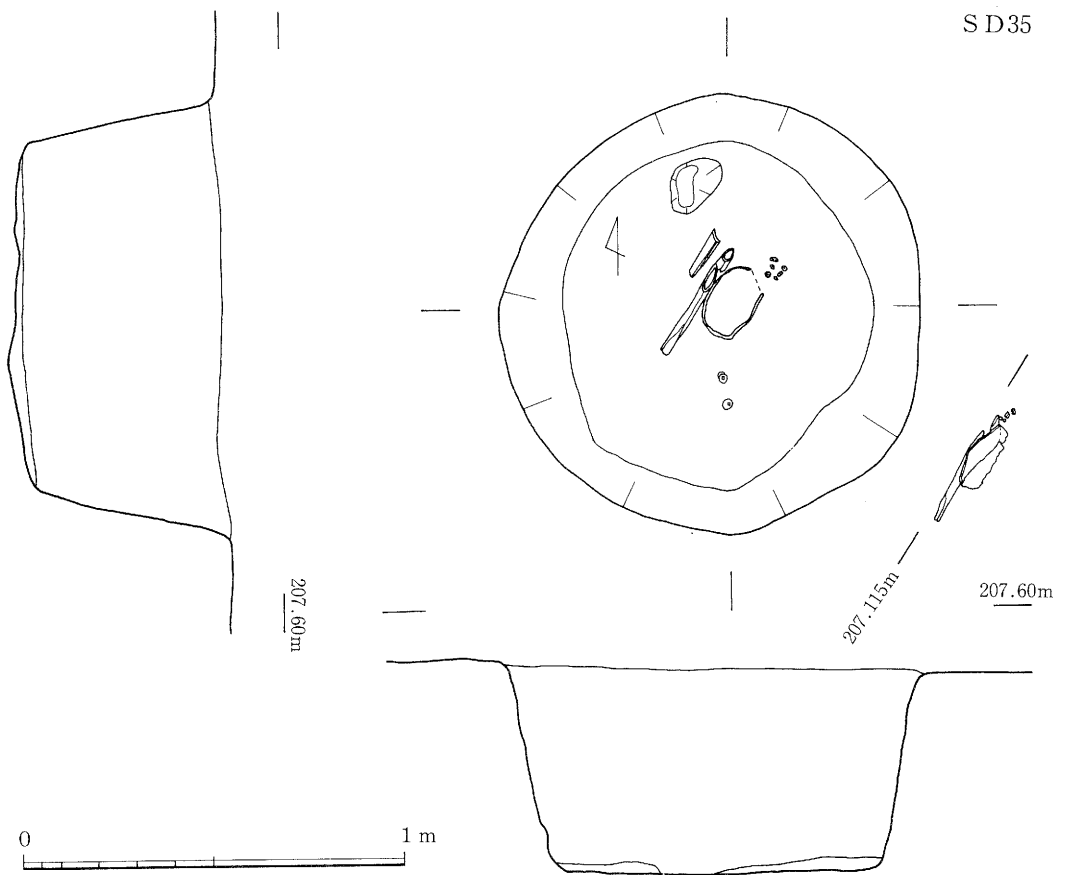


第53図 近世墓実測図 (XIV) SD32・34・37・41

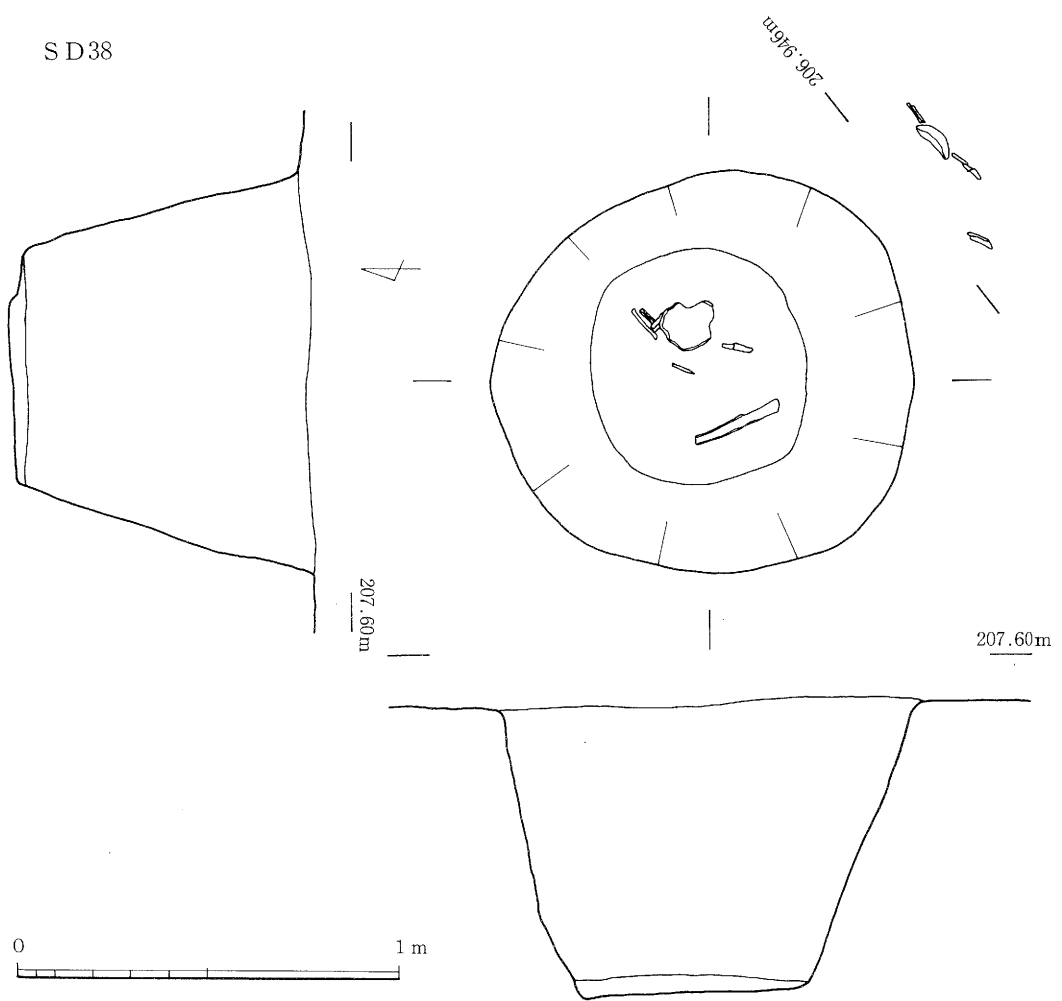
SD33



第54图 近世墓実測图 (XV) SD33

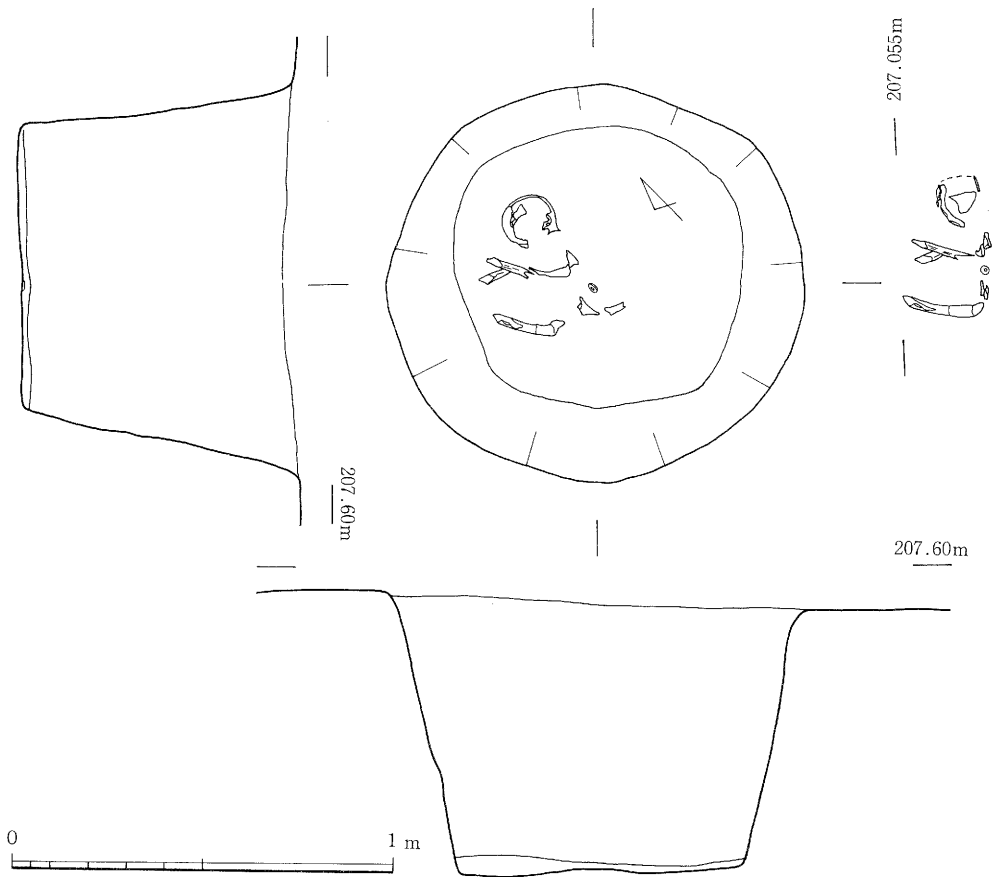


第55図 近世墓実測図 (XVI) S D35

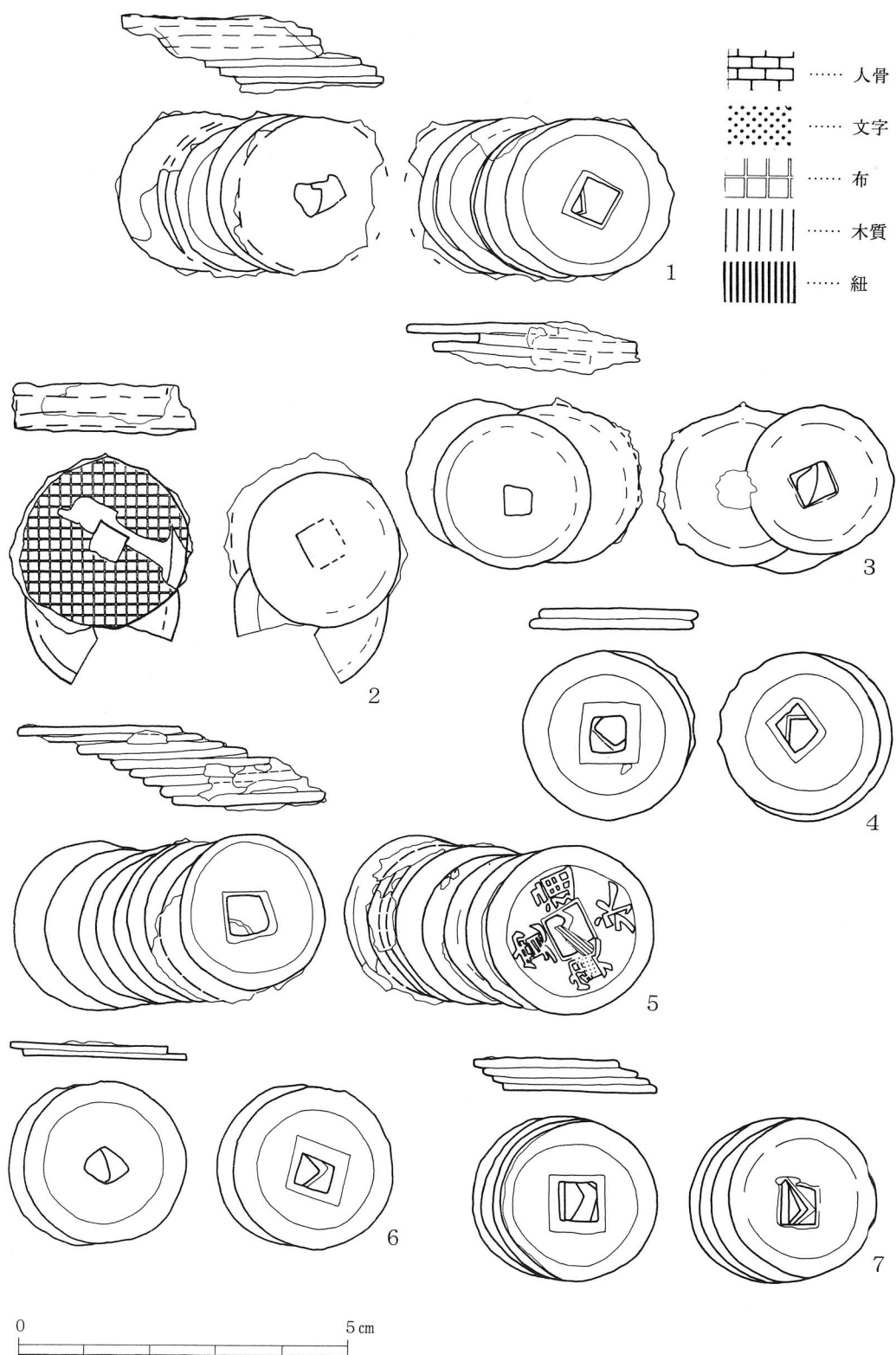


第56图 近世墓実測図 (XVII) S D38

SD39

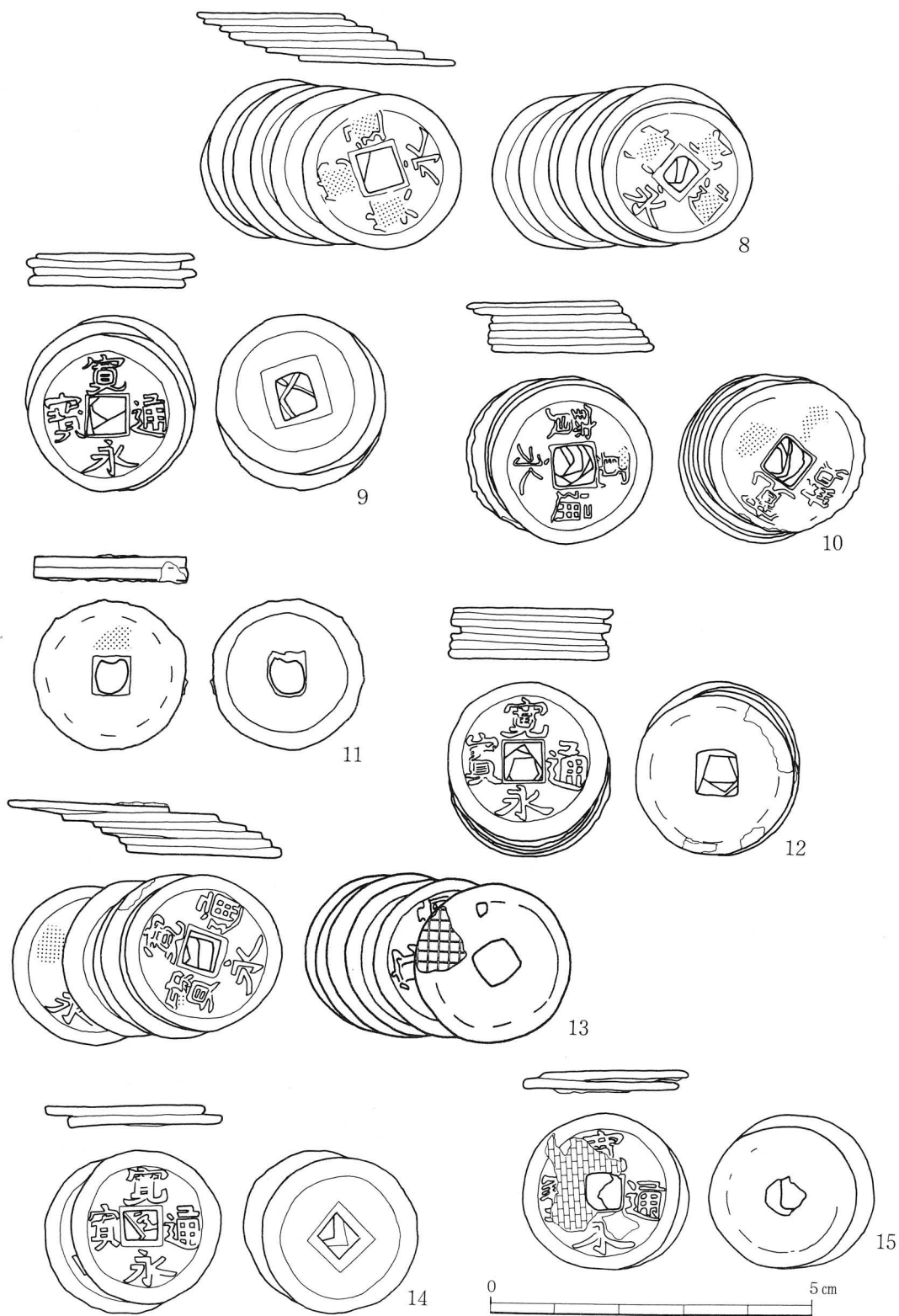


第57图 近世墓実測図 (XVII) SD39



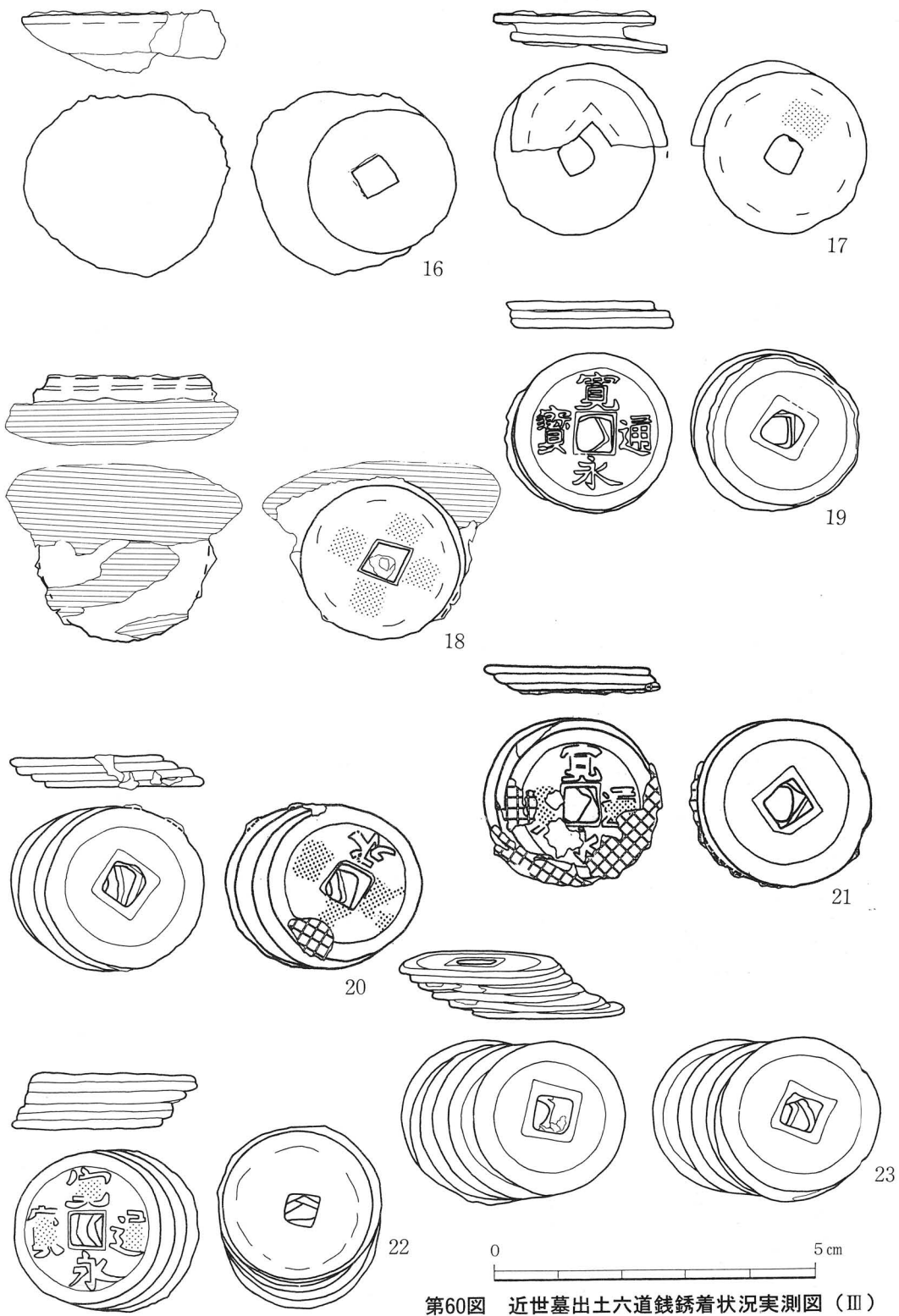
第58圖 近世墓出土六道錢銹着狀況実測圖 (I)

(1 = SD11, 2 · 3 = SD12, 4 = SD39, 5 = SD14, 6 · 7 = SD15)



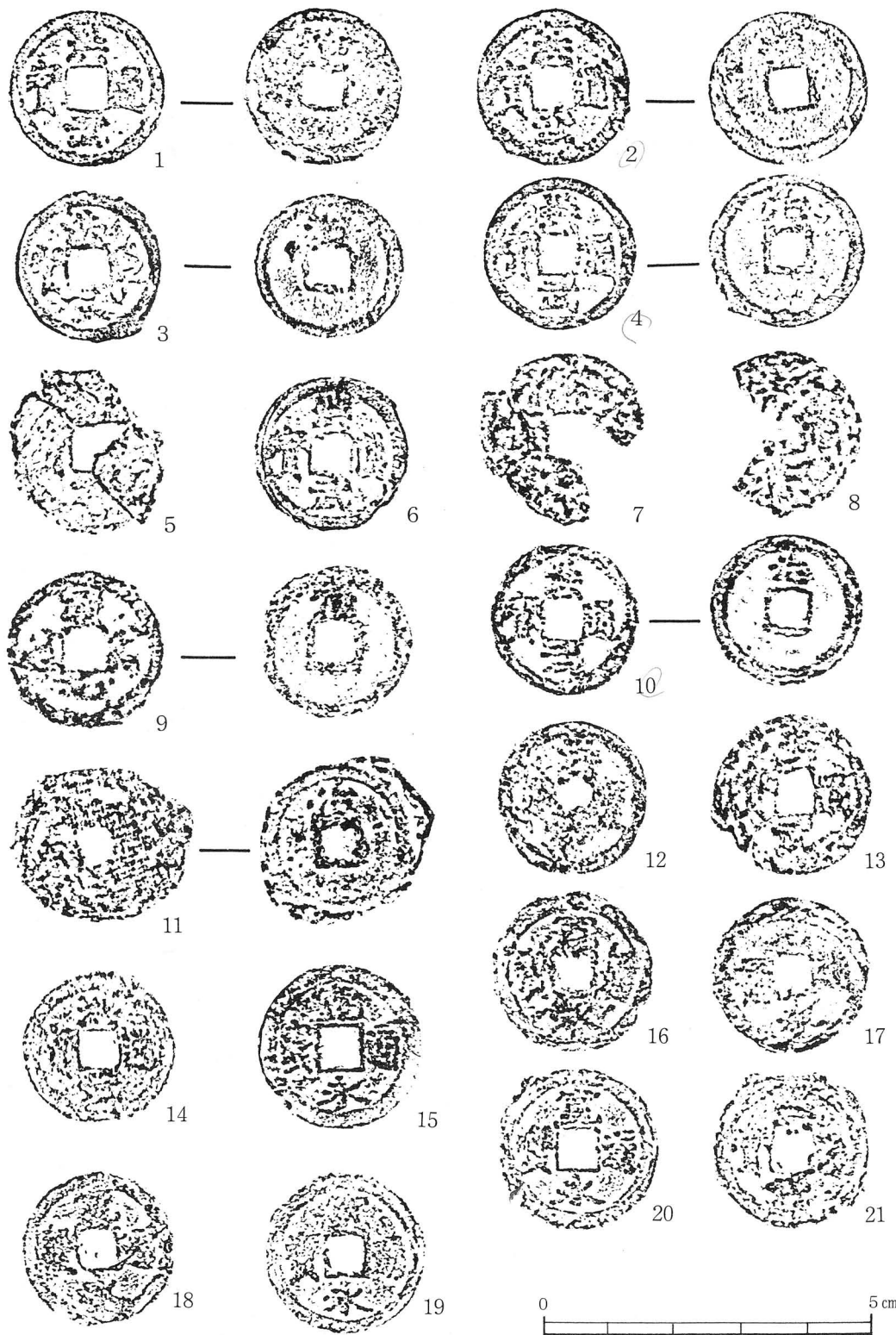
第59圖 近世墓出土六道銭錆着狀況実測圖(Ⅱ)

(8 = S D16、9 = S D21、10 = S D21埋土中、11 = S D24、13 = S D27、14 = S D35、15 = S D34)



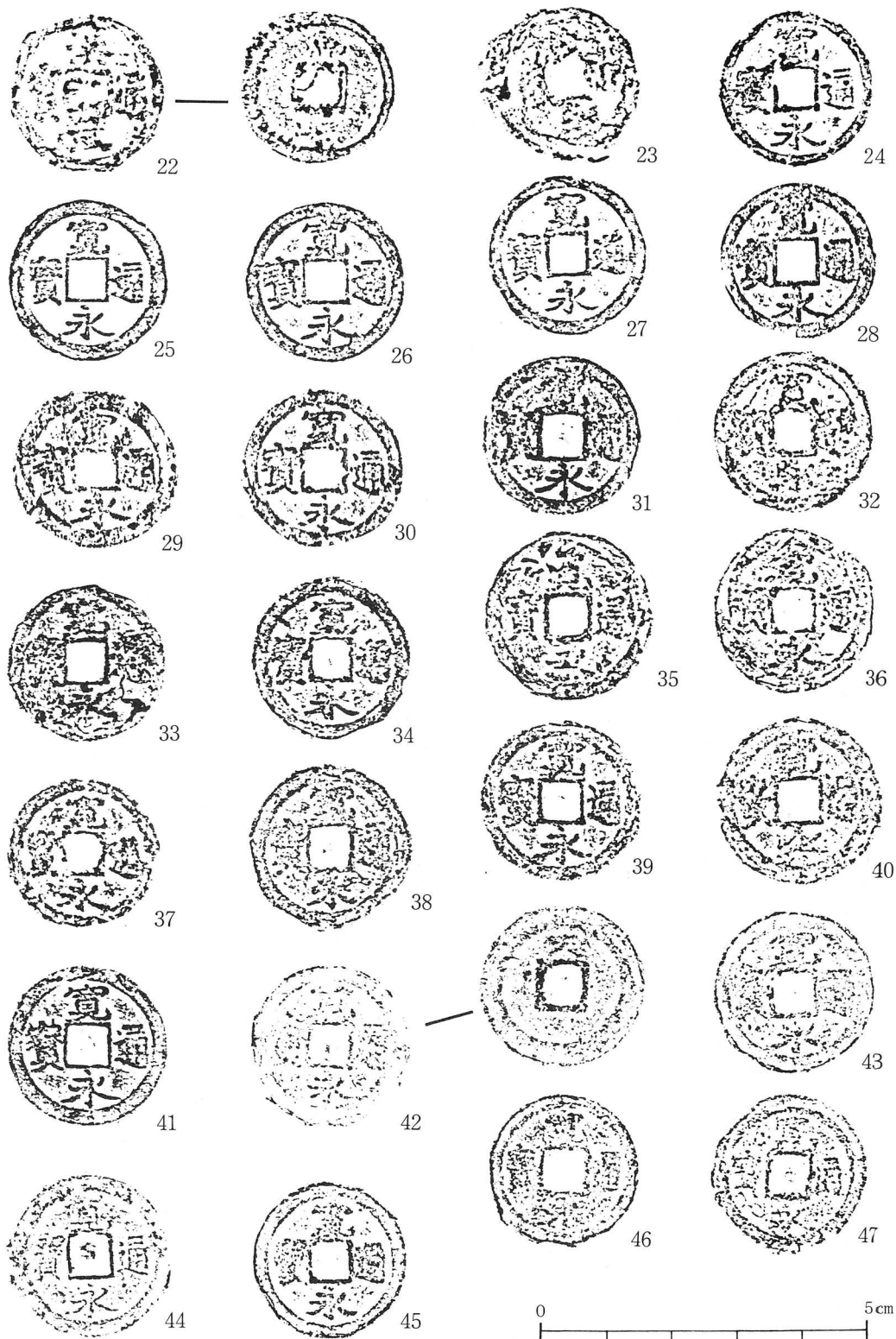
第60图 近世墓出土六道銭錆着状況実測図(Ⅲ)

(16=SD31, 17=SD30, 18=SD31, 19=SD41, 20・21=SD36, 22=SD40, 23=SD33)



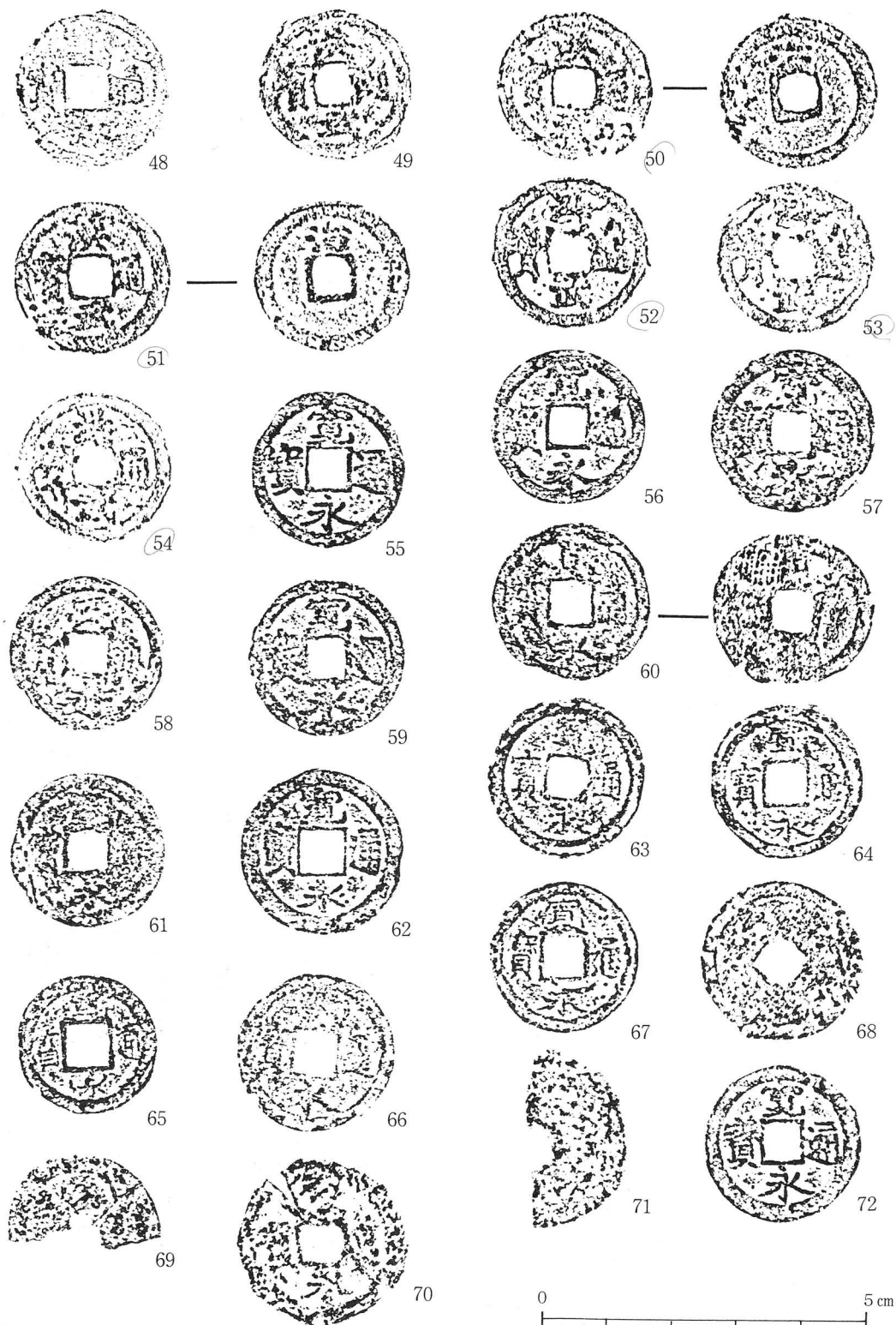
第61圖 近世墓出土六道錢拓影 (I)

(1~7 = SD11, 8~14 = SD12, 15~21 = SD14)



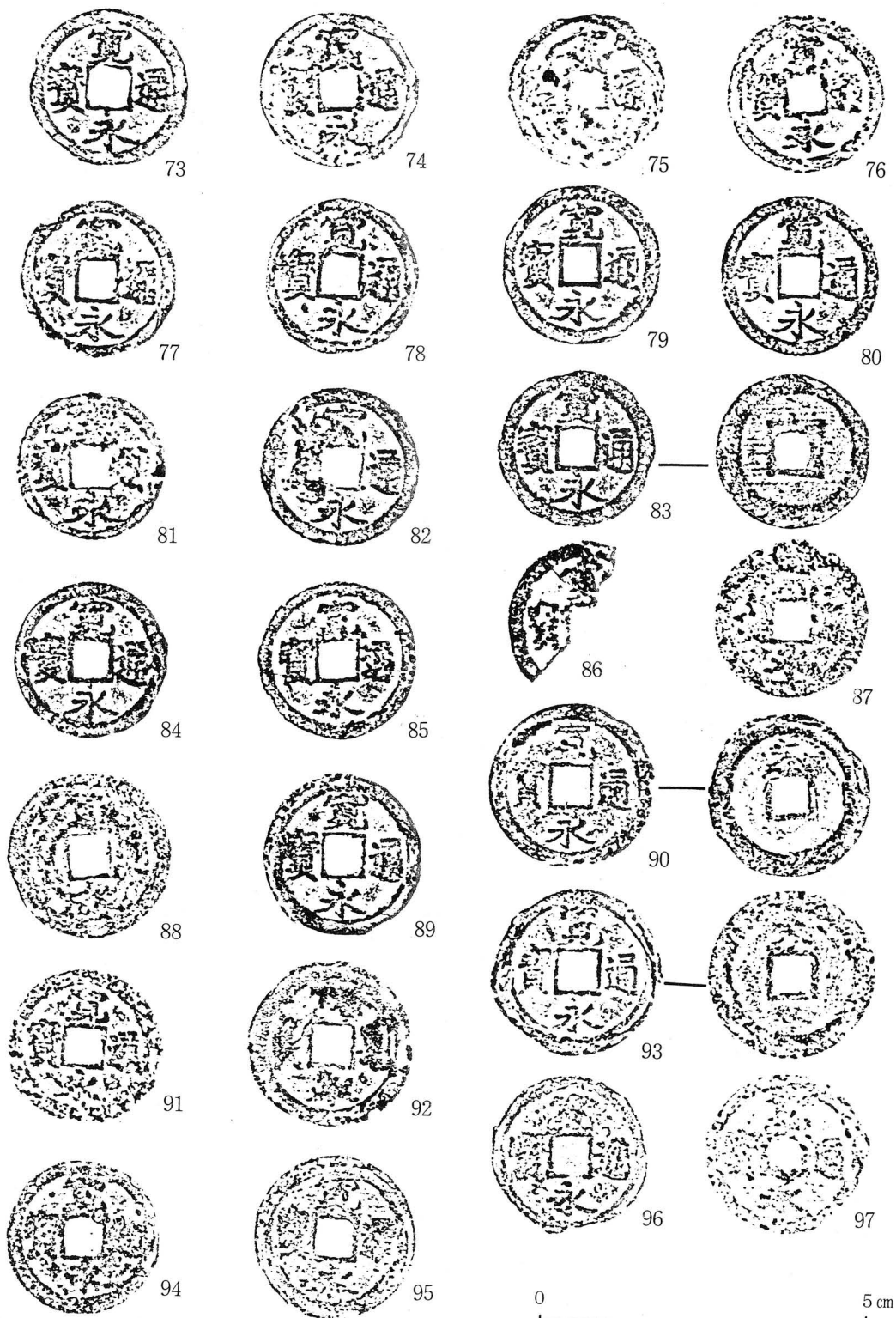
第62圖 近世墓出土六道錢拓影（II）

(22·23 = S D14, 24~30 = S D15, 31~37 = S D16, 38~47 = S D21)



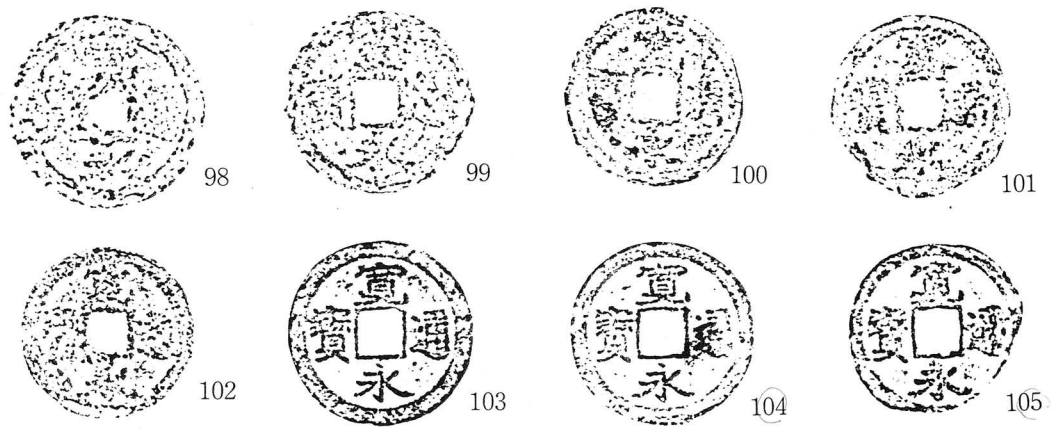
第63图 近世墓出土六道钱拓影(Ⅲ)

(48=SD21, 49~54=SD24, 55~61=SD27, 62~68=SD28, 69~71=SD30, 72=SD33)

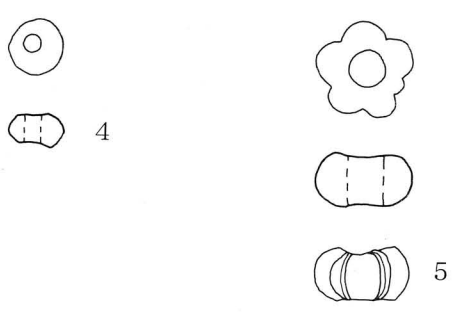
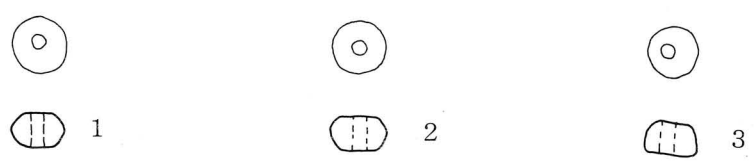


第64图 近世墓出土六道钱拓影 (IV)

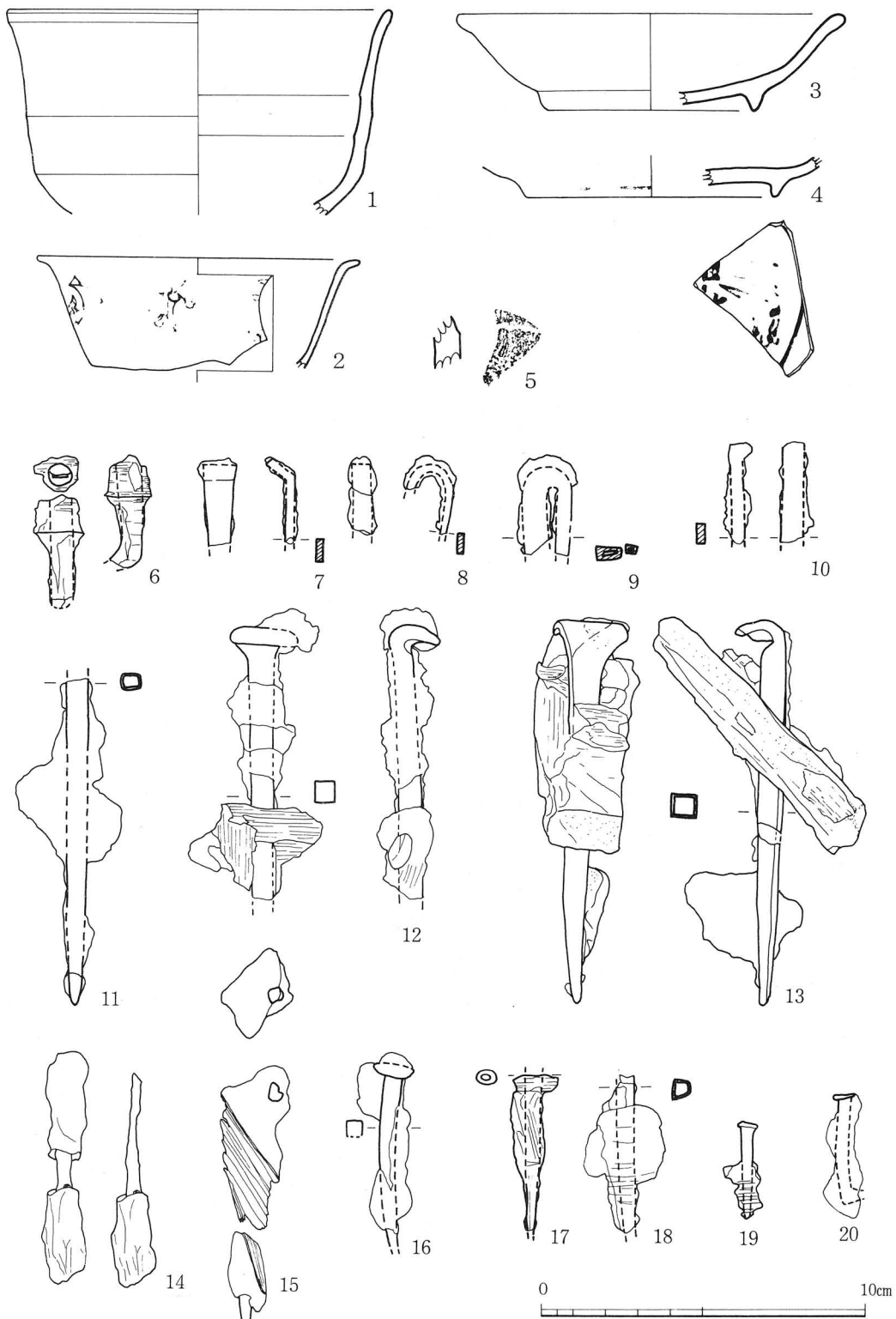
(73~79 = S D 33, 80~82 = S D 34, 83~86 = S D 35, 87~93 = S D 36, 94~96 = S D 39, 97 = S D 40)



第65図 近世墓出土六道銭拓影 (V)
 (98~102 = S D40, 103~105 = S D41)



第66図 近世墓出土数珠玉実測図
 (1~4 = S D10, 5 = S D20)



第67图 近世墓出土遺物実測図

第三章 まとめ

水落遺跡は、縄文時代後期の土器・打製石鏃、弥生時代後期の土器、中世の青磁・白磁・東播系の片口鉢などが出土し、縄文時代後期の土壌1基、弥生時代後期の竪穴住居6軒、中世の掘立柱建物7棟・溝状遺構9本、近世墓43基などが検出された。当遺跡は縄文時代後期から江戸時代まで営まれているが、生活空間としての利用されたのはB地区の弥生時代後期とA地区の中世の時期である。

(1) 縄文時代後期の土器

SC1（概報ではSA4）出土の深鉢土器は器形の特徴から三万田式土器の富田紘一氏編年⁽¹⁾の太郎迫式に、宮内克己氏編年⁽²⁾の三万田式Ⅰと三万田式Ⅱに併行する時期に相当する。

註

(1) 富田紘一「三万田式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣 1981

(2) 宮内克己「三万田式土器の研究」『古文化談叢』第8集 九州古文化研究会 1981

(2) 弥生時代後期の土器

1. 弥生土器の形態分類

当遺跡の竪穴住居から出土した弥生土器は次のように分類される。

甕

甕は量法から大型（口径20.3～36.8cm、頸部径17.6～33.4cm、器高26.7～28.0cm）、中型（口径15.4～19.6cm、頸部径14.2～15.7cm）、小型（口径10.6cm、頸部径10.4cm、器高13.6cm+ α ）に分かれる。底部には平底と高台状の上げ底がある。

I類 口径が胴部の最大径より大きく、胴部最大径は頸部直下にある。口縁部は斜め上方に伸びる（12・13・43）。大型のみである。

II-A類 口径と胴部の最大径がほぼ同じで、器高が口径より大きい。胴部の最大径は頸部直下にある。口縁部は直立して途中から外反し、底部は上げ底（125）である。大型（17・125）・中型（47）・小型（22）がある。

II-B類 口径と胴部の最大径がほぼ同じで、器高が口径より大きい。胴部の最大径は頸部直下にある。口縁部は直立して途中から外反し、底部は平底である（74・75）。

III-A類 口径と胴部の最大径がほぼ同じで、器高が口径より大きい。胴部の最大径は頸部直下にある。口縁部は緩やかに外反し、底部は上げ底である。大型（126・127・14・16）・中型（45・46・73）がある。

III-B類 口径と胴部の最大径がほぼ同じで、器高が口径より大きい。胴部の最大径は頸部直下にある。口縁部は緩やかに外反して、底部は平底である（15）。大型のみである。

壺

長頸壺

I類 重弧文長頸壺。頸部から口縁部はほぼ直立に立ち上がり、口縁部の先端部で大きく外反する。頸部に4条の突帯を巡らしている(113)。胴部の最大径は中位にあり、底部はわずかに平底を残す丸底である。胴部上半部に16条の重弧文とその下位に4条の横方向の沈線の上から縦方向に2段の沈線を施している。胴部上半部外面は縦方向のヘラ磨きを、下半部は縦・横方向のハケメを施している(114)。

II類 器高と胴部の最大径がほぼ同じで、口径が胴部の最大径のほぼ半分である。頸部はほぼ直立しながら外方に長く伸び、口縁部はわずかに外反する。胴部はソロバン状に横に大きく張り、底部は径2.0cmの明瞭な平底を呈する。外面は全面に丁寧なヘラ磨きを施している(59)。

壺

I類 短い口頸部が斜め上方に伸び、胴部は球形であり、胴部の最大径は中位にある。胴部の外面はヘラ磨きを施す(103)。

II類 口径が胴部最大径の約二分の一のタイプである。口頸が短く外反し、器高が胴部最大径の1.5倍の長胴である。口径は胴部最大径の約半分で、胴部最大径は上位にある。底部はわずかに平底の痕跡が残る丸底の底部である。胴部は全面はハケメを施す(117)。117より一回り大きく、胴部最大径が中位にある。底部は平底気味である(118)。胴部が横に張り、胴部最大径が中位よりやや下の下膨れである。底部は平底である(119)。

III類 胴部最大径は中位にある長胴で、その部位に刻み目突帯を施している。底部は平底である(115・116)。

複合口縁壺

I類 頸部が大きく外反し、口縁部が内傾する。口縁部に楕円波状文を施さない無文のタイプのみである(57・58・88)。頸部に突帯を有するタイプ(88)とないタイプ(57・58)がある。

短頸壺

I類 口頸部が短く大きく外反し、小型の壺である(89)。

高坏

I類 口縁部が斜め上方に短く立ち上がり、坏部下半はわずかに丸みを持ち、脚部は下方に緩やかに広がる。坏部と口縁部の境に明瞭な稜線を有し、坏部の上半部と下半部の高さは1:2で、深さは深い。円形透かし孔は脚部と脚裾部の変換点に位置する。坏部と脚部外面は丁寧なヘラ磨きを施している(25・26)。

II類 長い口縁部が緩やかに湾曲しながら外反する、浅い坏部と口縁部の境に明瞭な稜線を有し、坏部の上半部と下半部の高さは1:1で浅い。脚部が緩やかに広がり、脚裾部から更に大きく広がる。脚部と脚裾部との変換点に円形透かし孔を有する。坏部と脚部とも外面はヘラ磨きを施し

ている (80・81)。

Ⅲ類 脚部が下方にいくに従って徐々に広がり、脚裾部が水平気味に小さく広がる (100)。

鉢

I A類 器高が口径より大きく、胴部から口縁部にかけて緩やかに内側に湾曲し、口縁部でほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部を外側に少し折り曲げ、平坦に仕上げている (41・42)。

I B類 胴部から口縁部にかけてほぼ直立しながら伸び、口縁端部付近で内側に湾曲し、口縁端部は丸く仕上げている (71)。

I C類 器高と口径がほぼ同じで、底部から胴部にかけて大きく外反し、胴部から口縁部にかけて緩やかに内側に湾曲し、口縁部でほぼ垂直に立ち上がる (38)。

Ⅱ類 口径が器高より大きく、胴部上半部は椀状を呈している。底部を指押さえによってかなり強調して整形されている。内外面ともハケメを施している (133)。

IV A類 口径が器高より大きく、胴部が緩やかに斜め上方に伸び、口縁部付近で直立気味に立ち上がる。口縁部は外側に段を有し、外面にヘラ磨きを施す (72)。

IV B類 口径が器高より大きく、胴部が緩やかに内側に湾曲し、口縁端部は凹気味に仕上げている。外面はヘラ磨きを施す (11)。

当遺跡出土の土器は上記のように分類される。甕形土器は法量と口縁部の形態によってⅠ～Ⅲ類に分けたが、時期については丸谷遺跡⁽¹⁾の住居の土器と比較する。甕形土器は口径と胴部最大径がほぼ等しく、胴部最大径は頸部の下位で、上げ底である特徴は丸谷第2遺跡の1・2号住居の甕に見られる。丸谷1号住居からはⅠ・Ⅲ類が、2号住居からⅠ類が出土しており、ほぼ同時期の後期末葉であるが、高坏の坏部の口縁部の伸びと脚部の形態から2号住居に新しい要素が見える。壺形土器は無文の複合口縁壺Ⅰ類は後期末葉に比定される。高坏はⅡ類が坏部の長く伸びた口縁部、脚部から大きく広がる裾部、脚部と裾部の変換点の円形透かし孔を有する点で後期末葉に比定される。高坏Ⅱ類が丸谷1号住居で、Ⅲ類の脚部が丸谷2号住居で出土している。以上のように土器の主体は後期後葉～末葉に比定される。

2. 重弧文土器

円形プランのSA7から出土した重弧文土器は長胴化し、丸底気味なので、西健一郎氏分類⁽²⁾の第4型式cに相当し、後期後葉の新段階に比定される。市内では細野出土のものが知られており、SA7出土のものと同じタイプである。重弧文土器は県内では五ヶ瀬川上流域、大淀川上流域、大淀川下流域に分布している⁽⁴⁾。県内では竪穴住居から重弧文土器が出土した例としては、城ヶ尾遺跡⁽⁵⁾ (高城町) と様屋敷第2遺跡⁽⁶⁾ (高崎町) のみがあるだけであり、本来は大萩遺跡⁽⁷⁾ (野尻町) の土壙墓の例のように供献土器として製作・使用されている。城ヶ尾遺跡の突出壁を2個有する一辺465cmの方形プランの日向型間仕切り住居であるSA1からは長頸壺の長頸部、突出壁を8

個有する長径3.8m～短径3.3mの円形プランを基調とするSA2からは頸部の8条の沈線の下位に下向きの重弧文を、ソロバン玉状の胴部上半部に5条の沈線の上下に重弧文を施した長頸壺が出土している。これらの重弧文土器は西健一郎氏分類の第4形式bに相当し、後期後葉の中段階に比定されている。SA1は後期後葉に、SA2は後期末葉に比定されている。様屋敷第2遺跡の1号住居は一辺3.4m+ α の方形プランの住居で、絡縄突帯の甕形土器と共にソロバン玉状の胴部上半部に7条の重弧文を施した重弧文土器が出土している。

註

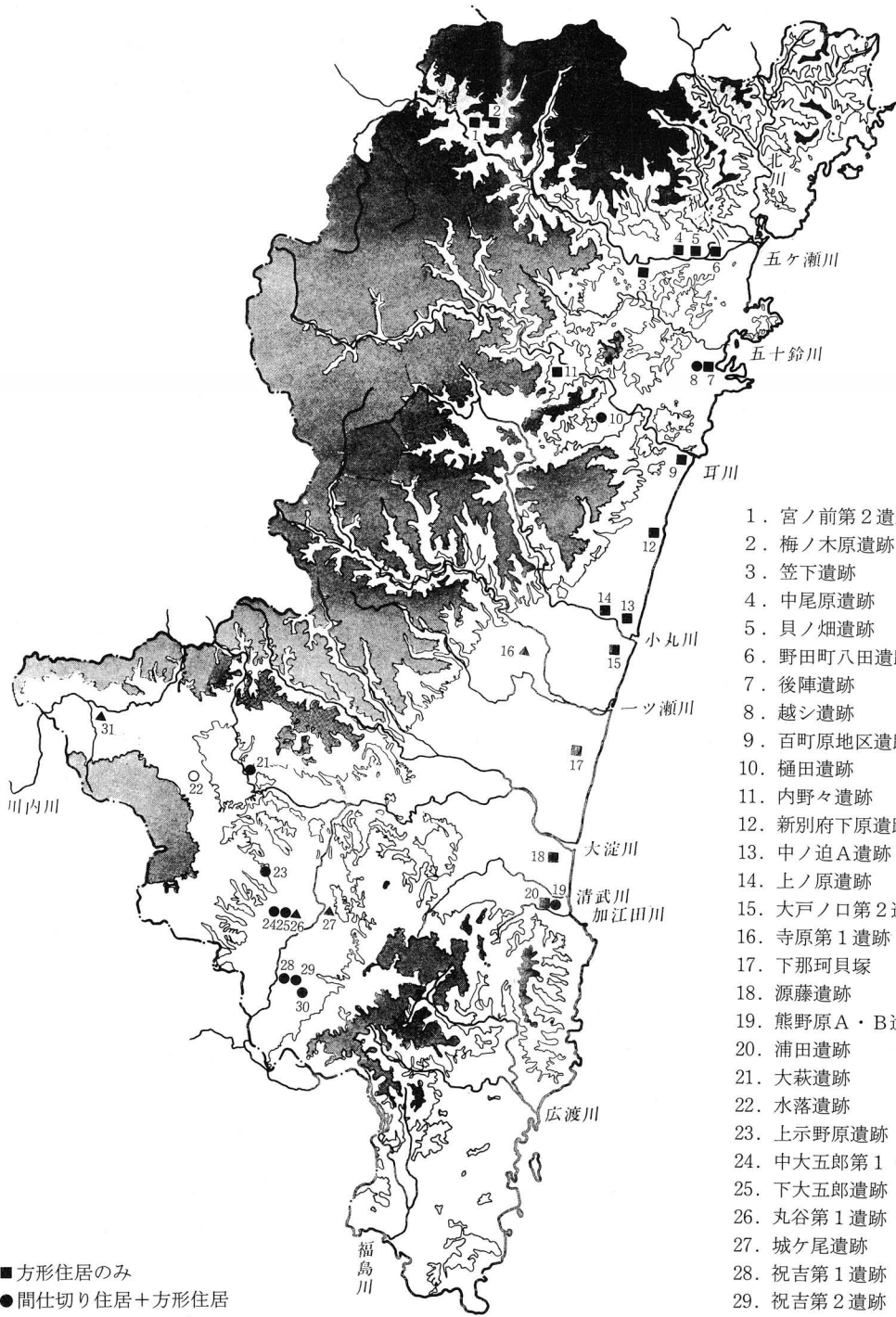
- (1) 面高哲郎「丸谷第一遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』(3) 宮崎県教育委員会 1979
- (2) 西健一郎「重弧文長頸壺」『弥生文化の研究』4 雄山閣 1987
- (3) 瀬之口伝九郎・樋渡正男「日向の重弧文土器」『古代文化』第14巻第10号 1943
- (4) 石川悦雄「日向における外来系の土器の伝播とその地域性(1) -瀬戸内・畿内系土器の流入とその展開-」『宮崎県総合博物館研究紀要』第9号 宮崎県総合博物館 1984
- (5) 長津宗重・寺師雄二「城ヶ尾遺跡」『高城町文化財調査報告書』第1集 高城町教育委員会 1989
- (6) 北郷泰道「様屋敷第2遺跡」『高崎町文化財調査報告書』第2集 高崎町教育委員会 1990
- (7) 石川恒太郎他「大萩遺跡(1)」『特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』宮崎県教育委員会

1975

(3) 弥生時代後期後半の集落

当遺跡の弥生時代後期の堅穴住居6軒の内訳は、円形プラン4軒(SA3・SA5・SA6・SA7)・方形プラン2軒(SA1・SA2)である。円形プランのSA3は4本柱で囲まれた方形部分が周囲の床面より一段低くなっており、周囲はベッド状遺構を呈している。このようなタイプの堅穴住居は祝吉第2遺跡の7・10号住居などに見られるように日向型間仕切り住居に多い。また方形プランのSA1は東から内側に張り出し部があり、大萩4号住居に見られるように入口部としての機能が想定される。SA3の34.4m²を最大規模にして、20m²代の住居であるSA1とSA5、10m²前後の住居であるSA2・SA6・SA7に分かれる。平均18.1m²である。これらの堅穴住居の時期は上げ底の甕や重弧文土器から後期後葉～末葉に比定される。

県内で弥生時代後期後半～末の集落で発掘調査されたのは、高千穂町の宮ノ前第2遺跡(4軒)・梅ノ木原遺跡(1軒)、北方町の笠下遺跡(8軒)、延岡市の中尾原遺跡(15軒)、日向市の越シ遺跡(2軒)・後陣遺跡(2軒)・百町原地区遺跡(1軒)、東郷町の樋田遺跡(6軒)、西郷村の内野々遺跡(10軒)、都農町の新別府下原遺跡(7軒)、川南町の上ノ原遺跡(6軒)、高鍋町の中ノ迫A遺跡(1軒)・大戸ノ口第2遺跡(12軒)、西都市の寺原第1遺跡(2軒)、宮崎市の熊野原遺跡B地区(16軒)・前原北遺跡(16軒)・源藤遺跡(5軒)、清武町の浦田遺跡(6軒)、野尻町の大萩遺跡(6軒)、高城町の城ヶ尾遺跡(3軒)、都城市の年見川遺跡(2軒)、丸谷第1遺跡(2軒)・祝吉第1遺跡(7軒)・祝吉第2遺跡(13軒)などがあるが、ほとんどは日向型間仕切り



- 方形住居のみ
- 間仕切り住居+方形住居
- ▲ 間仕切り住居のみ
- 円形住居+方形住居

1. 宮ノ前第2遺跡
2. 梅ノ木原遺跡
3. 笠下遺跡
4. 中尾原遺跡
5. 貝ノ畑遺跡
6. 野田町八田遺跡
7. 後陣遺跡
8. 越シ遺跡
9. 百町原地区遺跡
10. 樋田遺跡
11. 内野々遺跡
12. 新別府下原遺跡
13. 中ノ迫A遺跡
14. 上ノ原遺跡
15. 大戸ノ口第2遺跡
16. 寺原第1遺跡
17. 下那珂貝塚
18. 源藤遺跡
19. 熊野原A・B遺跡
20. 浦田遺跡
21. 大萩遺跡
22. 水落遺跡
23. 上示野原遺跡
24. 中大五郎第1・2遺跡
25. 下大五郎遺跡
26. 丸谷第1遺跡
27. 城ケ尾遺跡
28. 祝吉第1遺跡
29. 祝吉第2遺跡
30. 年見川遺跡
31. 永田原遺跡

第68図 弥生時代後期後半の遺跡分布図

⁽¹⁾住居を主体とする集落で、日向型間仕切り住居を有しない集落は少ない(第68図)。なお日向型間仕切り住居で構成された集落に比較すると様相は不明であったが、最近では調査が増加し、比較できる程になった。そこでまず方形住居を主体とする集落を見てみる。

1. 方形住居のみで構成された集落

方形住居のみで構成された集落は大淀川下流域より北に分布しており、北から順に概観する。

宮ノ前第2遺跡⁽²⁾は五ヶ瀬川上流左岸の330mの丘陵の北側斜面上に位置する。高千穂バイパス建設に伴って宮崎県教育委員会が平成元年4月24日～平成2年3月30日まで調査を行った。その結果、弥生時代終末期の方形プランの竪穴住居が4軒検出された。S A13の58.6㎡が最大規模で、S A12の28.3㎡が最小規模で、平均41.6㎡である。

梅ノ木原遺跡⁽³⁾は五ヶ瀬川の支流である岩戸川を南に望む丘陵と山地の転換点の352mに位置する。県道改良工事に伴って高千穂町教育委員会が昭和59年9月3日～28日まで調査を行った。その結果、弥生時代後期中葉の2本柱の方形住居が検出され、面積は6.8㎡と小型である。

笠下遺跡⁽⁴⁾は五ヶ瀬川右岸の標高80～90mの緩やかな丘陵上に位置する。ゴルフ場建設に伴って北方町教育委員会が調査を行った。その結果、弥生時代終末期から古墳時代初頭の方形プランの竪穴住居が8軒検出された。4期に区分されたうち、I期(弥生時代終末期)が3軒、II期が2軒、III期(古墳時代初頭)が3軒・土壇1基である。I期がV区では35.3㎡のS A4と9.6㎡のS A6がセットになり、V区のS A1も30.2㎡である、II期がI区では13.0㎡のS A2と9.0㎡のS A3がセットになり、III期がV区の30.2㎡のS A3と22.1㎡のS A2、I区が12.5㎡のS A1である。平均は20.2㎡である。

中尾原遺跡⁽⁵⁾は五ヶ瀬川左岸の標高50mの平坦で南向きの台地上に立地する。県営圃場整備事業に伴って平成2年2月～3月、平成2年6月5日～3年3月2日まで延岡市教育委員会が調査を行った。元年度の調査では弥生時代後期後半～終末期の隅丸方形の住居が15軒、2年度の調査では後期後半～古墳初頭と6世紀代の住居が34軒検出された。方形住居の一部には張り出しを有するものもある。

後陣遺跡⁽⁶⁾は亀崎台地の東南部の標高26mに位置する。区画整理事業に伴って日向市教育委員会が昭和58年9月12日～59年1月27日まで調査を行った。その結果、方形住居が2軒検出された。1号住居が33.6㎡、2号住居が36.0㎡であり、両者とも4本柱である。

百町原地区遺跡⁽⁷⁾は宮崎平野北部段丘群の北端部にあたり、標高39mに位置する。県営圃場整備事業に伴って日向市教育委員会が昭和63年6月19日～12月24日まで調査を行った。その結果、古墳時代初頭の竪穴住居1軒・周溝状遺構1基が検出された。1号住居は44.8㎡の方形住居で、6本柱の大型住居である。周溝状遺構は陸橋部を1ヶ所所有し、溝で囲まれた部分は8.5㎡と小型である。

新別府下原遺跡⁽⁸⁾は名貫川下流左岸の宮崎平野北部段丘群の三角洲性低地(名貫川開析扇状地)

の標高30mに位置する。県営圃場整備事業に伴って都農町教育委員会が昭和63年9月5日～平成元年2月1日まで調査を行った。その結果、弥生時代後期末葉の竪穴住居7軒・周溝状遺構3基・土壇5基が検出された。竪穴住居は床面積が平均16.6㎡と当時期の方形プランの竪穴住居としては標準的であり、最大規模はA-1区の1号住居の20.2㎡、最小規模はB-1区の2号住居の12.4㎡である。支柱穴はB-1区の3号住居の4本柱を除くと2本柱を基本としている。周溝状遺構の溝で囲まれた部分の面積はB-1区のSL1が16.4㎡、B-7区のSL1が15.8㎡、SL2が12.8㎡で、平均15.0㎡である。住居と周溝状遺構の面積にあまり差異はない。特にB-1区で周溝状遺構1基・竪穴住居2～3軒・土壇2～3基という集落の基本的な一単位が抽出されたのは注目される。

中ノ迫A遺跡⁹⁾は尾鈴山系の東麓の東になだらかに伸びる標高100m前後の舌状台地上に位置する。昭和53年に宮崎県教育委員会が調査を行った。その結果、弥生時代終末期～古墳時代初頭の23.0㎡の方形住居が1軒検出された。

上ノ原遺跡¹⁰⁾は小丸川左岸に広がる標高80～90mの国光原段丘の南縁辺部に立地する。畑造成に伴って川南町教育委員会が昭和60年7月29日～10月25日まで調査を行った。その結果、弥生時代後期後半～終末期の竪穴住居が6軒検出された。竪穴住居のうち5軒は方形プランであるが、3号住居だけが外に張り出し部を1ヶ所有する。最大規模の1号住居が537cm×527cmの28.3㎡であるのに対して、2号住居が20.8㎡、3～6号住居は一辺3m代の平均10.3㎡の小型住居である。平均の面積が19.4㎡であり、住居間に格差がある。

大戸ノ口第2遺跡¹¹⁾は小丸川右岸の牛牧台地東端の丘陵（標高68m）上に位置する。町総合体育施設建設に伴って高鍋町教育委員会が平成元年8月2日～2年1月10日に調査を行った。その結果、弥生時代後期後半の竪穴住居が12軒検出された。張り出し部を有するSA4以外はすべて方形プランであるが、その多くは10㎡未満の竪穴状遺構である。最大規模のSA4が20.5㎡であるのに対して、平均15.0㎡の3軒の小型住居である。平均の面積は16.4㎡であり、住居間の格差はない。

源藤遺跡¹²⁾は大淀川右岸の平野との比高差約20mの丘陵上（標高28.5m）に位置する。団地造成に伴って宮崎市教育委員会が昭和60年5月14日～9月18日に調査を行った。その結果、後期末葉の方形プランの竪穴住居が5軒検出された。28号住居の36.0㎡を最大規模にして平均21.5㎡である。

浦田遺跡¹³⁾は双石山（509m）から東に伸びる丘陵が鏡洲付近で二つに分かれたうちの北側丘陵の標高21mに立地し、谷底低地との比高差は10mである。宮崎学園都市建設に伴って宮崎県教育委員会が昭和58年10月12日から59年3月19日まで調査を行った。その結果、弥生時代終末期の竪穴住居6軒と土壇10基が検出された。竪穴住居はすべて方形プランで、SA7は701cm×696cmの48.8㎡と最大規模であるのに対して、SA6の29.1㎡を除くと平均13.7㎡の小型住居である。平

均の面積が16.2㎡であり、住居間に格差がある。小範囲に営まれた1軒の大型住居・5軒の小型住居・土壌で構成された小集落の姿が明確にされた。

参考までに古墳時代初頭の集落である熊野原遺跡C地区¹⁴では23軒の方形住居と周溝状遺構1基で構成されている。面積では3～9㎡（4軒）、10～15㎡（8軒）、25～29㎡（3軒）、33～45㎡（6軒）、57㎡前後（2軒）に分かれる。特に10～15㎡の小型住居と33～45㎡に集中している。

以上、方形プランを主体とする集落は次のように分けられる。20㎡前後の中型（標準的）住居1～2棟と平均10～15㎡の小型住居数棟で構成された集落であるAタイプ、36㎡のやや大型住居1棟と20㎡前後の中型住居数棟で構成された集落であるBタイプ、30～35㎡のやや大型住居数棟と10～15㎡の小型住居数棟で構成された集落であるCタイプ、浦田遺跡の1軒の49㎡の大型住居1棟と10～15㎡の小型住居数棟・土壌数基で構成された集落であるDタイプがある。また新別府下原遺跡で抽出された堅穴住居2～3軒・周溝状遺構1基・土壌2～3基という集落の基本的な単位は周溝状遺構の性格付けと共に注目される。

2. 方形住居を含み日向型間仕切り住居を主体とする集落

方形住居を含み日向型間仕切り住居を主体とする集落は大淀川下流域から上流域を中心に分布しており、北から順に概観する。

越シ遺跡¹⁵は弥生時代終末期の2軒の住居が検出され、1号住居が一辺6.9mの方形プランを基調とする住居であるのに対して、2号住居は突出壁を2個有する日向型間仕切り住居は31.3㎡である。方形プランのみの集落である後陣遺跡とは丘陵を違えて300m離れている。

樋田遺跡¹⁶は後期後半～終末の住居が6軒（日向型間仕切り住居3軒・方形プラン3軒）検出された。

内野々遺跡¹⁷は後期後半～終末期の日向型間仕切り住居3軒と方形住居7軒の計10軒で構成されており、張り出し部を有する方形プランのSA3が51.0㎡と最大規模で、日向型間仕切り住居の平均は33.0㎡である。方形プランは平均32.5㎡である。両者には格差はない。

熊野原遺跡A地区¹⁸は後期後葉の日向型間仕切り住居1軒と方形住居1軒と周溝状遺構1基で構成されており、方形プランを基調とする日向型間仕切り住居のSA1が31.6㎡であるのに対して、方形住居のSA2は9.9㎡と小さい。両者に格差が見られる。周溝状遺構は42.0㎡である。

熊野原遺跡B地区¹⁹は後期後半～終末期の日向型間仕切り住居13軒と方形住居5軒の計18軒で構成されており、方形プランを基調とする日向型間仕切り住居のSA4が38.8㎡と最大規模で、日向型間仕切り住居の平均は26.1㎡である。一方、方形プランは平均14.9㎡である。両者に格差が見られる。

大萩遺跡¹⁹は後期後葉～終末期の日向型間仕切り住居1軒と方形住居2軒と不定形住居2軒の計5軒で構成されており、張り出し部を有する4号住居が20.9㎡と最大規模である。方形住居は14.9㎡～17.2㎡である。両者の格差はわずかである。

上示野原遺跡⁽²⁰⁾は古墳時代初頭の日向型間仕切り住居1軒・方形住居4軒で構成されており、円形プランを基調とする日向型間仕切り住居である2号住居は $50.0\text{m}^2 + \alpha$ が最大規模であるのに対して、方形住居は1号住居が 41.3m^2 で、他の住居は 20m^2 代である。両者に格差が見られる。

年見川遺跡⁽²¹⁾は後期後葉～終末期の張り出しを有する方形住居1軒と方形住居と周溝状遺構1基で構成されており、張り出しを有する方形住居である3号住居は 41.1m^2 である。一方、方形の2号住居は 18.5m^2 であり、両者に格差が見られる。周溝を巡らした平地住居跡と考えられている1号住居は 19.5m^2 で、2号住居に切られている。1号住居については周溝状遺構の可能性はある。

祝吉第一遺跡⁽²²⁾は後期後半～終末期の日向型間仕切り住居3軒と方形住居3軒の計6軒で構成されており、方形プランを基調とする日向型間仕切り住居の1号住居が 51.2m^2 と最大規模で、日向型間仕切り住居の平均は 34.5m^2 である。一方、方形住居は 11.3m^2 であり、両者に格差が見られる。

祝吉第二遺跡⁽²³⁾は後期末葉～古墳時代初頭の日向型間仕切り住居11軒と方形住居2軒の計12軒で構成されており、円形プランを基調とする日向型間仕切り住居の7号住居が 50.8m^2 と最大規模で、日向型間仕切り住居の平均は 24.8m^2 である。一方、方形住居は 23.9m^2 で、両者に格差は見られない。

最近の調査例では下大五郎遺跡⁽²⁴⁾では日向型間仕切り住居を主体とする集落、向原第一遺跡⁽²⁵⁾・中大五郎第一・二遺跡⁽²⁶⁾は日向型間仕切り住居・方形住居・周溝状遺構で構成された集落である。弥生時代後期前半の中五郎第1遺跡は日向型間仕切り住居4軒・方形住居3軒・周溝状遺構3基であるのに対して、後期後半の中大五郎遺跡は日向型間仕切り住居2軒・方形住居4軒・周溝状遺構3基・棟持ち掘立柱建物1棟で構成されている。

以上のように日向型間仕切り住居と方形住居で構成された集落では2遺跡を除くとすべて両者に面積で格差があり、日向型間仕切り住居が主で方形住居が従という関係であり、機能差が想定される。また周溝状遺構を集落構成の要素として含む遺跡が都城盆地で最近増加し、特に向原第一遺跡の柱穴から建物が想定される。

3. 日向型間仕切り住居のみで構成された集落

日向型間仕切り住居のみで構成された集落は数少ないが、北から概観する。

寺原第一遺跡⁽²⁷⁾は方形プランを基調とする日向型間仕切り住居が2軒調査され、1号住居は 34.0m^2 、2号住居は 45.5m^2 である。

城ケ尾遺跡⁽²⁸⁾は後期後葉～末葉の日向型間仕切り住居が3軒調査され、円形プランを基調とするものが2軒、方形プランを基調とするものが1軒である。S A 1が 19.0m^2 、S A 2が 22.7m^2 、S A 3が 14.1m^2 である。

丸谷第一遺跡⁽²⁹⁾は後期後葉の方形プランを基調とする日向型間仕切り住居2軒が調査され、2号住居は 78.8m^2 、1号住居は 57.6m^2 であり、大型の住居である。

以上のように日向型間仕切り住居のみで構成された集落では住居は大型であることが多い。

4. まとめ

以上のように弥生時代後期後葉～終末期の集落を見てくると、方形住居のみで構成される集落と日向型間仕切り住居を主体とする集落の間には様相に明確な差がある。その中で水落遺跡の集落構成は円形住居を主体とする集落であり、日向型間仕切り住居を主体とする地域の中では異質であると共に、円形住居が当時期まで残る点でも特異である。

註

- (1) 長津宗重「日向型間仕切り住居研究序説」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985
- (2) 未報告。
- (3) 長津宗重「梅ノ木原遺跡」『高千穂町文化財調査報告書』第4集 高千穂町教育委員会 1985
- (4) 小野信彦「笠下遺跡」『北方町文化財調査報告書』第1集 北方町教育委員会 1990
- (5) 山田 聡「上南方地区遺跡」『延岡市文化財調査報告書』第6集 延岡市教育委員会 1991
- (6) 緒方博文「後陣遺跡」『亀崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財報告書』日向市教育委員会 1986
- (7) 緒方博文「百町原地区遺跡」『昭和63年度県営圃場整備事業百町原地区工事に伴う埋蔵文化財調査概要報告書』日向市教育委員会 1989
- (8) 長津宗重「新別府下原遺跡」『都農町文化財調査報告書』第3集 都農町教育委員会 1990
- (9) 岩永哲夫「中ノ迫A遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第28集 宮崎県教育委員会 1985
- (10) 永友良典「上ノ原遺跡」『川南町文化財調査報告書』4 川南町教育委員会 1986
- (11) 戸高真知子「大戸ノ口第2遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』第5集 高鍋町教育委員会 1991
- (12) 伊東 但「源藤遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』宮崎市教育委員会 1987
- (13) 谷口武範「浦田遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985
- (14) 面高哲郎「熊野原遺跡C地区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985
- (15) 緒方博文「越シ遺跡」『亀崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』日向市教育委員会 1986
- (16) 谷口武範「樋田遺跡」『東郷町文化財調査報告書』第2集 東郷町教育委員会 1991
- (17) 農業試験場建設に伴って県教育委員会が平成2年3月7日～8月7日まで調査を行った。東 憲章氏の教示による。
- (18) 菅付和樹「熊野原遺跡A・B地区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 1988
- (19) 石川恒太郎他「大萩遺跡(1)」『特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県教育委員会 1975
- (20) 茂山 護「上示野原遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第22集 宮崎県教育委員会 1980
- (21) 小田富士雄「年見川遺跡」『宮崎県史 資料編 考古1』宮崎県 1989
- (22) 北郷泰道「祝吉遺跡」『都城市文化財調査報告書』第1集 都城市教育委員会 1981
- (23) 面高哲郎「祝吉遺跡」『都城市文化財調査報告書』第2集 都城市教育委員会 1982

- (24) 河川改修工事に伴って県教育委員会が平成2年7月30日～10月30日まで調査を行った。山田洋一郎氏の教示による。
- (25) 柴畑光博「向原遺跡」『都城市文化財調査報告書』第11集 都城市教育委員会 1989
- (26) 県営圃場整備事業に伴って都城市教育委員会が平成3年10月23日～4年2月2日まで調査を行った。山田洋一郎氏と長友郁子氏の教示による。
- (27) 養方政幾「寺原第1遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集 西都市教育委員会 1985
- (28) 長津宗重・寺師雄二「城ヶ尾遺跡」『高城町文化財調査報告書』第1集 高城町教育委員会 1989
- (29) 面高哲郎「丸谷第1遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』(3) 宮崎県教育委員会 1979

(4) 中世の集落

中世の遺構はA地区の東区で掘立柱建物7棟・溝状遺構4本、西区で溝状遺構2本、B地区で溝状遺構3本が検出された。A地区は遺構の切り合いによって、次の4時期に分かれる。Ⅰ期はSB2・SB5・SB7・SE3、Ⅱ期はSB1・SB3・SB6・SE5、Ⅲ期はSB4・SE4、Ⅳ期はSE6である。SB1の柱穴から青磁片が、SB4の柱穴から白磁片が出土しているので、Ⅱ期が鎌倉期に、Ⅲ期が室町期に比定される。B地区のSE7は東播系の片口鉢から12世紀後半～13世紀初めに比定されており、A地区のⅡ期に相当する。当遺跡では一時期3棟の掘立柱建物の単位が抽出されたが、県内の中世の集落としては宮崎学園都市遺跡群の熊野原遺跡C地区（宮崎市大字熊野）・平畑遺跡（宮崎市大字熊野字平畑）・堂地東遺跡（宮崎市大字熊野字堂地）・前原北遺跡（宮崎市大字熊野字前原）・陣ノ内遺跡（宮崎市大字熊野字陣ノ内）、天神河内第1遺跡（田野町字天神河内）、松原地区遺跡群（都城市郡元町字松原）などが調査されている。

熊野原遺跡C地区は清武川と加江田川に挟まれた丘陵の標高14mに位置する。宮崎学園都市建設に伴って昭和58年4月5日～59年3月19日まで宮崎県教育委員会が調査を行った。その結果、掘立柱建物13棟と溝状遺構16本が検出された。13棟の掘立柱建物は棟方向とその配置状況からA群（四面に庇を持つSB1を中心とし、SB2とSB5が「コ」の字形に配置された掘立柱建物群）、B群（四面に庇を持つSB3を中心とし、SB4とSB6が逆「コ」の字形に配置された掘立柱建物群）、C群（南北に庇を持つSB9を中心とし、SB10とSB11が逆「コ」の字形に配置された掘立柱建物群）に分けられ、庇を持つものが母屋、他が納屋あるいは倉庫が想定されている。出土土師器から14～15世紀を中心とした時期に推定されている。

他の学園都市遺跡群のうち平畑遺跡は古代末～13・14世紀前半の掘立柱建物が10棟（2間×3間6棟、2間×2間2棟、北面庇付きの2間×5間1棟など）検出され、北面庇付きの2間×5間のSB16を中心とするD群（4棟）と北面庇付きの可能性のある？間×5間のSB20を中心とするE群（6棟）に分かれる。堂地東遺跡は13～16世紀前半の建物が4棟（両面庇付きの4間×6間1棟、両面庇付きの4間×5間1棟、両面庇付きの3間×4間1棟、2間×2間1棟）検出され、主軒が東西方向の両面庇付きの建物が主体である。陣ノ内遺跡は13～15世紀の建物が10棟

(2間×3間8棟、2間×2間3棟、両面庇付きの2間×4間1棟) 検出され、SE3・7・8に区画された部分に西面庇付きの2間×4間のSB11を中心として9棟、SE3の東側の外に3棟分布する。前原北遺跡⁽⁵⁾は建物が50棟(1間×3間21棟、2間×3間11棟、1間×2間6棟、両面庇付きの1間×8間1棟、4間×6間1棟など) 検出され、大きくは溝状遺構で区画された4群に分かれる。その中で東北部を区画する溝状遺構は、南辺に陸橋部を有しているため、その内側のSB1～14のうちの数棟の建物で構成された中世の居館の在り方の一つである可能性が指摘されている。

天神河内第1遺跡⁽⁶⁾は大淀川の支流である境川右岸の標高約280m前後の南北に長い河岸段丘上に営まれている。国営天神ダム建設に伴って昭和63年8月9日～平成元年3月10日まで宮崎県教育委員会が調査を行った。その結果、掘立柱建物50棟、溝状遺構22本が検出され、建物の主軸や梁の長さ、位置関係及び遺構内から出土した土器片などから13世紀前半～16世紀を6期に区別されている。一般的な集落構成は1～3棟を一単位とするが、I期(13世紀前半)には1間×3間を基本としていたが、III期になると1間×5間や庇を持つものなど大型の建物が出現し、IV期からはまた1間×3間が主体となる。I～III期には溝で区画された中に建物があり、V期には溝によって南北に分断されている。なおIII期にはII区とIII区では建物の規模や出土遺物に格差がみられるので、階層差が想定され、V期以後は、建物の規模は均一化し、「散村」化していくと指摘している。特にII期～III期に大きな変革が考えられている。

松原地区遺跡群⁽⁷⁾は大淀川支流の沖水川左岸、鰐塚山地より北へせりだした都城市街地を形成する台地の縁部の標高約150mに立地し、水田面との比高差が約10mである。区画整理事業に伴って昭和60年7月15日～12月16日まで都城市教育委員会が調査を行った。その結果、掘立柱建物10棟、大溝1本、溝状遺構15本が検出され、溝状遺構の埋土の文明期(1469～87年)の桜島降下軽石の有無、遺構の切り合い、遺物の時期などから3期に区分されている。I期(13世紀後半)は大溝と2号溝を「└」型に巡らした区画に建物があり、II期(14世紀後半～15世紀前半)は2号溝に区画された区画に建物があり、III期(16・17～19世紀)はグループCを中心とした建物群である。I期は大溝・溝・建物・井戸から構成されたそれ相当の勢力を有した居館跡が、II期は溝・建物・竪穴遺構(倉庫)・井戸から構成された在地領主の屋敷跡が想定されている。

以上のように庇のついた大型の掘立柱建物とそれに付随する数軒の小型の掘立柱建物を一つの単位として考えられているが、天神河内第1遺跡⁽⁸⁾で指摘されているように集落構成における時期的な変遷がある。当遺跡もI期に西面庇付きの2間×3間のSB2を中心として1間×3間のSB5とSB7で構成され、II期は東面庇付きの2間×3間のSB1を中心として2間×3間のSB3と2間×2間のSB6で構成され、III期は南面庇付きの2間×5間のSB4のみである。庇付きの掘立柱建物1棟と建物2棟で構成された中世の集落の基本的な単位が抽出されたのは大きな成果であった。

註

- (1) 面高哲郎「熊野原遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985
- (2) 日高孝治「平畑遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985
- (3) 日高孝治「堂地東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985
- (4) 永友良典「陣ノ内遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 1988
- (5) 北郷泰道「前原北遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 1988
- (6) 谷口武範「天神河内第1遺跡」『大淀川右岸農業水利事業国営天神ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県教育委員会 1991
- (7) 矢部喜多夫「松原第Ⅰ遺跡」『都城市文化財調査報告書』第7集 都城市教育委員会 1989
- (8) 日高孝治「日向の古代～中世一学園都市遺跡群を中心として」『えとのす』第32号 1987

(5) 溝状遺構

A地区のSE6やB地区のSE7に見られるように溝内に楕円形の浅い掘りこみを多数有する溝状遺構は、県内では前畑遺跡（えびの市大字浦前畑）、熊野原遺跡C地区（宮崎市大字熊野字熊野原）、大岩田村ノ前遺跡（都城市大岩田町村ノ前）、松原地区第Ⅱ遺跡（都城市郡元町字松原）、樺山・郡元地区遺跡（三股町大字樺山・都城市郡元町）、牟田ノ上遺跡（都城市早水町）、六部市遺跡（えびの市大字上江字六部市）などで検出され、溝状遺構の性格としては道・柵列・堀の基礎・「木馬道」などが想定されているが、不明な点が多い。

前畑遺跡⁽¹⁾は霧島火山の北西端部を占める飯盛山の北麓の標高280mの台地上に位置している。九州縦貫自動車道建設に伴って昭和54年2月22日～3月22日まで宮崎県教育委員会が調査した。検出された溝状遺構は幅180～200cm、長さ23.6m + α で、幅20～40cm・深さ10～20cmの細長い楕円形の窪みが20～30cm間隔で連続している。細長い楕円形プランの窪みは真ん中が浅くなり、両端が深くなっている。溝状遺構からは16・17世紀の陶磁器が出土している。県内で初めて当該遺構が検出され、木馬道と考えられた遺跡である（第69図）。

熊野原遺跡C地区⁽²⁾は加江田川と清武川に挟まれた標高14～30mの台地上に位置し、沖積面との比高差は2～10mである。宮崎学園都市建設に伴って昭和58年4月5日～59年3月19日まで宮崎県教育委員会が調査した。検出されたSE9は北北西から南南東に伸びる幅140～170cm、長さ75mで、径30cm、深さ10cm前後の円形の窪みが30cm間隔で連続する部分と長さ110cm、幅30cm、深さ10cmの細長い楕円形の窪みが30cm間隔で連続する部分がある。この溝の両側にはSE8とSE9が付帯している。円形と細長い楕円形の窪みの埋土には赤褐色あるいは褐灰色系の固い0.5cm前後の薄い層が互層となっており、検出時には一層ずつの剥離が見られた。溝からはヘラ切りの土師器杯、須恵器、中世陶器等が出土している。この溝の性格としてはB群（四面に底を持つ3間×1間のSB3を中心とし3間×1間のSB4と4間×1間のSB6が「コ」の字形に配置される掘立柱建物群）とC群（南北に底を持つ4間×1間のSB9を中心とし3間×1間のSB10

と3間×1間のSB11が逆「コ」の字形に配置される掘立柱建物群)とを区画する溝と推定されている。出土した土師器から14～15世紀を中心とする時期と推定されている(第69図)。

松原地区第Ⅱ遺跡⁽³⁾は大淀川の支流である沖水川左岸、鰐塚山地より北へせりだした都城市街地を形成する台地の縁部の標高約150mに立地し、沖水川左岸の低地水田面との比高差が約10mである。区画整理事業に伴って都城市教育委員会が昭和60年11月2日～14日まで2000m²の調査を行った。その結果、中・近世の溝状遺構が4本検出された。2号溝は幅50～60cm、底幅40cm、深さ10cmで、床面に長軸30cm、短軸20cm、深さ10cmの楕円形の窪みが20～30cm間隔で連続している。窪み内に根石状の石を配置したり溝の走行が直線的であることから柵列または道路と推定されている(第69図)。

大岩田村ノ前遺跡⁽⁴⁾は大淀川と梅北川の合流地点より、南に約700mの標高150mの台地縁辺部に位置し、低湿地との比高19mである。斉場建設に伴って都城市教育委員会が昭和63年11月10日～12月7日まで4500m²の調査を行った。その結果、古代から中世にかけての幹線道路1本と小規模のもの1本が検出された。1号道路の床面に楕円形の窪みが連続しており、溝の埋土の文明軽石層の下部から平安末期の陶器片と北宋銭の天聖元宝が出土している。この1号道路は規矩性を有する幹線道路として性格づけられている。

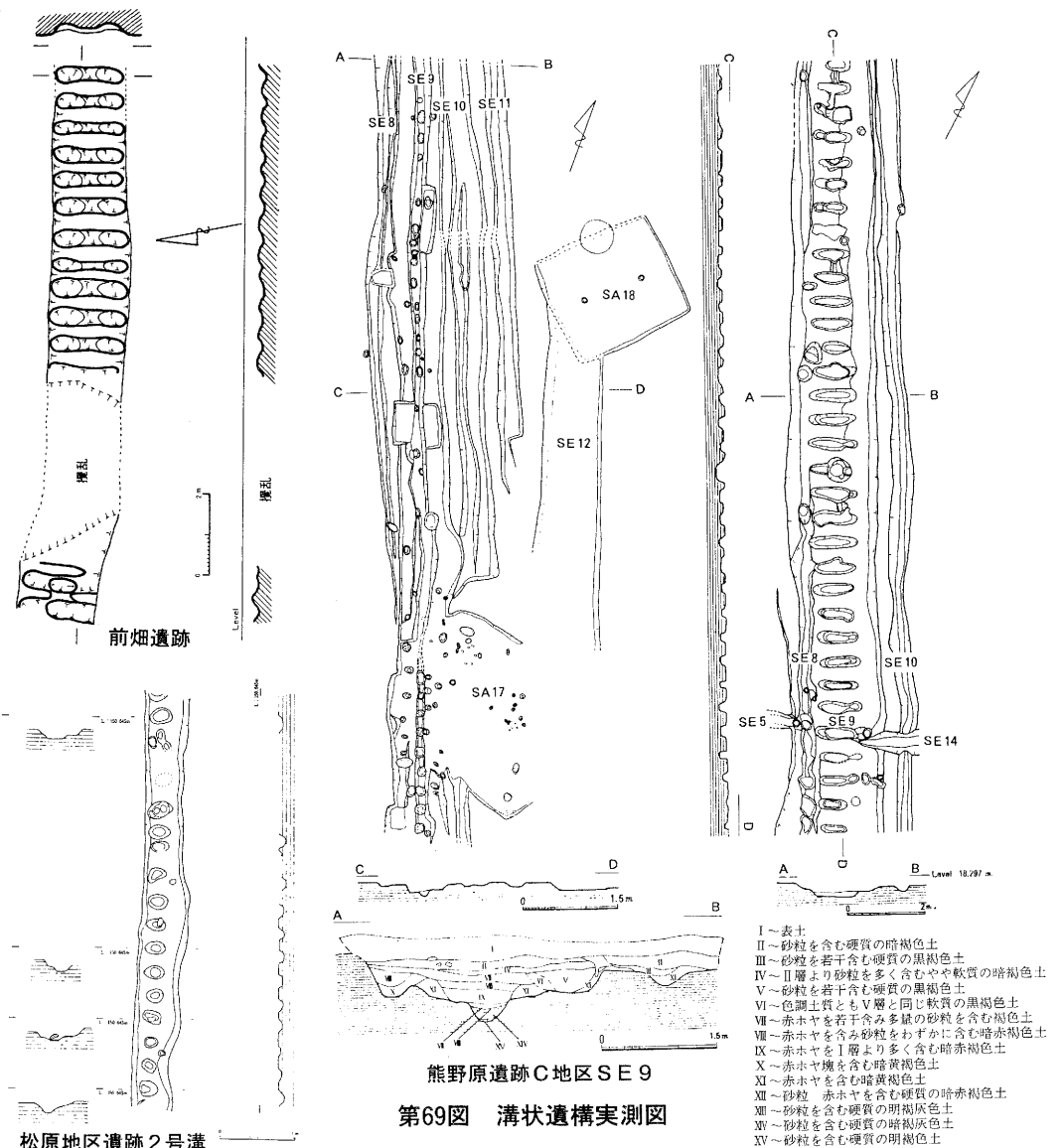
樺山・郡元地区遺跡⁽⁵⁾は大淀川の支流である沖水川左岸の標高163mに位置する。小規模河川改修事業に伴って県教育委員会が調査を平成元年2月22日～3年3月30日まで行った。調査の結果、掘立柱建物16棟・溝状遺構42本が検出された。SE1・SE24・SE25・SE30が検出されている。IV区のSE1は幅220cm、深さ80～100cmで、床面には幅100cm、厚さ30cmの硬化面の下に径30cm、深さ10cmの円形の窪みが20～70cm間隔で11m連続している。SE24とSE25も床面に等間隔にピットが連続している。ピット底面は固く締まっている。SE30も床面に不定楕円形の窪みが連続している。SE1は15世紀後半以降に比定されている。

牟田ノ上遺跡⁽⁶⁾は鰐塚山地に西側に広がる扇状地の端部に位置し、遺跡の北側を扇状覆流水の湧水点を源とする小河川が西流し、大淀川に注いでいる。健康福祉センター建設に伴って都城市教育委員会が平成2年9月12日～3年3月10日まで12000m²の調査を行った。その結果、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物19棟、溝状遺構10数本、土壌墓数基が検出された。建物は2間×3間を基本として1間×2間、1間×3間のものもある。1号溝(幅約2m)と4号溝は床面に細長い楕円形の窪みが30～40cm間隔で連続しており、表面は硬化している。

六部市遺跡⁽⁷⁾はえびの盆地中央を西流する川内川と池島川に挟まれた広大な低位段丘の西南部の舌状に張り出した部分に位置する。圃場整備事業に伴ってえびの市教育委員会が平成2年12月4日～3年2月8日まで調査を行った。その結果、中・近世の竪穴状遺構16基・掘立柱建物9軒・溝状遺構16本・土壌墓2基などが検出された。SE8の床面の一部に方形の窪みが5個だけ連続している。

以上のように床面に窪みが連続する溝状遺構の特徴については次のようになる。①溝状遺構には当遺跡のSE7のように直線的に伸びるものとSE6のように曲線的に伸びるものがある。②床面の窪みのプランも前畑遺跡・熊野原遺跡C地区の細長い楕円形、松原地区第2遺跡の円形、当遺跡の方形などがあり、多種多様である。③硬化面についてもあるもの、ないものがある。④当遺跡のSE7のように両側に溝状遺構を伴うものとなないものがある。この溝状遺構の時期比定は困難であるが、熊野原遺跡C地区のSE9の14～15世紀を上限として中・近世に見られる。

この溝状遺構の性格については道・道の基礎・柵列・塀の基礎・「木馬道」・「甌穴」などが想定されている。しかし、前畑遺跡の溝状遺構について田中熊雄氏は民俗学の知見から「木馬道」を提案し、北郷泰道氏は『大仏殿再建記・天』記載の東大寺虹梁との関連から運搬路を指摘した⁽⁸⁾。また早川 泉氏は全国の類例を集成した結果、「波板状凹凸面」は『鳥獣人物戯画』や『石山寺縁起』に表現されている重量物を運搬した際に用いられたコロや梃子あるいは枕木として利用した丸太の路面に残された圧痕として結論づけた⁽⁹⁾。今のところ北郷氏や早川氏の言う運搬路が妥当



- I～表土
- II～砂粒を含む硬質の暗褐色土
- III～砂粒を若干含む硬質の黒褐色土
- IV～II層より砂粒を多く含むやや軟質の暗褐色土
- V～砂粒を若干含む硬質の黒褐色土
- VI～色調土質ともV層と同じ軟質の黒褐色土
- VII～赤ホヤを若干含む多量の砂粒を含む褐色土
- VIII～赤ホヤを含む砂粒をわずかに含む暗赤褐色土
- IX～赤ホヤをI層より多く含む暗褐色土
- X～赤ホヤを塊を含む暗褐色土
- XI～赤ホヤを含む暗褐色土
- XII～砂粒 赤ホヤを含む硬質の暗赤褐色土
- XIII～砂粒を含む硬質の明褐色土
- XIV～砂粒を含む硬質の暗褐色土
- XV～砂粒を含む硬質の明褐色土

と考えられる。

- 註 (1) 北郷泰道「前畑遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(3)』宮崎県教育委員会 1980
- (2) 面高哲郎「熊野原遺跡C地区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985
- (3) 矢部喜多夫「松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」『都城市文化財調査報告書』第7集 都城市教育委員会 1989
- (4) 重永卓爾「昭和63年度遺跡発掘調査概報 大岩田村ノ前遺跡」『都城市文化財調査報告書』第10集 都城市教育委員会 1989
- (5) 近藤 協・谷口武範「樺山・郡元地区遺跡の発掘調査について」『平成元年度 埋蔵文化財担当専門職員等研修会資料』宮崎県教育委員会 1990
- (6) 柴畑光博「平成2年度遺跡発掘調査概報 牟田ノ上遺跡」『都城市文化財調査報告書』第13集 都城市教育委員会 1991
- (7) 東 憲章「原田・上江遺跡群 六部市遺跡」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第9集 えびの市教育委員会 1991年
- (8) 北郷泰道「東大寺虹梁と日向一神格化の構造」『えとのす』第32号 新日本教育図書 1987
- (9) 早川 泉「古代道路遺構に残された圧痕—波板状凹凸面の性格について—」『東京考古学』9 東京考古談話会 1991

(6) 近世墓

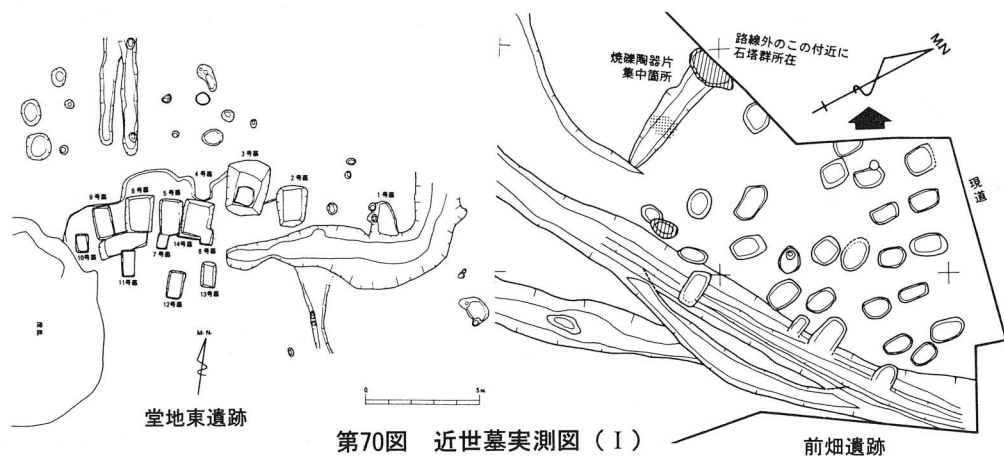
近世墓が10m×45m(450㎡)の範囲に円形プラン34基、方形プラン9基の合計43基が分布している。六道銭は18基から105枚出土しており、内訳は洪武通宝14枚、古寛永通宝は56枚、新寛永通宝12枚、不明23枚である。六道銭の副葬率は41.9%である。方形プランの土壌の長軸はSD15を除くとほぼ南北方向であり、最大規模のSD15は長さ200cm、幅132cm、深さ144cmであり、老年の男性と共に古寛永通宝が7枚出土している。洪武通宝はSD15に近接したSD11・12・14のグループとSD24から出土している。洪武通宝単独はSD11・12、洪武通宝と古寛永通宝の組み合わせはSD14・24、古寛永通宝単独がSD15・27・33・34・35・39・40・41、古寛永通宝と新寛永通宝の組み合わせがSD16・21・28・36、新寛永通宝単独はない。副葬品としては六道銭以外には数珠や玉類が出土し、棺釘などの鉄器が27点、棺材が5点出土している。人骨は17基から17体出土しており、人骨の出土状況から座棺である。付篇によれば17体の内訳は成人13体(うち男性3体、女性1体)、小児1体、不明3体である。SD21だけが小児と性別・年齢不明の2体を埋葬しているが、他は単体埋葬である。墓壇内から15~16世紀の白磁碗や16世紀の染付等などが出土しているが、破片であり流れ込みと考えられている。上部構造が喪失しているために細かい時期比定が困難であるので県内の近世墓を見てみる。

県内では堂地東遺跡(宮崎市大字熊野字堂地・14基)・前原北遺跡(宮崎市大字熊野字前原・2基)・竹之下遺跡(宮崎市大塚町時宗・3基)・坂ノ下遺跡(清武町大字木原字坂ノ下・18基)・前畑遺跡(日南市大字大窪字寺村・28基)・崩野遺跡(南郷町大字榎原字前原・1基)・貴船寺遺跡

(都城市梅北町字尾崎・中世墓を含めて144基)などで昭和57年以降県央と県南で調査されているが、県北については未調査で不明である。

堂地東遺跡⁽¹⁾は清武川と加江田川に挟まれた二本の丘陵のうち南側の丘陵上の標高20~30mに立地し、北側と南側の谷底低地との比高差は5~15mである。宮崎学園都市建設事業に伴って昭和57年6月24日~昭和58年1月31日まで県教育委員会が調査を行った。その結果、「道」と推定される溝状遺構の収束する場所の両側に長方形プランの近世墓が7m×15m(105㎡)の範囲に14基分布している。14号墓の東西方向を除いてすべて主軸は南北方向である。北側に2号墓と3号墓、4号墓と5号墓、8号墓と9号墓が対になって配列している。北側のグループが長さ150~200cm、幅90~180cm、深さ30~130cmであるのに対して、南側のグループは長さ85~125cm、幅55~70cm、深さ55~200cmと一回り小さい。特に11・12・13号墓は深さが125~200cmと深い。六道銭は6基から出土しており、そのうち3基は寛永通宝である。六道銭の副葬率は42.9%である。六道銭の枚数として最多は8号墓の6枚である。4号墓(女性・壮年)からは数珠玉が、1号墓と11号墓(男性・壮年)からは釘が出土している。人骨は7基より7体が出土しており、その性別年齢の内訳は男性壮年2体・男性不明1体・女性壮年1体・不明熟年~老年1体・不明少児(1)1体・不明不明1体である。しかし、人骨の遺存状態があまり良くないために日向の近世人の形質的特徴を明らかにするまでには至らなかった。これらの近世墓の時期は二次集積の土壌から出土した「寛政十(1798)年」・「文化二(1805)年」の年号が彫られている墓石から18世紀末~19世紀初頭を中心とする時期に比定される。墓道が想定される溝の末端の両側に3号墓と4号墓を中心に計14基営まれており、一族の墓地と推定される(第70図)。

前原北遺跡⁽²⁾は清武川と加江田川に挟まれた標高11~13mの丘陵上に位置する。宮崎学園都市建設事業に伴って昭和60年4月4日~12月27日まで県教育委員会が調査を行った。その結果、2基の長方形プランの近世墓が検出され、1号墓が長さ144cm×幅86cm×深さ126cmであるのに対して、2号墓は長さ190cm×幅90cm×深さ114cmである。2基の規模は堂地東遺跡の北側のグルー



第70図 近世墓実測図(Ⅰ)

ブに相当する。1号墓からは銅銭2枚が、2号墓からは盃・銅銭2枚・棺材・銅片が出土している。

竹之下遺跡⁽³⁾は大淀川右岸の標高約10mの丘陵上に位置する。県道新設に伴って昭和62年5月19日～7月15日まで県教育委員会が調査した。その結果、検出された3基の近世墓は長方形プランであり、2基から六道銭としての寛永通宝各1枚が出土している。かつて移転した石塔には「宝永六（1709）年」・「宝暦十（1760）年」・「寛政元（1789）年」の年号が彫られており、18世紀初頭～末に比定される。

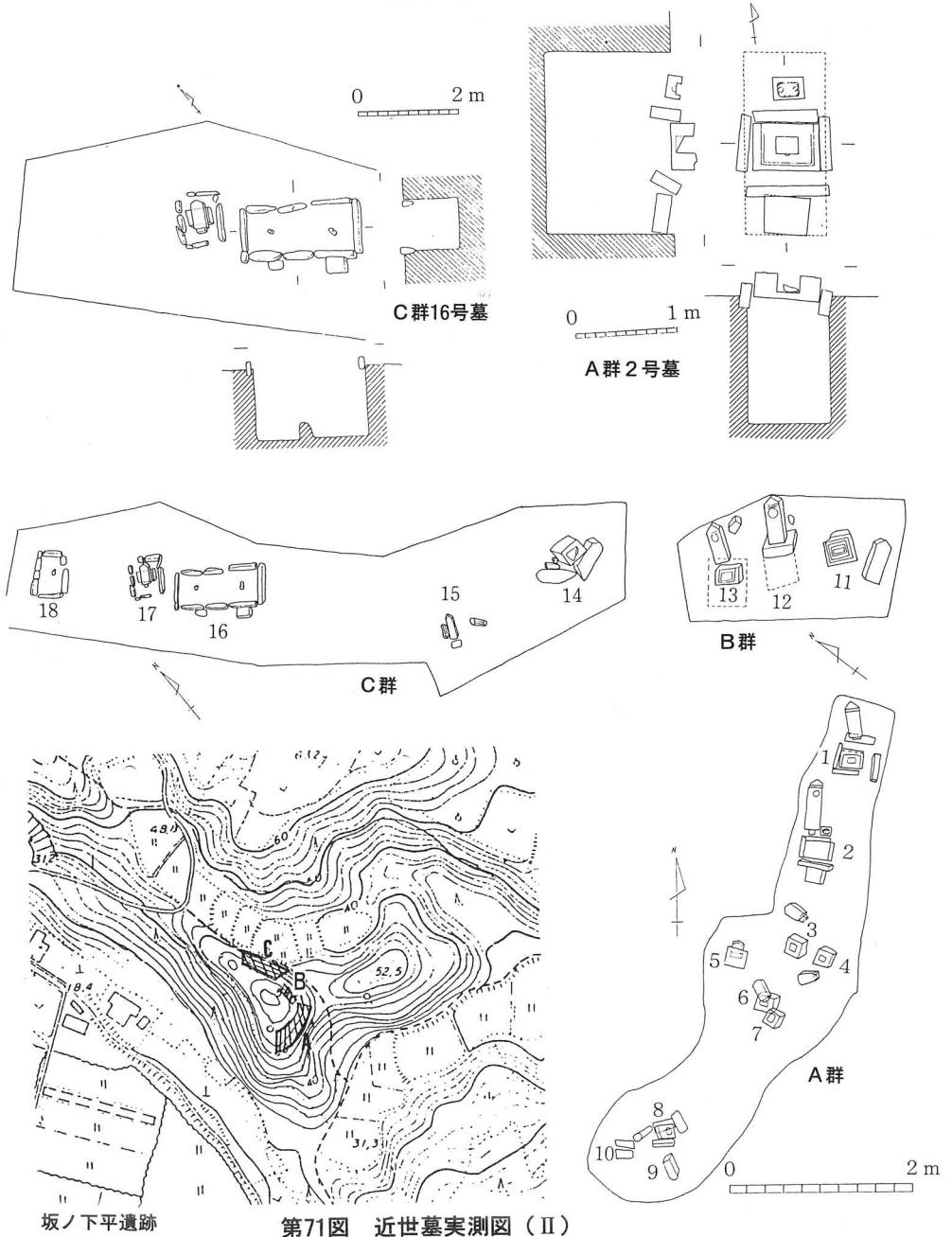
坂ノ下平遺跡⁽⁴⁾は清武川左岸の標高58.9mの丘陵上に位置する。宮崎女子短期大学運動場建設に伴って昭和57年4月に石川恒太郎氏を中心に大学が調査を行った。その結果、板碑などの18基の近世墓が検出され、そのうち3基（A群1・2号墓、B群12号墓）から六道銭が出土しており、六道銭の副葬率は16.7%である。六道銭以外にはA群1号墓からは陶磁器碗7個が、B群13号墓から煙管が出土している。釘は六道銭が出土した3基以外に、A群3号墓・B群11号墓・C群16～18号墓から出土している。石塔は台石の上に板碑を立て、四方を扁平な板石で囲む構造が主体である。墓壇はA群2号墓（1680年）が長さ183cm、幅83cm、深さ128cmの長方形プランであるのに対して、C群16号墓は長さ57cm、幅52cm、深さ54cmの方形プランであり、すべて長方形・方形プランである。石塔の年代はA群（10基）が「明暦元（1655）年」～「延宝八（1680）年」、B群（3基）が「承応三（1654）年」～「明暦四（1658）年」、C群（5基）が「延宝五（1677）年～天和二（1682）年」であり、A群とB群がほぼ同時に、遅れてC群が造営され、1654年～1682年という17世紀後半の時期に限定されて造営されている。特に1・11・12号墓のグループが最初に近接して造営を始め、周辺に拡大している。碑文からA群は月林氏・吉田氏の墓地、B群は江藤氏一族の墓地であるが、C群については不明である。調査された近世墓の中では最も古く、短期間に造営された一族の近世墓であり、墓壇と上部構造が完全に残っている点で注目される。

前畑遺跡⁽⁵⁾（長禅庵寺墓地推定地）は小河川に対して南西方向に伸びる標高120mの狭小なシラス台地上に立地し、沖積低地面との比高差は約20mである。広域農道建設に伴って平成元年4月25日～11月16日まで県教育委員会が調査を行った。その結果、14m×14m（196㎡）の範囲に円形・楕円形・隅丸方形プランの28基の近世墓が検出され、その内15基から六道銭が出土しており、洪武通宝1枚を除くとその他はすべて寛永通宝である。六道銭の副葬率は53.6%である。人骨は遺存状態が極めて悪く、歯片が数点出土したのみである。この近世墓の上部構造と推定されるすぐ近辺の石塔には「寛文二（1662）年」から「天保年間（1830～1844年）」の紀年銘があり17世紀後半～19世紀前半の時期の墓地と考えられている（第70図）。

崩野遺跡⁽⁶⁾は南郷川の中流右岸の南郷川が大きく蛇行し、それに沿って北へ舌状に伸びる台地の先端部の標高22m（比高差4～5m）に位置する。土砂採取に伴って平成元年12月4日～27日まで南郷町教育委員会によって調査された。その結果、1基の隅丸長方形プランの土壇から寛永通

宝2枚と陶磁器碗が出土した。18～19世紀に営まれた墓地で東側に拡大すると考えられる。

貴船寺跡⁽⁷⁾(尾崎第1遺跡)は都城盆地の南部、大淀川の支流である梅北川東岸の南向きの舌状台地上にある。市営住宅建築に伴って昭和63年8月4日～10月4日まで都城市教育委員会によって調査された。その結果、長方形の墓域の中に中世から近世の144基の墓塚が検出され、墓塚の形態には方形・隅丸方形・円形・二段掘り・横穴などの様々なタイプが混在している。墓塚の棺には35号墓のように木棺のタイプと5号墓のように薩摩焼の甕棺のタイプなどがある。副葬品と



第71図 近世墓実測図(Ⅱ)

しては薩摩焼や肥前系の陶磁器、柄鏡、簪、数珠、煙管などが出土している。六道銭は102基から出土しており、どの墓からも7枚ぐらいつつ出土している。六道銭の副葬率は70.8%と非常に高く、県内で最高の副葬率である。六道銭を棺材に金具で留めているものもある。石塔には「寛保三（1743）年」などの紀年銘があり、中世から近世の墓地と考えられている。

以上のような県内の近世墓のあり方から上部構造が欠如しているのがほとんどであるので、墓壙と六道銭の問題について取り上げる。墓壙の形態は17世紀後半の坂ノ下平遺跡では長方形と方形プランが混在しており、18世紀初頭～19世紀初頭の堂地東遺跡・竹之下遺跡では長方形プランのみである。これらの近世墓は石塔を上部構造として箱式の木棺を使用していることに由来すると思われる。当遺跡に見られる円形プランの時期については不明であるが、六道銭の洪武通宝単独が円形プランから出土していることからすれば、当初から造営されており、人骨の出土状況からすれば桶などを使用する座棺である。17世紀後半～19世紀前半の前畑遺跡でも円形・楕円形・隅丸方形ランプが混在している。六道銭については、貴船寺遺跡の70.8%、前畑遺跡の53.6%、堂地東遺跡の42.9%に示されるように六道銭の副葬率の高さ、7枚組の六道銭の多さなどが南部九州の特徴として既に指摘されているが、当遺跡でも41.9%と高く、7枚組の六道銭も19基中7基と多い。墓域の面積は堂地東遺跡の105㎡を最小として、前畑遺跡の196㎡、水落遺跡の450㎡であり、墓域の形態は長形状のものが多く、堂地東遺跡では墓道と推定される溝状遺構が検出され、当遺跡でも近世墓群に伸びるSE9が検出されたが、近世墓との切り合い関係により墓道とはなりえない。しかし、墓壙の分布状況から数本の墓道が復元され、大きく3群に分かれる。A群はSD10～12・14～18・21・25～31の16基、B群はSD19・24・32～41の12基、C群はSD1～9・13・20・22・23・42の14基である。六道銭はA群が16基中9基（56.2%）から、B群が12基中8基（66.7%）から出土しているが、C群からは全然出土していない。六道銭の組み合わせからI期の洪武通宝単独の時期（SD11・12の2基）、II期の洪武通宝と古寛永通宝の時期（SD14・24の2基）、III期の古寛永通宝単独の時期（SD15・27・33・34・35・39～41の8基）、IV期の古寛永通宝と新寛永通宝の時期（SD16・21・28・36の4基）の4時期に分かれ、III期に最盛期がある。六道銭の時期からすればA群はI～IV期に、B群はII～IV期に継続して造営されているが、A群がI期とIV期に、B群がIII期に最盛期がある。C群はSD20から玉が出土している以外は六道銭もないので時期は不明であるが、墓域がSD11・12から西に拡大していることを勘案するとC群はA・B群より古い可能性がある。

今回、道路によって既に削平されていたために墓域の全部を調査しえなかったが、桶棺を使用した円形プランの墓壙を主体とする近世墓の様相が始めて明らかになったことは大きな成果であった。また付篇で述べられているように近世人骨が17体も出土したが、人骨の保存状態が悪く、頭型や顔面の形態的特徴は明らかにされなかったが、四肢骨についての日向の近世人の形質が明らかになったことも大きな成果であった。

註

- (1) 長津宗重・日高孝治「堂地東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985
- (2) 北郷泰道「前原北遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 1988
- (3) 長津宗重『竹之下遺跡現地説明会資料』宮崎県教育委員会 1988
- (4) 石川恒太郎『宮崎女子短期大学運動場遺跡』宮崎女子短期大学 1982
- (5) 吉本正典「前畑遺跡（長禪廃寺墓地推定地）」『宮崎県文化財調査報告書』第33集 宮崎県教育委員会
1990
- (6) 長津宗重「崩野遺跡Ⅱ」『南郷町文化財調査報告書』第3集 南郷町教育委員会 1991
- (7) 榎畑光博「貴船寺跡（尾崎第1遺跡）」『都城市文化財調査報告書』第10集 都城市教育委員会 1989
- (8) 櫻木晋一「九州地域における中・近世の銭貨流通－出土備蓄銭・六道銭からの考察－」『九州文化史研究所
紀要』第36号 1991

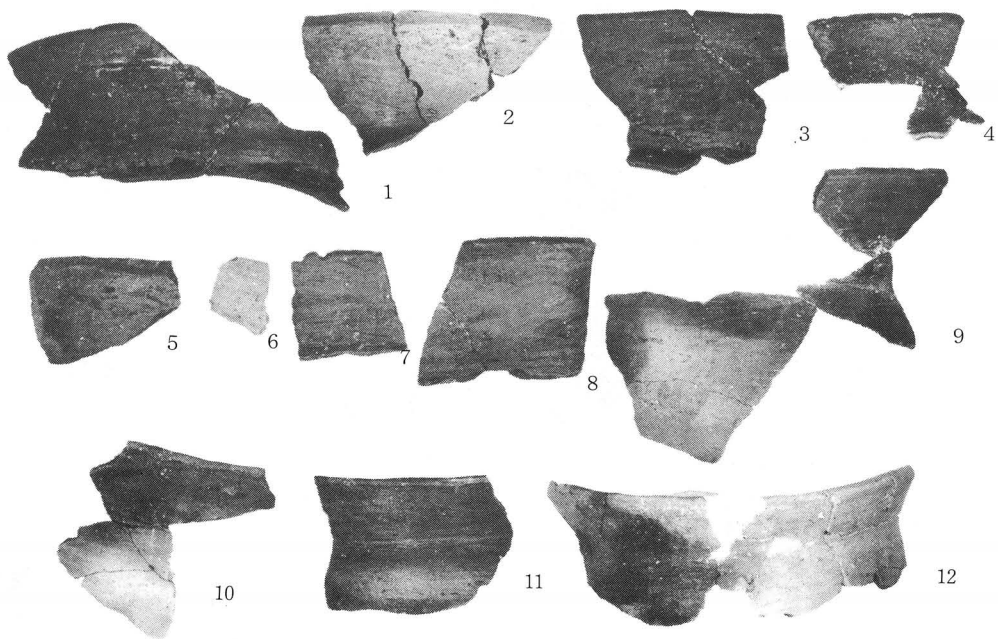
以上のように今回の面的な調査によって弥生時代後期の集落の構成と規模、中世の集落の単位、近世墓が確認されたのは大きな成果であった。しかし、土器形式の設定、他地域との比較など土器編年について十分に消化していない点もあるため、後日機会を改めて述べたいと思う。



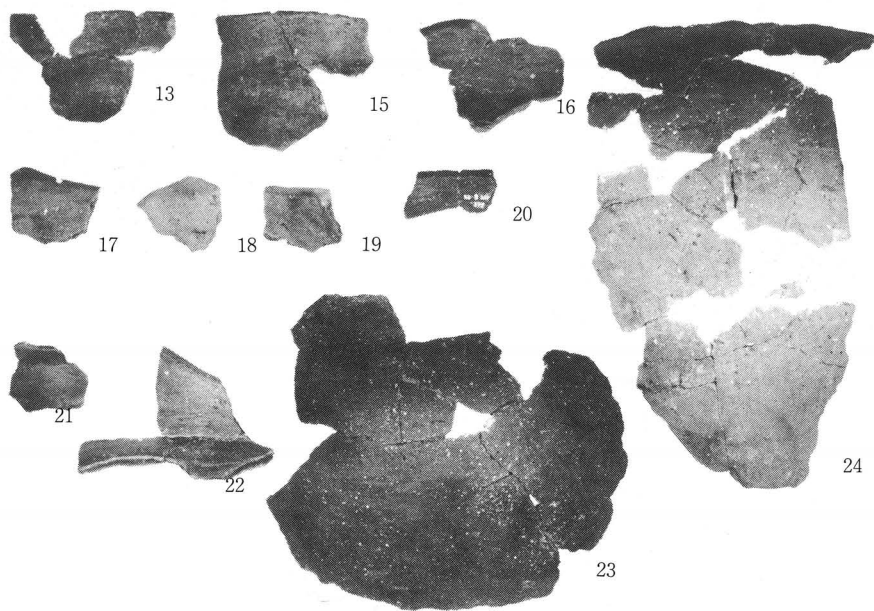
B地区調査前全景（北から）



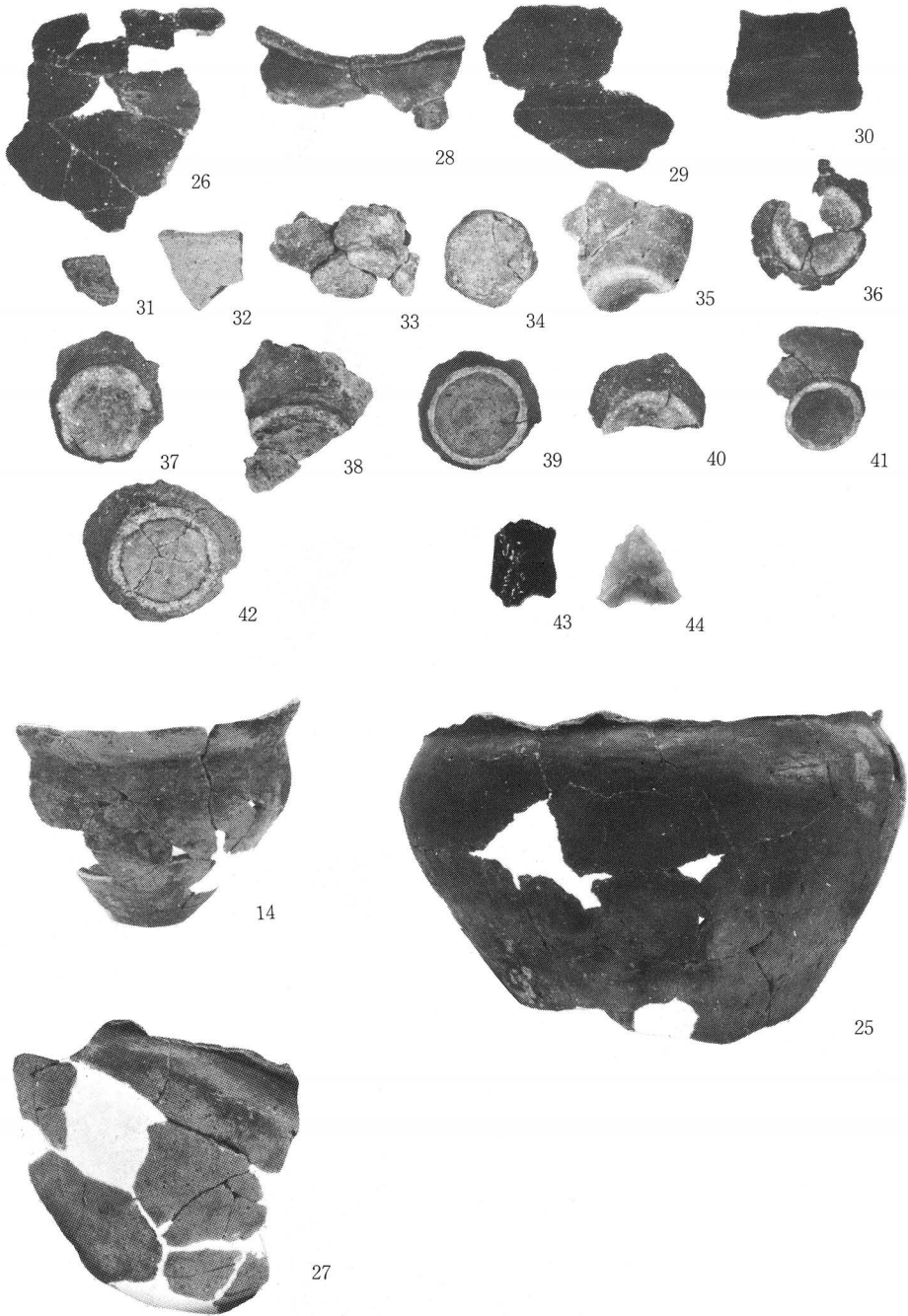
B地区全景



SC 1 出土縄文土器 (1~12)



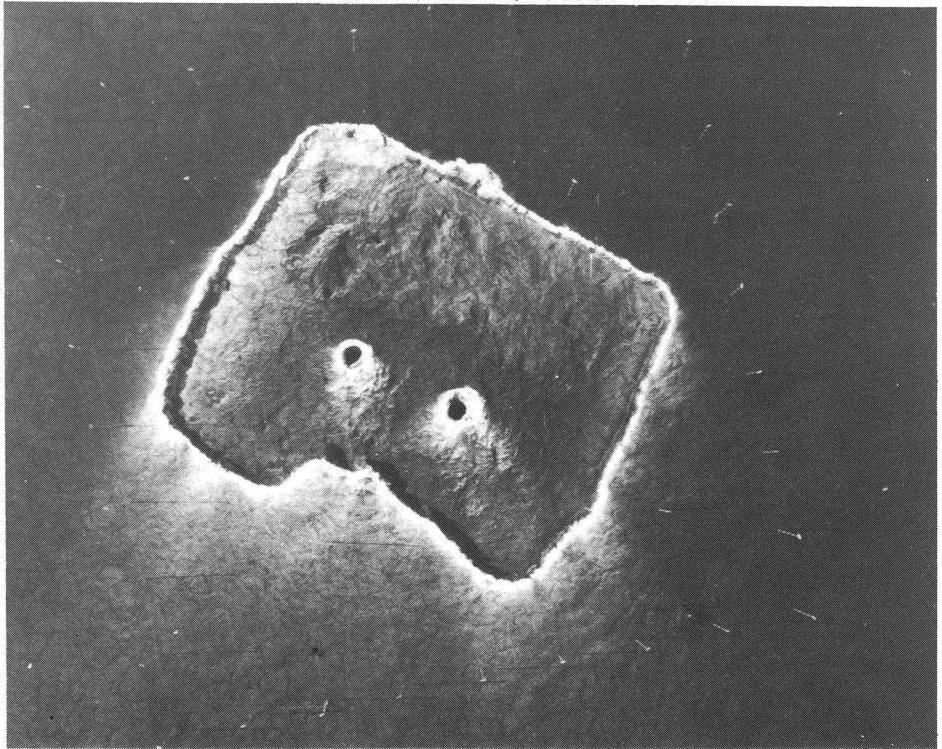
SC 1 出土縄文土器 (13、15~24)



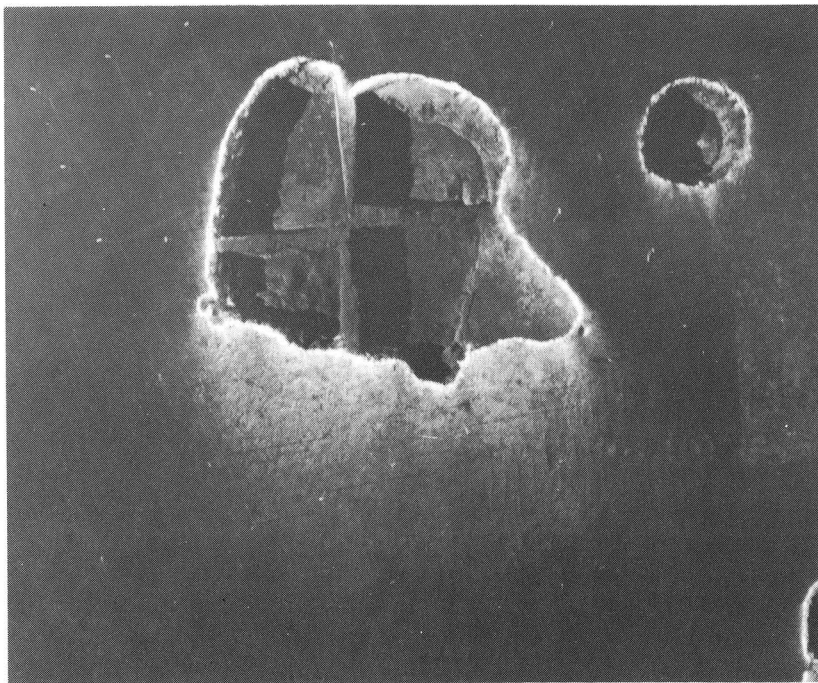
SC 1 出土繩文土器 (14、25~30、33~42)
SA 6 " (31、32)
SA 2、SA 4 出土石器 (43、44)



SC1, SA5, SA6



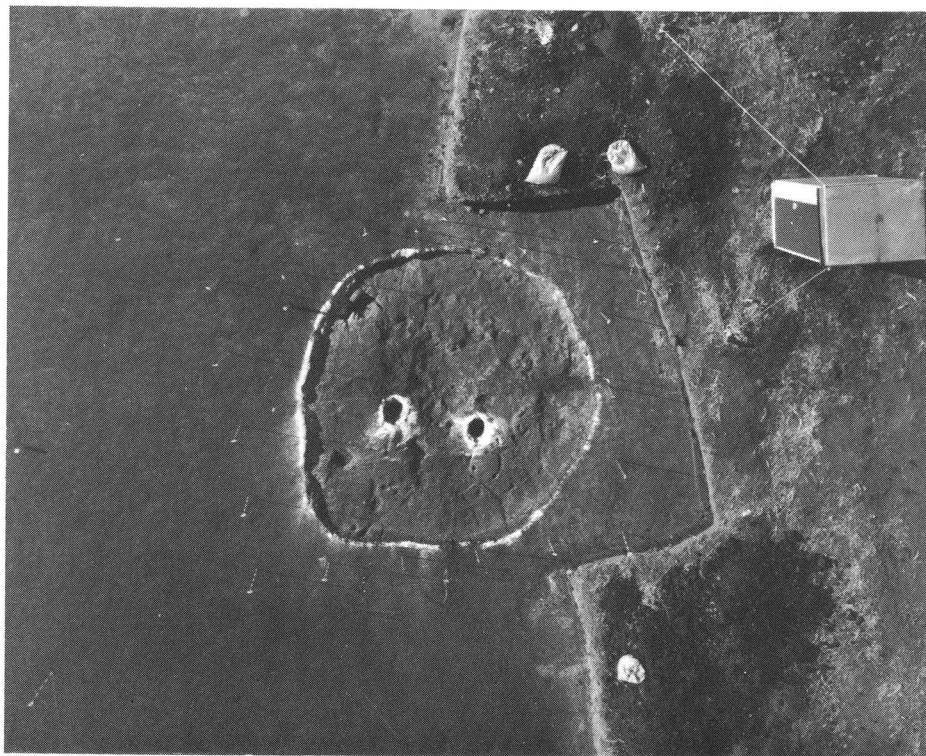
SA1



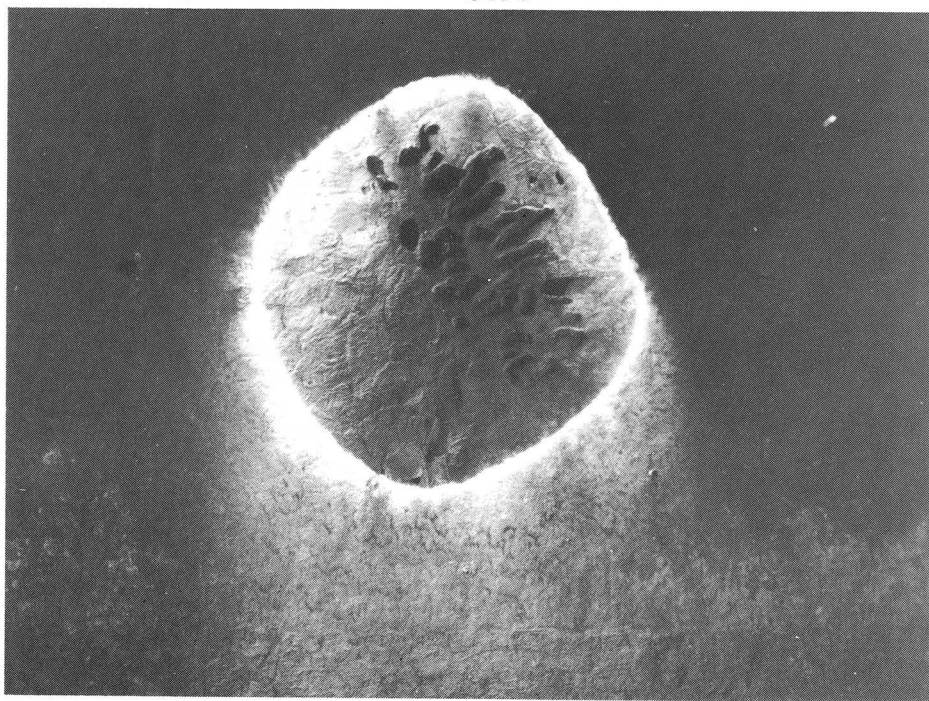
S A 2



S A 3



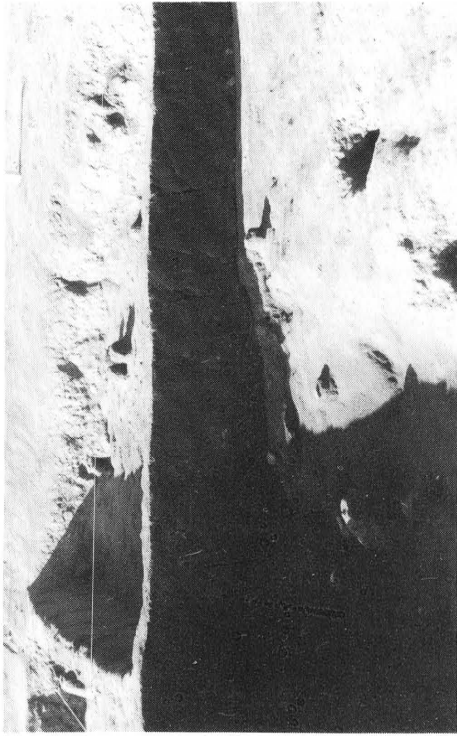
S A 6



S A 7 炭化材出土状況



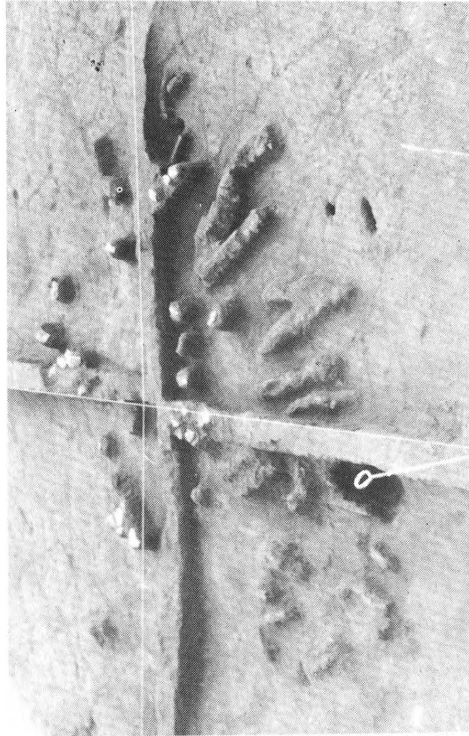
SA 2 土層断面



SA 3 土層断面



SA 5 土層断面

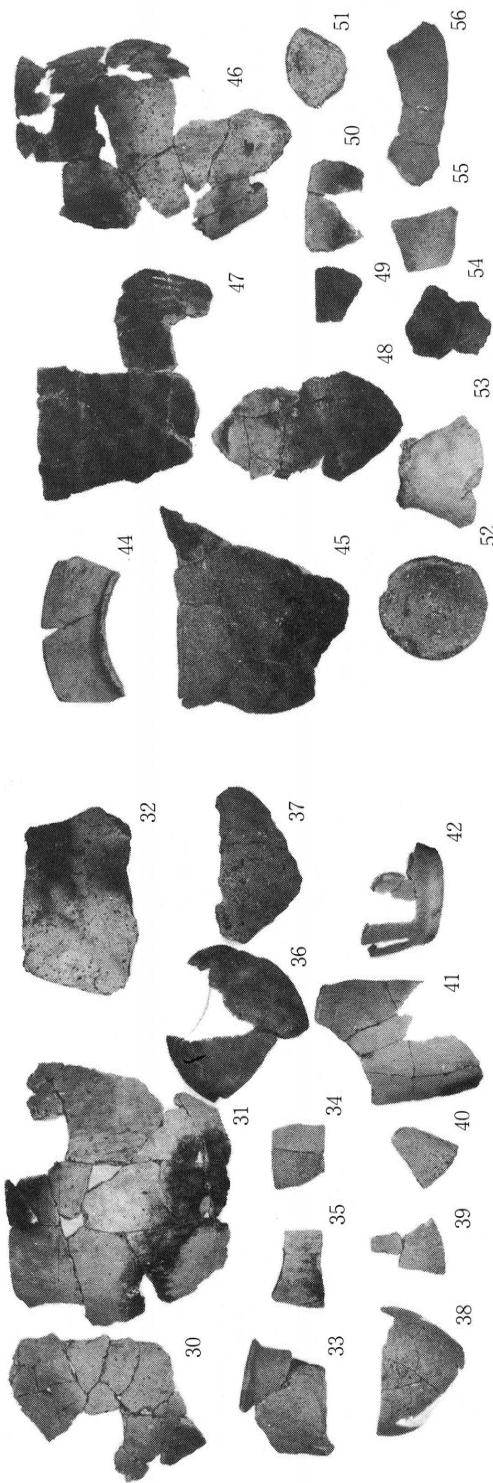


SA 7 炭化材出土状況

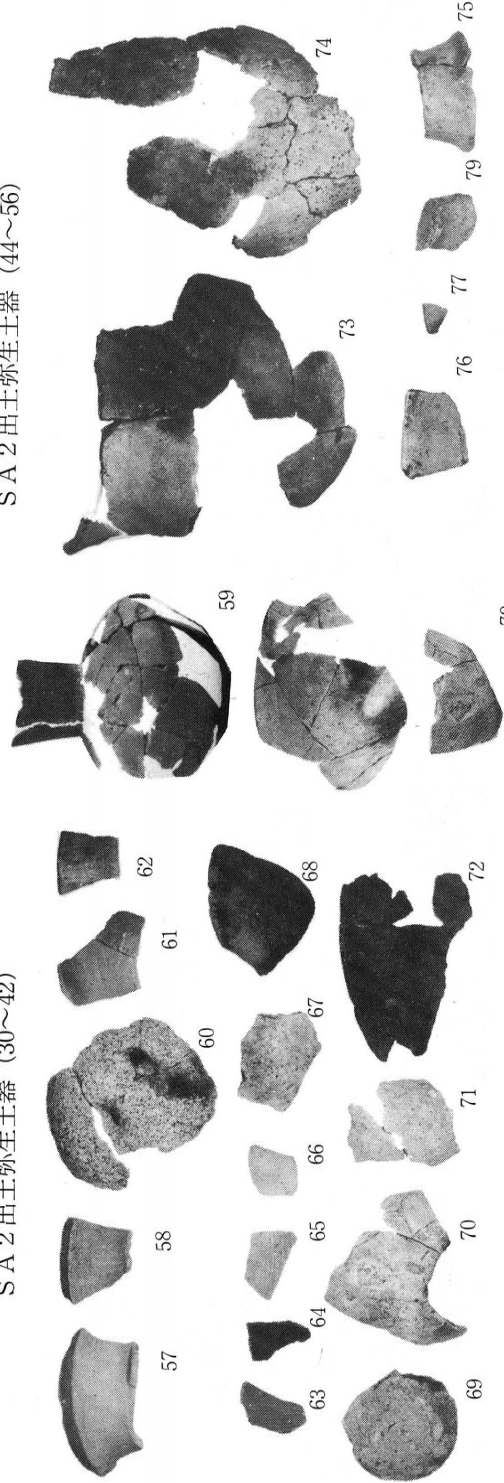
図 7



SA 1 出土弥生土器 (1~29)



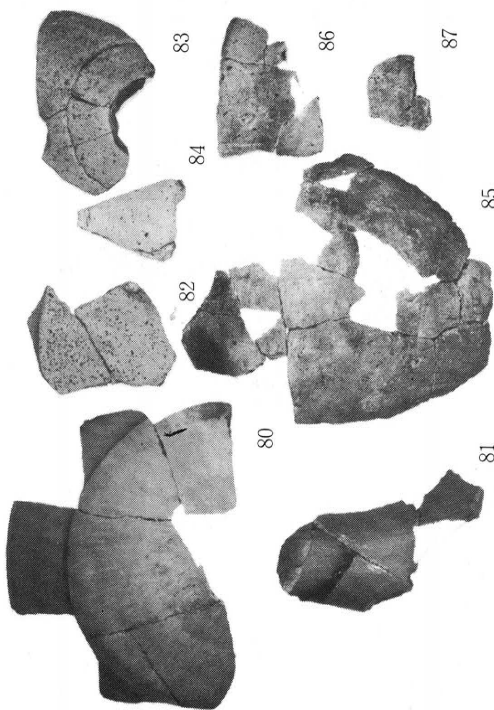
S A 2 出土弥生土器 (44~56)



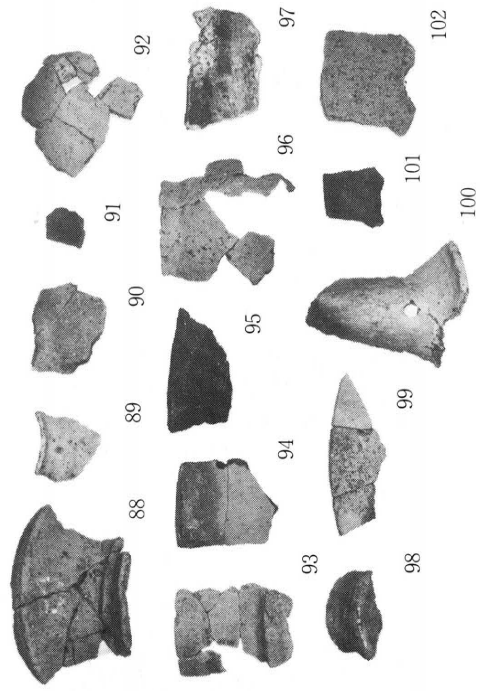
S A 2 出土弥生土器 (30~42)

S A 3 出土弥生土器 (73~79)

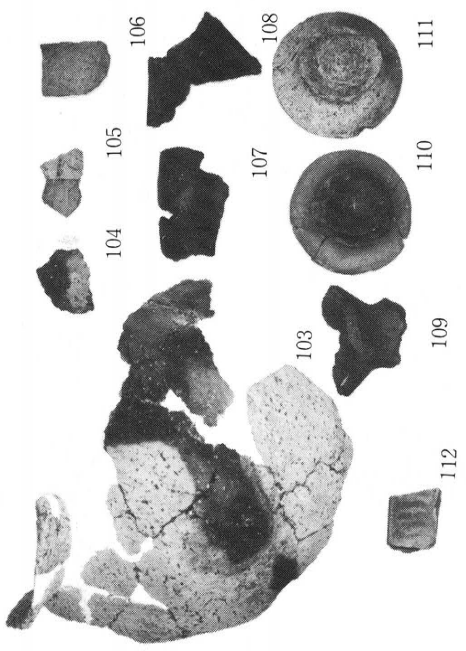
S A 3 出土弥生土器 (57~70)



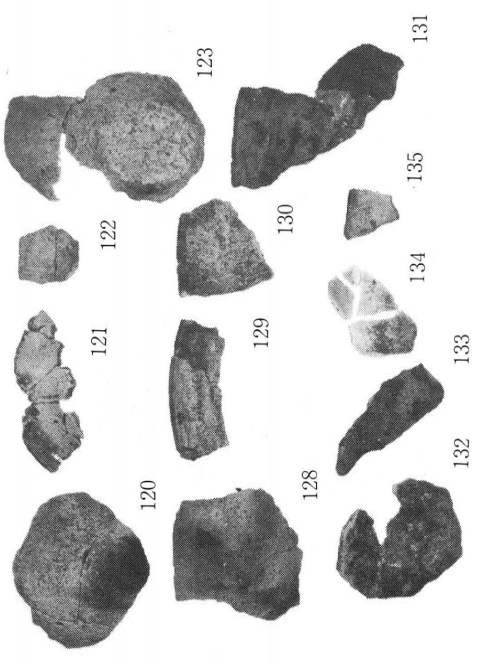
S A 3 出土弥生土器 (80~87)



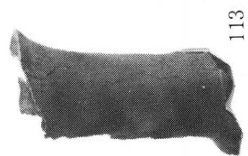
S A 5 出土弥生土器 (88~102)



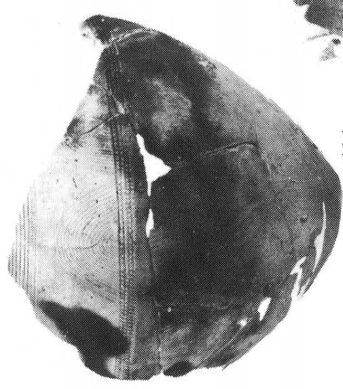
S A 6 出土弥生土器 (103~111)



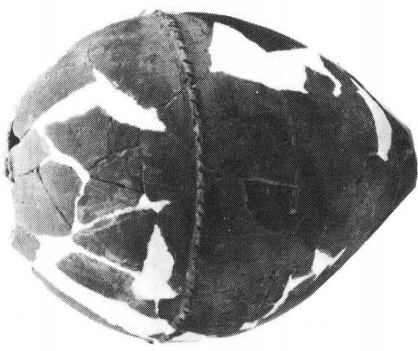
S A 7 出土弥生土器 (120~135)



113



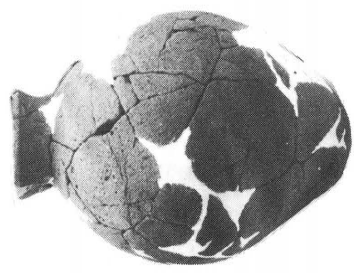
114



116



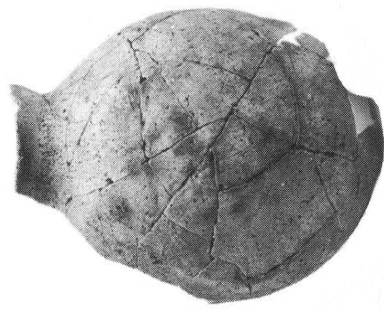
115



117



118



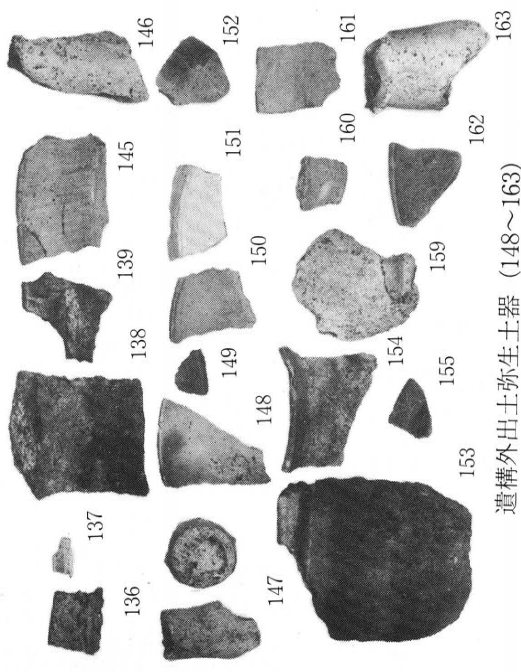
119



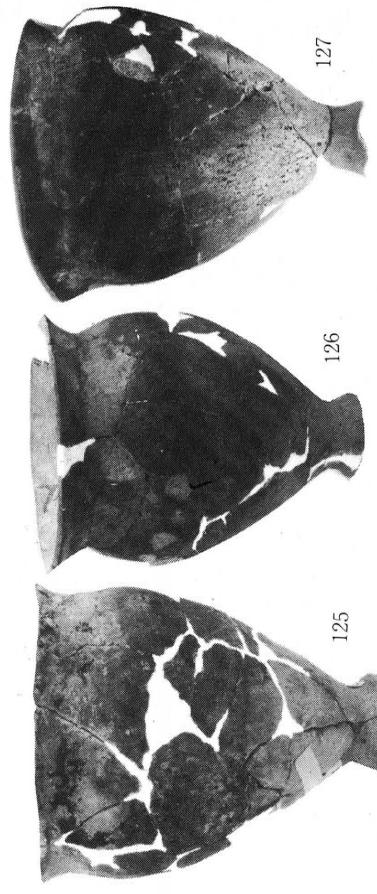
119

图版 11

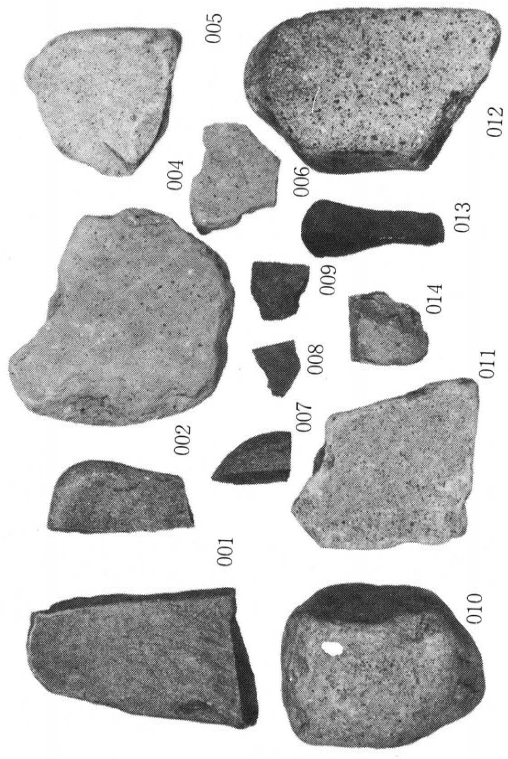
SA 7 出土弥生土器 (113~119)



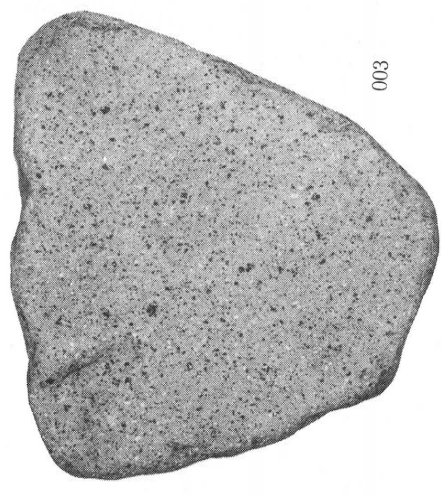
遺構外出土弥生土器 (148~163)



SA 7 出土弥生土器 (125~127)



SA 1 出土石器 (001・002)、SA 2 出土石器 (004・005)
SA 3 出土石器 (006)、SA 5 出土石器 (007~009)
SA 7 出土石器 (010~012)



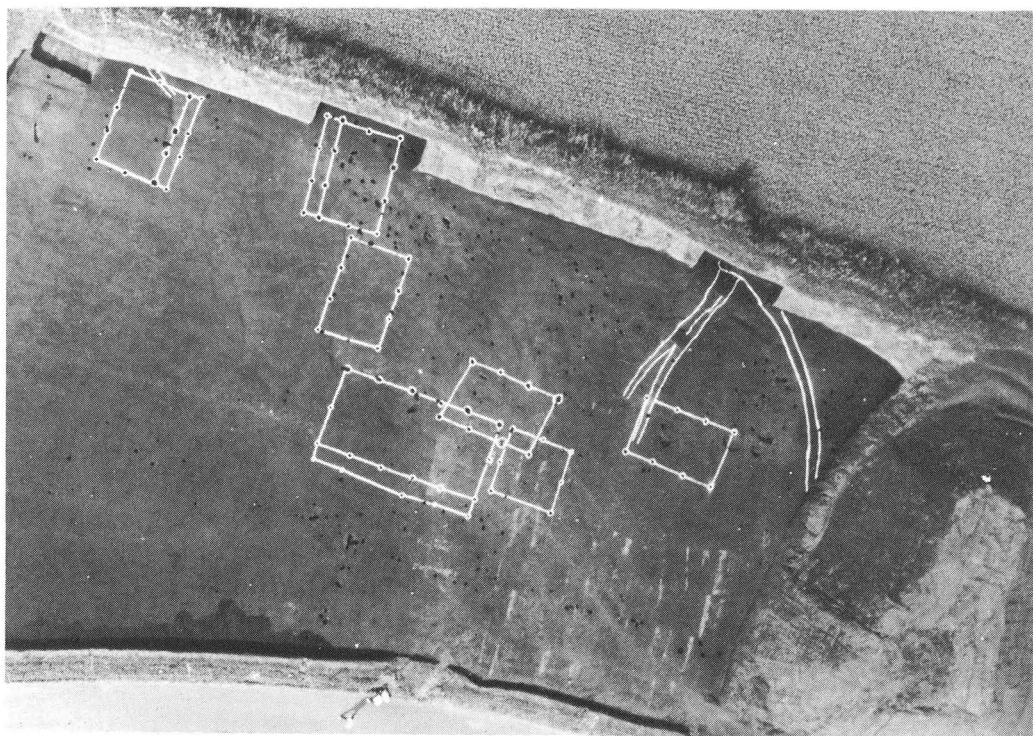
SA 2 出土石器 (003)



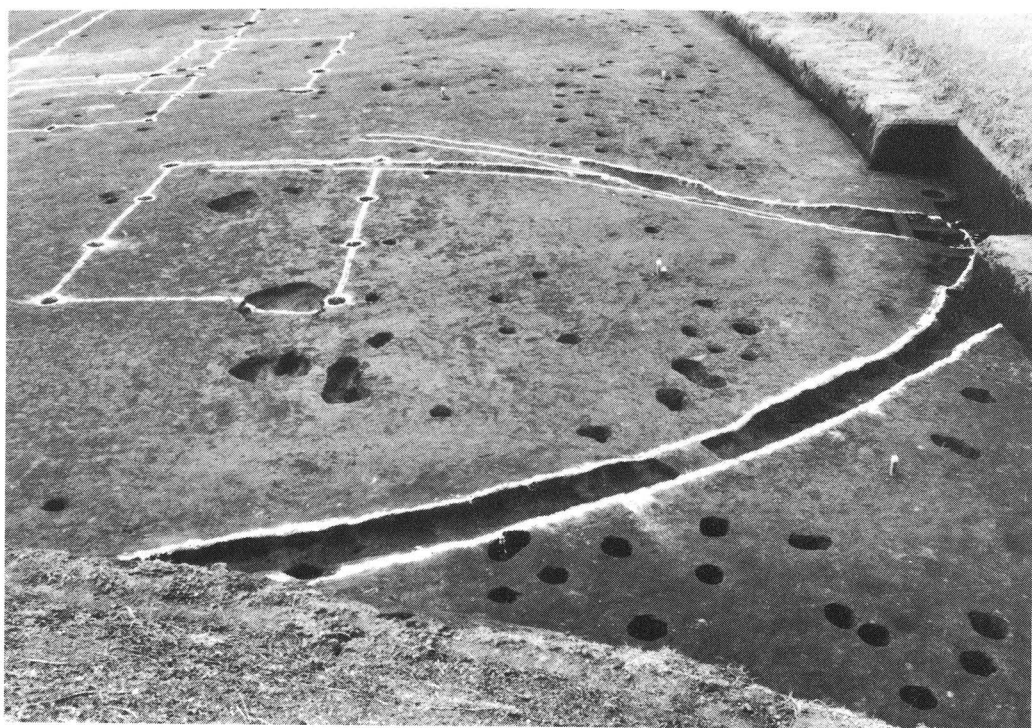
A地区遠景（西から）



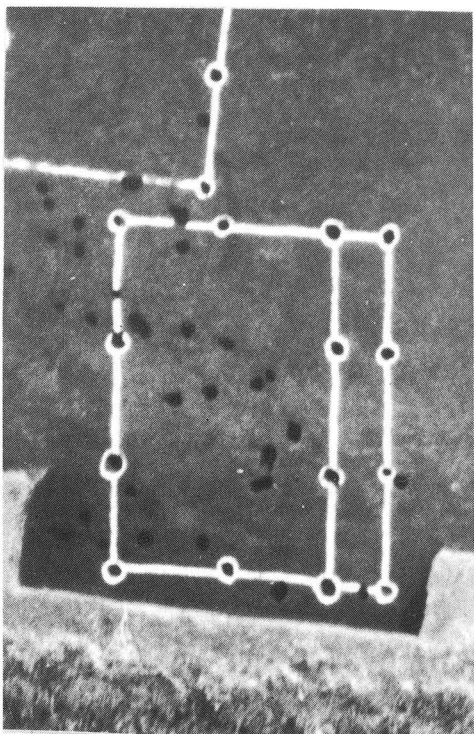
A地区全景



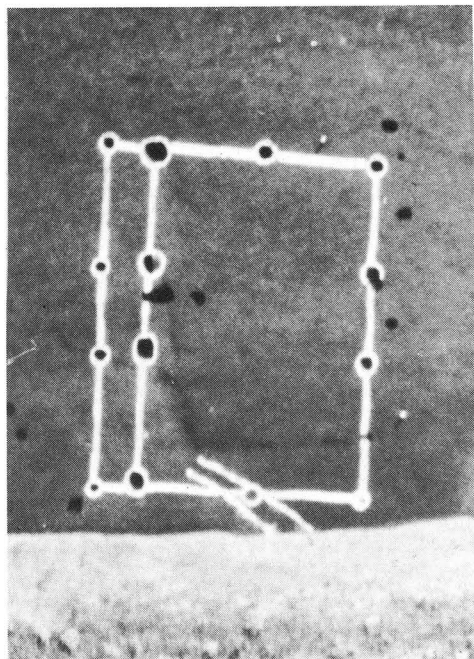
A地区掘立柱建物群



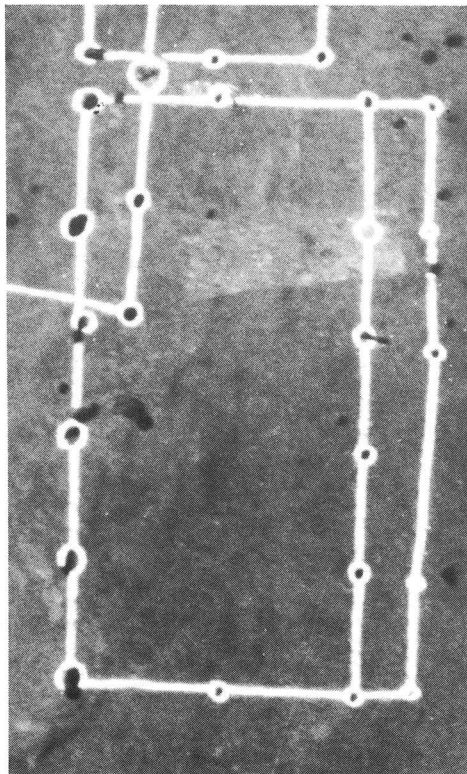
SE 4~6



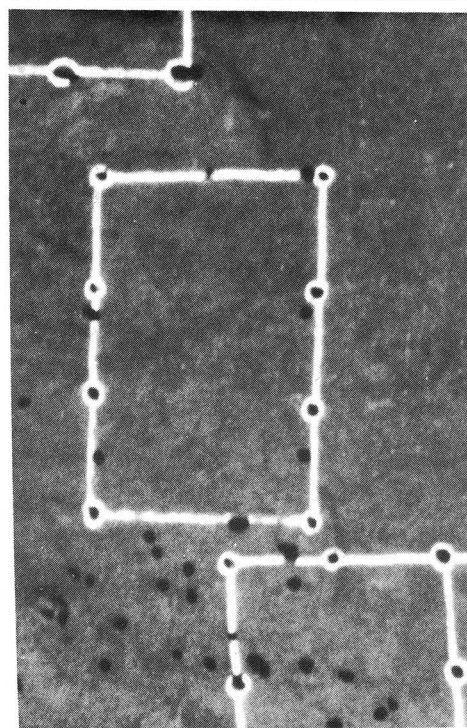
SB 2



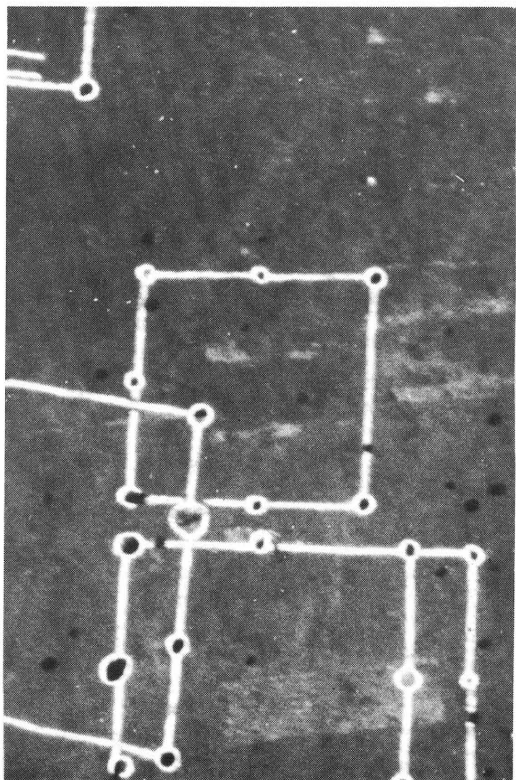
SB 1



SB 4



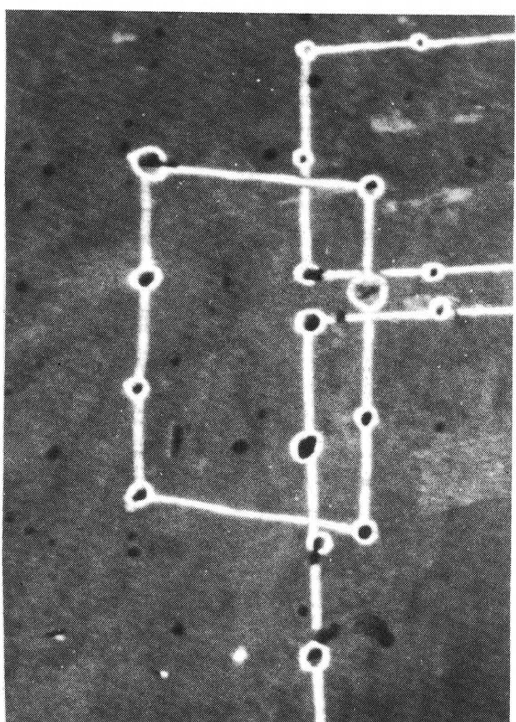
SB 3



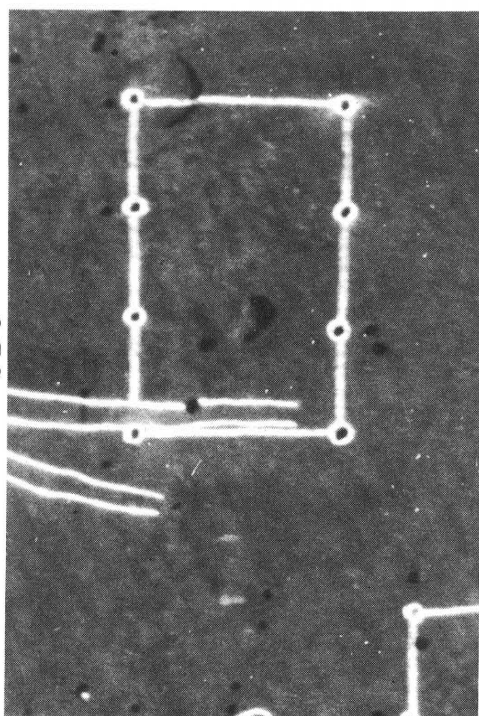
SB 6



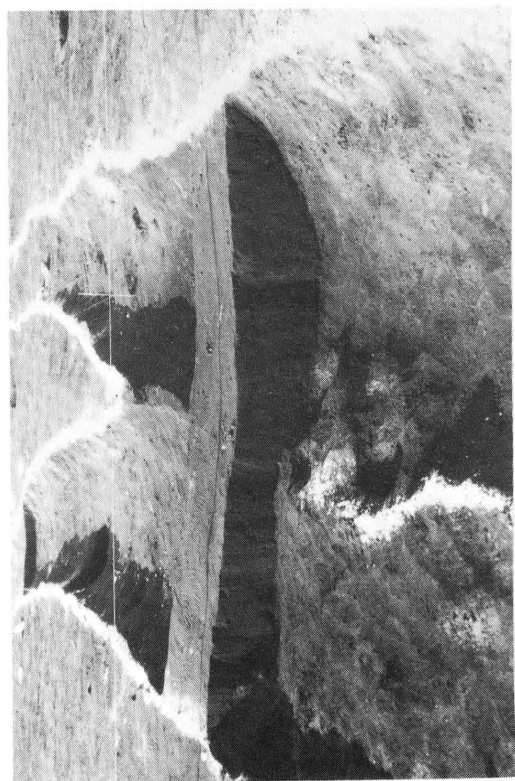
SE 1 · SE 2



SB 5



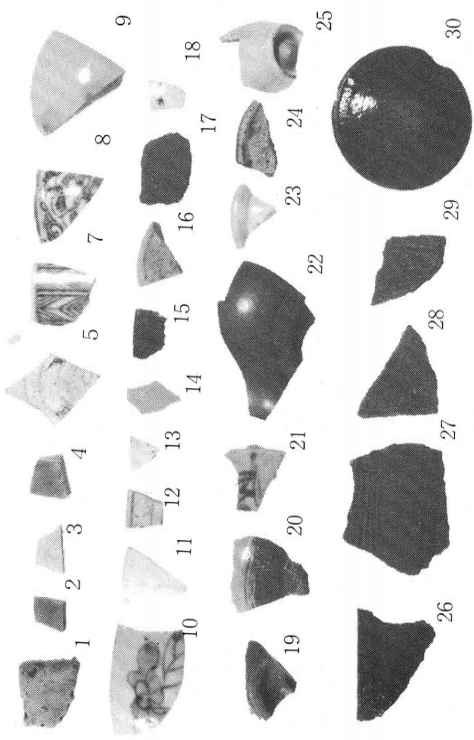
SB 7



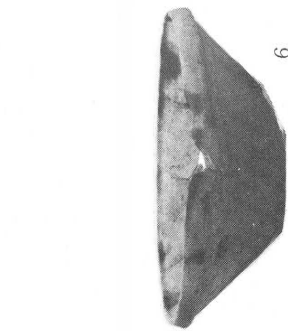
SE 4 · SE 5 土層断面



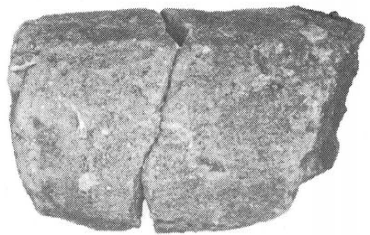
SB 4 P 4 半裁



陶磁器 (1~30)



6



31

東播系こね鉢 (6) 軽石製品 (31)